

下田遺跡 5

—下田遺跡 6 区発掘調査報告書—

2022. 3

埼玉県坂戸市教育委員会

序 文

坂戸市は埼玉県のほぼ中央部にあたり、関越自動車道や首都圏中央連絡自動車道など関東地方の交通を支える道路網の結節点に位置しています。地勢をみると市内の大部分は平坦な台地で占められており、越辺川や高麗川沿いに形成された広大な沖積平野には、豊富な水源と豊かな耕作地が広がっています。その結果、約1万5千年前から続く先人たちの生活の痕跡は大地に刻み込まれ、遺跡として今もなお私たちの足元に眠っています。

本報告の「下田遺跡」は、高麗川によって形成された沖積地に存在している遺跡です。平成25年に開通した坂戸西スマートインターチェンジは遺跡の中央にあたり、その周辺では企業誘致を含めた入西土地区画整理事業が実施され、各街区における企業の誘致が進んでおります。

今回の発掘調査では、氾濫原の中に形成された平安時代前期（10世紀前半）の竪穴建物等の遺構群が発見されました。この時期の遺構が市内で発見されることは大変珍しく、下田遺跡を含めた高麗川低地帯に広がる古代水田耕作地の管理実態を考えていく上での重要な発見となりました。

これらの調査成果は、坂戸に住む先人たちが自然と常に向き合い共存してきた姿を現在に生きる私たちへと伝えていきます。

本書が郷土歴史を育む文化財保護意識を醸成し、広く御活用いただければ幸いです。最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで地権者をはじめ、多くの関係者の方に御協力賜りましたことを深く感謝申し上げます。

令和4年3月

坂戸市教育委員会
教育長 安齊 敏雄

例 言

1. 本書は、埼玉県坂戸市西インター二丁目2番1、2番2に所在する下田遺跡6区の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、物流倉庫建設に伴う事前の記録保存を目的として、坂戸市教育委員会が国際文化財株式会社の支援を受けて実施した。
3. 所在地、発掘調査および整理期間、調査面積、調査担当、調査支援は下記の通りである。
遺跡名：下田遺跡6区
所在地：埼玉県坂戸市西インター二丁目2番1、2番2
調査期間：令和3年1月8日～令和3年7月2日
整理期間：令和3年7月3日～令和4年3月31日
調査面積：15,300㎡
調査担当：山本良太（坂戸市教育委員会）
調査支援：関 美男、山崎良二、吾妻俊典、安村 健、中村祐一、佐藤敬太、後藤亮太
丸山悠里香、川尻 大（国際文化財株式会社）
4. 発掘調査および報告書作成にかかる費用は、大和ハウス工業株式会社が負担した。
5. 写真撮影は、遺構を関、山崎、安村、後藤、川尻、遺物を後藤が行った。空中写真撮影は佐藤、二川目直人（国際文化財株式会社）が行った。
6. 本書の執筆は、第1章第1節、第2章、第3章第1節を山本が、第1章第2・3節、第3章第2節、第4～6章を後藤が、第8章を加藤恭朗（国際文化財株式会社）が担当し、編集を山本、後藤が行った。
7. 自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、第7章に掲載した。
8. 出土遺物および実測図・写真等の記録は、坂戸市教育委員会で保管している。
9. 発掘調査および整理作業参加者は下記の通りである。
発掘調査
浅井幸夫、浅見三男、荒木敏夫、井上洋一、臼井義隆、内田和義、大野道子、加藤恒吉
加納俊員、鎌滝軍平、川内啓士、北野浩二、小谷野昇、新号恵子、末武寿一、鈴木 高
須永高二、下元健蔵、関口勝夫、豊泉道男、永井信之、中村孝昭、南谷益二、根本希一
根本幸子、野本和男、林原 仁、日野拓男、平田芳男、古澤政之助、星野次夫、堀 忠男
堀 富雄、堀江和秀、水井力雄、村松幸夫、柳井武夫、横手宣永、渡辺喜美子
整理作業
荻野満幸、根岸真由美
10. 発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の方々からご教示・ご協力を賜った。
安西工業株式会社、大塚一彦、株式会社ヒサマツ、有限会社天田安平商店
田中広明（公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団）、手島英美子（鳩山町教育委員会）
松本尚也（日高市教育委員会）、末木啓介（埼玉県立さきたま史跡の博物館）

（敬称略・順不同）

凡 例

1. 本書に使用した空中写真・地図類について、第1図は『新編埼玉県史別編3 自然』中の「第2図 埼玉県の地形区分と名称」をもとに作成した。

第2図は国土地理院発行の、1/50,000 地形図『川越北部』を使用した。第118図は国土地理院撮影の空中写真(昭和50年撮影)をもとに作成した。

図版1は国土地理院撮影の空中写真(昭和50年撮影)を使用した。

2. 本書で使用する座標値は、世界測地系に基づく。また、挿図中の北方位は、座標北を示す。
3. 遺構図中の標高地は、東京湾平均海面(T.P.)を示す。
4. 遺構番号は、遺構種別に分けて1から付した。
5. 本書における挿図の縮尺は各挿図中に示しているが、原則として以下の通りである。

遺構：堅穴建物・掘立柱建物跡・堅穴状遺構・土坑 1/60

堅穴建物内施設(炉・カマド) 1/30

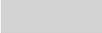
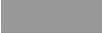
溝状遺構・道路状遺構・流路 1/60・1/100・1/150など

遺物：土器・土師器・須恵器・灰釉陶器 1/4

石器・石製品・土製品 1/3

6. 遺構図・遺物図で表示する各種のトーンまたは、指示線は下記の通りである。

遺構：  地山  焼土範囲  炭化物

遺物：  赤彩  黒色  施釉範囲  施釉境界線

7. 遺構種別の名称について、遺構図版では遺構番号の後ろに、以下のように略して表示している。

堅穴建物…建、掘立柱建物跡…掘、堅穴状遺構…堅、土坑…土、道路状遺構…道

溝状遺構…溝、ピット…ピ、流路…流

8. 本文中の遺構規模の計測値のうち、()は残存値を示す。
9. 遺物図のうち、中心線が一点鎖線の遺物は、反転実測したものを示す。
10. 遺物観察表の表記は下記の通りである。
・種別のうち、須恵器と断定できない個体には、()を付した。
・法量の単位は全てcm、重量についてはgで記載した。
・計測値のうち、()は推定値を、[]は残存値を示す。
・計測値のうち、口径と底径は、それぞれの接地面の径を示している。
・色調は『新版標準土色帖』2006年版(農林水産省農林水産技術会議事務局監修財団法人色彩研究色票監修)に即した。
・焼成は「良好」「普通」「不良」の3段階に区分した。
・胎土の含有物については、以下の略称で示した。

海綿骨針…針、石英…石、長石…長、角閃石…角、凝灰岩…凝、黒雲母…雲

片岩…片、チャート…チャ、赤色粒…赤、白色粒…白、黒色粒…黒

目次

例言／凡例	第5節 道路状遺構	72
第1章 調査の概要	1 奈良・平安時代	72
第1節 調査に至る経緯	第6節 溝状遺構	77
第2節 調査の経過	1 古墳時代	77
第3節 調査の方法	2 奈良・平安時代	80
第2章 遺跡の立地と環境	第7節 流路	96
第1節 地理的環境	1 平安時代	96
第2節 歴史的環境	第8節 ピット	97
第3章 遺跡の概要と基本層序	1 古墳時代	97
第1節 遺跡の概要	2 奈良・平安時代	108
第2節 基本層序	第9節 遺構外出土遺物	109
第4章 6区-1の調査成果	第6章 6区-3の調査成果	110
第1節 概要・層序	第1節 概要・層序	110
第2節 竪穴建物	第2節 土坑	111
1 平安時代	1 中世以降	111
第3節 竪穴状遺構	第3節 溝状遺構	112
1 平安時代	1 古墳時代	112
第4節 土坑	2 奈良・平安時代	112
1 平安時代	第4節 流路	114
第5節 溝状遺構	1 奈良・平安時代	114
1 平安時代	第5節 遺構外出土遺物	116
第6節 流路	第7章 自然科学分析	117
1 平安時代	第1節 樹種同定および	
第7節 遺構外出土遺物	放射線炭素年代測定	117
第5章 6区-2の調査成果	第8章 まとめ	122
第1節 概要	第1節 平安時代の土器について	122
第2節 掘立柱建物跡	第2節 平安時代の集落について	127
1 古墳時代	第3節 流路と道路状遺構	130
第3節 竪穴状遺構	写真図版／抄録／奥付	
1 古墳時代		
第4節 土坑		
1 古墳時代		
2 奈良・平安時代		

挿 図 目 次

第1図 埼玉県の地形 …………… 5	第47図 6区-1遺構外出土遺物…………… 56
第2図 周辺の主要遺跡分布図 …………… 7	第48図 調査区位置図 6区-2…………… 57
第3図 調査区位置図 …………… 11	第49図 6区-2・3古墳時代遺構配置図…………… 58
第4図 全体図 古墳時代 …………… 12	第50図 6区-2・3奈良・平安時代遺構配置図… 59
第5図 全体図 奈良・平安時代 …………… 13	第51図 1号掘立柱建物跡 …………… 60
第6図 基本層序 …………… 15	第52図 3号竪穴状遺構 …………… 61
第7図 調査区位置図 6区-1…………… 16	第53図 3号竪穴状遺構出土遺物 …………… 62
第8図 東壁断面 …………… 16	第54図 4号竪穴状遺構 …………… 63
第9図 6区-1古墳時代遺構配置図…………… 17	第55図 4号竪穴状遺構出土遺物 …………… 63
第10図 6区-1平安時代遺構配置図…………… 18	第56図 9・10・14・16～18・20号土坑 …………… 65
第11図 1号竪穴建物 …………… 19	第57図 21～26・29・31号土坑 …………… 67
第12図 1号竪穴建物炉 …………… 20	第58図 32～34・36～38号土坑 …………… 69
第13図 1号竪穴建物出土遺物 …………… 21	第59図 1～8・35号土坑 …………… 71
第14図 2号竪穴建物 …………… 23	第60図 1号道路状遺構 …………… 72
第15図 2号竪穴建物カマド …………… 24	第61図 2号道路状遺構 …………… 73
第16図 2号竪穴建物出土遺物 …………… 25	第62図 2号道路状遺構出土遺物 …………… 74
第17図 1号竪穴状遺構 …………… 27	第63図 3号道路状遺構 …………… 75
第18図 1号竪穴状遺構出土遺物 …………… 28	第64図 3号道路状遺構出土遺物 …………… 75
第19図 2号竪穴状遺構 …………… 30	第65図 4号道路状遺構 …………… 76
第20図 2号竪穴状遺構出土遺物 …………… 31	第66図 34・35号溝状遺構 …………… 77
第21図 19号土坑 …………… 33	第67図 36号溝状遺構 …………… 78
第22図 27・39～42号土坑 …………… 35	第68図 36号溝状遺構出土遺物 …………… 78
第23図 42号土坑出土遺物 …………… 35	第69図 37・38号溝状遺構 …………… 79
第24図 43号土坑 …………… 36	第70図 1号溝状遺構 …………… 80
第25図 43号土坑出土遺物 …………… 37	第71図 2号溝状遺構 …………… 81
第26図 44・45号土坑 …………… 37	第72図 3号溝状遺構 …………… 81
第27図 46～52号土坑 …………… 39	第73図 4号溝状遺構 …………… 82
第28図 40号溝状遺構 …………… 40	第74図 5号溝状遺構 …………… 83
第29図 40号溝状遺構出土遺物 …………… 41	第75図 6号溝状遺構 …………… 83
第30図 41号溝状遺構 …………… 41	第76図 6号溝状遺構出土遺物 …………… 84
第31図 流路位置図 …………… 42	第77図 7号溝状遺構 …………… 85
第32図 8号流路出土遺物 …………… 44	第78図 8号溝状遺構 …………… 85
第33図 9号流路 …………… 45	第79図 9号溝状遺構 …………… 86
第34図 9号流路出土遺物 …………… 45	第80図 10号溝状遺構 …………… 86
第35図 10号流路 …………… 46	第81図 11号溝状遺構 …………… 87
第36図 10号流路出土遺物 …………… 46	第82図 11号溝状遺構出土遺物 …………… 87
第37図 11号流路出土遺物 …………… 47	第83図 12号溝状遺構 …………… 88
第38図 12号流路 …………… 48	第84図 13号溝状遺構 …………… 88
第39図 12号流路出土遺物 …………… 49	第85図 14号溝状遺構 …………… 89
第40図 13号流路出土遺物 …………… 50	第86図 16号溝状遺構 …………… 89
第41図 14号流路 …………… 50	第87図 17号溝状遺構 …………… 90
第42図 14号流路出土遺物 …………… 51	第88図 18号溝状遺構 …………… 91
第43図 15号流路 …………… 52	第89図 20号溝状遺構 …………… 91
第44図 15号流路出土遺物 …………… 53	第90図 21号溝状遺構 …………… 92
第45図 16号流路 …………… 55	第91図 22号溝状遺構 …………… 92
第46図 16号流路出土遺物 …………… 55	第92図 23号溝状遺構 …………… 93

第93図	24号溝状遺構	93	第111図	6号流路出土遺物	115
第94図	26号溝状遺構	94	第112図	6区-3遺構外出土遺物	116
第95図	28号溝状遺構	95	第113図	暦年較正結果	120
第96図	29号溝状遺構	95	第114図	平安時代の土器	124
第97図	1号流路	96	第115図	6区-1平安時代遺構配置図	128
第98図	6区-2古墳時代ピット群-1	97	第116図	平安時代の集落	130
第99図	6区-2古墳時代ピット群-2	98	第117図	流路配置図	132
第100図	6区-2遺構外出土遺物	109	第118図	流路重ね図	134
第101図	調査区位置図 6区-3	110	第119図	5号道路状遺構	135
第102図	北壁断面	111	第120図	6号道路状遺構	136
第103図	11号土坑	111	第121図	7号道路状遺構	136
第104図	39号溝状遺構	112	第122図	8号道路状遺構	137
第105図	30号溝状遺構	112	第123図	9号道路状遺構	137
第106図	32号溝状遺構	113	第124図	10号道路状遺構	138
第107図	33号溝状遺構	113	第125図	11号道路状遺構	138
第108図	3号流路	114	第126図	6区-2・3奈良・平安時代遺構配置図	139
第109図	3号流路出土遺物	114	第127図	拾石遺跡全測図	141
第110図	6号流路	115	第128図	宮久保遺跡16次調査区遺構検出図	142

挿表目次

第1表	周辺主要遺跡一覧表	8	第20表	6区-1遺構外出土土器観察表	56
第2表	1号竪穴建物出土土器観察表	22	第21表	3号竪穴状遺構出土土器観察表	62
第3表	1号竪穴建物出土石製品観察表	22	第22表	4号竪穴状遺構出土土器観察表	63
第4表	2号竪穴建物出土土器観察表	26	第23表	2号道路状遺構出土土器観察表	74
第5表	1号竪穴状遺構出土土器観察表	29	第24表	3号道路状遺構出土土器観察表	75
第6表	2号竪穴状遺構出土土器観察表	32	第25表	36号溝状遺構出土土器観察表	79
第7表	42号土坑出土土器観察表	35	第26表	6号溝状遺構出土土器観察表	84
第8表	43号土坑出土土器観察表	37	第27表	11号溝状遺構出土土器観察表	87
第9表	40号溝状遺構出土土器観察表	41	第28表	古墳時代ピット一覧表	99
第10表	8号流路出土土器観察表	44	第29表	奈良・平安時代ピット一覧表	108
第11表	9号流路出土土器観察表	45	第30表	6区-2遺構外出土土器観察表	109
第12表	10号流路出土土器観察表	46	第31表	6区-2遺構外出土土器観察表	109
第13表	11号流路出土土器観察表	47	第32表	3号流路出土土器観察表	115
第14表	12号流路出土土器観察表	49	第33表	6号流路出土土器観察表	115
第15表	13号流路出土土器観察表	50	第34表	6区-3遺構外出土土器観察表	116
第16表	14号流路出土土器観察表	51	第35表	6区-3遺構外出土石製品観察表	116
第17表	15号流路出土土器観察表	54	第36表	樹種同定結果	118
第18表	15号流路出土土製品観察表	54	第37表	放射性炭素年代測定結果	119
第19表	16号流路出土土器観察表	55			

写真図版目次

図版 1	調査区周辺 調査区完掘全景-1	図版11	6号土坑 7号土坑 8号土坑 35号土坑
図版 2	調査区完掘全景-2 調査区完掘全景-3		1号道路状遺構 2号道路状遺構 3・4号道路状遺構 34号溝状遺構
図版 3	調査区北壁 調査区東壁 1号竪穴建物 1号竪穴建物炉 1号竪穴建物遺物出土状況 2号竪穴建物 2号竪穴建物カマド 2号竪穴建物遺物出土状況	図版12	35号溝状遺構 36号溝状遺構 37号溝状遺構 38号溝状遺構 1・2号溝状遺構 3号溝状遺構 4・7号溝状遺構 5・8号溝状遺構
図版 4	1号竪穴状遺構 1号竪穴状遺構遺物出土状況 2号竪穴状遺構 2号竪穴状遺構遺物出土状況 19号土坑 27号土坑 39号土坑 40号土坑	図版13	6号溝状遺構 9～12号溝状遺構 13・14号溝状遺構 16号溝状遺構 17号溝状遺構 18号溝状遺構 20・21号溝状遺構 22号溝状遺構
図版 5	41号土坑 42号土坑 43号土坑 44号土坑 45号土坑 46号土坑 47号土坑 48号土坑	図版14	23・24・26・29号溝状遺構 28号溝状遺構 1号流路 ピット群-1 ピット群-2 ピット群-3 ピット群-4 ピット群-5
図版 6	49号土坑 50号土坑 51号土坑 52号土坑 40号溝状遺構 41号溝状遺構 2号流路 4号流路	図版15	ピット群-6 11号土坑 39号溝状遺構 30号溝状遺構 32号溝状遺構 33号溝状遺構 3号流路 3号流路遺物出土状況
図版 7	13号流路 15号流路遺物出土状況 1号掘立柱建物跡 3号竪穴状遺構 3号竪穴状遺構焼土集中 3号竪穴状遺構 1号ピット 4号竪穴状遺構 9号土坑	図版16	1号竪穴建物出土遺物 2号竪穴建物出土遺物
図版 8	14号土坑 16号土坑 17号土坑 18号土坑 20号土坑 21号土坑 22号土坑 23号土坑	図版17	1号竪穴状遺構出土遺物 2号竪穴状遺構出土遺物
図版 9	24号土坑 25号土坑 26号土坑 29号土坑 31号土坑 32号土坑 33号土坑 34号土坑	図版18	11号流路出土遺物 13号流路出土遺物 15号流路出土遺物 4号竪穴状遺構出土遺物 6区-2遺構外出土遺物 3号流路出土遺物 6号流路出土遺物 6区-3遺構外出土遺物
図版10	36号土坑 37号土坑 38号土坑 1号土坑 2号土坑 3号土坑 4号土坑 5号土坑	図版19	炭化材(1)
		図版20	炭化材(2)・木材など

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

令和2(2020)年10月19日、開発計画者である大和ハウス工業株式会社(以下、開発事業者)より、坂戸西インター二丁目2番1、2番2について、物流倉庫建設事業に伴う周知の埋蔵文化財包蔵地内における開発行為の事前協議書が坂戸市教育委員会(以下、市教委)へ提出された。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である下田遺跡(No. 27-155)の範囲に該当しており、従前の事業計画に基づき、平成26年9月から平成27年8月に発掘調査(下田遺跡2区-C)を実施しており、開発区域の一部については遺構の現状保存措置を講じている状況にあった。

そのため、新たな事業計画について、開発事業者と協議を実施した結果、当該開発は前回調査範囲を大きく上回る規模であるため、未調査区域の地中に保存されている埋蔵文化財について追加の発掘調査を実施することとなった。

発掘調査の実施にあたっては、令和2年12月15日に文化財保護法第93条に基づく埋蔵文化財発掘の届出(坂教社発第1084号)を埼玉県教育委員会(以下、県教委)教育長あてへ進達した。これに対して県教委から同年12月15日に指示通知(教文資第4-1518号)を受けた。

文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知(坂教社発第1083号)は同年12月15日付けで県教育長あてへ通知した。

調査体制の組織については、市教委単独では調査体制の構築が困難と判断し、県教委と協議を行ったうえで、民間調査組織である国際文化財株式会社(以下、民間調査組織)の発掘調査支援を受けることとなった。調査に際しては、開発に係る各種申請の時期を見据えた開発計画を設定する

ため、開発事業者、民間調査組織、市教委の三者で調査に関する打合せを数回にわたり開催した。

上記の経過を経て令和2年12月18日に開発事業者、民間調査組織、市教委三者合意のもと、調査に関する協定を締結した。

なお、開発事業者と民間調査組織の発掘調査にかかる契約は同年12月10日に取り交わされた。発掘調査の対象面積は15,300㎡となり、調査は令和3年1月8日から令和3年7月2日まで実施した。

第2節 調査の経過

下田遺跡6区の発掘調査は、(仮称)坂戸DPLⅡ新築工事に先立ち、令和3年1月8日から令和3年7月2日にかけて実施した。総調査面積15,300㎡である。隣接調査区(2区-C2)の調査成果より、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期、奈良・平安時代～中世の順番に3つの文化層が存在することが確認されており、今回の現地調査もそれに準ずる形で実施した。

また、調査範囲が広大に及ぶことから、東部から時計回りに6区-1、6区-2、6区-3の3つの調査区を便宜上設定した(第5図)。

調査は、令和2年12月21日より重機・機材・仮設事務所等の搬入、設置をした後、令和3年1月8日に、6区-1北端部から西側に向けて重機による表土掘削を開始した。また、同月12日より6区-1南端部からも順次表土掘削を開始した。表土除去後、人力による奈良・平安時代～中世の遺構精査を同一面で行い、検出した全ての遺構調査終了後、空中写真撮影を実施した。

空中写真撮影後は、包含層を重機掘削し、古墳時代後期、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構確

第2節 調査の経過

認面で、それぞれ遺構精査・遺構調査を行った。検出された全ての遺構調査が終了した後、空中写真撮影を実施した。令和3年7月2日、6区-1南西部で最後の空中写真撮影を行い、全ての調査を終了した。以下には、各調査区の経過を記述する。

6区-1の調査経過

〔調査期間〕

令和3年1月8日～令和3年7月2日

〔調査面積〕

11,300㎡

調査区東部に位置する。表土掘削は令和3年1月8日より開始した。旧高麗川・葛川の氾濫原に位置すると考えられ、ほぼ全面的に攪乱が認められた。工程上の関係より、北部と南部で調査区を分割した上で遺構確認を行い、空中写真撮影もそれぞれ個別に実施した。

調査区北側は表土除去の後、V層上面にて、奈良・平安時代～中世の遺構精査を行った。攪乱の影響もあり、検出された遺構は溝状遺構1条のみにとどまった。また、調査区中央部で砂礫の拡がり同一面で確認された。範囲は、南北方向に最大93.1m、東西方向に最大60.9mを測る。下面での調査から、この砂礫は12号流路の覆土と考えられる。覆土中からは、内外面に赤彩が施された比企型土師器坏や、小片ながら東金子産須恵器甕、東濃窯産灰釉陶器壺が出土している。いずれの出土遺物にも、軽度～中度の摩滅が認められた。ドローンによる空中写真撮影は令和3年4月1日に行った。

続く古墳時代後期、弥生時代～古墳時代前期の遺構調査では、土坑1基を確認し調査を行った。その後、複数の流路の平面プランの記録と、トレンチ掘削を行い、令和3年4月16日と、令和3年5月24日にそれぞれ空中写真撮影を実施した。

また、5月24日に重機による下層確認を行い、遺構・遺物が存在しないことを確認した後、全ての調査を終了した。

調査区南側の表土掘削は、令和3年1月12日より行った。北側と同様に調査区を大きく攪乱され、西側は特に顕著であった。奈良・平安時代の遺構確認面では、遺構は検出されなかった。ドローンによる空中写真撮影は令和3年4月28日に行った。

重機掘削にて30cm程度下げた後、古墳時代後期の遺構確認面のレベルで、調査区南東部から南端部で堅穴建物2軒、堅穴状遺構2基、土坑10基が検出された。堅穴建物からは多数の土師器、ロクロ土師器、須恵器、灰釉陶器が出土した。2号堅穴建物は北側にカマド1基を有するが、少量の焼土を含むのみで、明確な袖部、火床面は確認されなかった。また、2号堅穴状遺構からは、完形に近い灰釉陶器壺や、内面に黒色処理が施された土師器壺が出土している。いずれの遺構も出土遺物の年代から、平安時代前期(10世紀前半)の所産と考えられる。また、いずれの遺構の底面直下には砂礫が堆積することから、少なくとも古墳時代～奈良時代の期間は水の流入があったことが認められる。

重機掘削の後、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構精査を行い、調査区西側にて、土坑2基を検出した。土坑の覆土中からは10世紀代の土師器甕が出土したため、上面での掘り残しと考えられる。最後の空中写真撮影は、工程の関係より調査区を更に東西に分割して行い、東側を令和3年6月15日に、西側を令和3年6月30日に行った。重機による下層確認は、令和3年7月2日に行い、下位に遺構・遺物がないことを確認し、全ての調査を終了した。

本調査区での調査成果及び、調査区東壁における層序を整理するに、近世水田層(Ⅱ層)の直下

に、奈良・平安時代～中世の基本層（V層）、古墳時代の基本層（VII層）、青灰色粘土層（VIII層）の順で堆積していると考えられる。古墳後期の基本層であるVI層は、下位のVII層と土質の差異が認められなかったため、本書ではVII層に統合して扱う。また、平安時代の所産と考えられる遺構群が、現場段階でのV層上面では確認できず、30cm程下げた高さで検出されたことから、II c層をV層と誤認し、その上面で1面目の調査を行い、2面目の調査をV層上面、3面目の調査をVII層上面で行ったことが考えられる。

6区-2の調査経過

〔調査期間〕

令和3年1月27日～令和3年5月26日

〔調査面積〕

2,500 m²

調査区南西部に位置する。表土掘削を令和3年1月27日より開始した。表土除去後、V層上面で奈良・平安時代～中世にかけての遺構精査を同一面で行い、土坑9基、溝状遺構25条、道路状遺構4条を調査した。この道路状遺構は、2区-C2でも確認されており、遺構形態、主軸方向から、一連のものと推察される。

他の調査区と比較すると、河川による影響は薄く、比較的安定した自然堆積が確認されたが、東側へ移るにつれ、砂礫、粗砂、粘土による混合層が流入する様子が認められた。この混合層は、13号流路の覆土と考えられる。また、遺構密度は高いが、対照的に出土遺物量は僅少であった。ドローンによる空中写真撮影は令和3年3月25日に実施した。

続く古墳時代後期の調査では、竪穴状遺構2基と溝状遺構4条を主に調査した。このうち4号竪穴状遺構からは古墳時代前期と考えられる土師器高坏の坏部が比較的良好な状態で出土した。覆土

は多量の焼土と炭化物を含んでおり、平面形は不整形を呈する。北西部で発見された3号竪穴状遺構も同様に、覆土中に多量の焼土・炭化物を有し、形態は4号竪穴状遺構と近似するが、出土遺物は少なく、具体的な用途は不明な点が多い。また、古墳時代後期の遺構では、37・38号溝状遺構が確認された。ドローンによる空中写真撮影は令和3年5月10日に実施した。

弥生時代後期～古墳時代前期の調査では、多数のピット群を確認したが、当時期を明確に指し示す遺構・出土遺物は確認されなかった。ドローンによる空中写真撮影は令和3年5月26日に実施した。その後、重機による下層確認は令和3年6月7日に行い、下位に遺構・遺物が存在しないことを確認し、調査を終了した。

本調査区は、V層の直下にVII層・VIII層の順に堆積する様子が確認された。古墳時代の遺構確認面のレベル（VII層上面）で、古墳時代前期を中心とする遺構・遺物が確認された。VII層は一定の厚さを保ち、西側に移るにつれて安定的に堆積していると考えられる。

6区-3の調査経過

〔調査期間〕

令和3年1月22日～令和3年4月17日

〔調査面積〕

1,500 m²

調査区北西部に位置する。表土掘削を令和3年1月22日から開始した。表土除去後、人力による奈良・平安時代～中世の遺構精査を行い、土坑1基、溝状遺構3条、流路3条を調査した。このうち33号溝状遺構は、南に隣接する下田遺跡2区-C2で確認された、4号溝状遺構と接続すると思われる。また、土坑は、6区-2で検出したものと同様に円形土坑であり、平安時代の所産と推察される。これらの遺構調査を終了した後、

第3節 調査の方法

令和3年3月31日にドローンによる空中写真撮影を行った。

その後、重機による包含層掘削を行い、古墳時代後期の遺構確認推定面の遺構調査を行い、流路1条のみを確認した。覆土中からは縄文時代の所産と考えられる打製石斧が1点出土したが、表面の摩滅状況から流入物である可能性が高い。ドローンによる空中写真撮影は令和3年4月7日に実施した。

重機による包含層掘削を行い、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構確認面の精査を行った結果、溝状遺構1条のみ検出し、調査を行った。令和3年4月27日に空中写真撮影を実施した。その後、重機による深掘りを行い、下位に遺構・遺物が存在しないことを確認し、同日調査を終了した。

他の調査区と同様に、Ⅴ層直下に、Ⅶ層、Ⅷ層の順で堆積する様子が観察された。所々で流路による自然堆積層への浸食状況が確認された。一方で、6区-2ほどではないにせよ、安定した自然堆積による層序も見受けられた。しかし、すぐ東側には6区-1を南北に横断する流路群が走ることから、河川氾濫と常に隣合わせに在る状況には置かれていたと考えられる。

第3節 調査の方法

過去の調査結果に基づき、表土を重機で掘削したのち、人力による遺構確認作業を行った。遺構番号は調査区ごとに分けず統一し、種別ごとに1番から調査着手順に付した。なお、グリッドは設定していない。

検出した遺構は平面プランの確認後、十文字ベルトを設定、または半裁することで、土層観察と重複関係の確認を行った。観察した土層は分層し、注記・写真撮影・断面図等の記録を作成したのち完掘した。

遺構から遺物が出土した場合は、基本的に出土地点を記録して点上げし、大型の遺物などは遺物微細図を作成した。その他、ごく小破片の遺物は、遺構・層位ごとに一括で取り上げた。これら出土遺物の記録作成後、遺構は完掘し、完掘写真撮影・平面図等の記録を作成した。

竪穴建物は、土層観察ベルトに沿ってトレンチを設定し、床面下の調査を行った。建物掘り方が確認された場合は、掘り方の調査を行い、写真撮影・平面図等の記録を作成し、調査終了とした。

遺構図面、遺物微細図の作成はトータルステーションを用いた。写真撮影は35mmフィルムカメラ(モノクロネガフィルムを使用)、デジタルカメラ(1,000万画素以上)を使用した。空中写真撮影・全景写真は調査区ごとにドローンを用いて撮影した。

また、下層確認調査として、青灰色粘土層(Ⅷ層)をトレンチ状に掘削し、遺構・遺物・旧河道の有無を確認した。

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

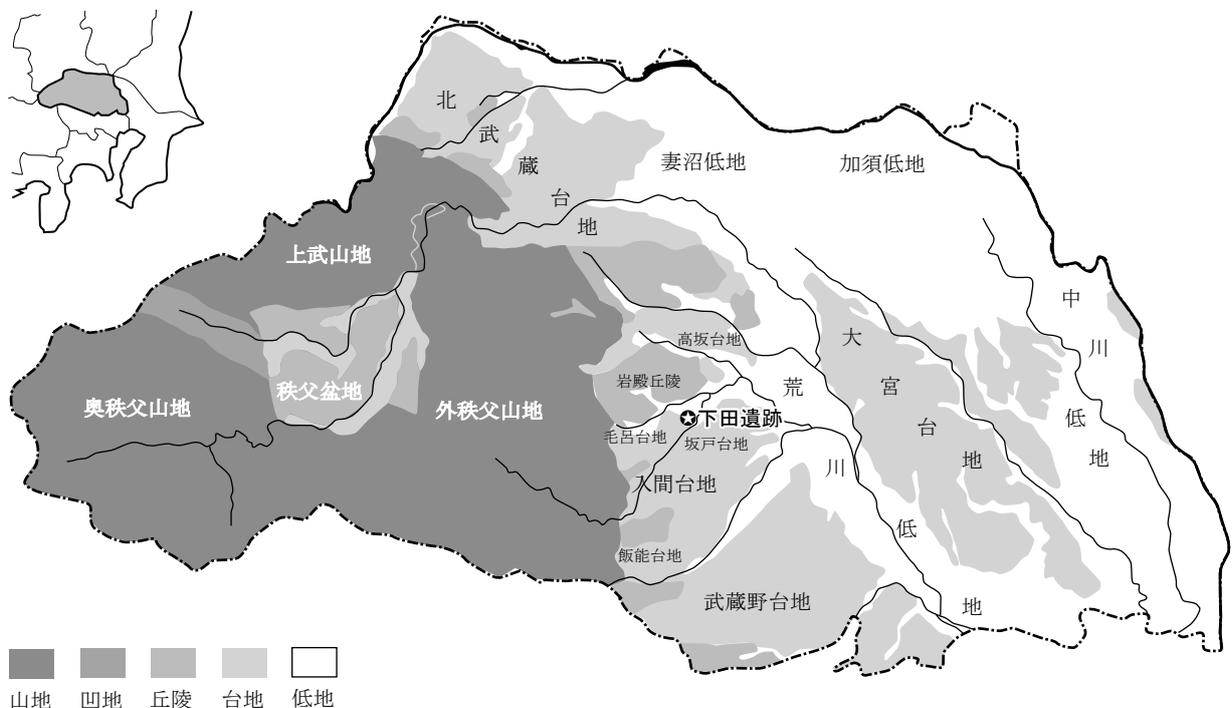
坂戸市は、埼玉県の中央部よりやや南寄りに位置する。坂戸市周辺の地勢を概観すると、入間川で武蔵野台地と区切られる入間台地は、入間川、高麗川、越辺川によって形成された扇状地性の台地で、河川によって坂戸台地、毛呂台地、飯能台地に分けることができる。さらに、幾つかの小河川が入間台地から流れ出ており、小支谷を刻んでいる。また、入間台地の北側は岩殿丘陵と接し、西側は毛呂山丘陵、高麗丘陵などと接している。

坂戸市域の大半が、入間台地の北側にあたり坂戸台地と毛呂台地で占められ、西の日高市から流入する高麗川と、毛呂山町から流入する越辺川により形成された沖積地が、市域の北から東に広く

開けている。市域全体が平坦な地形を示し、標高はおおよそ20～50mと、東から西に向かって平坦面が続き、漸移的に高くなっていく。市の西端部にあたる多和目地区では、僅かに外秩父山地の端部がかかり、市域で最高位の標高113mを測る。

坂戸市の地勢で特に注目されることは、高麗川と越辺川により形成された広大な沖積地が広がっていることである。高麗川と越辺川に挟まれた入西地区にも広大な沖積地が広がり、古代に開発されたと言われる入西条里の特徴的な区割りが、かなりの面積で残されていた。

下田遺跡が位置する地域は、高麗川により形成された沖積地で、常に氾濫の影響を受けていたと考えられる。西側には葛川が流れ、南側には島状に小高くなった地域が残っており、塚崎、中里などの地名が地形の特徴を表している。



第1図 埼玉県の地形

第2節 歴史的環境

下田遺跡周辺の遺跡を時代毎に概観し、下田遺跡を取り巻く歴史的環境について記述する。

縄文時代

坂戸台地、毛呂台地に包蔵されている縄文時代の遺跡は多くないが、早期から晩期の集落が確認されている。

高麗川を挟んで下田遺跡の対岸にある宮裏遺跡(58)では、撚糸文土器の竪穴建物と屋外炉が調査されている。坂戸台地先端部に位置し、圏央道関連で調査した御新田遺跡でも撚糸文の竪穴建物を1軒調査している。

また、鶴ヶ島市の東部にある鶴ヶ島中学校西遺跡、雷電池東遺跡などからも早期の土器片が発見されている。

前期になると集落が増加し、坂戸台地の東部にある木曾免遺跡で関山期、附島遺跡で関山期と黒浜期の集落がそれぞれ確認されている。圏央道で調査された番匠・下道遺跡、御新田遺跡からも黒浜期の竪穴建物が発見されている。また、坂戸台地の内陸部にあたるが、高麗川の河岸段丘上に位置する大家小学校遺跡でも黒浜期の竪穴建物を調査している。さらに、高麗川の上流にある多和田渡戸遺跡からは諸磯期の竪穴建物が、坂戸市内で唯一調査されている。毛呂山町新しき村遺跡でも諸磯式土器が出土している。

時期の違いも関係しているのだろうが、関山・黒浜式土器は坂戸台地の東部に、竹管文系の諸磯式土器は丘陵に近い地域に分布するようで、分布域に違いがみられる。

中期になるとさらに集落が増加するが、その時期は勝坂式期から加曽利E式期を主体とし、集落規模も大きくなり、環状に竪穴建物が配置される集落が出現する。坂戸台地の東から追ってくる

と、上谷遺跡、景台遺跡、御新田遺跡、番匠・下道遺跡、勝呂遺跡などがある。このうち環状集落を形成するのは、上谷遺跡と景台遺跡である。

高麗川を挟んで、下田遺跡の対岸にあたる位置に花影遺跡(57)があり、市内でも最大規模の集落である。前期でも取り上げた大家小学校遺跡では、集石土坑が多く発見され、柄鏡型竪穴建物が1軒調査された。毛呂台地にも遺跡は点在し、西浦遺跡(5)、木瓜田遺跡(10)、長岡遺跡(22)などがあげられる。毛呂山町まます遺跡(30)は勝坂式期後半の集落が調査されている。

後期になると遺跡は激減し、市内を見渡しても遺跡が点在する状況である。中小坂地区にある上谷遺跡と西窪遺跡で堀之内式期の貯蔵穴、土坑などが確認され、西窪遺跡からは土偶が出土している。塚越渡戸遺跡でも堀之内式期の竪穴建物が調査されている。

後期から晩期の集落が、高麗川の河岸段丘上にあたる多和田地区に岩口遺跡が存在する。後期後半の配石遺構と土坑群、晩期の竪穴建物などが調査されている。

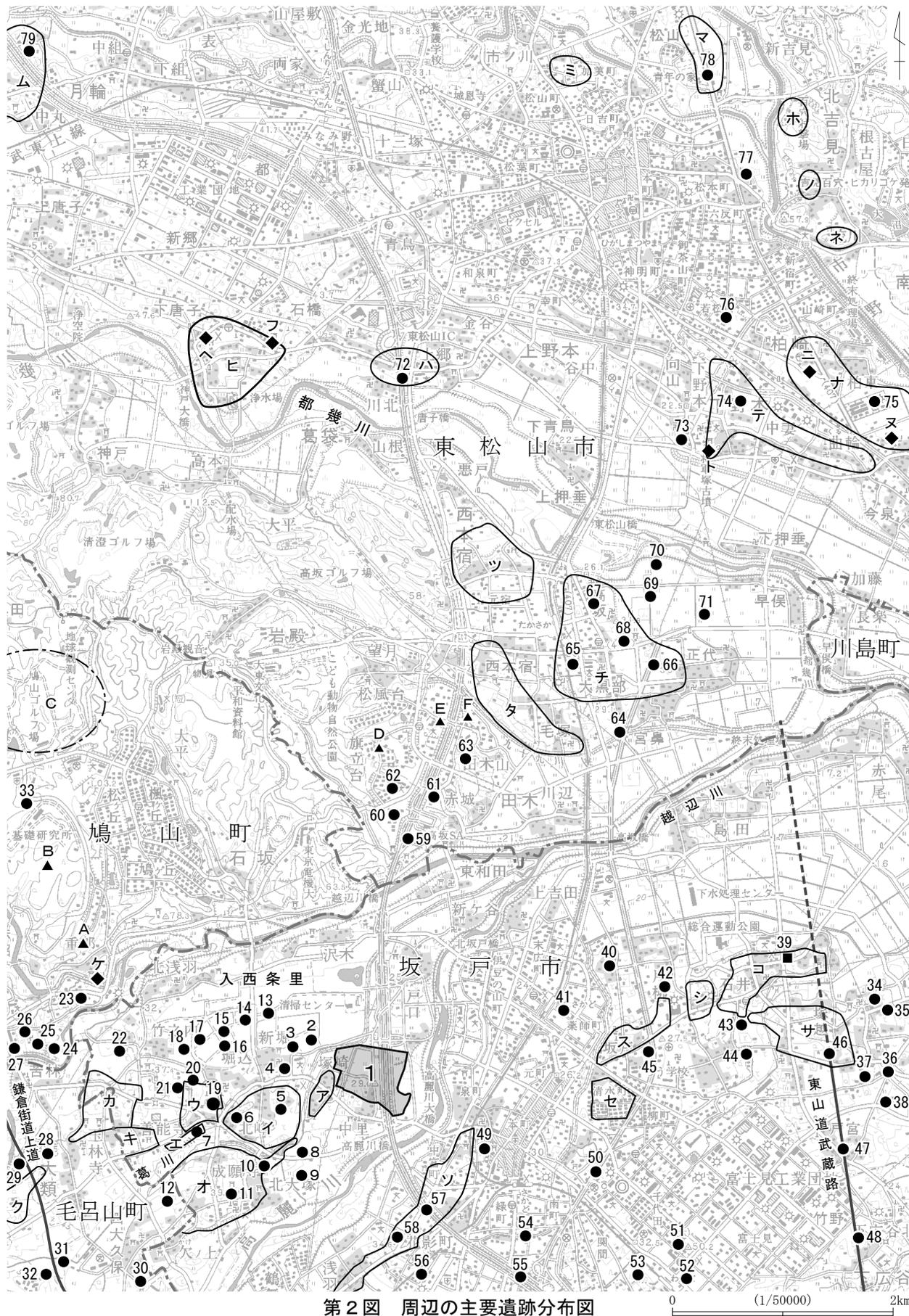
弥生時代

坂戸台地の先端部に、宮ノ台式並行期の環濠集落として、附島遺跡と木曾免遺跡が存在する。ともに、竪穴建物と方形周溝墓が発見されている。木曾免遺跡の北に位置する小沼堀之内遺跡からは、壺棺墓が調査されている。

塚越渡戸遺跡で調査した竪穴建物からは、北関東系の櫛描文土器と大型打製石斧が出土した。

越辺川を渡った北にある高坂台地には大西遺跡(64)、代正寺遺跡(66)から中期中葉の竪穴建物、方形周溝墓、壺棺墓などが調査されている。

越辺川を挟んで、坂戸台地東縁辺部と高坂台地東部に立地する中期中葉の遺跡群は、この地域にある程度の密度をもって分布しており、この時期



第1表 周辺主要遺跡一覧表

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	下田遺跡	31	西ヶ谷北遺跡	61	大塚原遺跡	シ	新町古墳群
2	足洗遺跡	32	鎌倉道遺跡	62	緑山遺跡	ス	片柳古墳群
3	金井遺跡	33	境田遺跡	63	田木山遺跡	セ	新山古墳群
4	内出遺跡	34	新田前遺跡	64	大西遺跡	ソ	浅羽野古墳群
5	西浦遺跡	35	明泉遺跡	65	下寺前遺跡	タ	毛塚古墳群
6	中原遺跡	36	宮町遺跡	66	代正寺遺跡	チ	高坂古墳群
7	大河原遺跡	37	住吉中学校遺跡	67	高坂二番町遺跡	ツ	諏訪山古墳群
8	沼端遺跡	38	清進場遺跡	68	高坂三番町遺跡	テ	野本古墳群
9	中道北遺跡	39	勝呂遺跡・勝呂廃寺	69	城敷遺跡	ト	野本将軍塚古墳
10	木瓜田遺跡	40	宮ノ前遺跡	70	銭塚遺跡	ナ	柏崎古墳群
11	若宮遺跡	41	芦山・宝戸ヶ谷遺跡	71	反町遺跡	ニ	権現塚古墳
12	常楽寺遺跡	42	勇福寺遺跡	72	附川遺跡	ヌ	おくま山古墳
13	中耕遺跡	43	柵遺跡	73	西浦遺跡	ネ	羽黒山古墳群
14	広面B遺跡	44	石井前原遺跡	74	山王裏遺跡	ノ	吉見百穴横穴墓群
15	桑原遺跡	45	相撲場遺跡	75	番清水遺跡	ハ	附川古墳群
16	田島遺跡	46	馬場遺跡	76	五領遺跡	ヒ	下唐子古墳群
17	棚田遺跡	47	町東遺跡	77	観音寺遺跡	フ	若宮八幡古墳
18	稲荷前遺跡	48	宮廻館跡	78	岩鼻遺跡	ヘ	冨塚古墳
19	三福寺遺跡	49	坂戸神社遺跡	79	屋田遺跡	ホ	岩粉山横穴墓群
20	塚の越遺跡	50	山田遺跡	ア	塚崎古墳群	マ	岩鼻古墳群
21	稲荷森遺跡	51	若葉台遺跡	イ	北峰古墳群	ミ	東耕地古墳群
22	長岡遺跡	52	富士見一丁目遺跡	ウ	三福寺古墳群	ム	月輪古墳群
23	赤沼高在家遺跡	53	池ノ台遺跡	エ	大河原古墳群	A	赤沼地区窯跡群第14支群
24	天神台東遺跡	54	一天狗遺跡	オ	成願寺古墳群	B	山田窯跡
25	天神台遺跡	55	脚折山田遺跡	カ	苦林古墳群	C	鳩山窯跡群
26	小路谷遺跡	56	羽折遺跡	キ	善能寺古墳群	D	根平遺跡
27	宿遺跡	57	花影遺跡	ク	川角古墳群	E	舞台遺跡
28	宿浦遺跡	58	宮裏遺跡	ケ	十郎横穴墓群	F	桜山窯跡群
29	堂山下遺跡	59	駒堀遺跡	コ	勝呂古墳群		
30	まま上遺跡	60	立野遺跡	サ	塚越古墳群		

から大きく開発が進んだ地域であると言える。

後期の岩鼻式土器（櫛描文土器）を主体とする集落が坂戸台地でも展開している。勇福寺遺跡（42）、柵遺跡（43）、石井前原遺跡（44）、相撲場遺跡（45）などがあり、坂戸台地縁辺部に集中している。いずれの遺跡でも堅穴建物が調査され、柵遺跡で大型の堅穴建物と方形周溝墓が調査され、この地域の中核的な集落と考えられる。

越辺川を挟んで坂戸台地の北対岸に位置する高坂台地では、大西遺跡（64）、代正寺遺跡（66）が、中期の集落から継続して堅穴建物、方形周溝墓などが検出されている。また、比企丘陵裾部の天神台東遺跡（24）からも岩鼻式土器が出土している。

岩鼻式土器の標式遺跡である岩鼻遺跡（78）は、

市野川と滑川に挟まれた東松山台地に立地する。

坂戸台地上には、比企地域から入間北部に分布する吉ヶ谷式期の集落が集中して確認されている。これまでも取り上げてきた、坂戸台地東部に分布する木曾免遺跡、附島遺跡をはじめとして、上谷遺跡、勝呂遺跡（39）など、坂戸台地のやや内陸部に入り飯盛川に沿った位置にある鶴ヶ岡遺跡、方形周溝墓が調査された花影遺跡（57）、鶴ヶ島市一天狗遺跡（54）などがあげられる。毛呂台地に入ると、沼端遺跡（8）、三福寺遺跡（19）、大河原遺跡（7）と、小河川に沿って台地内陸部に侵入している傾向がみられ、吉ヶ谷式期に集落が形成されていることが共通している。

高坂台地には大型の堅穴建物が調査された駒堀

遺跡(59)があり、下田遺跡からは越辺川を挟んで対岸に位置する。また、高坂地区の土地区画整理事業で調査された高坂二番町遺跡(67)、高坂三番町遺跡(68)からは、多くの竪穴建物と方形周溝墓が検出されている。

坂戸台地からは少し離れるが、東松山台地の先端部に位置する観音寺遺跡(77)では、竪穴建物と方形周溝墓が調査され、方形周溝墓の主体部から銅釧と鉄剣が出土し注目されている。

古墳時代前期

古墳時代前期になると、集落の規模が拡大し、方形周溝墓群が形成される。方形周溝墓群が顕著に現れるのは、越辺川に面した毛呂台地の先端部に立地する入西遺跡群で、中耕遺跡(13)、広面B遺跡(14)、稲荷前遺跡(18)などから、竪穴建物と共に方形周溝墓が100基以上検出されている。

毛呂台地から高麗川を挟んで坂戸台地に移ると、方形周溝墓群と竪穴建物群からなる宮裏遺跡(58)が存在する。縄文時代早期の竪穴建物と屋外炉がそれぞれ1ヶ所検出された以外は、すべて古墳時代前期の遺構である。隣接する花影遺跡(57)からも竪穴建物と方形周溝墓が確認されている。

坂戸台地の先端部でも、方形周溝墓と竪穴建物が確認された宮ノ前遺跡(40)、方形周溝墓が円墳に隣接して確認された勝呂遺跡(39)、方形周溝墓が調査された五反田遺跡、紺屋丸山遺跡、景台遺跡、前窪遺跡と続き、毛呂台地から坂戸台地の縁辺部に方形周溝墓が連なる状況を呈している。

集落跡についても、台地の縁辺部をほぼ方形周溝墓と重なるように分布しているが、坂戸台地では小規模な集落跡が分散している状況がみられ、宮裏遺跡(58)が最も大きな集落である。毛呂台地においては、入西遺跡群の方形周溝墓群の基数が群を抜いており、これに対応する規模の集落は確認されていない。

古墳時代後期

ここでは5世紀後半から7世紀の集落と古墳群について記述する。

集落は前期と同じように、台地の縁辺部に立地するが、前期に比べて規模が大きく、広範囲に分布している。坂戸市の南東部に位置する中小坂地区には、大穴遺跡、金山遺跡、前林遺跡と該期の集落が広がっている。中小坂地区を皮切りに、集落は坂戸台地の縁辺部をほぼ途切れることなく続き、高麗川に近い芦山・宝戸ヶ谷遺跡(41)まで続いている。

毛呂台地に移っても台地の縁辺部に集落が連なり、入西遺跡群から毛呂山町の境界に近い長岡遺跡(22)、高麗川の河岸段丘上にも沼端遺跡(8)、中道北遺跡(9)などが分布する。

いずれの集落も、5世紀後半から6世紀には開発され、7世紀後半まで継続している。古墳時代中期とされる和泉式土器が出土する集落はほとんどなく、中小坂地区の集落と入西遺跡群が挙げられる程度で、軒数は限られている。

古墳群は集落と同じように台地の縁辺部に分布し、古墳群を調査すると、その都度、消滅した古墳の周溝が確認され、古墳の数が増加する一方である。

入間川に面した坂戸台地の下小坂古墳群から台地を北上するように、天王山古墳群、牛塚山古墳群、雷電塚古墳群と続き、高麗川を望む浅羽野古墳群まで連なる。毛呂台地では、さらに古墳が密集して構築され、途切れなく善能寺古墳群(キ)から毛呂山町の苦林古墳群(カ)、川角古墳群(ク)へと続いている。

7世紀後半になっても群集墳は拡大していったと考えられるが、こうした小円墳とは別に、50m級の円墳が築造されている。勝呂古墳群に含まれる勝呂1号墳(勝呂神社古墳)、浅羽野1号墳(土屋神社古墳)、成願寺1号墳(石神神社古墳)がそれで、古墳

第2節 歴史的環境

群に属してはいるが、築造された位置や古墳の規模など、他の古墳とは違いを見せている。また、新町古墳群(シ)に属する新町2号墳の現況は直径18mの円墳であるが、発掘調査により、周溝が確認されたことから、一辺50mの方墳と考えられる。鶴ヶ島市の御伊勢原古墳との関連が注目される。

7世紀後半には勝呂廃寺(39)が創建され、ほぼ同時期に東山道武蔵路が整備されている。

古代

坂戸台地の古代の集落については、これまで無遺跡だった台地内陸部に大規模な集落が形成されていることが大きな特徴として挙げられる。

古代の「市」と考えられている宮町遺跡(36)、住吉中学校遺跡(37)、清進場遺跡(38)はひとつの集落と考えられ、坂戸台地内陸部に展開する。東山道武蔵路の東側に位置し、8世紀初めから10世紀初めまで継続している。若葉台遺跡(51)を中心に、山田遺跡(50)、池ノ台遺跡(53)、鶴ヶ島市の一天狗遺跡(54)、脚折山田遺跡(55)、羽折遺跡(56)も坂戸台地内陸部に形成された集落で、開発された時期が8世紀初めとほぼ同一時期で、大きく括って、ひとつの遺跡群とすることができる。

毛呂山台地では、入西遺跡群が規模を縮小しながらも継続しており、坂戸台地のように遺跡群とはならないが、台地縁辺部に集落が分布する状況である。

平安時代に移行しても、規模が拡大する集落は多く、各地域においても集落が分散していく傾向がうかがえる。

7世紀後半ごろから岩殿丘陵には南比企窯跡群が開窯し、8世紀から10世紀前半まで途切れなく窯業は継続され、入間郡内ばかりでなく武蔵国府、国分寺への須恵器の供給を支えてきた。

毛呂台地に面し、越辺川により形成された沖積地には、古代に開発されたと言われる入西条里が

広がっている。

古代の坂戸を含む入間郡は、7世紀後半から律令体制の整備に伴い大きな開発や事業が興り、その後の高麗郡・新羅郡の建郡、蝦夷とのかかわり、俘囚・夷俘の受け入れなど、社会情勢の影響により集落が変遷していったと考えられる。

中世

下田遺跡周辺には比較的多くの中世遺跡が残っている。入西条里は古代に開発された可能性があるが、この地を本願地とした浅羽氏によってさらに開発が進み、耕地の拡大がはかられたと推察される。北浅羽の万福寺には浅羽氏に関する板碑があり、小山三福寺の薬師如来坐像は鎌倉期の作と言われている。金井遺跡(3)は梵鐘・仏像から日用品の鍋などを鑄造していた。

高坂台地を本拠地とした小代氏の資料として、勝呂周辺の耕作地を譲ることを記した書状には、現在も使われている地名が明記されている。勝呂氏の活躍した記録もあり、坂戸周辺には鎌倉時代に活躍した武士団の痕跡を見ることができる。

坂戸の西側に鎌倉街道上道が通過しており、この延長線上に苦林宿と考えられている堂山下遺跡(29)が調査されている。近くには板碑や蔵骨器などが出土した崇徳寺や常楽寺が造営されている。

坂戸市内には、土塁や空堀が多く残され、館跡として登録されているが、規模や年代が不明な館跡が多い。この地域での代表的な館跡は、川越市と坂戸市の市境にある大堀館であろう。また、宮廻館跡(48)は発掘調査によって、堀跡が検出された。

中世の集落は、遺構の残存状況が良好な遺跡があまりなく、遺物の出土も少ないため、遺跡の性格や年代を決定することが困難である場合が多く、集落について具体的に記述することが難しいのが現状であろう。

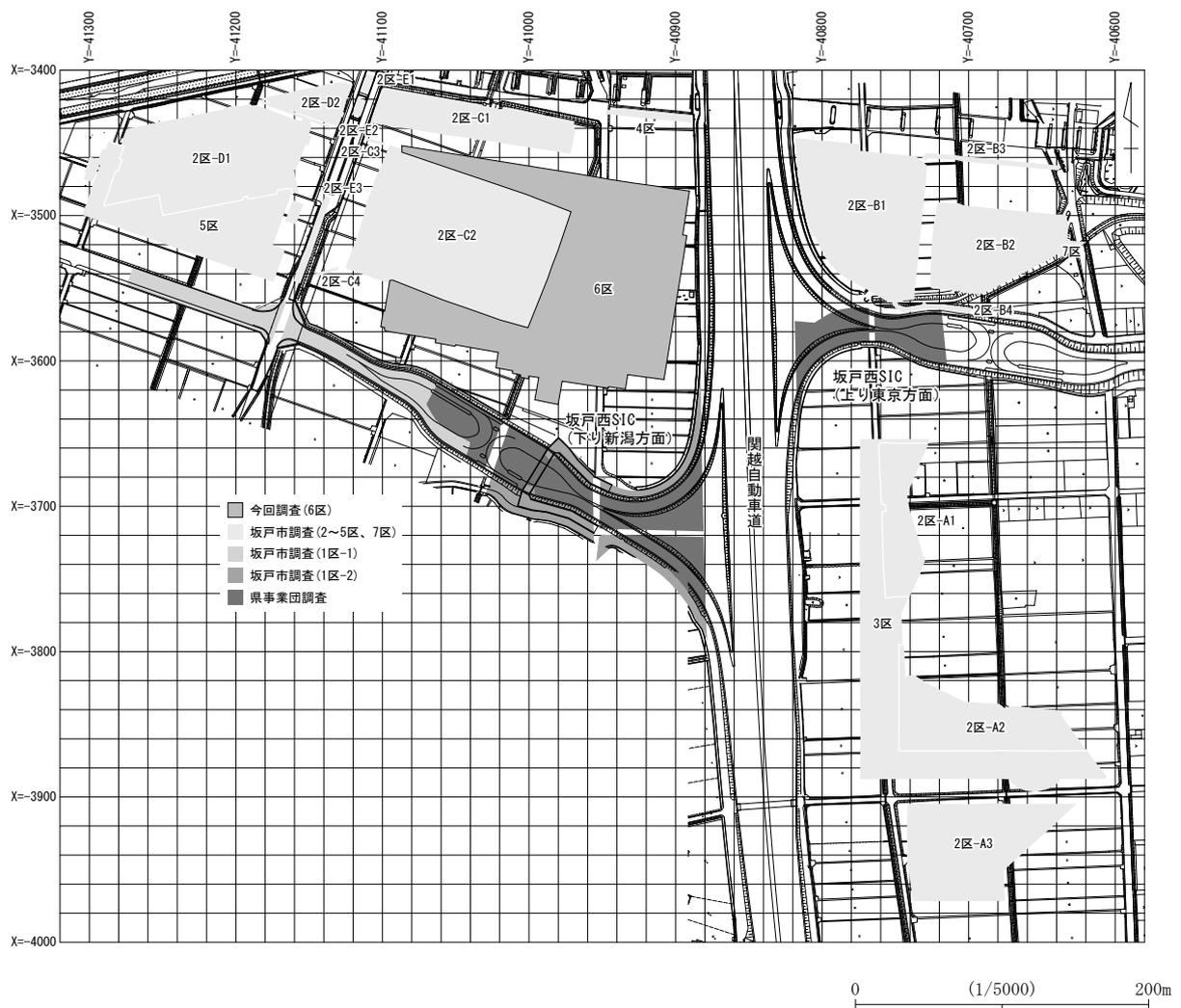
第3章 遺跡の概要と基本層序

第1節 遺跡の概要

下田遺跡は、入西遺跡群の東端に位置する遺跡であり、坂戸西スマートインターチェンジ建設に伴う事前調査として、平成22～23年度に、坂戸市教育委員会（以下、市教委）および埼玉県埋蔵文化財調査事業団（以下、県事業団）によって発掘調査を実施している。その後、流通加工施設の建築事業等に伴う調査として、市教委が主体となり平成27年度に下田遺跡2区、平成28～29年度に下田遺跡3区、平成29年度に下田遺跡4区、

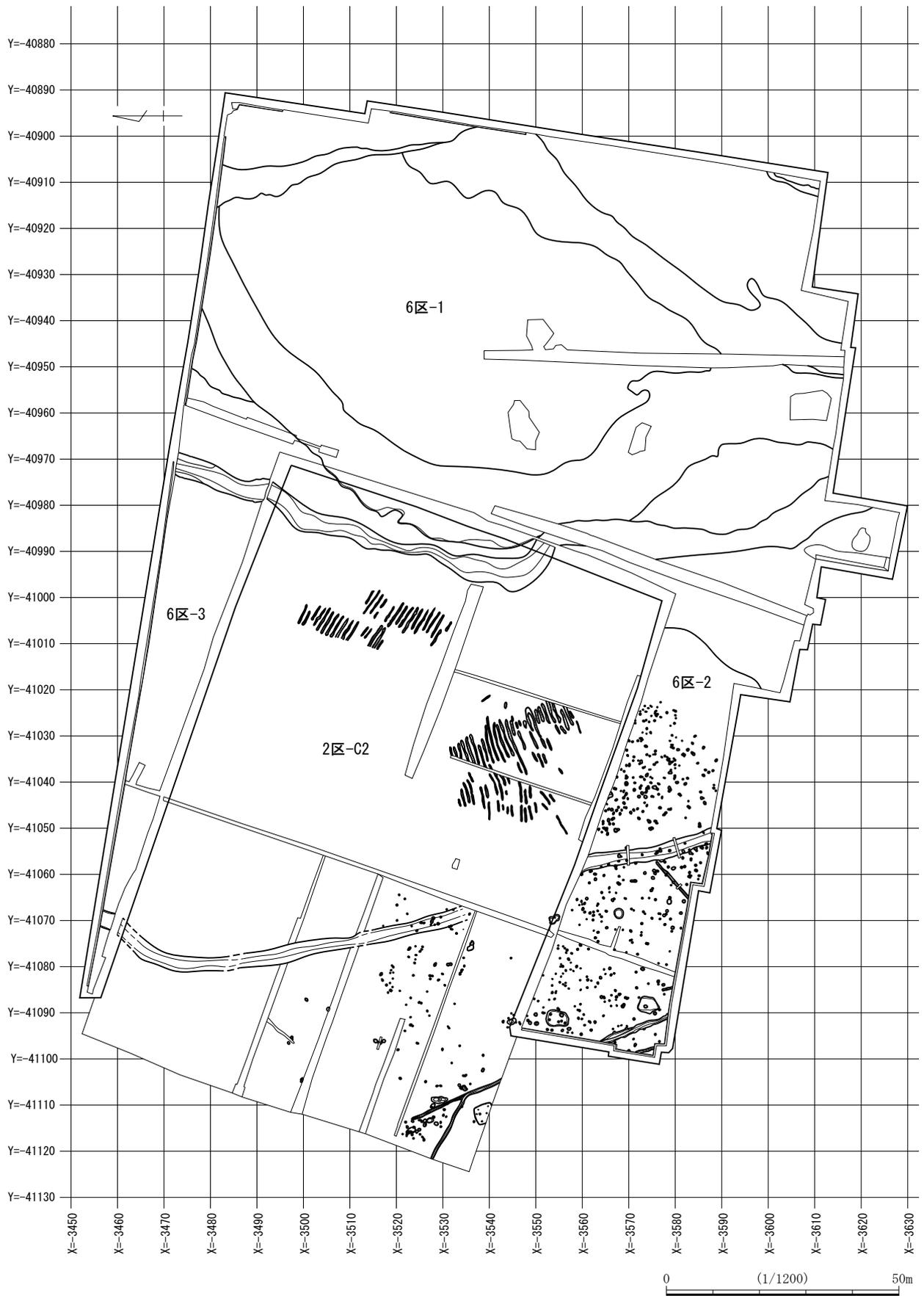
平成29～30年度に下田遺跡5区、令和2年度に下田遺跡7区の発掘調査を実施した。

今回の調査区である下田遺跡6区は、2区-C2を「コ」の字状に三方を囲むように隣接する位置にある。検出された遺構・遺物は、東部の6区-1を中心に確認された平安時代前期の集落跡が主体となる。一方で、南西部の6区-2で検出された3・4号竪穴状遺構は、2区-Dから2区-C2南西部にかけて広がる古墳時代前期の集落跡と一連性を有する遺構であると考えられる。

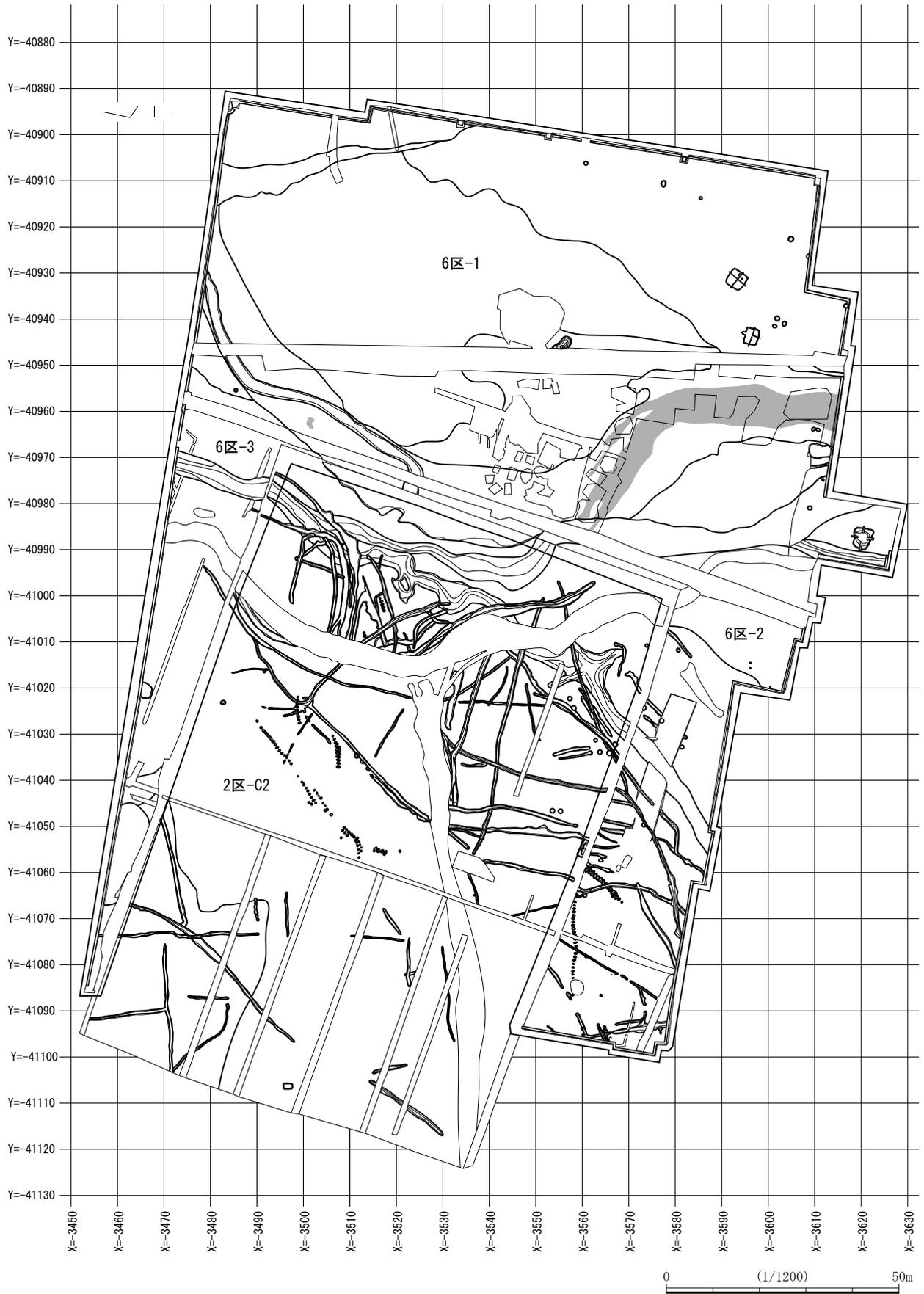


第3図 調査区位置図

第1節 遺跡の概要



第4図 全体図 古墳時代



第5図 全体図 奈良・平安時代

第2節 基本層序

過去の調査と同様に、今回の調査でも、自然堆積層に対する、旧高麗川・葛川による河川浸食の形跡が顕著に認められた。特に、6区-1では流路が南から流入する様子が明確であった。一方、6区-2は比較的安定した自然堆積層が観察でき、近・現代の水田耕作に至るまで、河川の影響が他の調査区に比べて少ない環境下で生活を営み続けられていたことが考えられる。

また、調査区が広大に渡ることから、地区ごとに堆積環境が異なり、遺構・遺物出土量にも偏りが生じている。大半の遺構は、6区-2で検出された。一方で、6区-1の南東部から南端部にかけての範囲で、1・2号竪穴建物、1・2号竪穴状遺構と、いくつかの円形土坑群が、多量の遺物と共に確認された。

調査区全体の共通項は、既往調査と同様に古墳時代の基本層(VII層)直下に、青灰色を呈する粘土層(VIII層)が厚く堆積している。また、下層確認調査にて、VIII層の下位には礫層(IX層)が堆積する様子が観察できた。よって、過去の調査と同様に、VII層を最終遺構確認面と判断した。

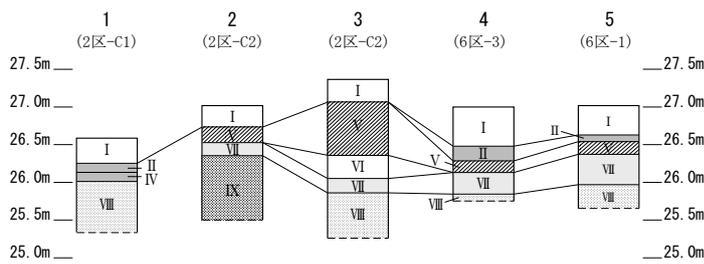
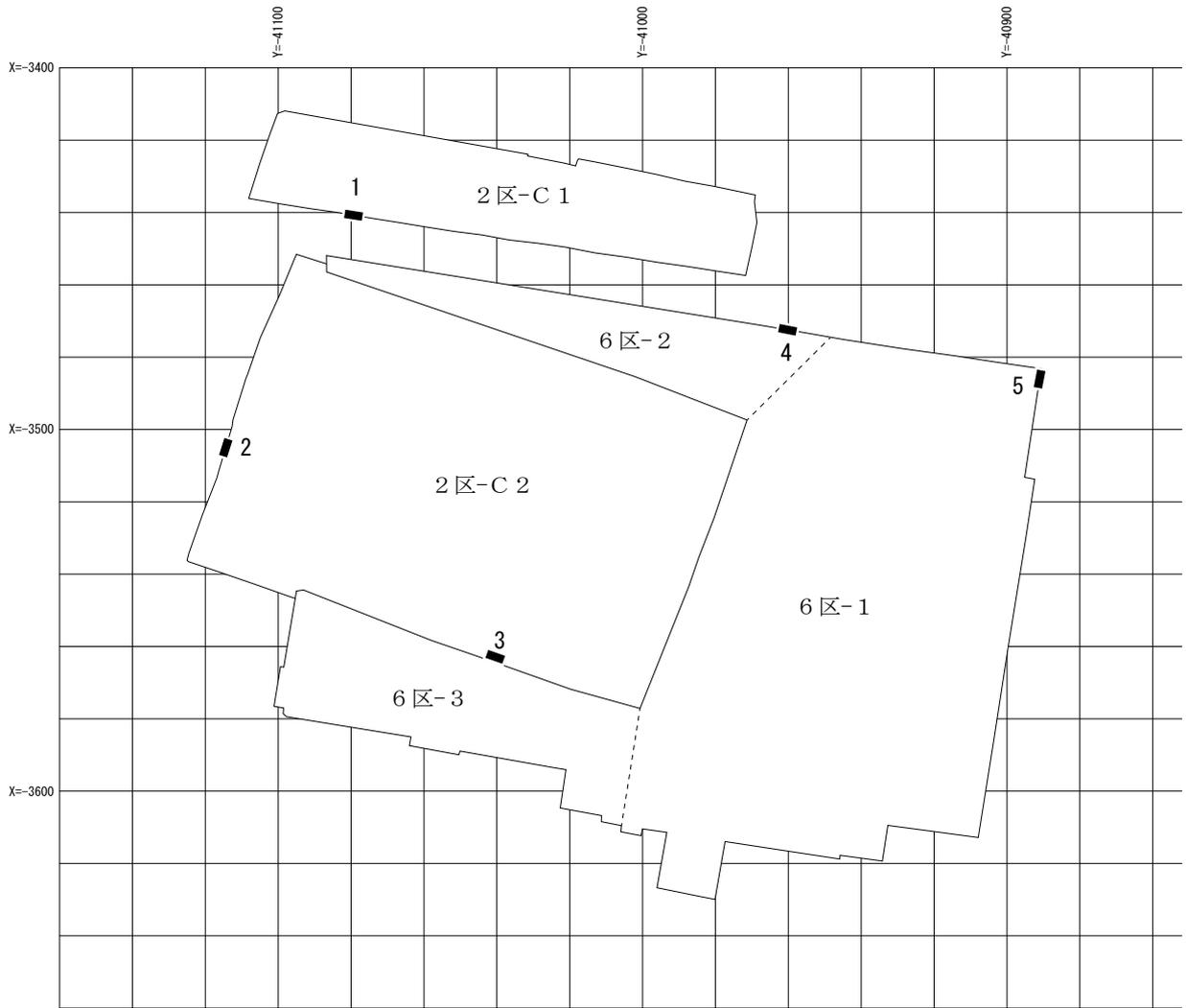
基本層序の確認位置は、2区-C2の調査で採取ができなかった北壁と東壁に設定し、記録を行った。以下に、基本層序の考察と分類を記述する。

I層は表土である。近・現代の水田層であり、マンガン・酸化鉄・コンクリート片・ビニール片などを含む。II層は中・近世の水田層である。調査区北壁の一部では、本層を削平するように砂礫層が流入していることが観察でき、少なくとも当時期までは河川の影響が存在していたことが推察される。V層上面は奈良・平安時代～中世の遺構確認面である。6区-1の南東部から南端部で検出された1・2号竪穴建物、1・2

号竪穴状遺構、円形土坑群は出土遺物より、平安時代前期の所産と考えられる。VII層上面は古墳時代の遺構確認面である。本層上面で確認された、6区-2の3・4号竪穴状遺構は出土遺物より、古墳時代前期の所産と考えられる。また、2区-C2区の1号住居跡とは同時期に併存しており、2区-D1から広がる集落跡の南端に属すると推察される。

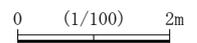
また、当初はV層直下で確認された砂質シルト層を古墳時代後期の基本層(VI層)として捉え、現地調査を行ったが、整理段階でVII層と土質に明確な差異が認められなかったこと、現地調査段階におけるVI層上面・VII層上面で検出された遺構の主体を古墳時代前期の所産が占めることから、今回の調査ではV層の直下にVII層が厚く堆積すると判断した。よって、本遺跡における遺構時期は奈良・平安時代と、古墳時代の2時期に大別されると考えられる。

次章では、発見された遺構・遺物について、調査区ごとに記述していく。



層位	主体となる土質	時期
I	砂質シルト	近・現代(表土)
II	粘土質シルト	中・近世水田跡
III	砂質シルト	中・近世
IV	粘土質シルト	古代水田跡
V	砂質シルト	奈良・平安
VI	砂質シルト	古墳後期
VII	砂質シルト	弥生後期～古墳前期
VIII	粘土(青灰色)	
IX	砂利・礫	

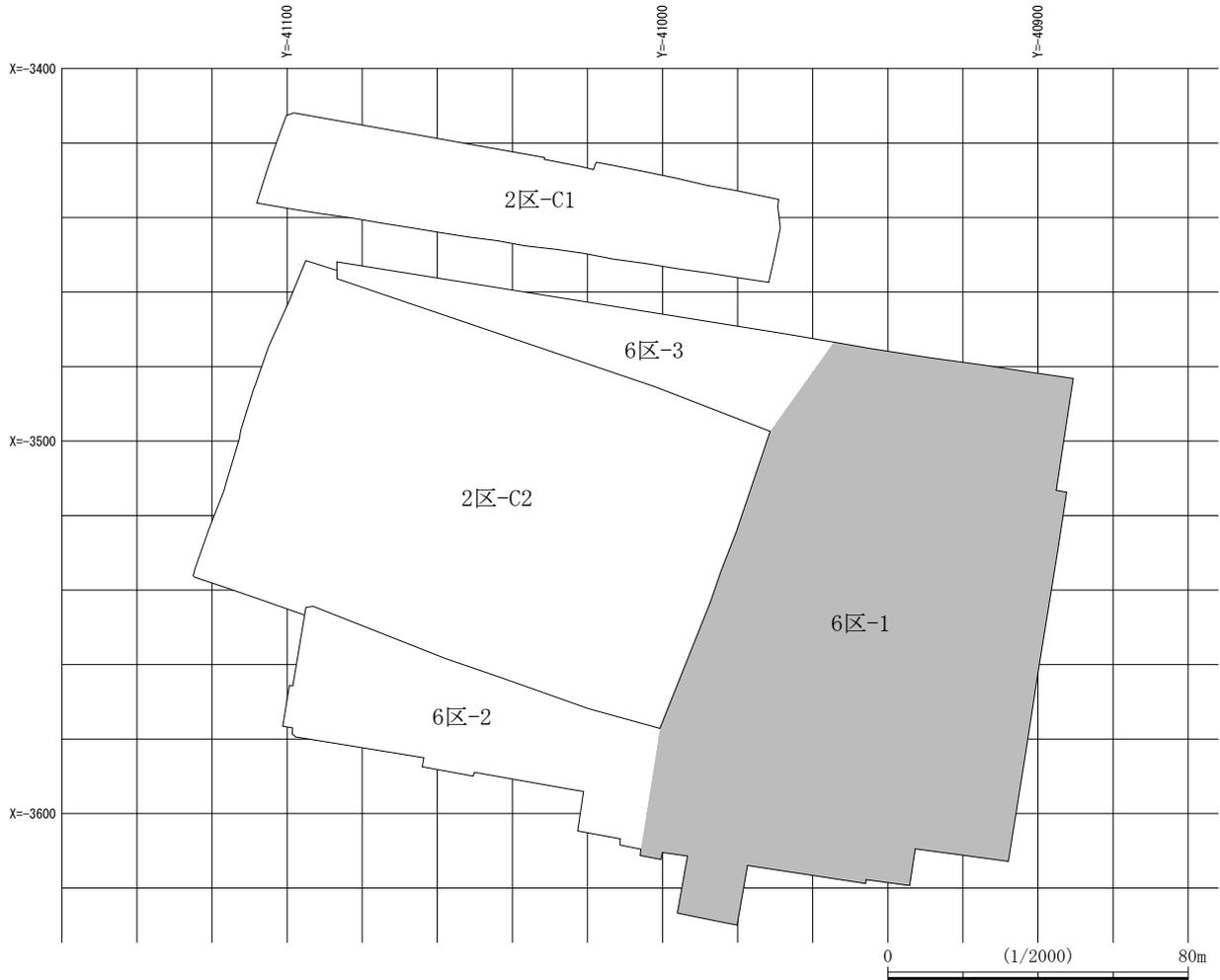
※「時期」とは、各層の上面で検出される遺構の時期を示す。



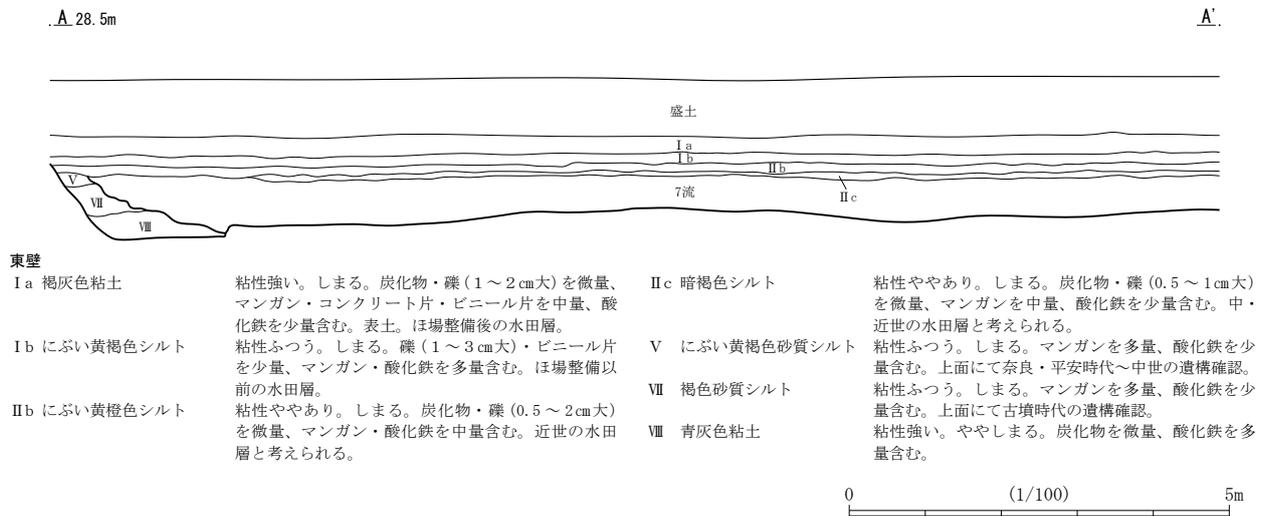
第6図 基本層序

第4章 6区-1の調査成果

第1節 概要・層序



第7図 調査区位置図 6区-1



東壁

- | | | |
|-------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>I a 褐灰色粘土</p> <p>I b にぶい黄褐色シルト</p> <p>II b にぶい黄橙色シルト</p> | <p>粘性強い。しまる。炭化物・礫(1~2cm大)を微量、マンガン・コンクリート片・ビニール片を中量、酸化鉄を少量含む。表土。ほ場整備後の水田層。</p> <p>粘性ふつう。しまる。礫(1~3cm大)・ビニール片を少量、マンガン・酸化鉄を多量含む。ほ場整備以前の水田層。</p> <p>粘性ややあり。しまる。炭化物・礫(0.5~2cm大)を微量、マンガン・酸化鉄を中量含む。近世の水田層と考えられる。</p> | <p>II c 暗褐色シルト</p> <p>V にぶい黄褐色砂質シルト</p> <p>VII 褐色砂質シルト</p> <p>VIII 青灰色粘土</p> <p>粘性ややあり。しまる。炭化物・礫(0.5~1cm大)を微量、マンガンの中量、酸化鉄を少量含む。中・近世の水田層と考えられる。</p> <p>粘性ふつう。しまる。マンガンを多量、酸化鉄を少量含む。上面にて奈良・平安時代~中世の遺構確認。</p> <p>粘性ふつう。しまる。マンガンを多量、酸化鉄を少量含む。上面にて古墳時代の遺構確認。</p> <p>粘性強い。ややしまる。炭化物を微量、酸化鉄を多量含む。</p> |
|-------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

第8図 東壁断面

6区-1は下田遺跡6区の東部にあたり、2区-C2が西隣する。現地表面の標高は約27.7～28.1mを測り、北に向けて下がる。

1～1.3m前後の盛土を除去すると区画整理以前の水田層が残存し、更に約0.5m下で奈良・平安時代の遺構確認面であるV層上面に達するが、

V層は南東隅から北方向に約60mの範囲で、流路の上部に堆積する様子が確認できた。

調査区東壁では水田層の下部で、流路の礫層が厚く堆積する様子が広範囲で確認された。

調査区中央部から北部では、水田層を除去すると直下に流路覆土の礫層、砂礫層が確認された。



第9図 6区-1古墳時代遺構配置図

第1節 概要・層序

平安時代の所産と考えられる竪穴建物、竪穴状遺構、土坑などの基盤層となるV層は堆積した範囲が限られ、V層の下部は流路となる。また、V層の堆積が認められなかった地点は、流路が南から北方向に注ぎ込む状況が続いたと考えられる。

層序は、調査区東壁の一部を図示した(第8図)。I a層はほ場整備後の現代水田層であり、

表土にあたる。I b層はほ場整備前の近・現代水田層、II b層が近世水田層、II c層が中・近世水田層にあたる。なお、2区-C 2東部で広がる古墳時代の畝群は、本調査では確認されなかった。

調査区の南東部に堆積したV層上面は、奈良・平安時代の遺構確認面、VII層の上面は古墳時代の遺構確認面である。



第10図 6区-1 平安時代遺構配置図

第2節 竪穴建物

1. 平安時代

検出された竪穴建物は2軒である。いずれも南東部で確認された。

1号竪穴建物 (第11～13図 図版3・16)

位置：南東部。

重複：なし。

形態：平面形は隅丸方形を呈する。

規模：長軸3.98m×短軸3.76m×深さ0.22m

主軸：N-55°-W

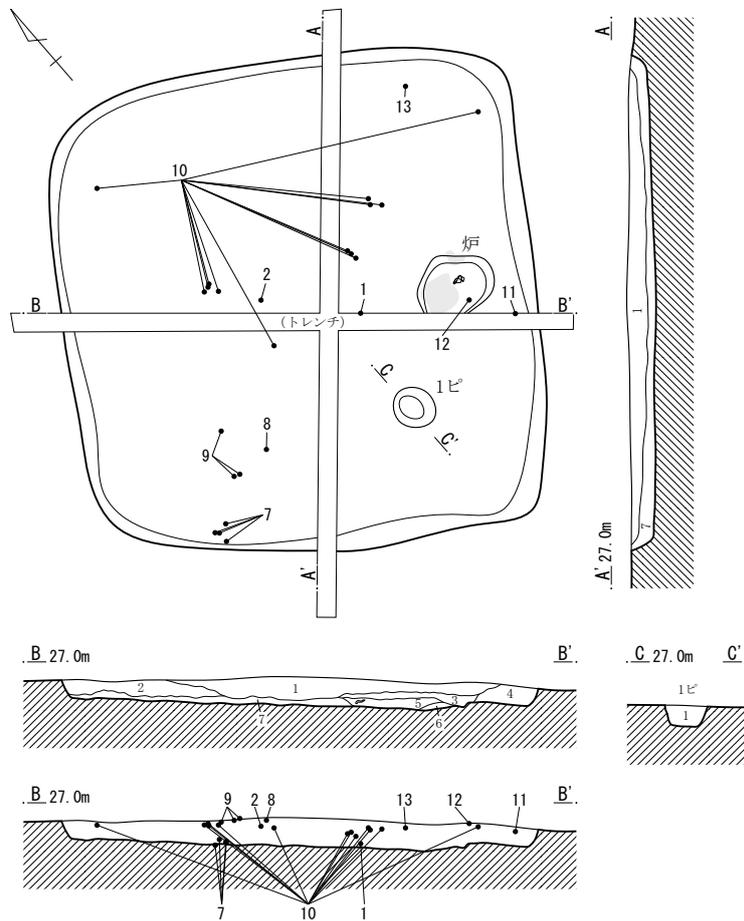
覆土：レンズ状に堆積し、7層に分層される。各層は焼土・炭化物を含み、6層は焼土ブロック（1～2cm大）を多量に含む。

周溝：なし。

柱穴：南東側の床面より1号ピットを検出した。

床面：硬化面範囲は認められなかった。

掘り方：なし。



1号竪穴建物

- | | |
|---------------|---------------------------------|
| 1 暗褐色砂質シルト | 粘性ややあり。しまる。焼土・炭化物を少量含む。 |
| 2 にぶい黄褐色砂質シルト | 粘性ややあり。しまる。焼土を少量、炭化物を微量含む。 |
| 3 黒褐色シルト | 粘性ふつう。しまる。炭化物を中量含む。 |
| 4 黄褐色砂質シルト | 粘性ふつう。しまる。焼土・炭化物を微量含む。 |
| 5 灰黄褐色砂質シルト | 粘性ふつう。しまる。焼土を少量含む。 |
| 6 にぶい赤褐色シルト | 粘性ややあり。しまる。焼土ブロック（1～2cm大）を多量含む。 |
| 7 にぶい褐色砂質シルト | 粘性ややあり。しまる。炭化物を少量含む。 |
| 1号竪穴建物1号ピット | |
| 1 灰黄褐色シルト | 粘性ふつう。しまる。炭化物を微量含む。 |

0 (1/60) 2m

第11図 1号竪穴建物

第2節 竪穴建物

炉

位置：東側中央の壁際に位置する。
規模：長軸0.64m×短軸0.5m×深さ0.05m
形態：平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。中央部底面には被熱を受けた自然礫が置かれていた。

遺物

遺物は竪穴建物全体から出土しているが、中央部からやや北側に集中している。

出土遺物の総量は、須恵器28.72g、ロクロ土師器151.06g、土師器2,909.81g、灰釉陶器10.52g、石製品37.2gで、このうち13点を図示した。大半は覆土中から出土したが、1と7は床面から出土した。また、10は覆土上層から中層にかけて出土した破片が接合した。

1・2はロクロ土師器坏である。1は内面の摩滅が顕著であり、ロクロ目は観察できなかった。器厚は体部がやや厚く、口縁部にかけて薄くなる。2は口縁部のみ残存する。器厚は厚く、口縁部は僅かに外反する。

3・4はロクロ土師器高台付坏である。いずれも底部を回転糸切り後に高台を貼付けている。色調は須恵器に類似し、灰色を呈する。

5・6は灰釉陶器碗である。6は東濃窯産と思われる。

7～12は土師器甕である。7は口唇部外面に沈線が巡る。器厚は、口縁部から頸部にかけて肥厚し、外面には段を有する。断面は「コ」の字状を呈する。肩部は張り、外面にススが付着している。

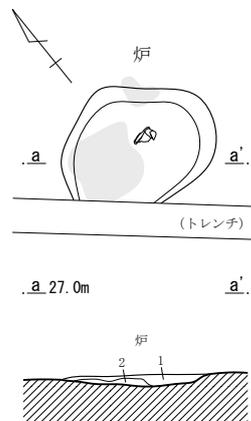
8も口唇部外面に沈線が巡る。器厚は口縁部が厚く、頸部下端から胴部に向けて薄くなる。口縁部は「く」の字状を呈する。9も口唇部外面に沈線が認められる。頸部下端から胴部に向けて、器厚は薄く推移する。

10は口縁部から底部にかけての破片を復元実測した。外面はにぶい黄褐色を示し、内面は黒褐色を呈する。口縁部は緩い「く」の字状に外反する。器厚は肩部から胴部上位にかけて器壁は薄くなり、胴部中位の輪積み接合部が肥厚する。その後、胴部下位から底部にかけて再び薄くなり、底部で肥厚する。また、頸部内面には明確ではないが、木口状工具によるナデ調整が認められる。

11は口縁部から肩部が残存する。器厚はほぼ一定であり、口縁部が緩やかに「く」の字状に外反する。肩部外面には砂粒剥落痕が認められた。

12は胴部下位から底部の破片である。底部外面は部分的に剥離しているが、ヘラケズリが認められた。

13は砥石である。両端部を欠損する。石材は凝灰岩であり、色調は白色を呈する。



1号竪穴建物炉

- 1 にぶい黄褐色シルト 粘性ふつう。しまる。焼土ブロック(0.5～3cm大)を中量、炭化物を少量含む。
- 2 明赤褐色シルト 粘性弱い、ややしまる。焼土ブロック(0.5～3cm大)を多量含む。

0 (1/30) 1m

第12図 1号竪穴建物炉

時期

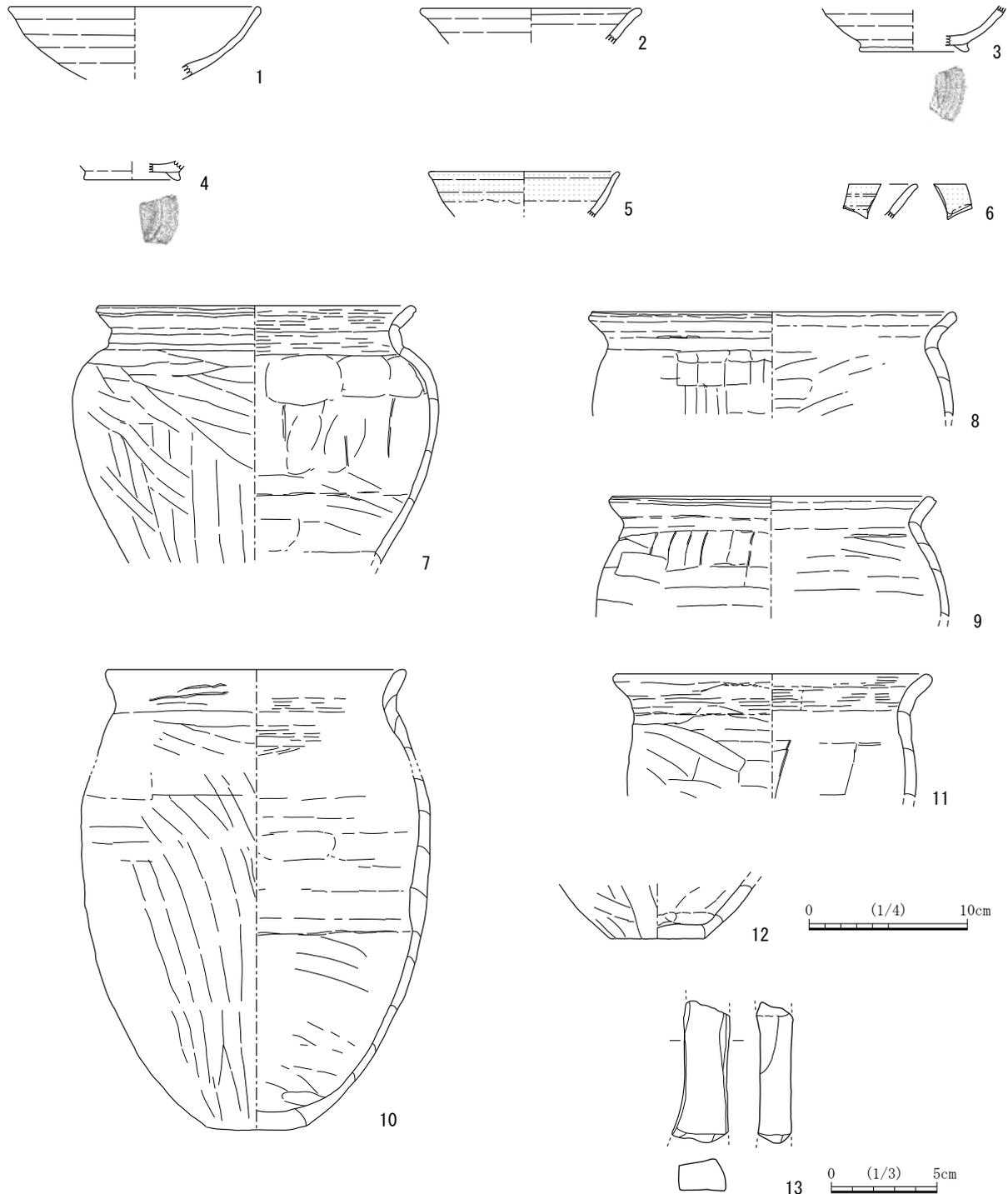
出土遺物より、平安時代前期(10世紀前半)と考えられる。

所見

遺構検出をしたところ、暗褐色砂質シルトの土

層が隅丸方形状に広がりを示した。

トレンチを十字に設定し床面の確認を行ったが、明確な硬化面が判断できなかったため、サブトレンチを設定し下層を確認した。その結果、7層直下に16号流路の覆土と思われる砂礫層が厚



第13図 1号竪穴建物出土遺物

第2節 竪穴建物

く堆積していたため、7層直下を建物床面と判断した。

建物東側中央部の壁面付近では、楕円形状に焼土・炭化物が集中する箇所が観察された。当初は、カマドの火床面である可能性を考慮し、建物東壁の再精査を行ったが、カマドの存在を明確に

示す、袖部・煙道部が確認されなかったため、先述の焼土・炭化物集中範囲は炉と判断した。

炉内からは、自然礫(砂岩)が2点出土した。外面にはススが付着し、部分的に赤色化が認められることから、炉の使用時に用いられたものと考えられる。

第2表 1号竪穴建物出土土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値 (cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	ロクロ土師器 杯	床	口径：(15.6) 底径：- 器高：[6.1] 最大径：-	特徴：器面摩滅 外面：ロクロナデ 内面：器面摩滅により判別不能	胎土：角、片、チャ、赤 焼成：普通 色調：明赤褐色 残存度：25%	
2	ロクロ土師器 杯	覆土上層	口径：(13.7) 底径：- 器高：[2.4] 最大径：-	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	胎土：石、長、角、チャ、赤 焼成：普通 色調：明褐色 残存度：10%	
3	ロクロ土師器 高台付杯	覆土	口径：- 底径：(6.4) 器高：[2.6] 最大径：-	特徴：器面摩滅 外面：ロクロナデ、底部回転糸切り後高台貼付け 内面：器面摩滅により判別不能	胎土：石、片、チャ 焼成：普通 色調：灰色 残存度：底部10%	
4	ロクロ土師器 高台付杯	覆土	口径：- 底径：(6.0) 器高：[1.2] 最大径：-	特徴：器面摩滅 外面：ロクロナデ、底部回転糸切り後高台貼付け 内面：器面摩滅により判別不能	胎土：角、片、チャ 焼成：普通 色調：灰色 残存度：10%	
5	灰釉陶器 埴	覆土	口径：(11.8) 底径：- 器高：[2.9] 最大径：-	外面：漬け掛け 内面：漬け掛け	胎土：石、長、チャ、白 焼成：良好 色調：灰白色 残存度：10%	
6	灰釉陶器 埴	覆土	口径：- 底径：- 器高：[2.2] 最大径：-	外面：漬け掛け 内面：漬け掛け	胎土：白、黒 焼成：良好 色調：灰色 残存度：破片	東濃窯産
7	土師器 甕	覆土下層 床	口径：(19.6) 底径：- 器高：[16.4] 最大径：-	外面：口唇部沈線、頸部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面：口縁部～頸部ナデ、胴部指頭圧痕後ヘラナデ	胎土：角、チャ、赤 焼成：普通 色調：にぶい黄褐色 残存度：35%	
8	土師器 甕	覆土上層	口径：(22.8) 底径：- 器高：[6.7] 最大径：-	外面：口唇部沈線、頸部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面：口唇部凹線、頸部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土：石、長、片、チャ 焼成：普通 色調：にぶい黄褐色 残存度：10%	
9	土師器 甕	覆土上層	口径：(20.0) 底径：- 器高：[7.8] 最大径：-	外面：口唇部沈線、口縁部～頸部ナデ、胴部ヨコケズリ、ヘラケズリ 内面：口唇部凹線、口縁部～胴部ヨコナデ	胎土：角、凝、片、チャ 焼成：普通 色調：黄褐色 残存度：15%	
10	土師器 甕	覆土上層 覆土中層	口径：(24.0) 底径：(6.2) 器高：(29.0) 最大径：-	特徴：内面黒色 外面：口縁部ヨコナデ、頸部～胴部ヘラケズリ 内面：口縁部～胴部ヘラナデ、頸部木口状当て具痕	胎土：石、長、片、チャ 焼成：普通 色調：にぶい黄褐色 残存度：30%	復元実測
11	土師器 甕	覆土上層	口径：(19.6) 底径：- 器高：[7.8] 最大径：-	特徴：胴部外面に砂粒剥落痕 外面：口縁部～頸部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土：石、長、角、片、チャ 焼成：普通 色調：にぶい黄褐色 残存度：口縁部10%	
12	土師器 甕	覆土上層	口径：- 底径：(6.0) 器高：[3.5] 最大径：-	外面：ヘラケズリ 内面：ナデ	胎土：角、片、チャ 焼成：普通 色調：黒褐色 残存度：底部40%	

第3表 1号竪穴建物出土石製品観察表

番号	器種	石材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存度	備考
13	砥石	凝灰岩	覆土上層	[6.8]	[2.6]	[1.7]	37.2	80%	両端部欠損

2号竪穴建物(第14～16図 図版3・16)

位置：南東部。1号竪穴建物の南西に位置する。
 重複：なし。
 形態：平面形は隅丸方形を呈する。
 形態：長軸3.68m×短軸3.6m×深さ0.18m
 主軸：N-21°-E
 覆土：ほぼ水平に堆積し、2層に分層される。
 周溝：なし。
 柱穴：なし。
 床面：硬化面範囲は認められなかった。
 掘り方：なし。

カマド

位置：建物の北壁やや東寄りに1基有する。
 規模：長軸0.97m×短軸0.6m
 覆土：黄褐色系統のシルトを主体とし、各層に焼土・炭化物を含む。2・3層に焼土ブロックがやや多く含まれているが、覆土

の赤変化は見受けられなかった。層位から天井部周辺の土層と考えられる。

天井部：焼土ブロック・焼土を中量含む4・5層が天井部崩落土と考えられる。

袖部：確認されなかった。

煙道部：底面は奥側に向けて緩やかな傾斜を示し、奥壁はやや開かれた角度で立ち上がる。

火床面：明確な火床面は確認されなかった。

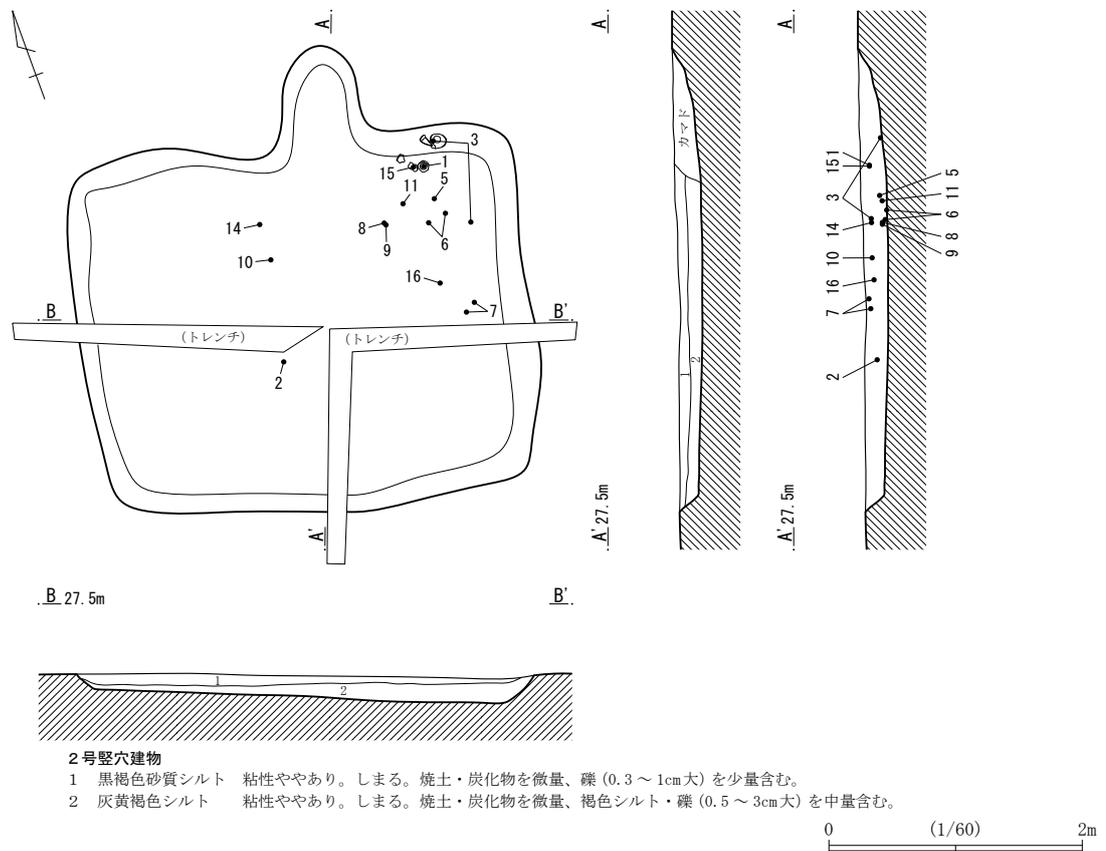
掘り方：なし。

遺物

遺物は竪穴建物の中央部から北東隅に集中し、覆土上層から床面近くに渡って分布している。

また、種別のうち須恵器と断定できない土器については、本書に限り便宜上(須恵器)と分類し、表記する。

出土遺物の総量は須恵器323.89g、(須恵器)34.51g、ロクロ土師器372.36g、土師器1,045.53g



第14図 2号竪穴建物

第2節 竪穴建物

であり、このうち16点を図示した。3は壁際と床面からの出土、13はカマド中層からの出土である。

1は須恵器坏の体部下位～底部片である。底部はやや上げ底になっている。底部内面は、中央部がやや窪む。胎土中に海綿骨針を含む。南比企産である。

2は(須恵器)坏の体部下位～底部片である。色調は灰色を呈する。焼成が不良であり、ロクロナデがやや不明瞭であった。

3は須恵器高台付埴であるが、高台部を完全に欠損し、接合痕のみを残す。器厚は口縁部から体部下位にかけて薄くなり、体部と底部の接続部分で肥厚する。

4～6はロクロ土師器坏である。4は口縁部片で、器厚はやや薄く、口縁部は大きく外反する。5は口縁部～体部上位部分が残存する。器厚はほぼ均一で、口縁部は僅かに外反し、口唇部は丸く収めている。胎土中に海綿骨針を含むことから、南比企窯周辺の土を製作に用いたと考えられる。

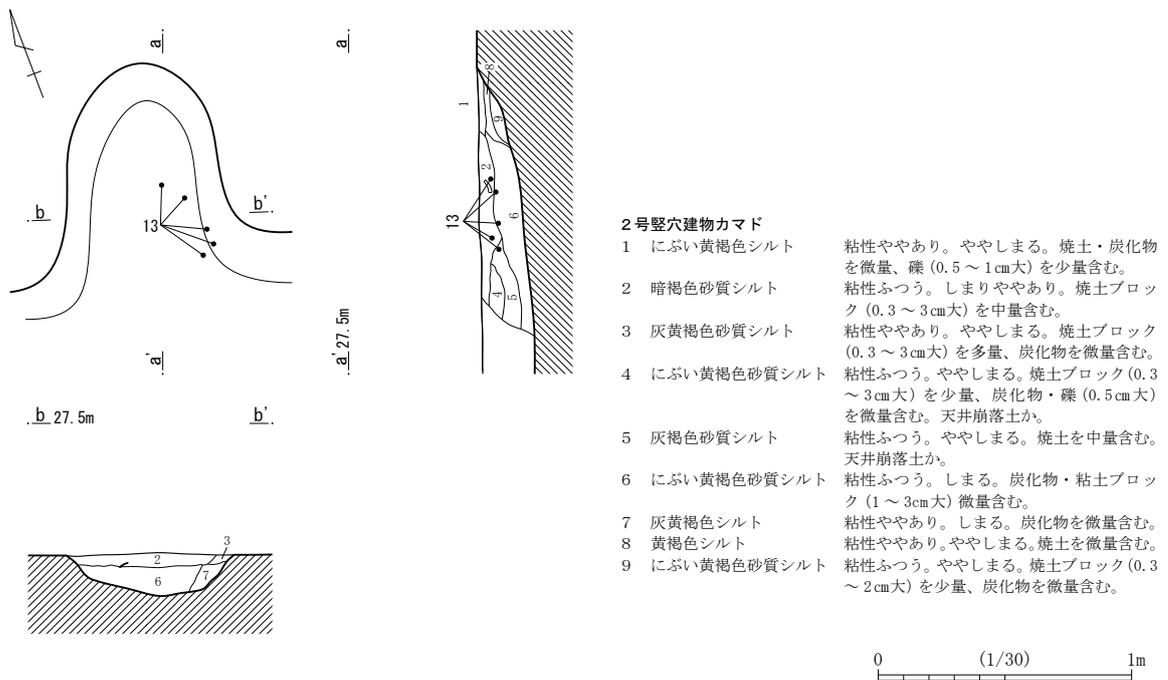
6は口縁部片である。器厚はほぼ均一で、やや直線的に立ち上がる。

7～11はロクロ土師器高台付坏・埴である。このうち8は5と同様に胎土中には海綿骨針を含む。いずれも、底部を回転糸切りした後、高台を貼り付けた痕跡が認められる。

12・13は土師器甕である。12は口縁部から肩部片である。口縁部から頸部外面は指頭圧痕による凹凸が部分的に残存しつつ、ナデによって平滑に仕上げられている。外面は横方向のケズリが散見される。13はカマドから出土した口縁部から胴部片を復元実測した、器厚はほぼ均一である。肩部外面にはススが附着している。

14は土師器小型甕である。カマドから出土した。頸部から肩部上位がやや肥厚し、口縁部はやや垂直気味に立ち上がる。肩部下位から胴部に向けてはやや薄くなる。外面には砂粒剥落痕が散見される。

15・16は土師器台付甕である。ともに底部片で、脚部を欠損している。



第15図 2号竪穴建物カマド

時期

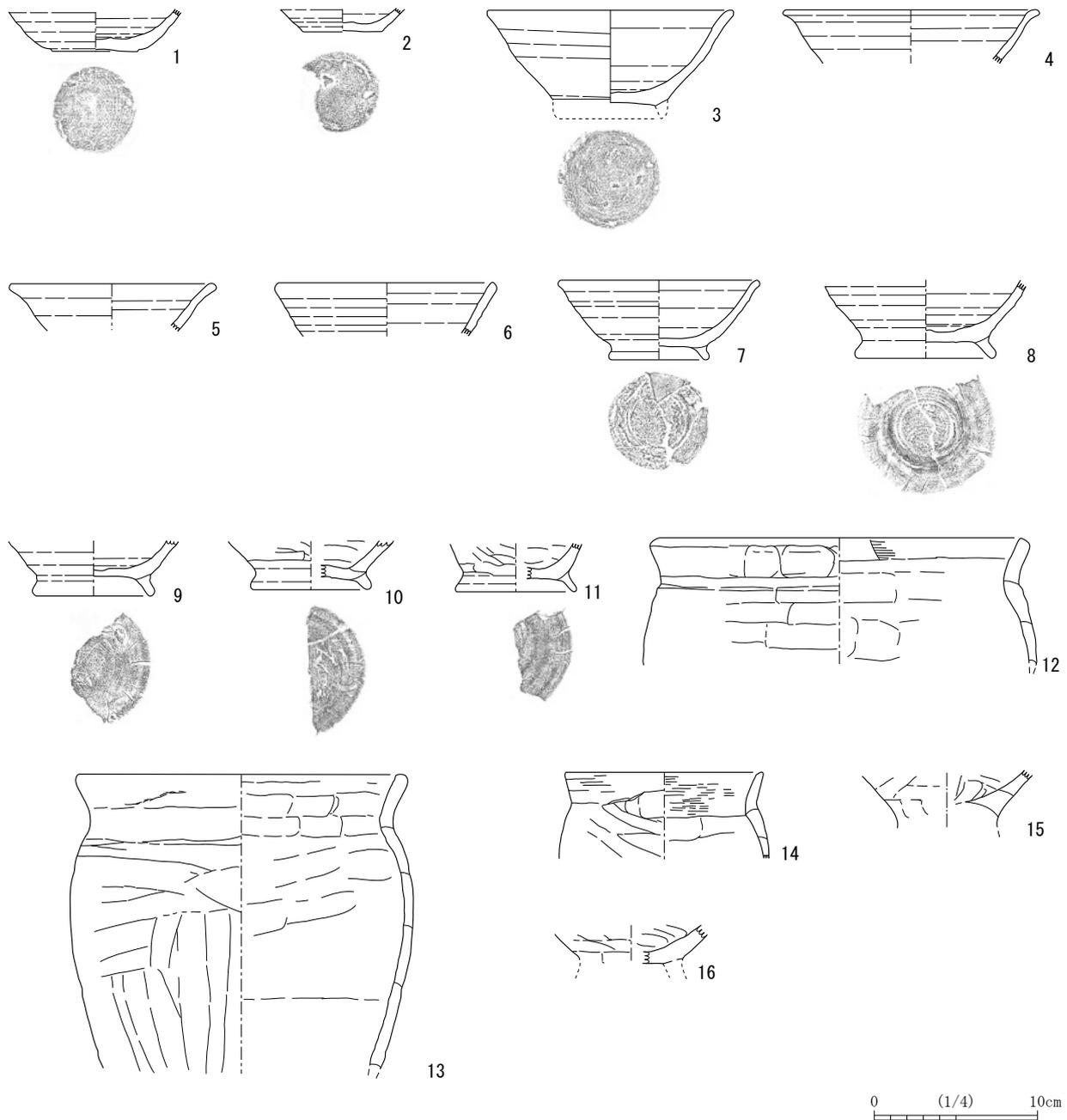
出土遺物より、平安時代前期(10世紀前半)と考えられる。

所見

今回の調査で唯一のカマドを有する竪穴建物である。覆土は、黒褐色砂質シルト(1層)を主体とし、焼土・炭化物と、礫が混入物として含まれていた。

1号竪穴建物と同様に、明確な床面の識別が困難であることから、サブトレンチを設定したところ、灰黄褐色シルト(2層)の下層に、16号流路の覆土と考えられる礫層が堆積することから、礫層の上面である2層を床面とした。

カマドは北側に1基有するが、残存状態は悪く、袖部、火床面は確認されなかった。カマドの覆土も全体的にしまりが弱い。



第16図 2号竪穴建物出土遺物

第2節 竪穴建物

第4表 2号竪穴建物出土土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値 (cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	須恵器 坏	覆土上層	口径：- 内底径：4.3 底径：5.0 器高：[2.4] 最大径：-	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	胎土：針、角、チャ 焼成：普通 色調：にぶい褐色 残存度：底部100%	南比企産
2	(須恵器) 坏	覆土中層	口径：- 内底径：3.7 底径：4.8 器高：[1.4] 最大径：-	特徴：器面軽度の摩滅 外面：ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	胎土：石、長、片、チャ 焼成：不良 色調：灰色 残存度：底部100%	東金子産か？
3	須恵器 高台付塊	覆土上層 床	口径：15.0 内底径：4.2 底径：5.5 器高：[5.9] 最大径：-	特徴：高台部欠損 外面：ロクロナデ、底部回転糸切り後高台貼付け 内面：ロクロナデ	胎土：針、片、チャ、黒 焼成：普通 色調：暗灰黄色 残存度：ほぼ完形	南比企産
4	ロクロ 土師器 坏	覆土	口径：(15.5) 底径：- 器高：[3.3] 最大径：-	特徴：外面の一部をナデ整形 外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ、ナデ	胎土：チャ 焼成：普通 色調：褐灰色 残存度：10%	
5	ロクロ 土師器 坏	覆土下層	口径：(12.4) 底径：- 器高：[2.9] 最大径：-	特徴：外面の一部をナデ整形 外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ、ナデ	胎土：針、石、長、片、 チャ 焼成：普通 色調：灰黄褐色 残存度：20%	在地産
6	ロクロ 土師器 坏	床	口径：(13.2) 底径：- 器高：[3.3] 最大径：-	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	胎土：石、長、片、チャ 焼成：普通 色調：明黄褐色 残存度：口縁部10%	
7	ロクロ 土師器 高台付坏	覆土上層	口径：(12.0) 底径：(6.0) 器高：4.9 最大径：-	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り後高台貼付け 内面：ロクロナデ	胎土：石、長、片、チャ 焼成：普通 色調：灰黄褐色 残存度：60%	
8	ロクロ 土師器 高台付塊	床	口径：- 底径：7.8 器高：[4.8] 最大径：-	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り後高台貼付け 内面：ロクロナデ	胎土：針、石、長、角、 チャ 焼成：普通 色調：褐色 残存度：底部90%	在地産
9	ロクロ 土師器 高台付坏	床	口径：- 底径：6.8 器高：[3.4] 最大径：-	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り後高台貼付け 内面：ロクロナデ	胎土：石、長、チャ 焼成：普通 色調：にぶい黄褐色 残存度：20%	
10	ロクロ 土師器 高台付坏	覆土上層	口径：- 底径：(7.0) 器高：[3.0] 最大径：-	外面：体部ヘラナデ、高台部ロクロナデ 内面：体部ヘラナデ	胎土：凝、チャ、赤、黒 焼成：普通 色調：にぶい黄褐色 残存度：20%	
11	ロクロ 土師器 高台付坏	覆土下層	口径：- 底径：(7.0) 器高：[3.0] 最大径：-	外面：胴部ヘラナデ、高台部ロクロナデ 内面：体部ヘラナデ	胎土：石、長、片、チャ 焼成：普通 色調：にぶい赤褐色 残存度：10%	
12	土師器 甕	カマド 覆土	口径：(22.4) 底径：- 器高：[7.9] 最大径：-	外面：頸部指頭圧痕、ナデ、胴部ヨコケズリ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部～胴部ヘラナデ	胎土：石、長、角、チャ 焼成：普通 色調：にぶい黄褐色 残存度：口縁部10%	
13	土師器 甕	カマド 覆土中層	口径：20.0 底径：- 器高：[18.5] 最大径：-	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヨコナデ	胎土：石、長、角、片、 チャ 焼成：普通 色調：にぶい黄褐色 残存度：30%	外面にスス付着
14	土師器 小型甕	覆土上層	口径：(11.8) 底径：- 器高：[5.4] 最大径：-	特徴：胴部外面砂粒剥落痕 外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	胎土：石、長、チャ 焼成：普通 色調：明褐灰色 残存度：口縁部10%	
15	土師器 台付甕	覆土上層	口径：- 底径：- 器高：[2.7] 最大径：-	特徴：脚部欠損 外面：胴部ヘラケズリ、ナデ 内面：胴部ヘラナデ	胎土：角、凝、チャ、黒 焼成：普通 色調：にぶい黄褐色 残存度：底部40%	
16	土師器 台付甕	覆土上層	口径：- 底径：- 器高：[2.3] 最大径：-	特徴：脚部欠損 外面：胴部ヘラケズリ、ヘラナデ 内面：胴部ヘラナデ	胎土：角、片、チャ 焼成：普通 色調：黄褐色 残存度：底部40%	

第3節 竪穴状遺構

1. 平安時代

検出された竪穴状遺構は2基である。

1号竪穴状遺構 (第17・18図 図版4・17)

位置：中央南端部。

重複：なし。

形態：平面形は不整形、断面形は逆台形を呈し、南側は調査区域外に延びる。底面は南側が平坦であったが、北側には緩やかな凹凸が認められた。

規模：長軸(4.72)m×短軸3.24m×深さ3.6m

主軸：N-7°-E

覆土：単層である。覆土中には、焼土・炭化物を微量に含み、0.5～3cm大の礫を多量に含む。

遺物

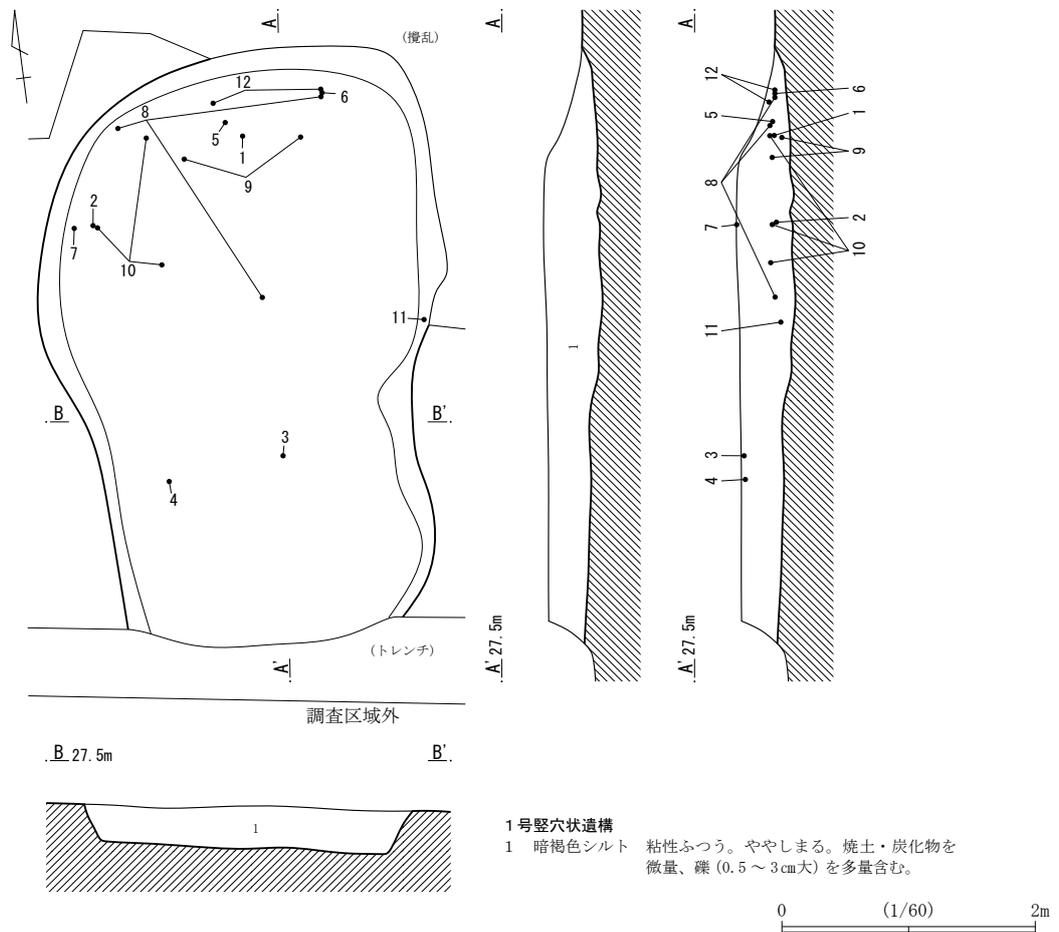
北・西側の壁際を中心に出土した。垂直分布では、覆土上～下位にかけて幅広く出土している様子が認められるが、底面に接する形で出土した遺物はない。

出土遺物の総量は、須恵器4.61g、(須恵器)36.68g、ロクロ土師器91.31g、土師器1,598.6g、灰釉陶器5.94gである。このうち12点を図示した。

1・2は(須恵器)坏である。いずれも焼成が不良である上、器面に軽度～中度の摩滅が認められる。色調は黄色系統を呈する。また、胎土中に海綿骨針が含まれることから、南比企窯周辺の土を製作に用いたと考えられる。

3は(須恵器)小皿である。器面に中度の摩滅が認められた。

4はロクロ土師器坏である。色調は褐灰色を呈



第17図 1号竪穴状遺構

第3節 竪穴状遺構

し、底部には回転糸切り痕が認められる。1～3とは胎土が明確に異なる。

5・6は土師器坏である。1・2同様に胎土中には海綿骨針が観察された。いずれも体部下半外面をヘラケズリ調整し、体部内面にヘラナデが認められる。器形は「比企型坏」の影響を脱している。

7は灰釉陶器碗である。他遺構で出土したものと同様に、内外面に釉の漬け掛けを施している。

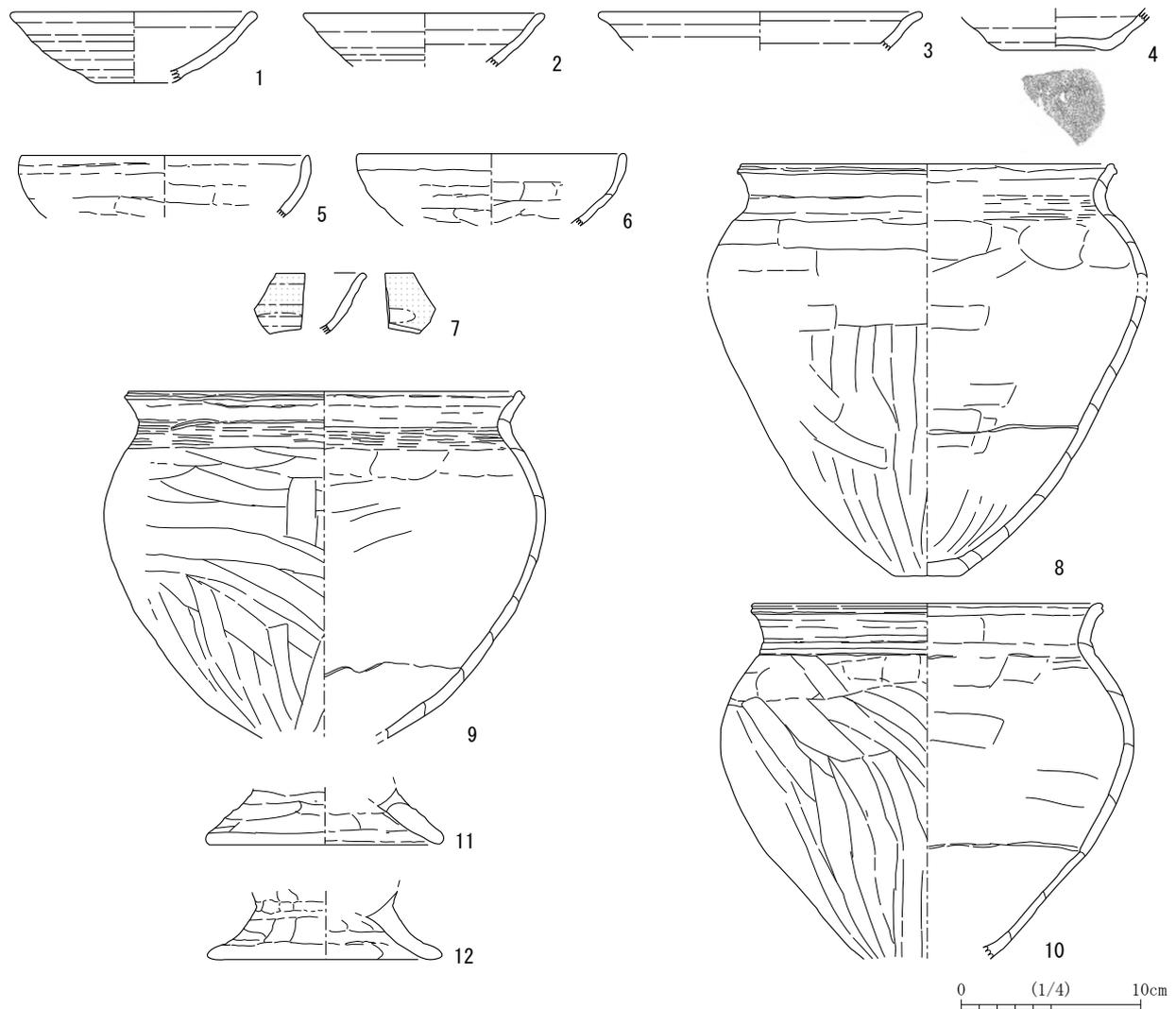
8～10は土師器甕である。8は口縁部～肩部片と胴部～底部片を復元実測した。口唇部外面には沈線が巡る。器形は口縁部が「く」の字状を呈し、肩部が張り出す。器厚はほぼ均一であるが、

胴部下位と底部の接続部分で肥厚する。9は口縁部～胴部下位片である。8と同様に口唇部外面には沈線が認められる。口縁部は「く」の字状を呈する。10は口縁部片～胴部片を復元実測した。頸部から口縁部に向けてやや直線的に立ち上がり、胴部中位から胴部下位にかけて急激に薄くなる。いずれの胎土中にも海綿骨針が認められた。

11・12は土師器台付甕の脚部である。1・2・5・6・8～10と同様に、胎土中に海綿骨針を含むことから、在地産と考えられる。

時期

出土遺物より、平安時代前期（10世紀前半）と考えられる。



第18図 1号竪穴状遺構出土遺物

所見

検出当初は、15号流路の蛇行部分に遺物が集積したと判断したが、遺物集中範囲で十字ベルトを設定し調査した結果、堅穴状の掘り込みが確認された。堅穴建物の可能性も考慮したが、明確な床面や炉などの施設が確認されなかったことか

ら、堅穴状遺構に分類した。

東側を15号流路と近接し、本遺構の出土遺物と15号流路の出土遺物が接合した例もみられた。こうした状況から、本遺構が存在した時期には、15号流路には水の流れが存在しなかった、あるいは微量であった可能性がうかがえる。

第5表 1号堅穴状遺構出土土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値 (cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	(須恵器) 坏	覆土中層	口径：(13.4) 内底径：(4.0) 底径：(4.1) 器高：[3.8] 最大径：-	特徴：器面摩滅 外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	胎土：針、石、長、片、 チャ、黒 焼成：不良 色調：黄褐色 残存度：10%	
2	(須恵器) 坏	覆土中層	口径：(13.4) 底径：- 器高：[3.0] 最大径：-	特徴：器面摩滅 外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	胎土：針、石、長、片、 チャ 焼成：不良 色調：浅黄色 残存度：10%	
3	(須恵器) 小皿	覆土上層	口径：(17.6) 底径：- 器高：[2.0] 最大径：-	特徴：器面摩滅 外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	胎土：片、チャ、赤 焼成：普通 色調：灰白色 残存度：10%	
4	ロクロ土師器 坏	覆土上層	口径：- 内底径：(5.0) 底径：(6.0) 器高：[2.2] 最大径：-	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	胎土：石、長、角、チャ 焼成：普通 色調：褐灰色 残存度：底部40%	
5	土師器 坏	覆土中層	口径：(16.0) 底径：- 器高：[3.5] 最大径：-	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ	胎土：針、片、チャ 焼成：普通 色調：外面 明褐色 内面 赤褐色 残存度：10%	在地産
6	土師器 坏	覆土中層	口径：(14.8) 底径：- 器高：[4.1] 最大径：-	外面：口縁部～体部上半ヨコナデ、体部下半ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ	胎土：針、片、チャ 焼成：普通 色調：褐色 残存度：10%	内面にスス付着 在地産
7	灰釉陶器 埴	覆土上層	口径：- 底径：- 器高：[3.5] 最大径：-	外面：漬け掛け 内面：漬け掛け	胎土：黒 焼成：良好 色調：灰白色 残存度：破片	
8	土師器 甕	覆土中層	口径：(20.8) 底径：3.8 器高：[23.2] 最大径：-	外面：口唇部沈線、口縁部ヨコナデ、頸部～胴部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部指頭圧痕、胴部ヘラナデ	胎土：針、石、長、角、 チャ 焼成：普通 色調：黒褐色 残存度：20%	復元実測 在地産
9	土師器 甕	覆土中層	口径：(19.2) 底径：- 器高：[20.0] 最大径：-	外面：口唇部沈線、口縁部ヨコナデ、頸部指ナデ、胴部ヘラケズリ 内面：口縁部ナデ、頸部～胴部ヘラナデ	胎土：針、片、チャ 焼成：普通 色調：黒褐色 残存度：20%	内外面にスス付着 在地産
10	土師器 甕	覆土中層	口径：(21.8) 底径：- 器高：[19.5] 最大径：-	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	胎土：針、角、片、チャ 焼成：普通 色調：外面 褐色 内面 明褐色 残存度：20%	復元実測 在地産
11	土師器 台付甕	覆土中層	口径：- 底径：12.8 器高：[3.2] 最大径：-	外面：ナデ 内面：ヘラナデ	胎土：針、石、長、チャ 焼成：普通 色調：明赤褐色 残存度：脚部40%	在地産
12	土師器 台付甕	覆土中層	口径：- 底径：11.0 器高：[3.8] 最大径：-	外面：ヨコナデ 内面：輪積み痕、ヨコナデ	胎土：針、石、長、チャ 焼成：普通 色調：褐色 残存度：脚部60%	在地産

第3節 竪穴状遺構

2号竪穴状遺構 (第19・20図 図版4・17)

位置：南西端部。

重複：なし。

形態：平面形は不整形、断面形は有段状を呈する。

規模：長軸4.61m×短軸4.01m×深さ0.47m

主軸：N-79°-W

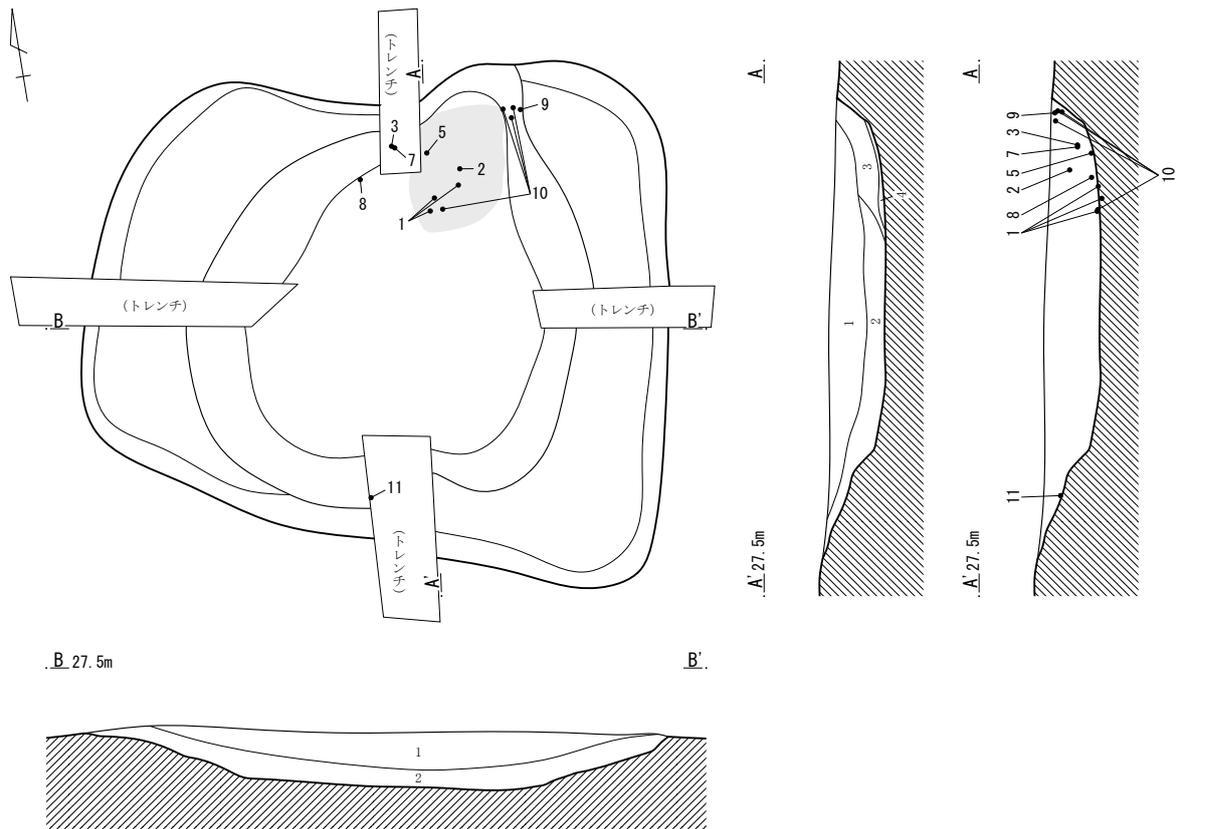
覆土：レンズ状に堆積し、4層に分層される。

遺物

出土遺物の総量は、須恵器79.92g、(須恵器)45.31g、ロクロ土師器47.33g、土師器421.22g、灰釉陶器159.7gであり、このうち11点を図示した。

1は須恵器坏である。胎土中に海綿骨針を含み、色調はにぶい褐色を呈する。器形は、口縁部が開かれた形で広がり、口唇部はほとんど外反せず、肥厚する。体部は薄く、内面は緩やかに立ち上がり、底部との返還点からやや肥厚する。底部は上げ底であり、外面には回転糸切り痕が認められる。南比企産である。

2は(須恵器)坏の口縁部～体部上位片である。色調は淡黄色を呈する。器形は口縁部が肥厚のうえ外反し、丸く収めている。体部内面は僅かに内湾するも、ほぼ直線状に口縁部に向けて立ち上がる。



2号竪穴状遺構

- | | |
|-----------|----------------------------------|
| 1 暗褐色シルト | 粘性ふつう。しまる。炭化物・礫(1～5cm大)を少量含む。 |
| 2 暗褐色シルト | 粘性ふつう。しまる。炭化物を微量、礫(1～3cm大)を少量含む。 |
| 3 褐色砂質シルト | 粘性強い。ややしまる。礫(1～3cm大)を少量含む。 |
| 4 黒色シルト | 粘性強い。しまり弱い。焼土・炭化物を多量含む。 |

0 (1/60) 2m

第19図 2号竪穴状遺構

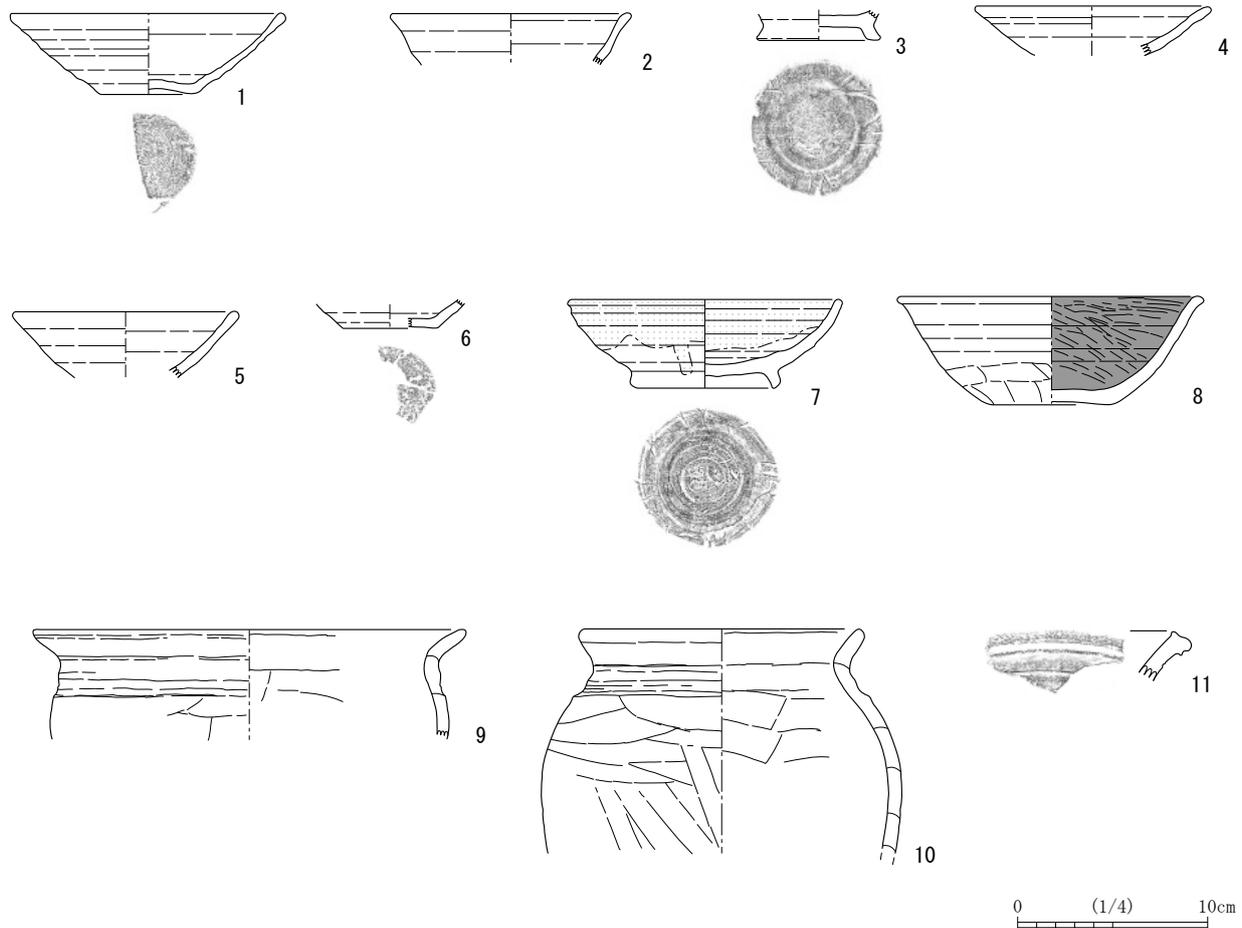
3は(須恵器)高台付坏の底部片である。色調は灰黄色を呈する。器面が重度の摩滅を受け、特に内面の調整技法の判別は不可能であった。

4～6はロクロ土師器坏である。4は口縁部～体部片である。色調は灰褐色を呈する。器形は、口縁部が開かれた形で広がり、外反する。5も口縁部～体部片である。色調は褐色を呈する。器形は体部から口縁部に向けて緩やかに立ち上がり、口縁部は外反せず、丸く収めている。器厚はほぼ一定である。6は底部片である。色調は明黄褐色を呈する。器厚はほぼ一定であるが、底部から体部に向けての立ち上がり部分は、指で押さえたことで凹線状を呈する。このうち、4・5は胎土中に海綿骨針が認められたことから、南比企窯周辺の粘土を製作に用いたと考えられる。

7は灰釉陶器碗である。色調は灰白色を呈し、内外面に釉の漬け掛けが施されている。釉の色調は、灰オリーブ色を呈する。器厚は体部中位から口縁部に向けて徐々に薄くなり、口縁部は外反せずに丸く収めている。

8は土師器碗である。外面は浅黄橙色を呈し、内面には黒色処理が施されている。調整技法は、内面がロクロナデの後、ナデ整形、外面は口縁部から体部上半にロクロナデ、体部下半から底部にかけてヘラケズリが認められた。

9・10は土師器甕である。9は口縁部～胴部上位片である。色調はにぶい赤褐色を呈する。口縁部が大きく開かれた形で広がり、「く」の字状を呈する。10は口縁部～胴部下位片である。色調はにぶい褐色を呈する。器形は、肩部から頸部



第20図 2号竪穴状遺構出土遺物

第3節 竪穴状遺構

にかけて窄まり、口縁部がやや開かれた形で広がり、「く」の字状を呈する。

11は須恵器甕の口縁部片である。色調は灰白色を呈する。全面に渡って重度の摩滅を受け、調整技法の観察は不可能であった。胎土中に片岩粒が多量に含まれることから、末野産と考えられる。

時期

出土遺物より、平安時代前期(10世紀前半)と考えられる。

所見

覆土中には炭化物を僅かに含み、下層には0.5～3cm大の礫を少量含む。覆土直下には0.5～3cm大の礫を多量に含む砂礫層が堆積する。

また、北側中央部の壁際付近の底面には、掘り込みを伴わない焼土が集中して検出されたことから、複数回に渡り、火を焚く行為を行っていたと考えられる。

遺構形態・出土遺物・覆土中の含有物は1号竪穴状遺構と近似する。

第6表 2号竪穴状遺構出土土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値(cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	須恵器 坏	底面	口径：(13.6) 内口径：(4.2) 底径：(5.0) 器高：4.2 最大径：-	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	胎土：針、石、長、チャ 焼成：普通 色調：にぶい褐色 残存度：60%	南比企産
2	(須恵器) 坏	覆土中層	口径：(12.4) 底径：- 器高：[2.8] 最大径：-	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	胎土：片、チャ 焼成：普通 色調：淡黄色 残存度：10%	混入物が粗目
3	(須恵器) 高台付坏	覆土中層	口径：- 底径：6.0 器高：[1.7] 最大径：-	特徴：器面摩滅 外面：ロクロナデ 内面：器面摩滅により判別不能	胎土：石、片、チャ 焼成：普通 色調：灰黄色 残存度：底部100%	混入物が緻密
4	ロクロ 土師器 坏	覆土	口径：(12.2) 底径：- 器高：[2.7] 最大径：-	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	胎土：針、角、片、チャ 焼成：普通 色調：灰褐色 残存度：20%	在地産
5	ロクロ 土師器 坏	底面	口径：(11.7) 底径：- 器高：[3.8] 最大径：-	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	胎土：針、角、片、チャ 焼成：普通 色調：褐色 残存度：10%	在地産
6	ロクロ 土師器 坏	覆土	口径：- 内口径：(4.2) 底径：(4.8) 器高：[1.3] 最大径：-	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	胎土：石、長、チャ 焼成：普通 色調：明黄褐色 残存度：底部20%	
7	灰釉陶器 埴	覆土中層	口径：14.1 底径：7.2 器高：4.7 最大径：-	外面：漬け掛け 内面：漬け掛け	胎土：白 焼成：普通 色調：灰白色 残存度：70%	
8	土師器 埴	覆土下層	口径：16.0 内口径：6.0 底径：6.2 器高：5.7 最大径：-	特徴：内面黒色処理 外面：口縁部～体部上半ロクロナデ、体部下半～ 底部ヘラケズリ 内面：ロクロナデ後ナデ	胎土：石、長、チャ、赤 焼成：普通 色調：浅黄褐色 残存度：50%	
9	土師器 甕	覆土上層	口径：(22.4) 底径：- 器高：[5.8] 最大径：-	外面：口縁部～頸部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面：ヘラナデ	胎土：石、長、角、チャ 焼成：普通 色調：にぶい赤褐色 残存度：破片	
10	土師器 甕	覆土上層 底面	口径：(14.4) 底径：- 器高：[11.9] 最大径：-	外面：口縁部～頸部ナデ、胴部ヘラケズリ 内面：ヘラナデ	胎土：石、長、角、片、 チャ 焼成：普通 色調：にぶい褐色 残存度：20%	
11	須恵器 甕	底面	口径：- 底径：- 器高：[2.6] 最大径：-	外面：器面摩滅により判別不能 内面：器面摩滅により判別不能	胎土：石、長、片、チャ、 白 焼成：普通 色調：灰白色 残存度：破片	末野産

第4節 土坑

1. 平安時代

検出された土坑は16基である。遺物を伴うものは少ないが、43号土坑は覆土中から多量の遺物が出土している。

19号土坑 (第21図 図版4)

位置：北東部。北側と東側は調査区域外へ延びる。

重複：7号流路に切られる。

形態：平面形は不明、断面形は有段状を呈する。

規模：長軸(3.58)m×短軸(1.35)m×深さ0.79m

長軸：N-76°-W

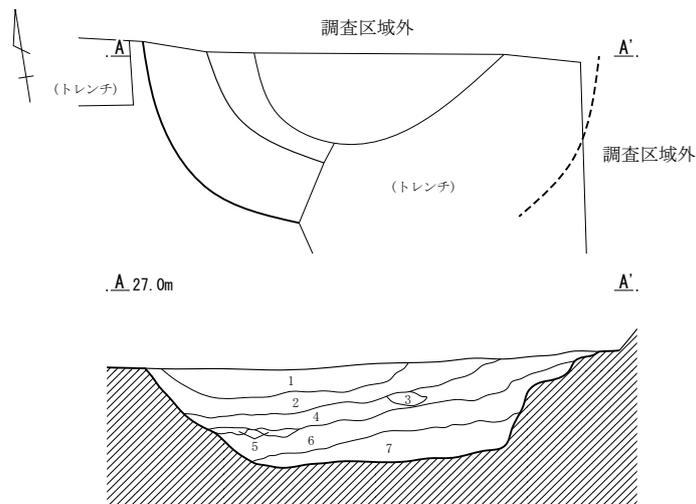
覆土：7層に分層される。下層は砂層だが、上層に移るにつれてシルト層となるため、水の流れが止まり、滞水化したと考えられる。

遺物：土師器甕が4点出土したが、小破片のため図示できなかった。

時期：調査区壁面の精査にて、V層からの掘り込みが確認されたことと、出土遺物より、平安時代と考えられる。

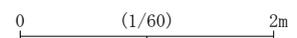
所見

攪乱を受け大半を欠失する。覆土中に礫を含むことから、流路の可能性も考えられたが、遺構形態と、覆土中に炭化物を含んでいたことから人為的に構築されたものと考え、土坑に分類した。



19号土坑

- | | | |
|---|-------------|----------------------------------------|
| 1 | にぶい黄褐色砂質シルト | 粘性やや強い。しまる。炭化物・マンガンを微量、酸化鉄を中量、細砂を多量含む。 |
| 2 | 褐灰色シルト | 粘性やや強い。しまる。炭化物・礫(3～5cm大)を微量、酸化鉄を少量含む。 |
| 3 | 暗褐色シルト | 粘性やや強い。しまる。炭化物・礫(0.5～1cm大)を微量含む。 |
| 4 | 褐灰色砂質粘土 | 粘性やや強い。しまる。焼土・炭化物・酸化鉄を中量含む。 |
| 5 | 黄灰色粘土 | 粘性強い。しまる。炭化物・礫(2cm大)を微量、酸化鉄を中量含む。 |
| 6 | 褐灰色粘土 | 粘性強い。しまる。炭化物・礫(1cm大)を微量、酸化鉄を多量含む。 |
| 7 | 黄灰色粘土 | 粘性強い。しまる。炭化物・礫(1～2cm大)を微量、酸化鉄を中量含む。 |



第21図 19号土坑

第4節 土坑

27号土坑(第22図 図版4)

位置：北西部。

重複：10号流路を切る。

形態：平面形は楕円形、断面形はU字形を呈する。

規模：長軸0.8m×短軸0.76m×深さ0.42m

長軸：N-35°-E

覆土：ほぼ水平に堆積し、2層に分層される。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：切り合い関係より、平安時代と考えられる。

所見

本遺構に切られる10号流路は9号流路より古く、その覆土を切り込む形で構築されていた。

また、10号流路では覆土より9世紀後半の須恵器坏が出土していることから、本遺構は平安時代の所産と考えたい。

39号土坑(第22図 図版4)

位置：南東部。

重複：なし。

形態：平面形は円形、断面形は浅いU字形を呈する。

規模：長軸1.18m×短軸1.15m×深さ0.14m

長軸：N-14°-W

覆土：暗褐色シルトの単層である。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：遺構形態と周辺状況より、平安時代と考えられる。

40号土坑(第22図 図版4)

位置：中央南端部。2号竪穴建物の南側。

重複：なし。

形態：平面形は円形、断面形は浅い逆台形を呈する。

規模：長軸1.06m×短軸0.92m×深さ0.2m

長軸：N-90°-W

覆土：灰黄褐色シルトの単層である。

遺物：土師器甕が1点出土したが、小破片のため図示できなかった。

時期：出土遺物と遺構形態より、平安時代と考えられる。

41号土坑(第22図 図版5)

位置：中央南端部。2号竪穴建物の南側。

重複：なし。

形態：平面形は円形、断面形は浅い逆台形を呈する。

規模：長軸1.08m×短軸1.02m×深さ0.22m

長軸：N-37°-E

覆土：褐色砂質シルトの単層である。

遺物：ロクロ土師器甕・土師器甕が4点出土したが、小破片のため図示できなかった。

時期：出土遺物と遺構形態より、平安時代と考えられる。

42号土坑(第22・23図 図版5)

位置：南部。2号竪穴建物の南側。

重複：なし。

形態：平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。

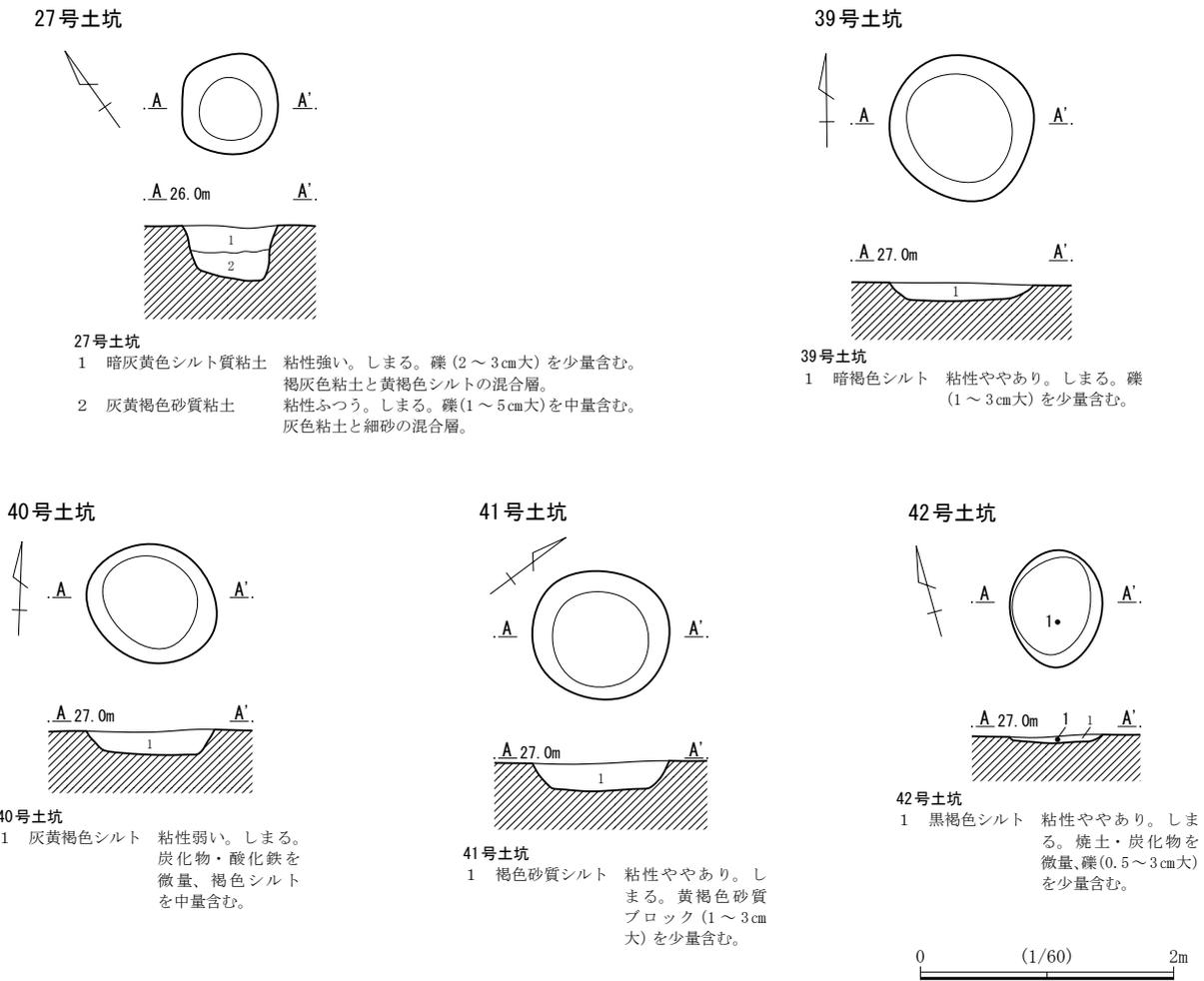
規模：長軸0.93m×短軸0.73m×深さ0.06m

長軸：N-16°-E

覆土：焼土・炭化物を含む黒褐色シルトの単層である。

遺物：出土遺物はロクロ土師器坏の底部片1点を図示した。内面は摩滅が顕著で調整技法の識別が不可能であった。

時期：出土遺物と周辺状況より、平安時代と考えられる。



第22図 27・39~42号土坑



第23図 42号土坑出土遺物

第7表 42号土坑出土土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値 (cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	ロクロ土師器 坏	覆土	口径： - 内底径： (5.6) 底径： (5.6) 器高： [1.0] 最大径： -	特徴：器面摩滅 外面：ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：器面摩滅により判別不能	胎土：片、チャ、黒 焼成：普通 色調：黒褐色 残存度：底部20%	

43号土坑 (第24・25図 図版5)

位置：中央部。西側を攪乱により欠失する。
 重複：なし。
 形態：平面形は不整形、断面形は有段状を呈する。
 規模：長軸4.48m×短軸2.48m×深さ0.84m
 長軸：N-21°-W
 覆土：レンズ状に堆積し、8層に分層される。
 最下層の8層は、多量の焼土と少量の炭化物を含む明赤褐色シルトである。
 時期：出土遺物より、平安時代と考えられる。

遺物

(須恵器) 16.37g、土師器250.86gが出土した。本稿ではこのうち2点を図示した。

1は(須恵器) 坏である。色調は淡黄色を呈する。焼成が不良に加え、全体が著しく摩滅されていることから、内外面のロクロ目は不明瞭である。器形は体部上端から急激に薄くなり、口縁部は外反する。産地不明。

2は土師器甕の胴部下位～底部片である。色調は橙色を呈する。全体が摩滅され、割口も丸みを

帯びる。調整技法は外面にヘラケズリ、内面はヘラナデが認められた。他遺構から出土した平安時代の土師器甕とは、胎土や器壁に差異が認められる。

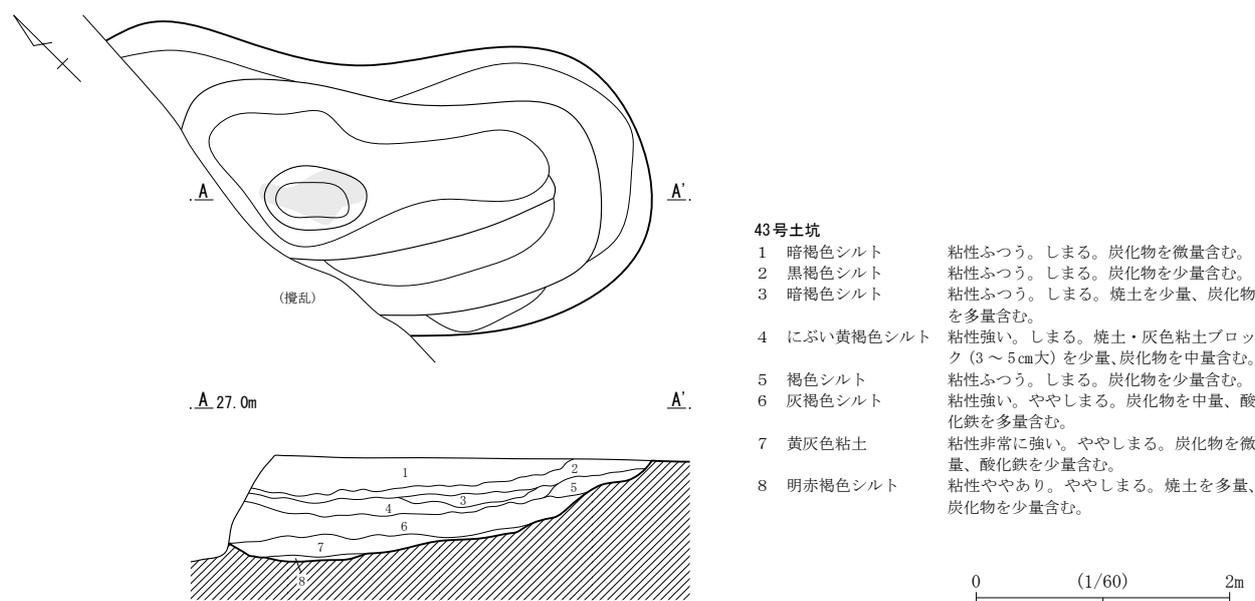
所見

6区-1の中央部に位置する。周囲には、9世紀代には埋没し始めていたと考えられる、12・15号流路が巡る。南東部の1・2号竪穴建物と同様に、本遺構も流路が埋没した土地を利用し、構築されたと考えられる。

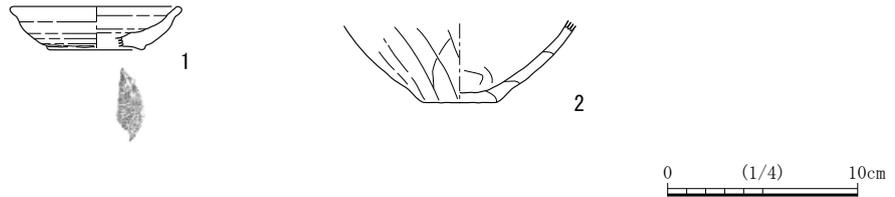
2・3層に焼土を、いずれの層にも炭化物を含む。最下層の8層は厚さが0.03～0.05mと薄く、皿状を呈し、焼土粒を多量に含んでいた。

6区-1で平安時代の所産として確認された他の土坑群は、調査区北東部壁際で確認された19号土坑を除き、平面形は円形、楕円形を呈し、長軸が0.6m～1.2m、深さは0.5m以下でまとまる。また、遺物は僅少、あるいは出土していない。

本遺構の形態、覆土の様相、出土遺物量と、先述の近隣土坑群との差異から、本遺構は焼成土坑などの性格を有していた可能性が考えられる。



第24図 43号土坑



第25図 43号土坑出土遺物

第8表 43号土坑出土土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値 (cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	(須恵器) 坏	覆土	口径: (8.8) 内底径: 5.0 底径: (5.0) 器高: 2.3 最大径: -	特徴: 全面摩滅 外面: ロクロナデ、底部回転糸切り 内面: ロクロナデ	胎土: 石、長、角、片、チャ 焼成: 不良 色調: 淡黄色 残存度: 30%	産地不明
2	土師器 甕	覆土	口径: - 底径: (4.0) 器高: [4.3] 最大径: -	特徴: 全面摩滅 外面: ヘラケズリ 内面: ヘラナデ	胎土: 片、チャ、赤 焼成: 普通 色調: 橙色 残存度: 底部80%	

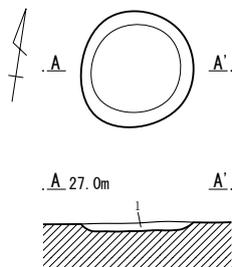
44号土坑 (第26図 図版5)

位置: 南部。
重複: 15号流路を切る。
形態: 平面形は円形、断面形は皿状を呈する。
規模: 長軸0.92m×短軸0.88m×深さ0.06m
長軸: N-8°-W
覆土: 暗褐色シルトの単層である。
遺物: 遺物は出土しなかった。
時期: 切り合い関係と周辺状況より、平安時代と考えられる。

45号土坑 (第26図 図版5)

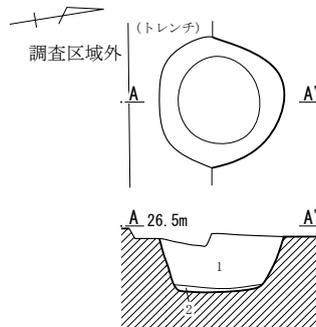
位置: 中央南端部。
重複: なし。
形態: 平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。
規模: 長軸1.04m×短軸(0.98)m×深さ0.47m
長軸: N-81°-W
覆土: 2層に分層される。各層には微量の炭化物を含む。
遺物: 遺物は出土しなかった。
時期: 遺構形態と周辺状況より、平安時代と考えられる。

44号土坑

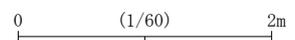


44号土坑
1 暗褐色シルト 粘性ふつう。しまる。炭化物を微量、礫(0.2~0.5cm大)を少量含む。

45号土坑



45号土坑
1 暗褐色シルト 粘性ふつう。しまる。炭化物・礫(0.5~1cm大)を微量含む。
2 褐色シルト 粘性ふつう。ややしまる。炭化物を微量含む。



第26図 44・45号土坑

46号土坑(第27図 図版5)

位置: 中央南端部。

重複: なし。

形態: 東側は土層確認用トレンチで欠失してしまつた。平面形は円形、断面形は逆台形を呈すると考えられる。

規模: 長軸1.08m×短軸(0.52)m×深さ0.16m

長軸: N-78°-W

覆土: 暗褐色砂質シルトの単層である。

遺物: 遺物は出土しなかつた。

時期: 遺構形態と周辺状況より、平安時代と考えられる。

47号土坑(第27図 図版5)

位置: 東部。

重複: なし。

形態: 平面形は円形、断面形は逆台形を呈すると考えられる。東壁はほぼ垂直に立ち上がる。

規模: 長軸0.64m×短軸0.64m×深さ0.18m

長軸: N-13°-E

覆土: にぶい黄褐色シルトの単層である。

遺物: 遺物は出土しなかつた。

時期: 遺構形態と周辺状況より、平安時代と考えられる。

48号土坑(第27図 図版5)

位置: 東部。

重複: なし。

形態: 平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。

規模: 長軸1.41m×短軸0.98m×深さ0.34m

長軸: N-86°-W

覆土: 炭化物を微量に含む暗褐色シルトの単層である。

遺物: 遺物は出土しなかつた。

時期: 遺構形態と周辺状況より、平安時代と考えられる。

49号土坑(第27図 図版6)

位置: 北東部。

重複: なし。

形態: 平面形は円形、断面形は浅い逆台形を呈する。

規模: 長軸0.87m×短軸0.82m×深さ0.12m

長軸: N-22°-E

覆土: 炭化物を微量に含む暗褐色砂質シルトの単層である。

遺物: 遺物は出土しなかつた。

時期: 遺構形態と周辺状況より、平安時代と考えられる。

50号土坑(第27図 図版6)

位置: 中央南端部。

重複: 14号流路を切る。

形態: 平面形は円形、断面形は皿状を呈する。

規模: 長軸0.6m×短軸0.37m×深さ0.08m

長軸: N-59°-E

覆土: 2層に分層される。各層には焼土・炭化物が含まれる。

遺物: 土師器甕1点が出土したが、小破片のため図示できなかつた。

時期: 切り合い関係と出土遺物より、平安時代と考えられる。

51号土坑(第27図 図版6)

位置: 中央南端部。52号土坑に隣接する。

重複: 15号流路を切る。

形態: 平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。

規模: 長軸0.89m×短軸0.68m×深さ0.88m

長 軸：N-39°-W

覆 土：暗褐色砂質シルトの単層である。

遺 物：土師器甕10点が出土したが、小破片のため図示できなかった。

時 期：切り合い関係と出土遺物より、平安時代と考えられる。

規 模：長軸0.9m×短軸0.6m×深さ0.09m

長 軸：N-25°-E

覆 土：灰黄褐色砂質シルトの単層である。南西部には焼土が集中する箇所が認められた。

遺 物：底面付近より礫が2点が出土したが、いずれも使用痕や加工痕は認められなかった。

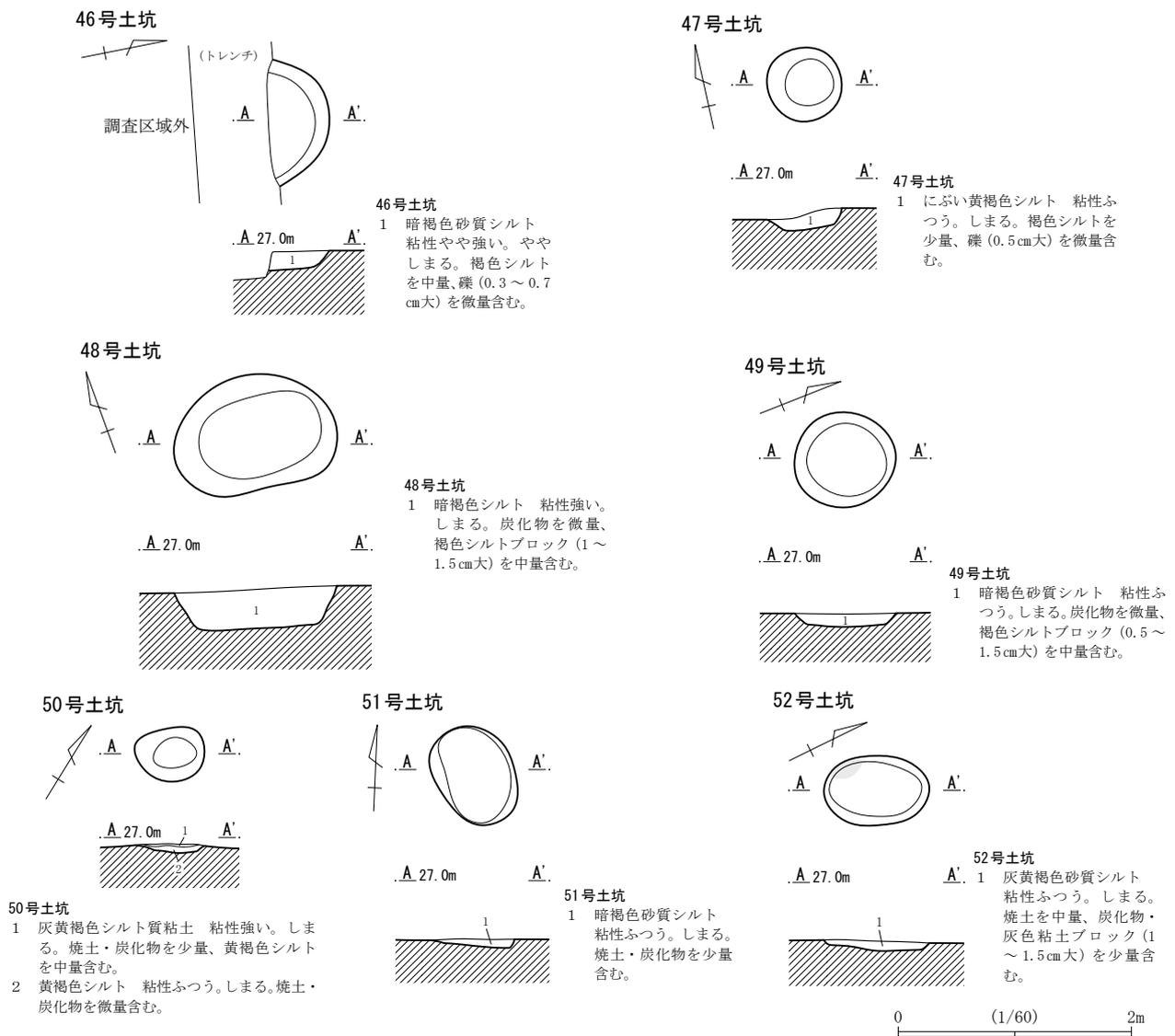
時 期：切り合い関係より、平安時代と考えた

52号土坑 (第27図 図版6)

位 置：中央南端部。51号土坑に隣接する。

重 複：15号流路を切る。

形 態：平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。



第27図 46~52号土坑

第5節 溝状遺構

1. 平安時代

検出された溝状遺構は2条である。

40号溝状遺構 (第28・29図 図版6)

位置：南西部。中央部の一部と南側は調査区域外に延びる。2号竪穴状遺構の西側に隣接する。

重複：14号流路に切られると考えられる。

形態：断面形は逆台形を呈する。

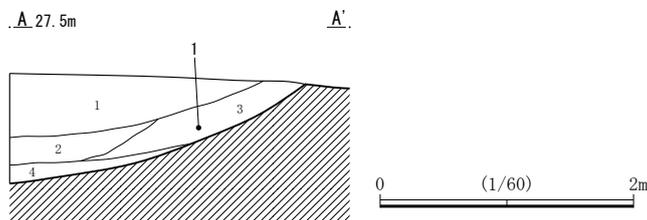
規模：長軸(20.76)m×短軸3.58m×深さ0.88m

長軸：N-8°-E

覆土：レンズ状に堆積し、4層に分層される。

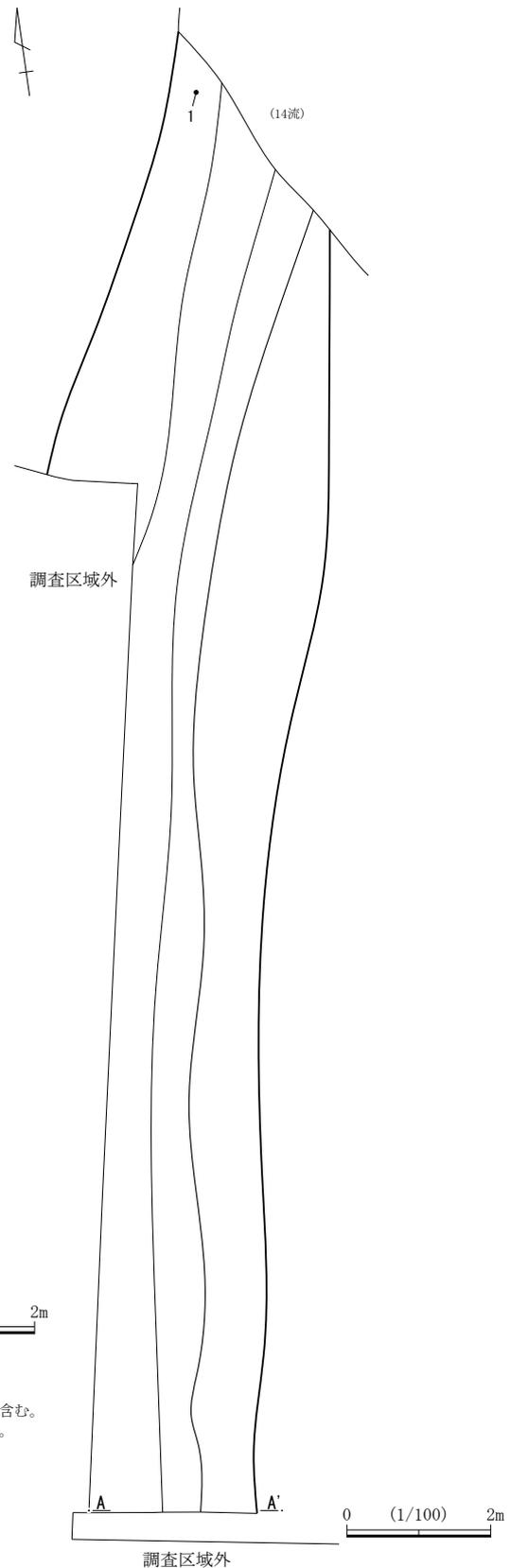
遺物：須恵器高台付坏1点を図示した。胎土中に海綿骨針を含むことから、南比企産と考えられる。

時期：出土遺物と切り合い関係から、平安時代と考えられる。

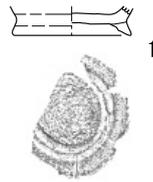


40号溝状遺構

- | | |
|---------------|--------------------------------|
| 1 黒褐色シルト | 粘性強い。しまる。焼土・炭化物を少量含む。 |
| 2 にぶい黄褐色シルト | 粘性強い。しまる。炭化物を少量、マンガン・酸化鉄を中量含む。 |
| 3 にぶい黄褐色砂質シルト | 粘性ややあり。しまる。炭化物を少量、マンガンの中量含む。 |
| 4 灰黄色砂 | 粘性弱い。しまり弱い。酸化鉄を少量含む。 |



第28図 40号溝状遺構



第29図 40号溝状遺構出土遺物

第9表 40号溝状遺構出土土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値 (cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	須恵器 高台付坏	覆土	口径： - 内底径： (4.4) 底径： (6.2) 器高： [1.5] 最大径： -	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り後高台貼付け 内面：ロクロナデ	胎土：針、凝、片、チャ 焼成：普通 色調：明褐色 残存度：破片	南比企産

41号溝状遺構 (第30図 図版6)

位置：中央南端部。北側は攪乱を受け欠失し、南側は調査区域外に延びる。1号竪穴状遺構の東側に位置する。

重複：なし。

形態：断面形は逆台形を呈する。

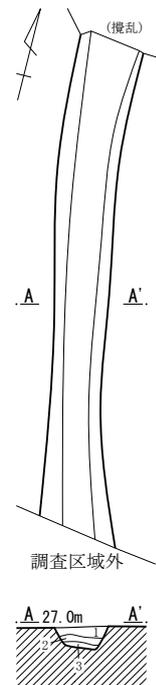
規模：長軸(4.03)m×短軸0.43m×深さ0.18m

長軸：N-14°-W

覆土：ほぼ水平に堆積し、3層に分層される。

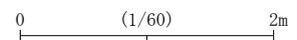
遺物：土師器高坏、10世紀前半の土師器甕が出土したが、小破片のため図示できなかった。

時期：出土遺物と周囲の状況から、平安時代と考えられる。



41号溝状遺構

- 1 灰黄褐色シルト 粘性強い。しまる。焼土を微量、礫(0.5～3cm大)・褐色砂質シルトを少量含む。
- 2 暗褐色砂質シルト 粘性ややあり。しまる。礫(0.2～0.5cm大)を少量含む。
- 3 黒褐色シルト 粘性強い。ややしまる。礫(0.2～1cm大)を多量含む。



第30図 41号溝状遺構

第6節 流路

1. 平安時代

検出された流路は13条である。2号流路は6区-3、13号流路は6区-2に位置するが、6

区-1で検出された流路群との関係性を示すために、本稿に集約し記載する。

調査区中央部では、II層直下で12号流路の覆土と考えられる礫層が広範囲で確認された。この段階では、調査区壁面精査でV層が確認されな



第31図 流路位置図

かったことから、当初は近世以降の流路に伴うものと考えたが、礫層と同じレベルで確認された全ての流路が切り込んでいる状況が認められた。

このため、先の礫層が最も古い流路に伴うものであり、東西の流路はこの礫層を削るように、南から流入していたと判断した。また、南から流入した流路は、重複しているように見えたが幅や方向を変えながら、徐々に位置を変えていったことがうかがえる。

各流路は、遺物の出土状況や、炭化物の検出状況から平安時代に流れが弱まったことは明確ではあるが、竪穴建物や土坑群などが掘り込まれたV層が上部に堆積して埋没したもの、完全に埋没しきらなかったものなど、状況に差異が認められた。

流入時期や流れが沈静化した時期など、不明確な点が多いが、少なくとも平安時代に流れが停止、あるいは流路が埋没していたことが考えられるため、平安時代の所産として統一し、報告する。

また、2号流路、4号流路、17号流路を除く大多数の流路は掘削途中で湧水が発生し、底面まで至らなかったため、平面の上端ラインと、掲載遺物の出土位置のみ図示した。

2号流路 (第31図 図版6)

位置：6区-3東部。南から北方向に延び、南側は2区-C2の2号流路、14号流路の順に合流すると考えられる。

重複：2区-C2の2号流路と合流する。

形態：砂礫層、砂質粘土層を主体とし、レンズ状に堆積する。

規模：長軸(20.39)m×短軸4.61m

主軸：N-5°-E

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：V層上面で検出されたことから、少なくとも9世紀代までは流路としての機能を有していたと考えたい。

4号流路 (第31図 図版6)

位置：北東部。南側は蛇行し、2区-C2へ延びる。

重複：9号流路を切る。

形態：砂礫層、砂質粘土層を主体に、レンズ状に堆積する。

規模：長軸(69.29)m×短軸4.33m

主軸：N-4°-E

遺物：須恵器坏・土師器甕が出土したが、小破片のため図示できなかった。いずれも、9世紀から10世紀の所産と考えられる。

時期：VII層上面で検出したが、調査区北壁を精査した結果、本遺構のV層からの掘り込みを確認した。また、9世紀から10世紀の遺物が出土していることから、当時期までは水の流入があった可能性がある。

所見

4号流路の調査終了後、同じくVII層上面で検出された9号流路の範囲に収まり、調査区北壁の再精査では9号流路の上部に4号流路が堆積していた。そのため、4号流路は9号流路の最終段階の覆土である可能性も考えられる。

7号流路 (第31図)

位置：北西部。西側を除き、調査区域外へ延びる。

重複：19号土坑、8・11号流路を切る。

形態：掘削途中で湧水があり、底面まで至らなかった。調査区北壁の精査では、8号流路への切り込みは緩やかで、途中から急激に落ち込む様子が認められた。

規模：長軸(54.08)m×短軸(10.36)m

主軸：N-1°-W

第6節 流路

遺物：須恵器甕、ロクロ土師器坏、土師器甕
が出土したが、小破片のため図示でき
なかった。

時期：切り合い関係と出土遺物より、10世
紀までには埋没したと考えられる。

8号流路 (第31・32図)

位置：北西部。北側は調査区域外へ延びる。

重複：9・11・12号流路を切り、7号流路
に切られる。

形態：掘削途中で湧水があり、底面まで至ら
なかった。調査区北壁の精査では、9
号流路への切り込みは緩やかであった。

規模：長軸(49.73)m×短軸7.25m

主軸：N-2°-W

遺物：7世紀から10世紀の所産と考えられ
る須恵器坏・甕、土師器坏・甕が出土
し、このうち須恵器甕の胴部片1点を
図示した。全体に摩滅が著しく、内面
の調整技法の判別は不可能であった。

時期：調査区北壁の精査でV層からの掘り込
みが確認された。切り合い関係と出土
遺物から、10世紀までに水の流入は
止まっていたと考えられる。

9号流路 (第33・34図)

位置：北西部。北側は調査区域外へ延び、南
側は15号流路、2区-C2の3号流
路と合流すると考えられる。

重複：10・12号流路を切り、4号流路に切
られる。

形態：掘削途中で湧水があり、底面まで至ら
なかった。調査区北壁の精査では、10
号流路の上部から緩やかに切り込んで
いることが確認された。

規模：長軸(75.29)m×短軸10.78m

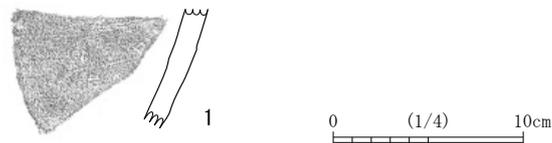
主軸：N-5°-E

遺物：須恵器甕、土師器坏・甕が出土し、こ
のうち須恵器甕の胴部片1点を図示し
た。器面には中度の摩滅が認められ
た。外面はタタキ、内面は同心円当て
具痕が認められる。

時期：調査区北壁の再精査でV層からの掘り
込みが確認された。流路の切り合い関
係と出土遺物から、10世紀までに水
の流入は止まっていたと考えられる。

所見

15号流路と同様に、炭化物が集中する箇所が
認められた。試料1点を採取し、¹⁴C年代測定を
実施した結果、calAD894～1022の年代値が得ら
れた(第7章参照)。

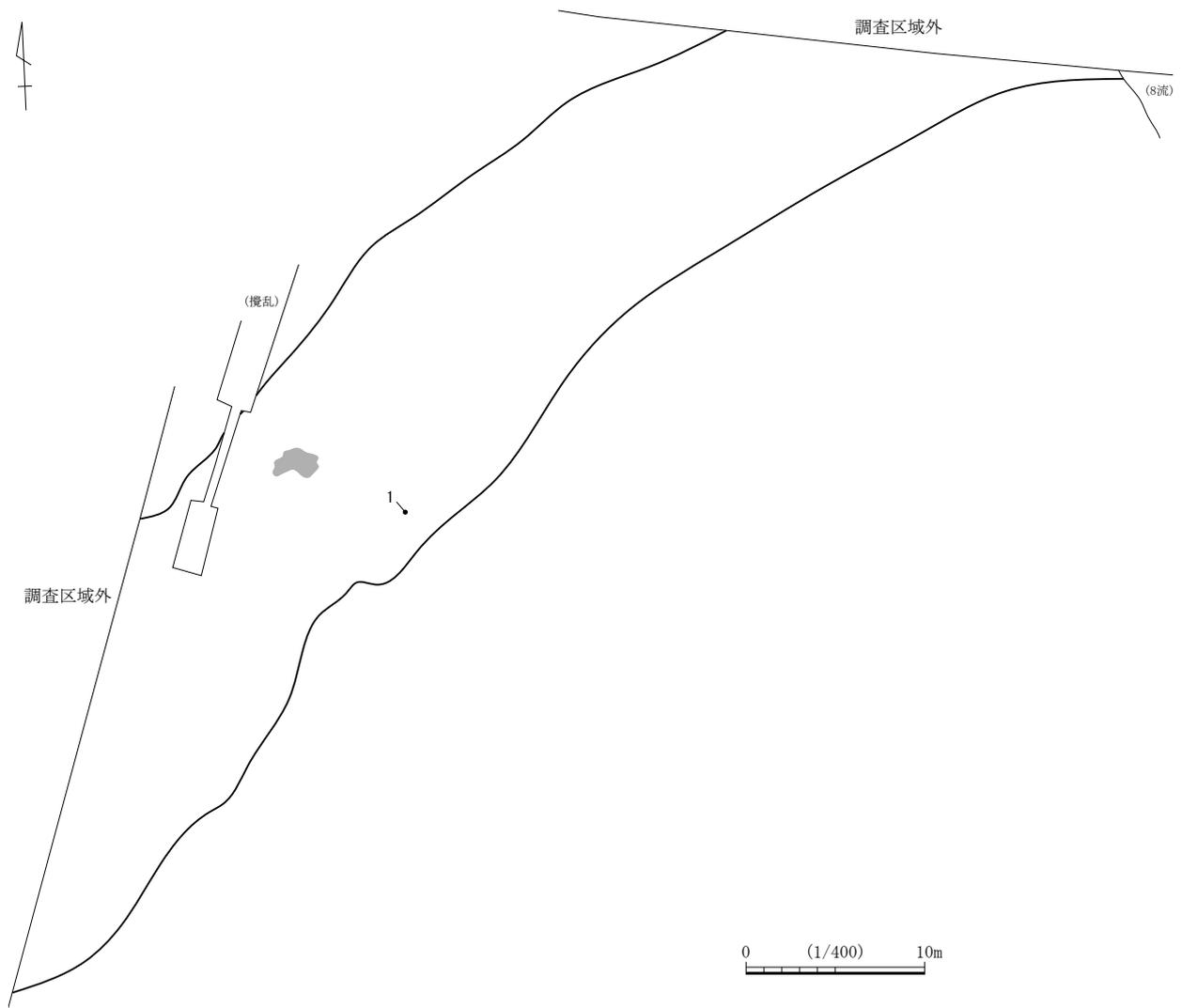


第32図 8号流路出土遺物

第10表 8号流路出土土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値 (cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	須恵器 甕	覆土	口径： - 底径： - 器高： [6.5] 最大径： -	特徴：全体摩滅 外面：タタキ 内面：器面摩滅により判別不能	胎土：片、チャ、黒 焼成：普通 色調：灰白色 残存度：破片	



第33図 9号流路



第34図 9号流路出土遺物

第11表 9号流路出土土器観察表

()は推定、[]は残存高

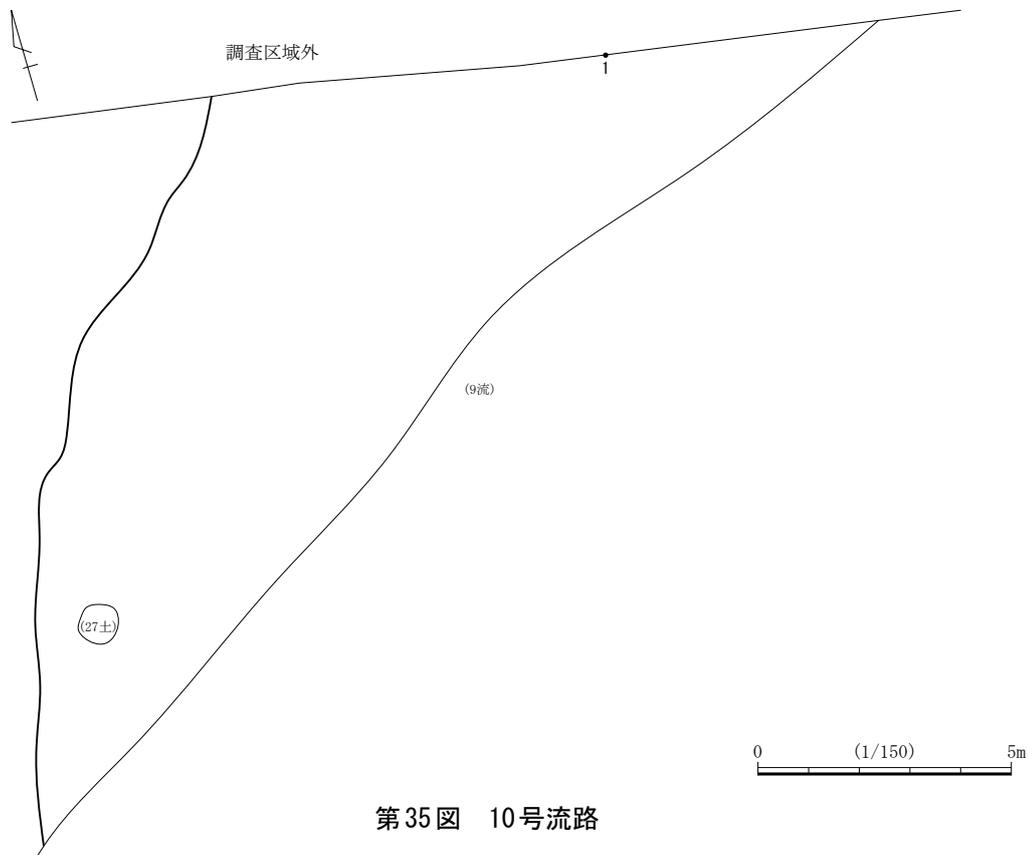
番号	種別	出土位置	計測値 (cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	須恵器 甕	覆土	口 径： - 底 径： - 器 高： [4.3] 最大径： -	特徴：器面摩滅 外面：タタキ 内面：同心円当て具痕	胎 土：片、チャ、赤 焼 成：良好 色 調：灰オリーブ色 残存度：破片	

第6節 流路

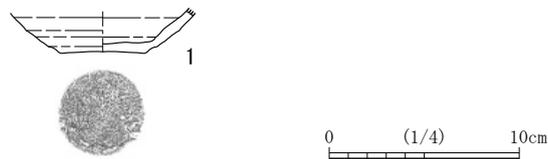
10号流路 (第35・36図)

位置：北西部。北側は調査区域外へ延びる。
 重複：12号流路を切り、27号土坑・9号流路に切られる。
 形態：掘削途中で湧水があり、底面まで至らなかった。調査区北壁の精査ではV層上面から緩やかに切り込んでいることが確認された。
 規模：長軸(11.14)m×短軸9.82m
 主軸：N-29°-E

遺物：ロクロ土師器坏1点を図示した。色調はにぶい褐色を呈する。胎土中には海綿骨針が認められることから、南比企窯周辺の粘土を製作に用いたと考えられる。
 時期：調査区北壁の再精査でV層からの掘り込みが確認された。流路の切り合い関係と出土遺物から、10世紀までに流路としての機能を停止し、埋没が始まっていたと考えられる。



第35図 10号流路



第36図 10号流路出土遺物

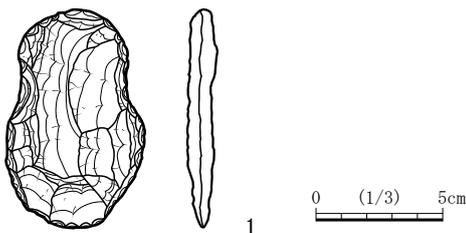
第12表 10号流路出土土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値 (cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	ロクロ土師器坏	覆土	口径： - 内底径： 4.8 底径： 4.4 器高： [2.2] 最大径： -	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	胎土：針、石、長、片、 チャ 焼成：普通 色調：にぶい褐色 残存度：15%	在地産

11号流路 (第31・37図 図版18)

位置：東部。東側は調査区域外へ延びる。
 重複：12号流路を切り、7・8・16号流路に切られる。15号流路とも重複するが、攪乱され、新旧関係は不明である。
 形態：掘削途中で湧水があり、底面まで至らなかった。調査区北壁の精査では、上部にV層が堆積していた。
 規模：長軸(106.24)m×短軸12.21m
 主軸：N-26°-E
 遺物：縄文時代の所産と考えられる打製石斧
 1点を図示した。石材はホルンフェルスである。全体に摩滅が認められることから、流入物と考えられる。他に、7世紀から10世紀の須恵器坏、土師器坏・甕の小破片が出土した。
 時期：流路の上部にはV層が堆積し、1・2号竪穴建物が構築されていた。具体的な年代は判然としないが、12号流路を除く周囲の流路より古いと考えられる。



第37図 11号流路出土遺物

12号流路 (第38・39図)

位置：中央部。
 重複：8・9～11・15号流路に切られる。
 形態：掘削途中で湧水があり、底面まで至らなかった。
 規模：長軸(111.25)m×短軸58.61m
 主軸：N-20°-E
 遺物：6点を図示した。1は須恵器坏である。2は須恵器盤である。胎土観察から、ともに南比企産と考えられる。3は須恵器長頸瓶である。外面は降灰を受けた形跡が目立つ。4は須恵器甕である。器面には軽度な摩滅が認められた。胎土観察から、3・4はともに東金子産と考えられる。
 5は土師器壺である。内外面に赤彩が施されている。器面の摩滅が著しく、割口も丸みを帯びている。6は土師器甕である。胴部外面のヘラケズリは縦方向に入り、底部は不明瞭ながらナデ整形が認められた。この他、土師器坏・甕の小破片が出土している。時期は4世紀から10世紀に渡り、年代幅が認められる。
 時期：他の流路と同様に出土遺物に年代幅があり、時期の決定は困難である。切り合い関係より、周囲の流路に比べて古い時期の所産と考えられる。

第13表 11号流路出土石器観察表

番号	器種	石材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存度	備考
1	打製石斧	ホルンフェルス	覆土	8.8	5.5	1.0	68.8	100%	

第6節 流路



第38図 12号流路

所見

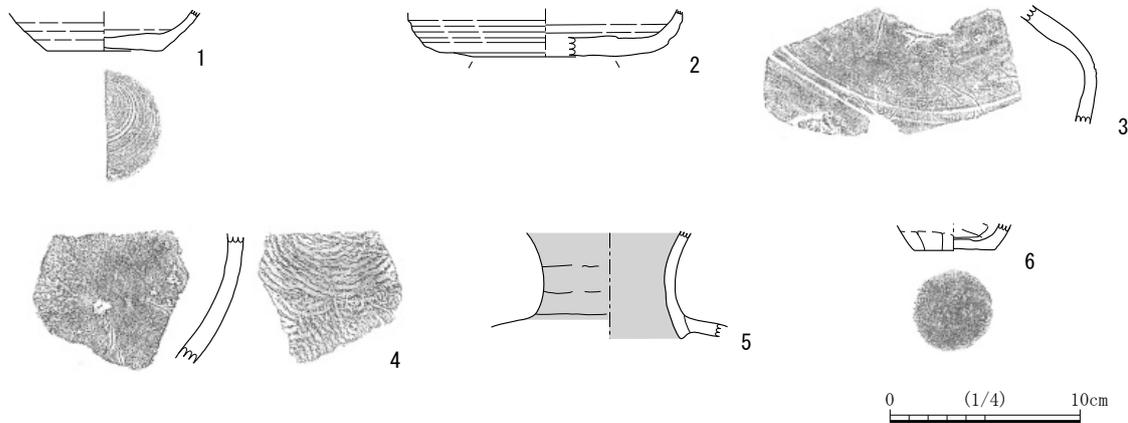
12号流路は確認された流路の中で、最も古い時期の所産と考えられ、V層上面では広範囲に渡り覆土と思われる礫層が露出していた。昭和50年撮影の空中写真と、本遺構の位置を検証した結果、現在の水田区割りとはほぼ合致することが確認された(第118図)ことから調査地周辺区域の基盤層となる礫層が、他の流路の影響を受けながら高いレベルで残存していた可能性が考えられる。

13号流路(第31・40図 図版7・18)

位置：6区-2東部。北側は2区-C2へ、南側は調査区域外へ延びる。

重複：1～3号ピットに切られる。14号流路とも重複するが、切り合い関係は不明である。

形態：掘削途中で湧水があり、底面まで至らなかった。12号流路と同様にV層上面で本流路の覆土と考えられる礫層が露出していた。この礫層は西側の6



第39図 12号流路出土遺物

第14表 12号流路出土土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値 (cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	須恵器 環	覆土	口径：- 内底径：(6.0) 底径：(6.0) 器高：[2.1] 最大径：-	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	胎土：針、石、片、チャ 焼成：普通 色調：灰白色 残存度：底部40%	南比企産
2	須恵器 盤	覆土	口径：(14.2) 底径：(11.0) 器高：[2.3] 最大径：-	特徴：口唇部先端を欠損、器面摩滅 外面：ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	胎土：針、石、長、角、 チャ 焼成：普通 色調：灰褐色 残存度：10%	南比企産
3	須恵器 長頸瓶	覆土	口径：- 底径：- 器高：[5.9] 最大径：-	特徴：外面降灰、器面摩滅 外面：ロクロナデ、タタキ 内面：器面摩滅により判別不能	胎土：石、長、チャ 焼成：良好 色調：灰色 残存度：破片	東金子産
4	須恵器 甕	覆土	口径：- 底径：- 器高：[6.7] 最大径：-	特徴：外面自然釉、全体軽度の摩滅 外面：タタキ 内面：同心円当て具痕	胎土：石、長、片、チャ 焼成：普通 色調：灰色 残存度：破片	東金子産
5	土師器 壺	覆土	口径：- 底径：- 器高：[5.4] 最大径：-	特徴：内外面赤彩、器面摩滅 外面：ヨコナデ 内面：器面摩滅により判別不能	胎土：凝、片、チャ 焼成：良好 色調：橙色 残存度：口縁部30%	
6	土師器 甕	覆土	口径：- 底径：4.2 器高：[1.4] 最大径：-	外面：ヘラケズリ 内面：ヘラナデ	胎土：石、長、チャ、黒 焼成：普通 色調：灰褐色 残存度：10%	

第6節 流路

区-2に向かい、シルト層に潜り込むように沈降していた。

規模：長軸(63.05) m×短軸32.75m

主軸：N-1°-E

遺物：土師器坏・甕が出土し、このうち土師器坏1点を図示した。

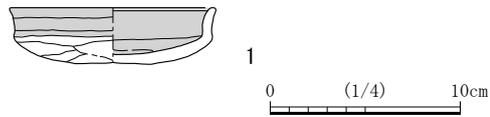
時期：出土遺物と周辺状況により、12号流路と同時期の可能性が考えられる。

所見

V層上面で覆土と考えられる礫層が露出していた。また、空中写真との検証の結果、12号流路と同様に現在の水田区割りとほぼ合致する。

礫層は西に向かって沈降し、礫層の上部には青灰色粘土層とシルト層が堆積する様子が確認された。

12号流路と同じく、他の流路による影響を受け、残存した一部が本遺構と考えられる。



第40図 13号流路出土遺物

第15表 13号流路出土土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値 (cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	土師器坏	覆土	口径：(10.8) 底径：(4.0) 器高：2.9 最大径：-	特徴：内外面赤彩 外面：口唇部沈線、口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 内面：ヘラナデ	胎土：石、長、凝、片、チャ 焼成：普通 色調：明赤褐色 残存度：60%	2・3面出土



第41図 14号流路

14号流路(第41・42図)

位置：南部。南側は調査区域外へ延び、北側は2区-C2の2号流路と合流すると考えられる。

重複：44・50号土坑、40号溝状遺構に切られる。13・15号流路とも重複するが、新旧関係は不明である。

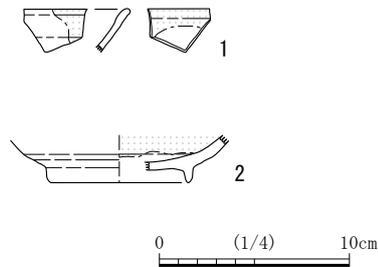
形態：掘削途中で湧水があり、底面まで至らなかった。

規模：長軸(72.18)m×短軸9.23m

主軸：N-2°-E

遺物：2点を図示した。いずれも灰釉陶器坑であり、内外面に釉の漬け掛けを施している。他に須恵器坏・長頸瓶、ロクロ土師器坏、土師器甕が出土した。時期は9世紀から10世紀に渡る。

時期：出土遺物と周囲の状況から、10世紀までには水の流入が停止したと考えられる。



第42図 14号流路出土遺物

15号流路(第43・44図 図版7・18)

位置：南部。南側は調査区域外へ延び、北側は9号流路、2区-C2の3号流路と合流すると考えられる。

重複：51・52号土坑に切られる。11・14号流路とも重複するが、新旧関係は不明である。

形態：掘削途中で湧水があり、底面まで至らなかった。

規模：長軸(72.18)m×短軸19.42m

主軸：N-20°-W

遺物

覆土から出土した11点を図示した。このうち10の須恵器長頸瓶は、1号竪穴状遺構出土の破片と接合された。

1は須恵器高台付坏である。全面に重度の摩滅を受け、内面は剥落してしまっている。底部も判然とはしないが、回転糸切りの後、高台を貼り付けたと考えられる。

2はロクロ土師器坏の体部下位から底部片である。全体に軽度の摩滅を受けている。器厚は、体部が薄く、口縁部に向けては、やや直線的に立ち上がると推測される。

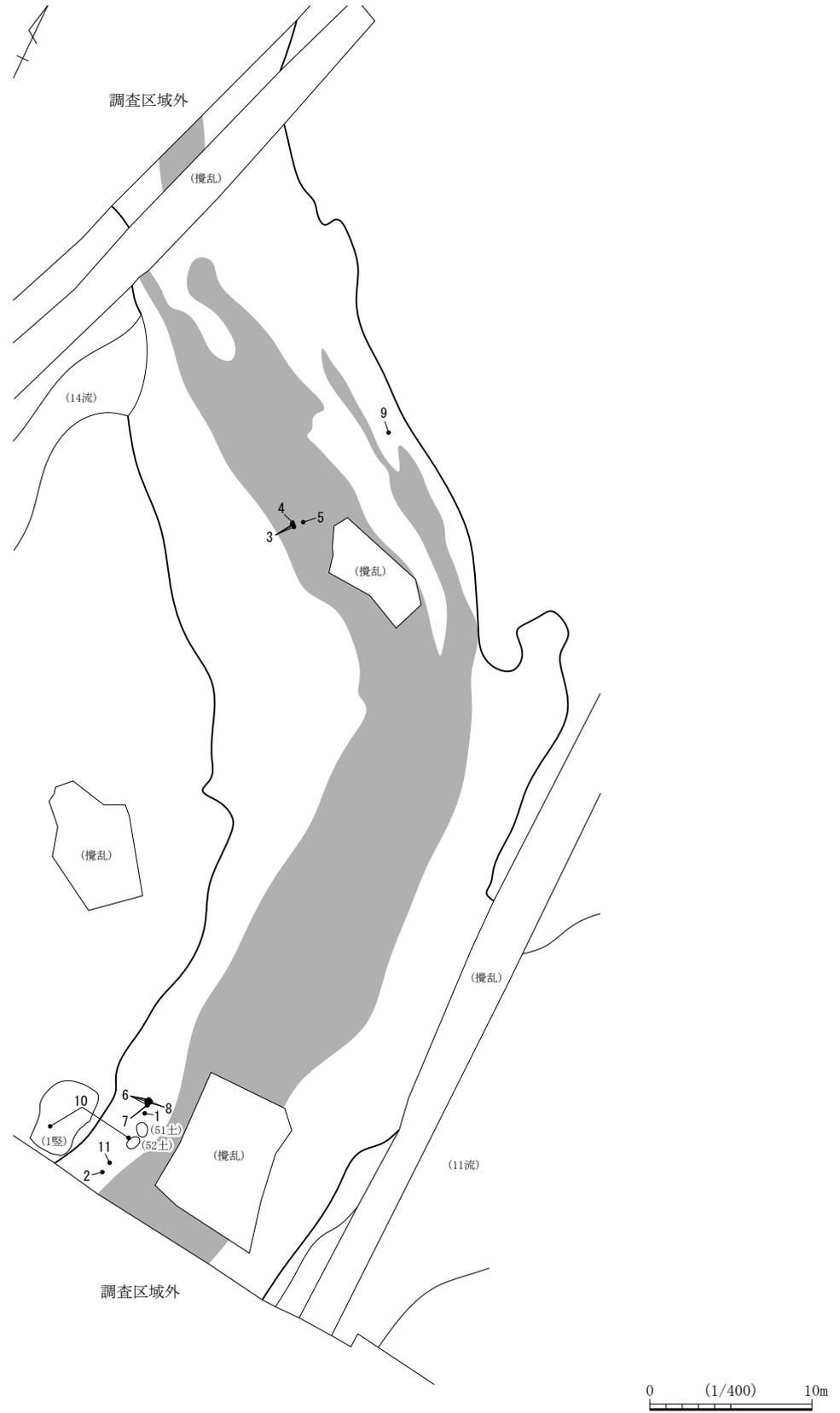
3～5は土師器坏である。3は口縁部から体部下位まで残存する。体部は斜め方向のヘラケズリの後、ナデを施している。口縁部内面のナデは摩滅によって観察できなかった。器型は体部上位か

第16表 14号流路出土土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値(cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	灰釉陶器坑	覆土	口径：- 底径：- 器高：[2.3] 最大径：-	外面：ロクロナデ、漬け掛け 内面：ロクロナデ、漬け掛け	胎土：白、黒 焼成：良好 色調：灰白色 残存度：破片	
2	灰釉陶器坑	覆土	口径：- 底径：(7.2) 器高：[2.5] 最大径：-	外面：ロクロナデ、漬け掛け 内面：ロクロナデ、漬け掛け	胎土：白 焼成：良好 色調：灰白色 残存度：10%	

第6節 流路



第43図 15号流路

ら口縁部に向けてほぼ垂直に立ち上がり、口唇部は丸く収めている。4・5はいずれも口縁部片である。2と比べると、やや肥厚しているが、2と同様に口唇部は丸く収めている。

6・7は土師器甕である。6は口縁部から胴部上位まで残存する。口縁部から肩部上位にかけて肥厚し、口縁部は「コ」の字状を呈する。7は全体的に薄手であるが、頸部上位から口縁部に向けて急激に肥厚する。8は土師器小型甕である。口縁部から肩部まで残存する。口縁部外面には沈線が巡り、肩部は横・斜め方向のヘラケズリの後、ナデ調整をした形跡が散見される。9は須恵器甕の胴部片である。器面の摩滅が著しく、内面の調整技法は判別できなかった。

10は須恵器長頸瓶の胴部片である。外面には部分的に自然釉が認められる。

11は土錘の完形品である。外面に軽度の摩滅が認められる。

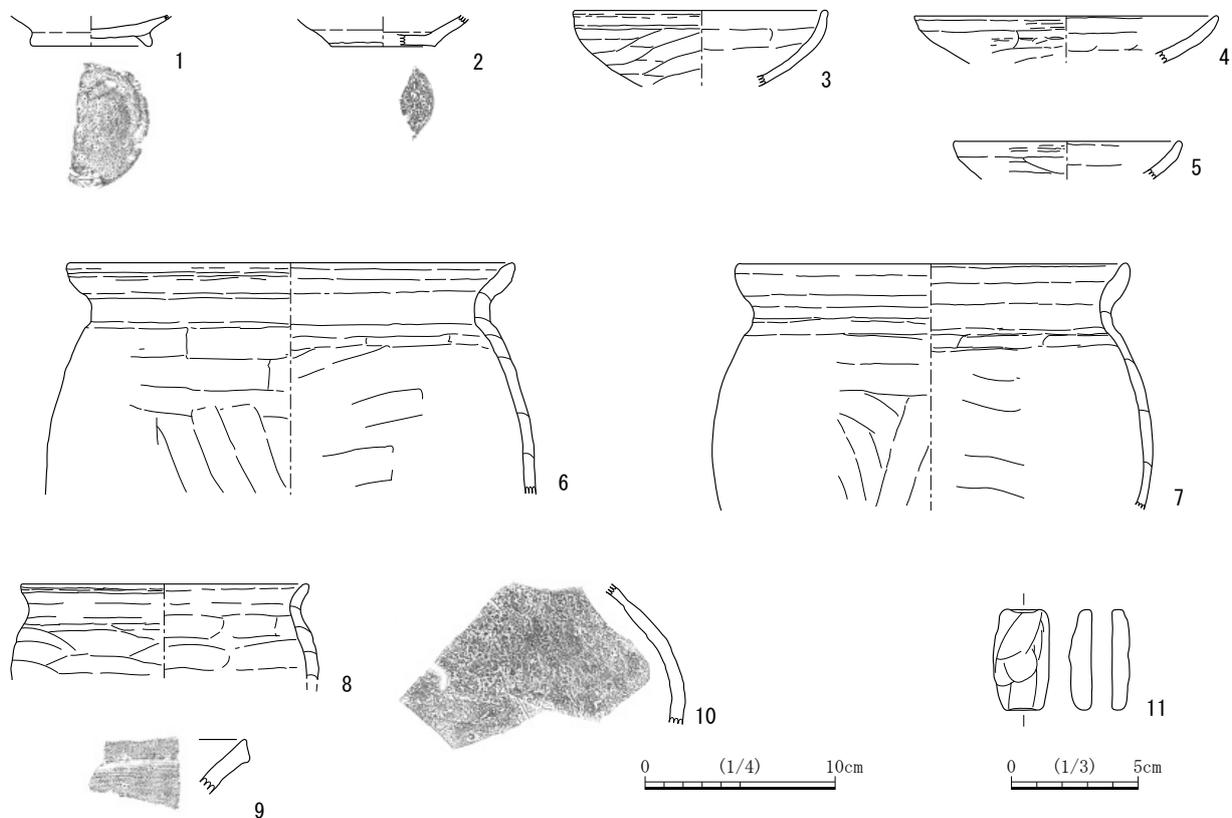
他に、須恵器坏・甕、ロクロ土師器坏、土師器甕の小破片が出土した。このうち、土師器坏には6世紀後半のものが含まれることから、本遺構の出土遺物の時期幅は6世紀から10世紀に渡る。

時期

出土遺物と周囲の状況から、10世紀には水の流入が停止していたと考えられる。

所見

V層上面にて検出し、平面プランの記録を行った。重機掘削の後、VII層上面で再検出を行ったところ、炭化物が帯状に広がる範囲を確認した。試料2点を採取し、¹⁴C年代測定を実施した結果、calAD772～975、calAD987～1031の年代値が得られた(第7章参照)。¹⁴C年代測定と出土遺物の所見から、1・2号竪穴建物、1・2号竪穴状遺構が存在していたと考えられる10世紀前半には、流路としての機能を喪失していたと考えられる。



第44図 15号流路出土遺物

第17表 15号流路出土土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値 (cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	須恵器 高台付坏	覆土	口径：- 底径：(6.2) 器高：[1.7] 最大径：-	特徴：全体摩滅 外面：高台部ロクロナデ、底部回転糸切り後高台貼付け 内面：器面摩滅により判別不能	胎土：凝、片、チャ、赤 焼成：普通 色調：橙色 残存度：底部50%	
2	ロクロ 土師器 坏	覆土	口径：- 内底径：(4.4) 底径：(5.4) 器高：[1.6] 最大径：-	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	胎土：角、片、チャ、赤 焼成：普通 色調：橙色 残存度：底部20%	
3	土師器 坏	覆土	口径：(13.1) 底径：- 器高：[4.1] 最大径：-	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 内面：ヘラナデ	胎土：石、長、片、チャ、赤 焼成：普通 色調：浅黄橙色 残存度：40%	
4	土師器 坏	覆土	口径：(15.8) 底径：- 器高：[2.5] 最大径：-	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、ナデ 内面：ヘラナデ	胎土：石、長、角、チャ 焼成：普通 色調：にぶい黄橙色 残存度：10%	
5	土師器 坏	覆土	口径：(11.8) 底径：- 器高：[2.0] 最大径：-	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 内面：ヘラナデ	胎土：石、長、チャ 焼成：普通 色調：にぶい黄橙色 残存度：10%	
6	土師器 甕	覆土	口径：(23.4) 底径：- 器高：[12.3] 最大径：-	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	胎土：石、長、片、チャ 焼成：普通 色調：にぶい褐色 残存度：30%	
7	土師器 甕	覆土	口径：(20.4) 底径：- 器高：[13.0] 最大径：-	外面：口縁部～頸部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	胎土：石、長、チャ 焼成：普通 色調：にぶい褐色 残存度：15%	
8	土師器 小型甕	覆土	口径：(15.1) 底径：- 器高：[5.1] 最大径：-	外面：口唇部沈線、口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土：凝、片、チャ、白 焼成：普通 色調：にぶい赤褐色 残存度：口縁部30%	
9	須恵器 甕	覆土	口径：- 底径：- 器高：[2.0] 最大径：-	特徴：器面摩滅 外面：タタキ 内面：器面摩滅により判別不能	胎土：チャ 焼成：良好 色調：紫灰色 残存度：破片	東金子産
10	須恵器 長頸瓶	覆土	口径：- 底径：[7.5] 器高：- 最大径：-	特徴：外面自然釉、器面摩滅 外面：タタキ 内面：器面摩滅により判別不能	胎土：石、長、チャ、白 焼成：普通 色調：灰色 残存度：破片	東金子産

第18表 15号流路出土土製品観察表

番号	器種	石材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存度	備考
11	土錘	-	覆土	4.0	2.2	0.9	21.5	100%	

16号流路 (第45・46図)

位置：南東部。北側と南側はいずれも調査区域外に延びる。

重複：11・17号流路を切る。

形態：掘削途中で湧水があり、底面まで至らなかったため、断面形は不明である。

規模：長軸 (79.82) m × 短軸 (26.89) m

主軸：N-30°-E

遺物

土師器壺の底部片1点を図示した。器面は重度の摩滅を受けており、割口は丸みを帯びている。

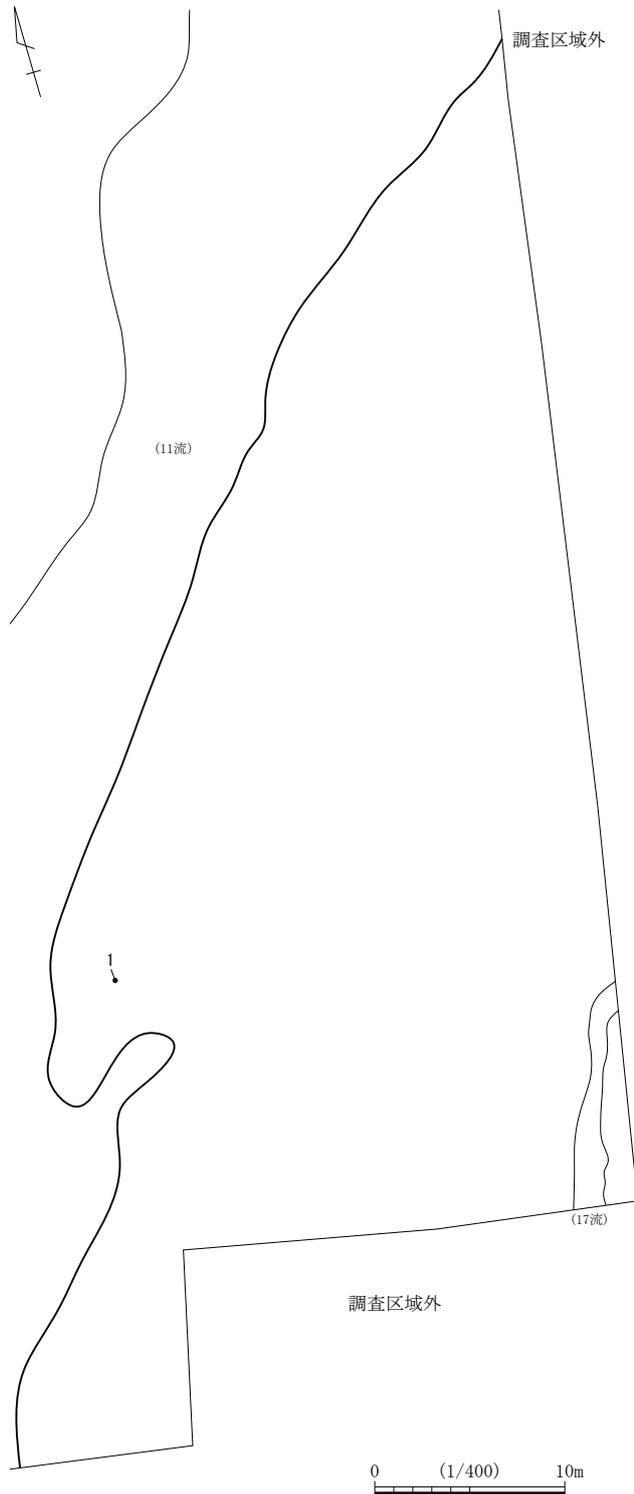
底部内面は縦・斜め方向のヘラケズリ後にナデを施している。4～5世紀の所産と考えられる。

時期

覆土中の炭化物1点を採取し、¹⁴C年代測定を実施した結果、calAD679～875の年代値が得られた(第7章参照)。出土遺物と周囲の状況及び、¹⁴C年代測定結果から9世紀後半には埋没が始まっていたと考えられる。

所見

出土遺物は10世紀の所産と考えられるが、1・2号竪穴建物が構築されたV層の下部で、本流路



第45図 16号流路

の覆土と思われる礫層が確認されたことから、V層が形成される以前には埋没していたと考えられる。

調査区東壁の精査にて、11号流路との切り合い関係が確認されたが、元々は同一の流路であった可能性が高く、11号流路が東に移動したものが、本流路であると推察される。

15号流路と同様に、覆土中に炭化物が確認されたが、混入量は散見される程度に留まる。

17号流路 (第31図)

位置：南東部。北側と南側はいずれも調査区域外に延びる。

重複：16号流路に切られる。

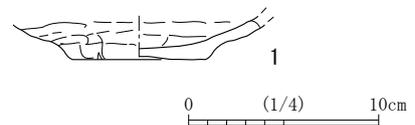
形態：平面形は北側で急激に蛇行し、調査区東壁へと延びる。断面形は浅いU字形を呈する。掘り込みは浅く、東側から砂礫層が流入する様子が認められた。

規模：長軸(12.32)m×短軸1.8m

主軸：N-27°-E

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：周囲の状況及び、16号流路との新旧関係から、9世紀代には埋没していたと考えられる。



第46図 16号流路出土遺物

第19表 16号流路出土土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値 (cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	土師器壺	覆土	口径：- 底径：(6.8) 器高：[2.6] 最大径：-	特徴：器面摩滅 外面：ナデ、ヘラケズリ 内面：ヘラナデ	胎土：片、チャ、白 焼成：良好 色調：明赤褐色 残存度：底部20%	

第7節 遺構外出土遺物

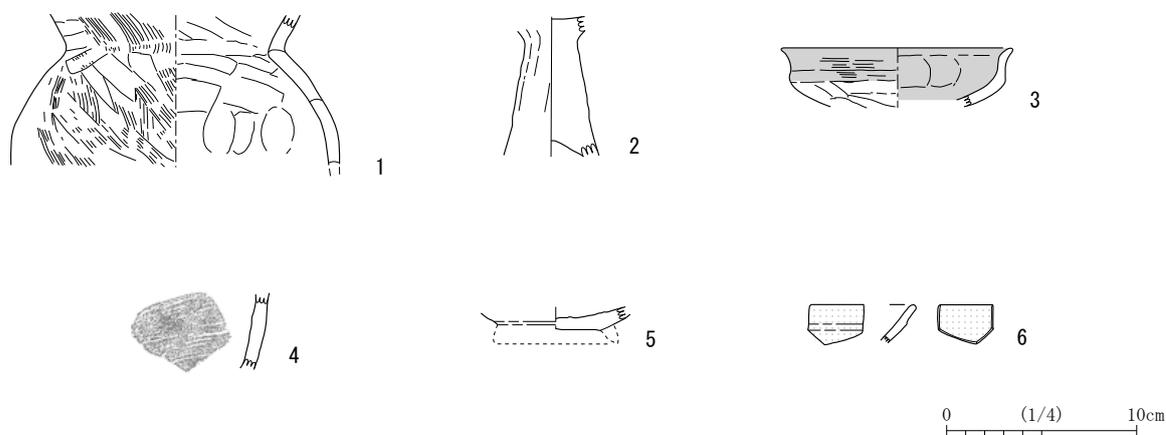
本稿では、表土掘削から各遺構確認面までに部分的に残存していた遺物包含層、及び表土から出土した遺物のうち、6点を図示した。いずれも古墳時代から奈良・平安時代の所産と考えられる。

1は土師器壺の頸部～胴部片である。外面にはハケメが残り、一部では、その後にナデ調整を施している。2は土師器高坏の脚部片である。器面

の摩滅が認められ、水の流入により流されたものと考えられる。

3は土師器坏である。「比企型坏」の器形を呈しており、内外面には赤彩が施されている。4は須恵器甕の胴部片である。東金子産と考えられる。

5はロクロ土師器高台付坏の底部片である。高台部を欠損する。6は灰釉陶器碗の口縁部片である。



第47図 6区-1遺構外出土遺物

第20表 6区-1遺構外出土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値 (cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	土師器壺	-	口径：- 底径：- 器高：[8.0] 最大径：-	特徴：器面摩滅 外面：頸部～胴部ハケメ後一部ナデ 内面：頸部ナデ、胴部指頭圧痕	胎土：石、長、角、チャ 焼成：普通 色調：灰褐色 残存度：20%	
2	土師器高坏	-	口径：- 底径：- 器高：[7.4] 最大径：-	特徴：器面摩滅 外面：ナデ 内面：器面摩滅により判別不能	胎土：石、長、片、チャ 焼成：普通 色調：橙色 残存度：脚部40%	
3	土師器坏	-	口径：(12.0) 底径：- 器高：[3.5] 最大径：-	特徴：内外面赤彩 外面：口縁部～体部上半ナデ、体部下半ヘラケズリ 内面：体部指頭圧痕、ナデ	胎土：片、チャ 焼成：普通 色調：赤褐色 残存度：10%	比企型
4	須恵器甕	-	口径：- 底径：- 器高：[4.3] 最大径：-	外面：タタキ 内面：タタキ、ヘラナデ	胎土：石、長、チャ 焼成：良好 色調：灰白色 残存度：破片	東金子産
5	ロクロ土師器高台付坏	-	口径：- 底径：(5.0) 器高：[1.2] 最大径：-	特徴：高台欠損 外面：ロクロナデ 内面：-	胎土：石、長、片、チャ 焼成：普通 色調：明褐色 残存度：底部30%	
6	灰釉陶器碗	-	口径：- 底径：- 器高：[2.0] 最大径：-	外面：ロクロナデ、漬け掛け 内面：ロクロナデ、漬け掛け	胎土：石、長、白 焼成：良好 色調：灰白色 残存度：破片	東濃窯産か？

第5章 6区-2の調査成果

第1節 概要

6区-2は下田遺跡6区の南西部に位置し、2区-C2が北隣する。現地表面の標高は約28.3mを測る。遺構は表土除去後、V層上面で奈良・平安時代の遺構を、VII層上面で古墳時代の遺構を確認した。

最東端では、13号流路の影響で、砂礫層が広がるが、全体を通して、河川浸食・氾濫の影響も少なく、安定した自然堆積層が確認された。なお、基本層序は、過去の調査で、隣接する2区-C2南壁にて記録したため、今回は記録していない。

2区-C2における、奈良・平安時代(V層上面)の主な遺構は溝状遺構と流路、ピット列で、竪穴

建物(『下田遺跡2』では住居跡と表記)は確認されなかった。古墳時代(VI、VII層上面)では竪穴建物、溝状遺構、土坑、畝状遺構などが調査された。

古墳時代と奈良・平安時代では、発見された遺構の種別に違いがみられ、遺跡を形成する上での自然環境が異なっていたことが推察される。

今回の6区-2の調査でも、奈良・平安時代の竪穴建物は確認されず、土坑・溝状遺構が主体を占めていた。

また、前回調査でピット列として報告した遺構は、遺構性格の再検討と周辺市町村における調査成果の蓄積により、道路状遺構と判断し、報告する。



第48図 調査区位置図 6区-2

第1節 概要



第49図 6区-2・3古墳時代遺構配置図

第2節 掘立柱建物跡

1. 古墳時代

検出された掘立柱建物跡は1棟である。

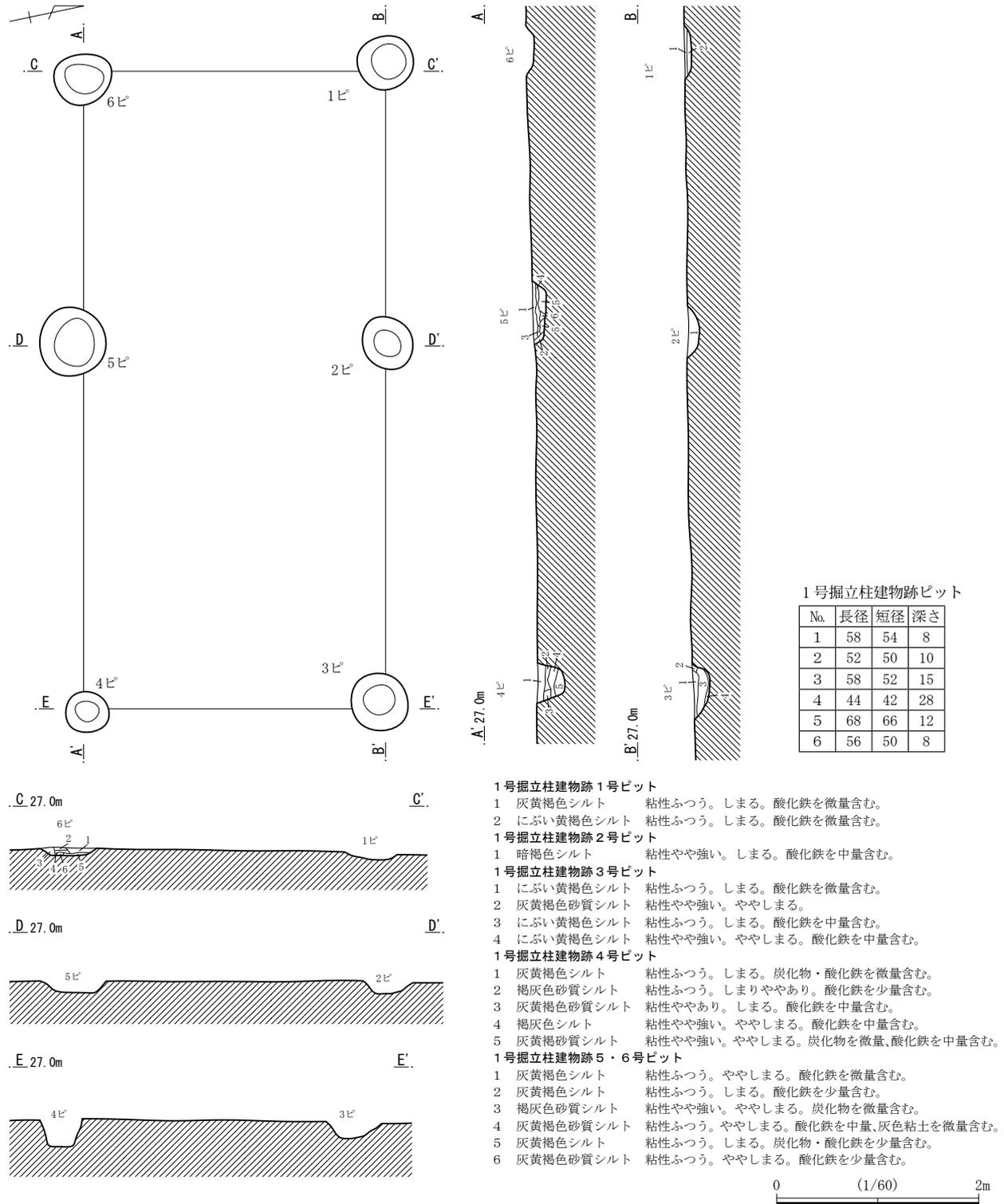
1号掘立柱建物跡 (第51図 図版7)

位置：中央部南側。

重複：37号溝状遺構を切る。

形態：梁行1間×桁行2間。

規模：長軸7.62m×短軸3.72m



第51図 1号掘立柱建物跡

長 軸 : N-82°-W

遺 物 : 遺物は出土しなかった。

時 期 : 周辺状況より、古墳時代と考えたい。

所見

建物の南側は調査区域外になるため、2間×2間の建物の可能性を残すが、柱間寸法が均等ではない状況から、1間×2間の側柱建物と考えられる。梁間寸法は2.44m、桁行寸法は2.26～3.02mを測る。柱筋の通りは悪く、平面は歪む。

第3節 竪穴状遺構

1. 古墳時代

検出された竪穴状遺構は2基である。

3号竪穴状遺構 (第52・53図 図版7)

位 置 : 北西部。

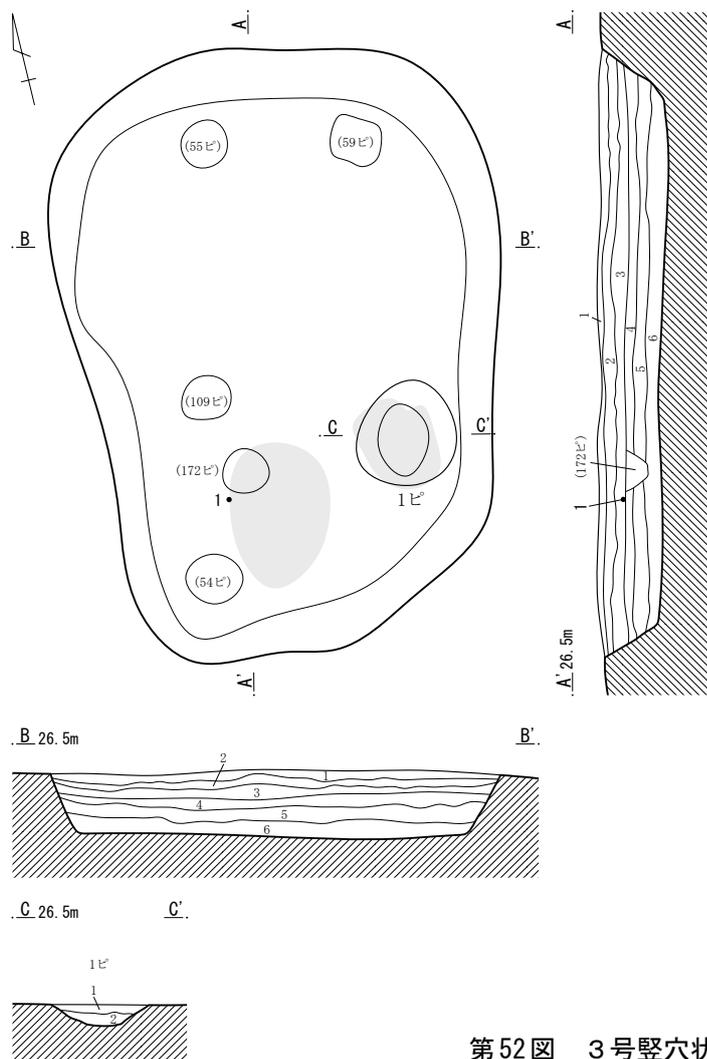
重 複 : なし。

形 態 : 平面形は不整形、断面形は逆台形を呈する。

規 模 : 長軸4.84m×短軸3.56m×深さ0.52m

主 軸 : N-13°-E

覆 土 : 水平に堆積し、6層に分層される。灰色系統の砂質シルトが主体と考えられる。上層～中層で焼土、中層～下層で炭化物を含む。



3号竪穴状遺構

- 1 褐灰色砂質シルト 粘性ふつう。しまる。焼土を少量、褐色シルトを微量、酸化鉄を多量含む。
- 2 灰色砂質シルト 粘性やや強い。ややしまる。焼土を多量、褐色シルト・酸化鉄を中量含む。
- 3 灰色砂質粘土 粘性強い。しまる。焼土を中量、褐色シルトを多量、酸化鉄を中量含む。
- 4 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや強い。しまる。焼土を少量、炭化物・マンガンを微量、酸化鉄を中量含む。
- 5 灰黄色砂質シルト 粘性やや強い。ややしまる。炭化物を・マンガンを微量、酸化鉄を中量含む。
- 6 灰黄色砂質シルト 粘性やや強い。しまる。炭化物を微量、青灰色粘土ブロック (0.5～2cm) を中量、酸化鉄を多量含む。

3号竪穴状遺構 1号ピット

- 1 灰黄褐色砂質シルト 粘性ふつう。しまりやや強い。焼土・酸化鉄を中量、炭化物を微量含む。
- 2 青灰色砂質粘土 粘性強い。ややしまる。焼土・褐色シルトを少量、酸化鉄を多量含む。

第52図 3号竪穴状遺構

第3節 竪穴状遺構

遺物

少量ながら、土師器甕・高坏が出土した。このうち土師器甕の底部片1点を図示した。

時期

出土遺物と、周囲の状況から古墳時代前期と考えられる。

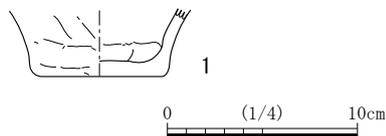
所見

Ⅶ層上面で確認された。遺構精査の段階から、焼土粒を含む褐灰色砂質シルトが平面状に広がり示したことにより、竪穴建物の可能性を考慮し、調査を開始したが、明確な硬化面や、付帯施設が確認されなかったことから、竪穴状遺構に分類した。

南東部壁際では、3層から掘り込む形で、1号ピットが確認された。複数の床面が存在する可能性も考えられたが、埋め戻しながら使用されていたと思われる。1号ピットの覆土は多量の焼土が含まれていることから、炉の可能性も考えられる。

試料3点を採取し、¹⁴C年代測定を実施したところ、calAD18～276、calAD83～223、calBC33～AD121の年代値が得られた(第7章参照)。

出土遺物も僅少であり、時期特定は困難であったが、遺構形態・覆土が近似する4号竪穴状遺構から古墳時代前期(4世紀)の土師器高坏が出土したことから、本遺構も同時期の所産と考えた。



第53図 3号竪穴状遺構出土遺物

4号竪穴状遺構(第54・55図 図版7・18)

位置:南西部。

重複:なし。

形態:平面形は不整形、断面形は皿状を呈する。壁面の立ち上がりは緩やかである。

規模:長軸4.52m×短軸3.53m×深さ0.36m

主軸:N-9°-E

覆土:ほぼ水平に堆積し、2層に分層される。

遺物

2層から4世紀の土師器高坏の坏部が1点出土し、図示した。内外面に赤彩が施されており、外面には縦～斜め方向のヘラナデ、内面には横方向のヘラナデが認められる。

時期

出土遺物から古墳時代前期(4世紀)と考えられる。

所見

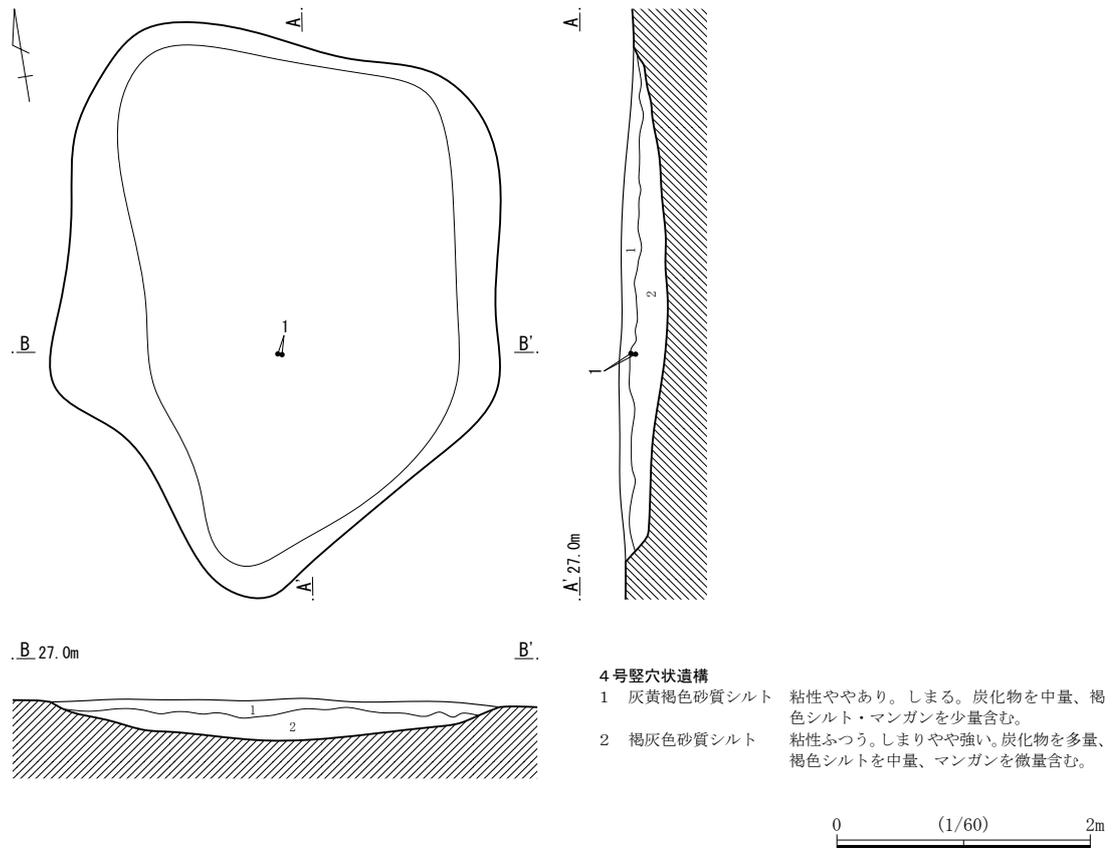
3号竪穴状遺構の南側に位置し、遺構形態・覆土が近似する。竪穴建物の可能性も考慮し調査を開始したが、明確な床面や、炉などの付帯施設は確認されなかったことから、竪穴状遺構とした。

出土遺物は僅少であるが、図示した土師器高坏は残存状態も比較的良好であり、古墳時代前期の所産と考えられるため、古墳時代前期(4世紀)の遺構と判断した。

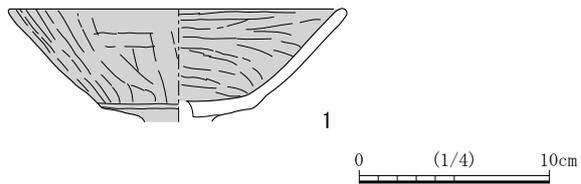
第21表 3号竪穴状遺構出土土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値(cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	土師器甕	覆土中層	口径: - 底径: (6.6) 器高: [3.6] 最大径: -	外面:ヘラケズリ、ヘラナデ 内面:ヘラナデ	胎土:石、長、角、雲、片、チャ 焼成:普通 色調:にぶい褐色 残存度:底部60%	



第54図 4号竪穴状遺構



第55図 4号竪穴状遺構出土遺物

第22表 4号竪穴状遺構出土土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値 (cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	土師器 高坏	覆土中層	口径：(17.8) 底径：- 器高：[6.0] 最大径：-	特徴：内外面赤彩、脚部欠損 外面：ヘラナデ 内面：ヘラナデ	胎土：針、石、片、チャ 焼成：良好 色調：にぶい赤褐色 残存度：坏部60%	在地産か？

第4節 土坑

1. 古墳時代

検出された土坑は21基である。

9号土坑(第56図 図版7)

位置：南西部。

重複：なし。

形態：平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。

規模：長軸0.52m×短軸0.46m×深さ0.26m

長軸：N-78°-W

覆土：褐灰色シルトを主体とし、2層に分層される。1層には焼土を微量に含む。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：周辺状況から、古墳時代と考えたい。

所見

VII層上面で検出された。東側には、古墳時代前期の土師器高坏が出土した4号竪穴状遺構が確認されている。4号竪穴状遺構と同様に、覆土中に焼土を含むことから、関連性を有するものと考えたい。

10号土坑(第56図)

位置：南西部。

重複：なし。

形態：平面形は円形、断面形は浅い逆台形を呈する。

規模：長軸0.69m×短軸0.67m×深さ0.16m

長軸：N-85°-W

覆土：2層に分層される。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：周辺状況から、古墳時代と考えられる。

所見

4号竪穴状遺構の南西にはほぼ隣接する。時期決定の指標となる遺物は出土しなかったが、炭化物を覆土中に含むことから、4号竪穴状遺構と関連性のある土坑と考えたい。

14号土坑(第56図 図版8)

位置：北西部。3号竪穴状遺構の北西に位置する。

重複：なし。

形態：平面形は楕円形、断面形は有段状を呈する。

規模：長軸0.86m×短軸0.74m×深さ0.24m

長軸：N-4°-W

覆土：水平に堆積し、3層に分層される。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：周辺状況より、古墳時代と考えられる。

16号土坑(第56図 図版8)

位置：中央部。

重複：なし。

形態：平面形は円形、断面形は緩い逆台形を呈する。

規模：長軸2.14m×短軸2.02m×深さ0.16m

長軸：N-76°-W

覆土：ほぼ水平に堆積し、2層に分層される。2層には炭化物を少量含む。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：周辺状況より、古墳時代と考えられる。

17号土坑(第56図 図版8)

位置：中央部南側。

重複：なし。

形態：平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。

規模：長軸1.12m×短軸0.96m×深さ0.12m

長軸：N-75°-W

覆土：ほぼ水平に堆積し、2層に分層される。2層は炭化物を少量含む。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：周辺状況より、古墳時代と考えられる。

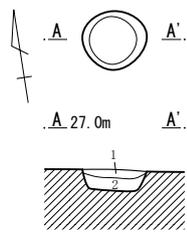
18号土坑 (第56図 図版8)

位置：中央部。
 重複：36号溝状遺構に切られる。
 形態：平面形は楕円形、断面形は浅い逆台形を呈する。
 規模：長軸1.11m×短軸0.85m×深さ0.2m
 長軸：N-18°-W
 覆土：レンズ状に堆積し、2層に分層される。
 遺物：遺物は出土しなかった。
 時期：36号溝状遺構との切り合い関係より、古墳時代前期と考えたい。

20号土坑 (第56図 図版8)

位置：中央部。
 重複：なし。
 形態：平面形は不整形、断面形は有段状を呈する。
 規模：長軸1.42m×短軸0.54m×深さ0.27m
 長軸：N-1°-E
 覆土：5層に分層される。1～4層には微量の炭化物を含む。
 遺物：土師器甕が出土したが、小破片のため図示できなかった。
 時期：周辺状況より、古墳時代と考えられる。

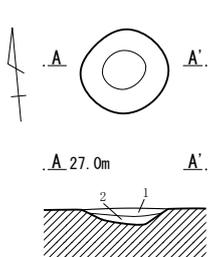
9号土坑



9号土坑

- 1 褐灰色シルト 粘性ややあり。ややしまる。焼土を微量、褐色シルト・マンガン少量含む。
- 2 褐灰色シルト 粘性やや強い。ややしまる。礫(1cm大)を微量、褐色シルト・マンガン少量含む。

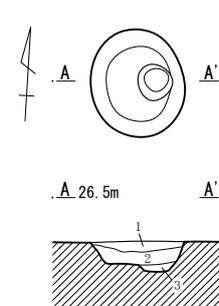
10号土坑



10号土坑

- 1 灰黄褐色シルト 粘性ややあり。ややしまる。炭化物・褐灰色砂質粘土を少量含む。
- 2 黒褐色シルト 粘性ふつう。ややしまる。炭化物・礫(0.5～1cm大)・褐灰色砂質粘土を少量含む。

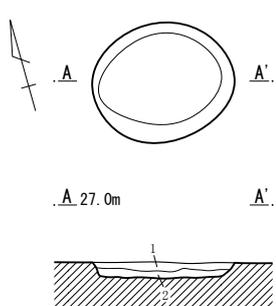
14号土坑



14号土坑

- 1 褐灰色シルト 粘性ややあり。しまる。褐色シルト・マンガン少量、酸化鉄を中量含む。
- 2 褐灰色シルト 粘性ふつう。しまりやや強い。礫(0.2～0.5cm大)・褐色シルトを少量、酸化鉄を多量含む。
- 3 褐灰色砂質シルト 粘性ややあり。しまる。酸化鉄を多量含む。

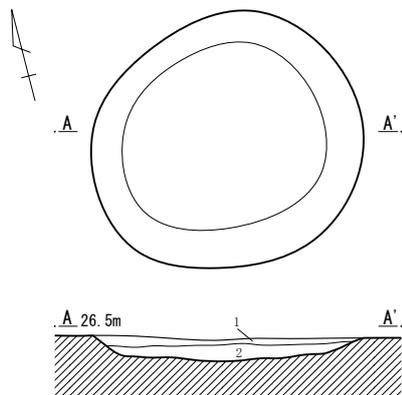
17号土坑



17号土坑

- 1 灰黄褐色シルト 粘性ややあり。しまりやや強い。褐色シルトを少量、マンガン微量、酸化鉄を中量含む。
- 2 灰黄褐色砂質シルト 粘性ふつう。しまる。炭化物・マンガン少量含む。

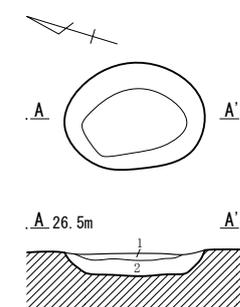
16号土坑



16号土坑

- 1 灰黄褐色シルト 粘性ややあり。しまりやや強い。褐色シルトを少量、マンガン微量、酸化鉄を中量含む。
- 2 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性ふつう。しまる。炭化物・マンガン少量含む。

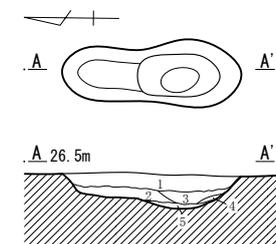
18号土坑



18号土坑

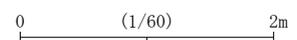
- 1 暗褐色シルト 粘性強い。しまる。焼土・炭化物を少量含む。
- 2 灰黄褐色砂質シルト 粘性ふつう。しまる。炭化物・マンガン少量含む。

20号土坑



20号土坑

- 1 褐灰色砂質シルト 粘性ふつう。しまる。炭化物を微量、灰色粘土ブロック(3～7cm大)を中量、酸化鉄を中量含む。
- 2 灰黄褐色砂質粘土 粘性やや強い。しまりやや強い。炭化物・酸化鉄を微量含む。
- 3 褐灰色砂質粘土 粘性やや強い。しまる。炭化物を微量、酸化鉄を少量含む。
- 4 灰褐色シルト 粘性ふつう。ややしまる。炭化物を微量含む。
- 5 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや強い。しまる。褐色シルトを少量含む。



第56図 9・10・14・16～18・20号土坑

21号土坑(第57図 図版8)

位置：中央部南側。
重複：なし。
形態：平面形は楕円形、断面形は浅い逆台形を呈する。
規模：長軸0.91m×短軸0.63m×深さ0.2m
長軸：N-19°-W
覆土：レンズ状に堆積し、2層に分層される。1層は炭化物を少量含む。
遺物：遺物は出土しなかった。
時期：周辺状況より、古墳時代と考えられる。

22号土坑(第57図 図版8)

位置：中央部。
重複：なし。
形態：平面形は不整形、断面形は浅い鍋底状を呈する。
規模：長軸0.92m×短軸0.8m×深さ0.14m
長軸：N-15°-E
覆土：2層に分層される。各層に炭化物を含む。
遺物：遺物は出土しなかった。
時期：周辺状況より、古墳時代前期と考えた
い。

23号土坑(第57図 図版8)

位置：東部。
重複：なし。
形態：平面形は楕円形、断面形は有段状を呈する。
規模：長軸1.05m×短軸0.54m×深さ0.28m
長軸：N-69°-E
覆土：2層に分層される。各層に炭化物を含む。
遺物：遺物は出土しなかった。
時期：周辺状況より、古墳時代と考えられる。

24号土坑(第57図 図版9)

位置：中央部。
重複：175号ピットを切る。
形態：平面形は楕円形、断面形はU字形を呈する。
規模：長軸0.84m×短軸0.7m×深さ0.25m
長軸：N-77°-E
覆土：2層に分層される。
遺物：遺物は出土しなかった。
時期：周辺状況より、古墳時代と考えられる。

25号土坑(第57図 図版9)

位置：東部。
重複：なし。
形態：平面形は不整形、断面形は浅いU字形を呈する。
規模：長軸1.37m×短軸0.73m×深さ0.14m
長軸：N-16°-E
覆土：4層に分層される。下層は黄褐色系統のシルトがブロック状に堆積する。
遺物：覆土中から土師器碗とみられる破片が1点出土したが、小破片のため図示できなかった。
時期：出土遺物と周囲の状況より、古墳時代と考えられる。

26号土坑(第57図 図版9)

位置：東部北側。北側は調査区域外へ延びる。
重複：なし。
形態：平面形は不整形、断面形は有段状を呈する。
規模：長軸1.75m×短軸(0.8)m×深さ0.15m
長軸：N-70°-W
覆土：ほぼ水平に堆積し、2層に分層される。
遺物：遺物は出土しなかった。
時期：周辺状況より、古墳時代と考えられる。

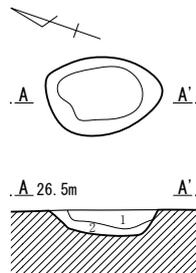
29号土坑 (第57図 図版9)

位置：西部。
 重複：なし。
 形態：平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。
 規模：長軸0.59m×短軸0.48m×深さ0.14m
 長軸：N-59°-E
 覆土：水平に堆積し、2層に分層される。
 遺物：遺物は出土しなかった。
 時期：周辺状況より、古墳時代と考えられる。

31号土坑 (第57図 図版9)

位置：西部南側。
 重複：なし。
 形態：平面形は楕円形、断面形は浅いU字形を呈する。
 規模：長軸0.8m×短軸0.63m×深さ0.1m
 長軸：N-4°-E
 覆土：レンズ状に堆積し、2層に分層される。
 遺物：遺物は出土しなかった。
 時期：周辺状況より、古墳時代と考えられる。

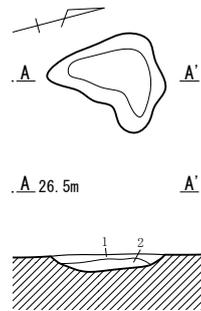
21号土坑



21号土坑

- 1 暗褐色シルト 粘性ふつう。しまる。炭化物を少量含む。
- 2 灰黄褐色砂質シルト 粘性ふつう。しまる。マンガンを少量含む。

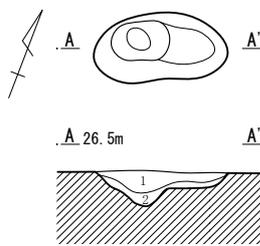
22号土坑



22号土坑

- 1 褐灰色シルト 粘性ふつう。しまる。炭化物を少量含む。
- 2 灰色砂質粘土 粘性強い。しまる。炭化物を微量、酸化鉄を少量含む。

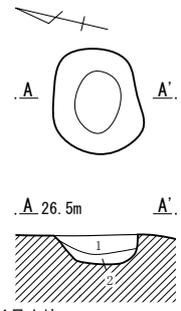
23号土坑



23号土坑

- 1 暗褐色砂質シルト 粘性ふつう。しまる。炭化物を少量含む。
- 2 にぶい黄褐色シルト 粘性ふつう。ややしまる。炭化物を微量、マンガンの中量含む。

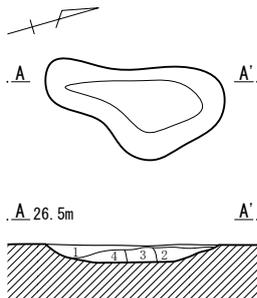
24号土坑



24号土坑

- 1 暗褐色シルト 粘性ふつう。しまる。焼土を微量、炭化物を少量含む。
- 2 にぶい黄褐色シルト 粘性ふつう。ややしまる。酸化鉄・マンガンの中量含む。

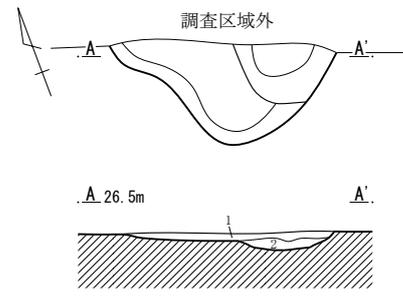
25号土坑



25号土坑

- 1 にぶい黄褐色シルト 粘性ややあり。しまる。炭化物を微量、褐色シルトを少量含む。
- 2 灰黄褐色シルト 粘性ややあり。しまる。褐色シルトを少量含む。
- 3 にぶい黄褐色シルト 粘性ややあり。ややしまる。炭化物を微量含む。
- 4 黄褐色シルト 粘性ややあり。しまる。褐色シルトを少量含む。

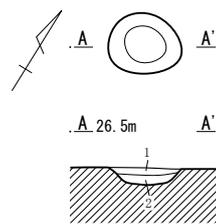
26号土坑



26号土坑

- 1 暗褐色シルト 粘性ふつう。しまる。炭化物を少量含む。
- 2 灰黄褐色シルト 粘性ふつう。しまる。炭化物を微量含む。

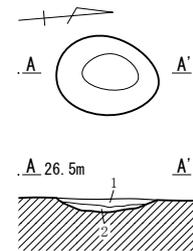
29号土坑



29号土坑

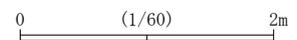
- 1 褐灰色砂質シルト 粘性ややあり。しまりやや強い。にぶい黄褐色シルトを中量、マンガンを少量、酸化鉄を多量含む。
- 2 褐灰色シルト 粘性ややあり。しまりやや強い。にぶい黄褐色シルト・酸化鉄を中量、マンガンを微量含む。

31号土坑



31号土坑

- 1 褐灰色砂質シルト 粘性ふつう。しまる。炭化物を微量、褐色シルト・酸化鉄を少量含む。
- 2 灰黄褐色シルト 粘性ややあり。しまる。礫(0.5~1cm大)を微量、褐色シルト・酸化鉄を少量含む。



第57図 21 ~ 26・29・31号土坑

第4節 土坑

32号土坑 (第58図 図版9)

位置：西部。
重複：なし。
形態：平面形は不整形、断面形は有段状を呈する。
規模：長軸1.0m×短軸0.66m×深さ0.26m
長軸：N-63°-W
覆土：4層に分層される。上層はほぼ水平に堆積し、下層はブロック状に堆積する。
遺物：遺物は出土しなかった。
時期：周辺状況より、古墳時代と考えられる。

33号土坑 (第58図 図版9)

位置：西部。
重複：なし。
形態：平面形は円形、断面形はU字形を呈する。
規模：長軸0.6m×短軸0.6m×深さ0.16m
長軸：N-8°-E
覆土：4層に分層される。1層には炭化物が多量に含まれ、4層は流入した形跡が認められる。
遺物：遺物は出土しなかった。
時期：周辺状況より、古墳時代と考えられる。

34号土坑 (第58図 図版9)

位置：北西部。3号竪穴状遺構の南西。
重複：なし。
形態：平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。
規模：長軸0.77m×短軸0.62m×深さ0.2m
長軸：N-27°-W
覆土：4層に分層される。2層以下はブロック状に堆積する。
遺物：遺物は出土しなかった。

時期：周辺状況より、古墳時代と考えられる。

36号土坑 (第58図 図版10)

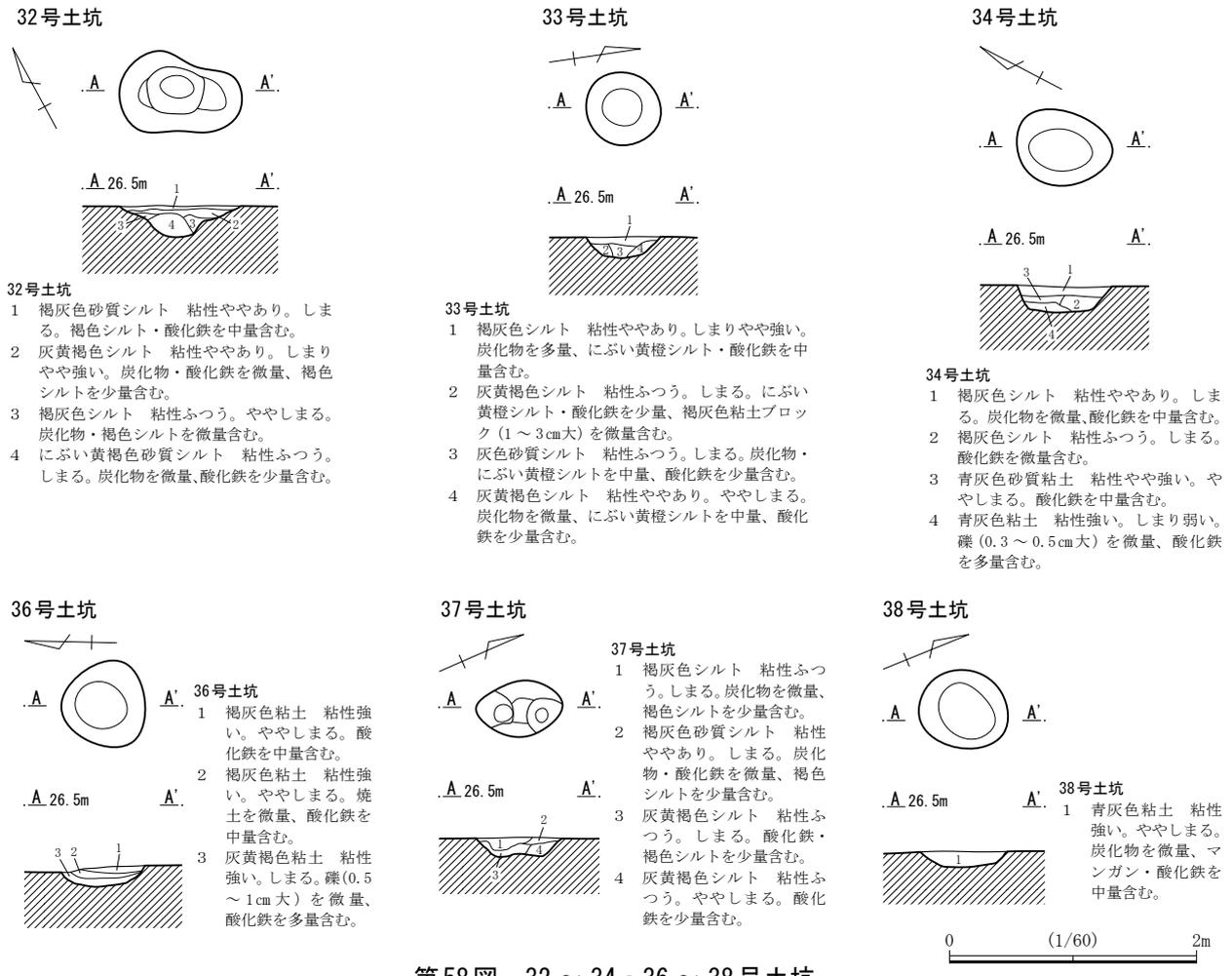
位置：北西部。3号竪穴状遺構の北。
重複：なし。
形態：平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。東側は緩やかに立ち上がる。
規模：長軸0.71m×短軸0.68m×深さ0.16m
長軸：N-89°-E
覆土：褐灰色粘土を主体とし、3層に分層される。レンズ状堆積を呈する。
遺物：遺物は出土しなかった。
時期：周辺状況より、古墳時代と考えられる。

37号土坑 (第58図 図版10)

位置：東部北側。
重複：なし。
形態：平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。東西の底面は中央部より浅く窪む。
規模：長軸0.7m×短軸0.46m×深さ0.16m
長軸：N-28°-E
覆土：ブロック状に堆積し、4層に分層される。
遺物：遺物は出土しなかった。
時期：周辺状況より、古墳時代と考えたい。

38号土坑 (第58図 図版10)

位置：東部。
重複：なし。
形態：平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。
規模：長軸0.71m×短軸0.64m×深さ0.12m
長軸：N-21°-E
覆土：青灰色粘土の単層である。
遺物：遺物は出土しなかった。
時期：周辺状況より、古墳時代と考えられる。



第58図 32~34・36~38号土坑

2. 奈良・平安時代

検出された土坑は9基である。

1号土坑 (第59図 図版10)

位置：東部。攪乱の底面で確認された。

重複：なし。

形態：平面形は円形、断面形は浅いU字形を呈する。

規模：長軸(1.1)m×短軸1.04m×深さ0.1m

長軸：N-15°-W

覆土：黒褐色シルトの単層である。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と遺構形態より、奈良・平安時代と考えられる。

2号土坑 (第59図 図版10)

位置：東部。

重複：なし。

形態：平面形は円形、断面形は浅いU字形を呈する。

規模：長軸0.87m×短軸0.85m×深さ0.06m

長軸：N-21°-W

覆土：黒褐色シルトの単層である。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と遺構形態より、奈良・平安時代と考えられる。

3号土坑 (第59図 図版10)

位置：中央部北側。北半部は調査区域外へ延びる。

第4節 土坑

重複：なし。

形態：平面形は円形を呈するものと考えられる。断面形は浅いU字形を呈する。

規模：長軸1.14m×短軸(0.64)m×深さ0.12m

長軸：N-72°-W

覆土：黒褐色シルトの単層である。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：覆土と遺構形態より、奈良・平安時代と考えられる。

4号土坑(第59図 図版10)

位置：東部。

重複：なし。

形態：平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。

規模：長軸0.83m×短軸0.77m×深さ0.28m

長軸：N-46°-E

覆土：黒褐色シルトの単層である。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と遺構形態より、奈良・平安時代と考えられる。

5号土坑(第59図 図版10)

位置：中央部。

重複：6号溝状遺構に切られる。

形態：南東側を6号溝状遺構により欠失するが、平面形は円形、断面形は浅いU字形を呈するものと考えられる。

規模：長軸0.92m×短軸(0.66)m×深さ0.09m

長軸：N-57°-E

覆土：炭化物を微量に含む黒褐色シルトの単層である。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と遺構形態より、奈良・平安時代と考えられる。

6号土坑(第59図 図版11)

位置：中央部北側。

重複：なし。

形態：平面形は楕円形、断面形は浅いU字形を呈する。

規模：長軸0.89m×短軸0.63m×深さ0.05m

長軸：N-16°-E

覆土：黒褐色シルトの単層である。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と周囲の状況より、奈良・平安時代と考えられる。

7号土坑(第59図 図版11)

位置：中央部北側。

重複：17号溝状遺構に切られる。

形態：東側を17号溝状遺構により欠失するが、平面形は円形を、断面形は浅いU字形を呈するものと考えられる。

規模：長軸0.76m×短軸(0.52)m×深さ0.06m

長軸：N-16°-W

覆土：にぶい黄褐色土の単層である。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と切り合い関係より、奈良・平安時代と考えられる。

8号土坑(第59図 図版11)

位置：西部。

重複：なし。

形態：平面形は円形を、断面形は浅い逆台形を呈する。

規模：長軸0.52m×短軸0.46m×深さ0.26m

長軸：N-78°-W

覆土：黒褐色シルトの単層である。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と遺構形態より、奈良・平安時代と考えられる。

35号土坑 (第59図 図版11)

位置：西部。

重複：20号溝状遺構に切られる。

形態：平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。東側は緩やかに立ち上がる。

規模：長軸0.51m×短軸0.49m×深さ0.12m

長軸：N-17°-E

覆土：ほぼ水平に堆積し、2層に分層される。

遺物：10世紀の所産と考えられる土師器甕が2点出土したが、小破片のため図示

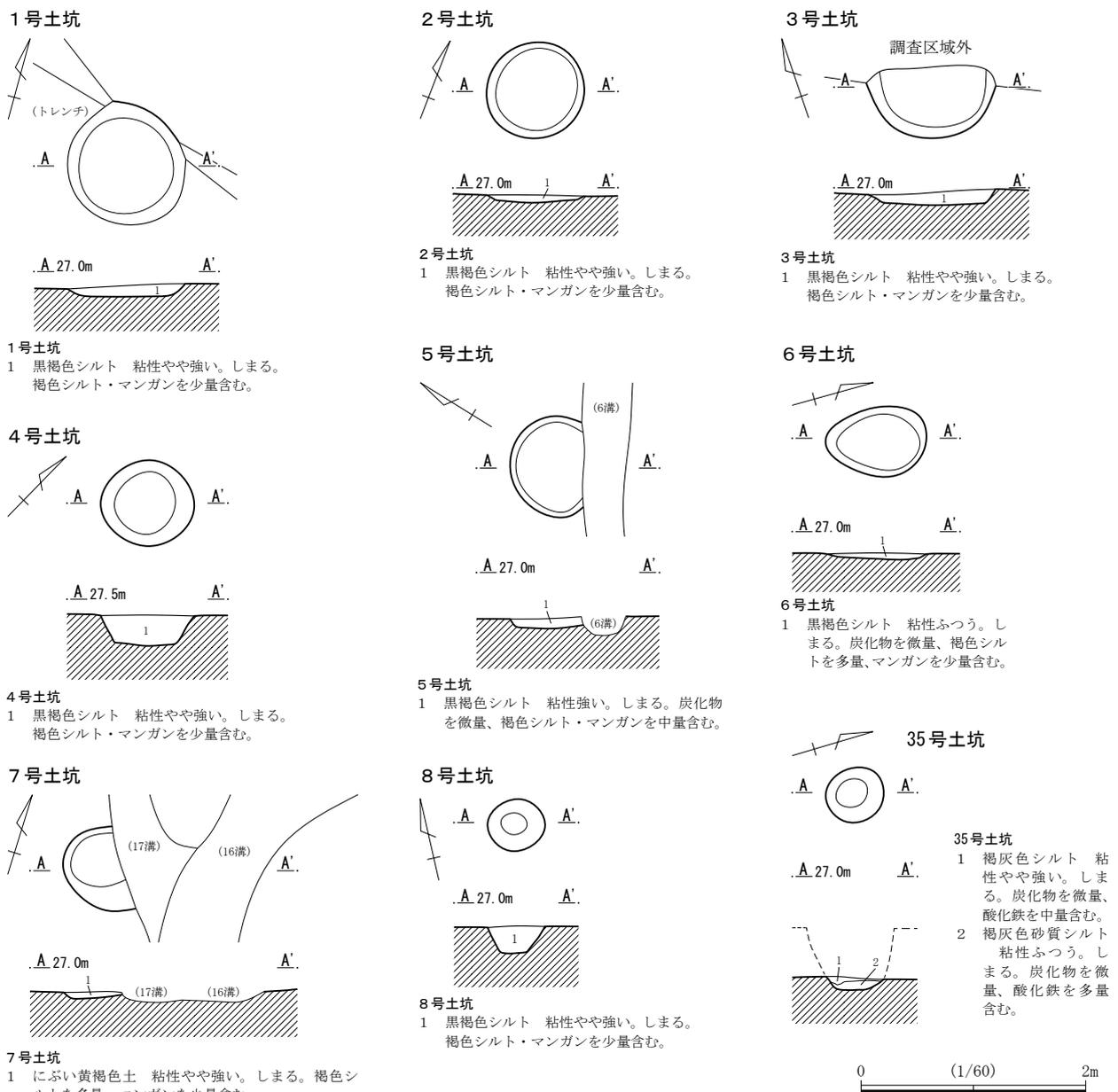
できなかった。

時期：出土遺物と周囲の状況から、平安時代と考えたい。

所見

切り合い関係からは、20号溝状遺構の底面でも本遺構の平面が確認されるはずであったが、少し掘り下げた位置での確認となった。

出土遺物の時期から、V層から切り込んだ遺構と考えられる。



第59図 1～8・35号土坑

第5節 道路状遺構

1. 奈良・平安時代

過去の調査区である2区-C2ではピット列として報告したが、本調査では、明確に「連結状土坑」の形態で確認されたので、道路状遺構として報告する。

また、2区-C2でも再検討した結果、道路状遺構と考えられる「連結状土坑」が存在した。

今回の調査では、奈良・平安時代の所産と考えられる4条の道路状遺構が確認された。

1号道路状遺構 (第60図 図版11)

位置：中央部北側。南西から北東方向に走る。北側は調査区域外に延びる。

重複：14・16号溝状遺構を切る。

形態：長楕円形の浅い土坑が連結した状態で連なり、一ヶ所は土坑が連結して「コ」の字状を呈する。断面形は波板状を呈する。遺構を形成する土坑の平面形は長楕円形、断面形は浅い鍋底状かU字形を呈する。

規模：長軸10.72m×短軸1.15m×深さ0.12m

長軸：N-42°-E

覆土：黒褐色砂質シルトを主体とする。B断面では下位に灰黄褐色砂質シルトが堆積する。

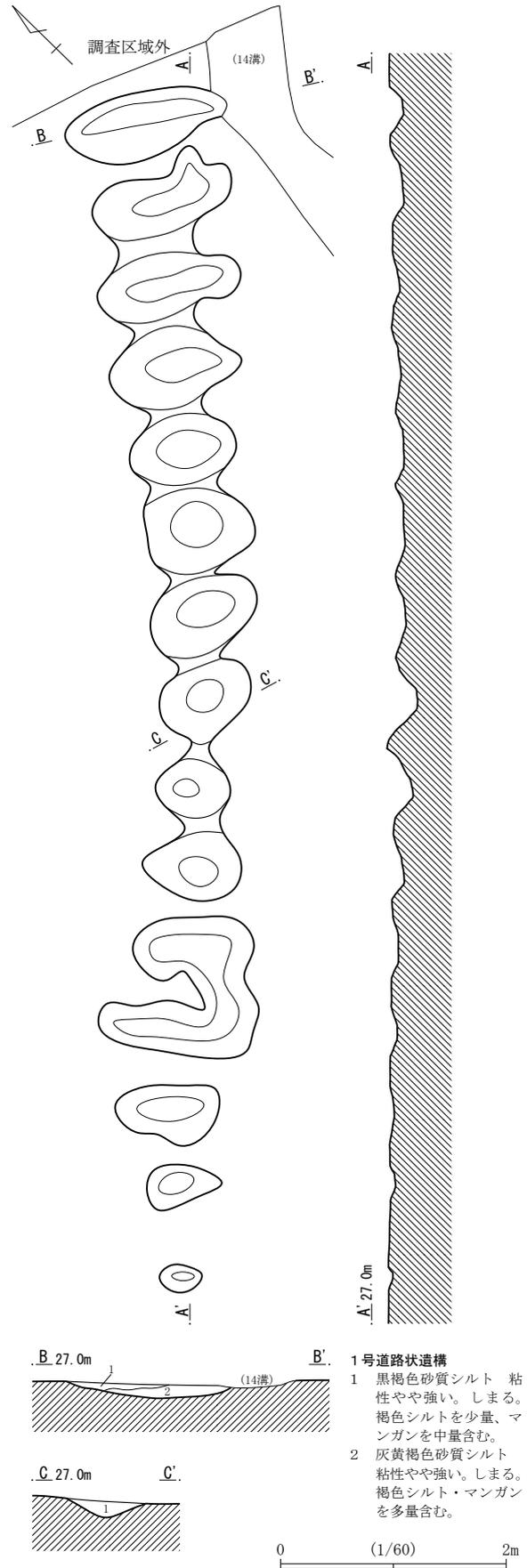
遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と周囲の状況より、奈良・平安時代と考えられる。

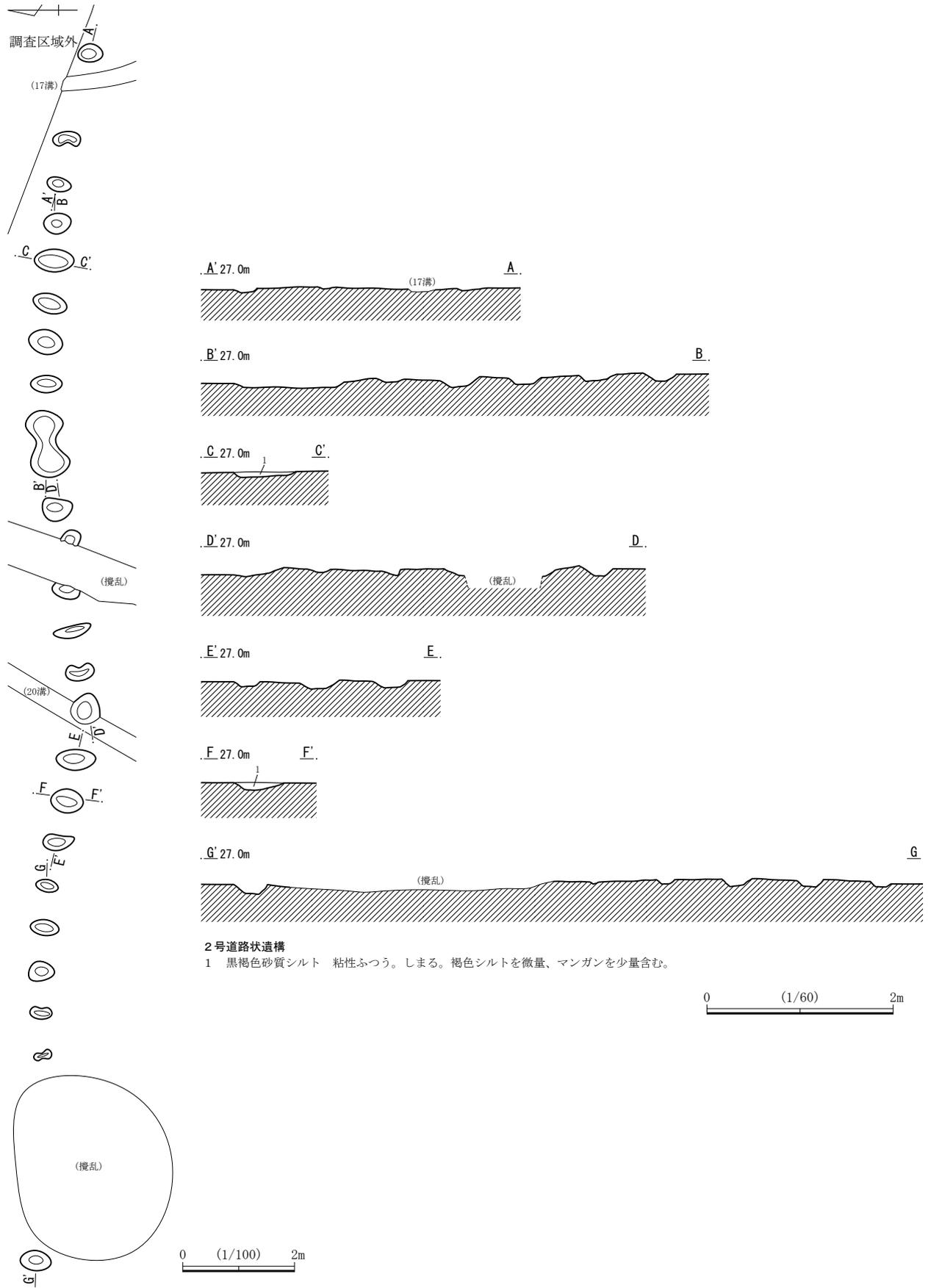
所見

上面を近世水田層(Ⅱb層)により削平を受けている可能性が考えられ、明確な硬化面は認められなかった。

また、2～4号道路状遺構とは、長軸方位が一致しないが、形態が類似することから道路状遺構と判断した。北東方向に延びる道路状遺構が複数



第60図 1号道路状遺構



第61図 2号道路状遺構

第5節 道路状遺構

存在していたと考えられる。

2号道路状遺構 (第61・62図 図版11)

位置：中央部北側。1号道路状遺構の西側に位置し、西から東方向に走る。東側は調査区域外に延びる。

重複：17・20号溝状遺構と交差する形で重複するが、新旧関係は不明である。

形態：遺構を形成する土坑の規模は長軸0.5～0.8mと、他の道路状遺構と比べると一回り小さい。間隔もやや距離があり連結した状態を示すのは一ヶ所だけであった。断面形は波板状を呈する。土坑の平面形は長楕円形、断面形は浅いU字形を呈する。

規模：長軸(22.16)m×短軸1.59m×深さ0.09m

長軸：N-85°-W

覆土：黒褐色砂質シルトの単層である。

遺物：須恵器長頸瓶が1点出土し、図示した。外面には自然釉が施されているが、内面は器面の摩滅が激しく、調整技法の識別が不可能であった。

時期：出土遺物と確認面、周囲の状況から奈良・平安時代と考えられる。

所見

上面を近世水田層(Ⅱb層)により削平を受け

ている可能性が考えられ、明確な硬化面は認められなかった。

土坑が連続する方向は一直線ではなく、緩いカーブを描いていた。

3号道路状遺構 (第63・64図 図版11)

位置：西部中央。4号道路状遺構と並行し、西から東方向に走る。西側は調査区域外に延びる。

重複：26号溝状遺構と交差する形で重複するが、新旧関係は不明である。

形態：長軸0.6～0.9mの土坑が連結した状態で連続するが、深さは0.13～0.3m前後で一定ではない。断面形は波板状を呈する。遺構を形成する土坑の平面形は長楕円形か円形、断面形は逆台形か浅いU字形を呈する。

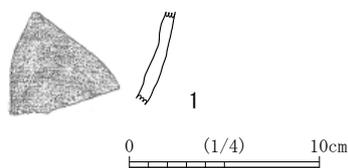
規模：長軸(3.39)m×短軸0.82m×深さ0.32m

長軸：N-75°-E

覆土：2層に分層される。色調と含有物は4号道路状遺構と近似する。

遺物：土師器台付甕、南比企産の須恵器坏が1点ずつ出土している。このうち土師器台付甕の脚部片を図示した。

時期：出土遺物と、周囲の状況から奈良・平安時代と考えられる。



第62図 2号道路状遺構出土遺物

第23表 2号道路状遺構出土土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値(cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	須恵器長頸瓶	覆土	口径：- 底径：- 器高：[5.0] 最大径：-	特徴：外面自然釉、器面摩滅 外面：ロクロナデ 内面：器面摩滅により判別不能	胎土：石、長、チャ、黒 焼成：良好 色調：灰白色 残存度：破片	東金子産

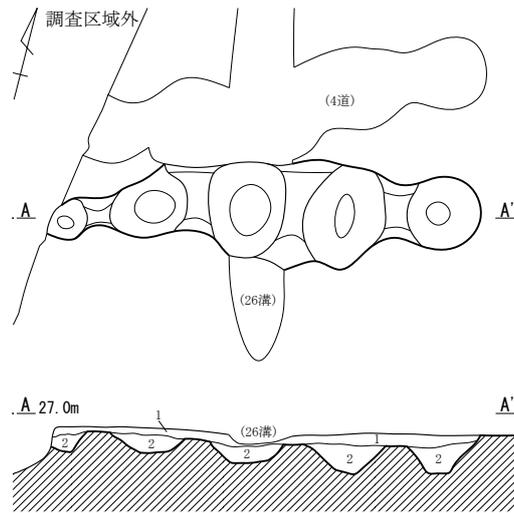
所見

上面を近世水田耕作土層(Ⅱb層)により削平を受けている可能性が考えられ、明確な硬化面は認められなかった。

1号道路状遺構とは遺構形態が、2号道路状遺

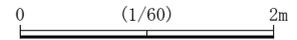
構とは長軸方位、遺構形態が近似する。

また、4号道路状遺構に近接し、遺構形態も類似するため、同時期に機能していたと考えられる。

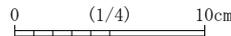


3号道路状遺構

- 1 黒褐色砂質シルト 粘性ふつう。しまる。褐色シルト・マンガンを少量含む。
- 2 灰黄褐色砂質シルト 粘性ふつう。しまる。褐灰色シルト・酸化鉄を中量含む。



第63図 3号道路状遺構



第64図 3号道路状遺構出土遺物

第24表 3号道路状遺構出土土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値 (cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	土師器 台付甕	覆土	口径： - 底径： - 器高： [2.0] 最大径： -	外面：ヘラナデ 内面：ケズリ	胎土：角、片、チャ 焼成：普通 色調：赤灰色 残存度：破片	武蔵型

4号道路状遺構 (第65図 図版11)

位置：西部中央。3号道路状遺構と並行し、西から東方向に走る。西側は調査区域外に延びる。

重複：26号溝状遺構と交差する形で重複するが、新旧関係は不明である。

形態：長軸は0.6～0.9mの土坑が連結した状態で連続するが、深さは0.13～0.3m前後で一定ではない。断面形は波板状を呈する。土坑の平面形は長楕円形か円形、断面形は浅いU字形を呈する。

規模：長軸(3.86)m×短軸0.81m×深さ0.31m

長軸：N-67°-E

覆土：2層に分層される。色調と含有物は3

号道路状遺構と近似する。

遺物：覆土中から礫が1点出土したが、明確な使用痕や加工痕は認められなかった。

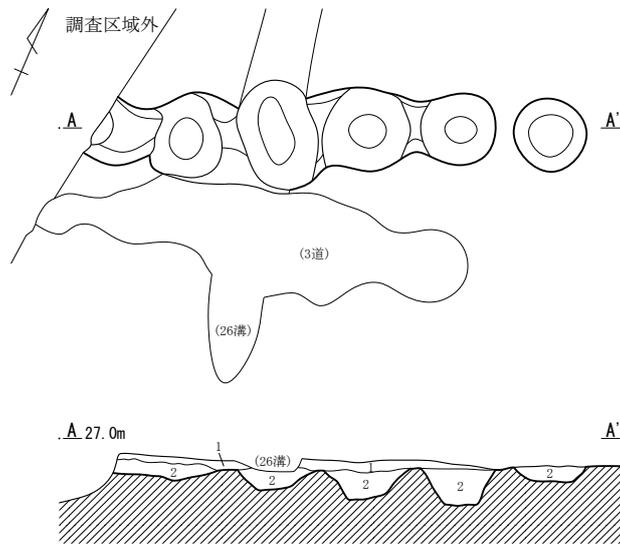
時期：周囲の状況から奈良・平安時代と考えられる。

所見

上面を近世水田耕作土層(Ⅱb層)により削平を受けている可能性が考えられ、明確な硬化面は認められなかった。

3号道路状遺構とは長軸方位、遺構形態が近似し並走する状況で確認され、同時期に機能していたと考えられる。

また、26号溝状遺構とは交差する位置関係にあり、関連性を有していたと思われる。



4号道路状遺構

- 1 黒褐色砂質シルト 粘性ふつう。しまる。褐色シルト・マンガンを少量含む。
- 2 灰黄褐色砂質シルト 粘性ふつう。しまる。礫(0.5～5cm大)・酸化鉄を中量含む。

0 (1/60) 2m

第65図 4号道路状遺構

第6節 溝状遺構

1. 古墳時代

検出された溝状遺構は5条である。

34号溝状遺構 (第66図 図版11)

位置：南東部。35号溝状遺構と並行し、南東から北西方向に延びると考えられる。北側と南側はいずれも調査区域外に延びる。

重複：なし。

形態：溝の上面は緩やかなカーブを描き、断面形は皿状を呈する。

規模：長軸(4.11)m×短軸0.59m×深さ0.05m

長軸：N-12°-W

覆土：灰黄褐色砂質シルトの単層である。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と周囲の状況より、古墳時代と考えられる。

35号溝状遺構 (第66図 図版12)

位置：南東部。34号溝状遺構とは並行し、南東から北西方向に延びると考えられる。北側と南側はいずれも調査区域外に延びる。

重複：8号ピットを切り、6・7号ピットに切られる。

形態：溝の上面は緩やかなカーブを描き、断面形は逆台形を呈する。北側で、テラス状に有段となるが、断面からは他の溝状遺構が重複した状況は認められなかった。

規模：長軸(14.34)m×短軸1.57m×深さ0.51m

長軸：N-26°-W

覆土：ほぼ水平に堆積し、4層に分層される。

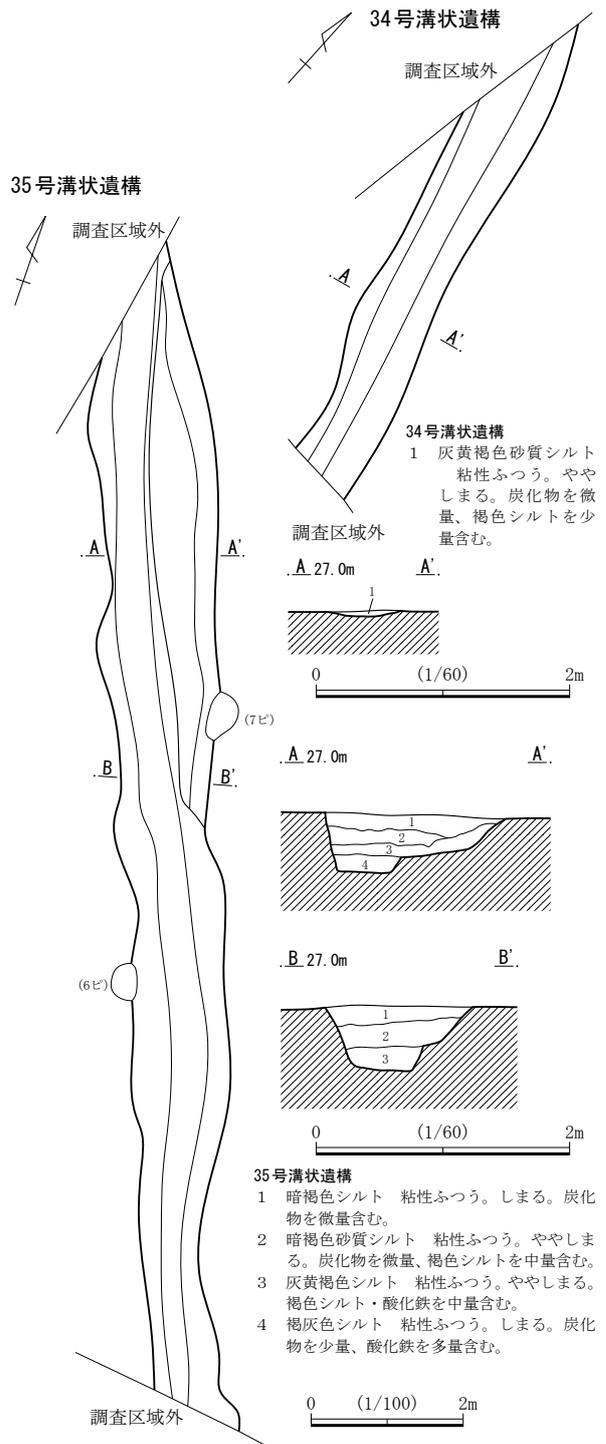
遺物：吉ヶ谷式土器甕が1点、土器甕が3点出土したが、小破片のため図示でき

なかった。

時期：出土遺物と周囲の状況より、古墳時代前期と考えられる。

所見

距離が開いているが、2区-C2の15号溝状遺構と合流すると考えられる。

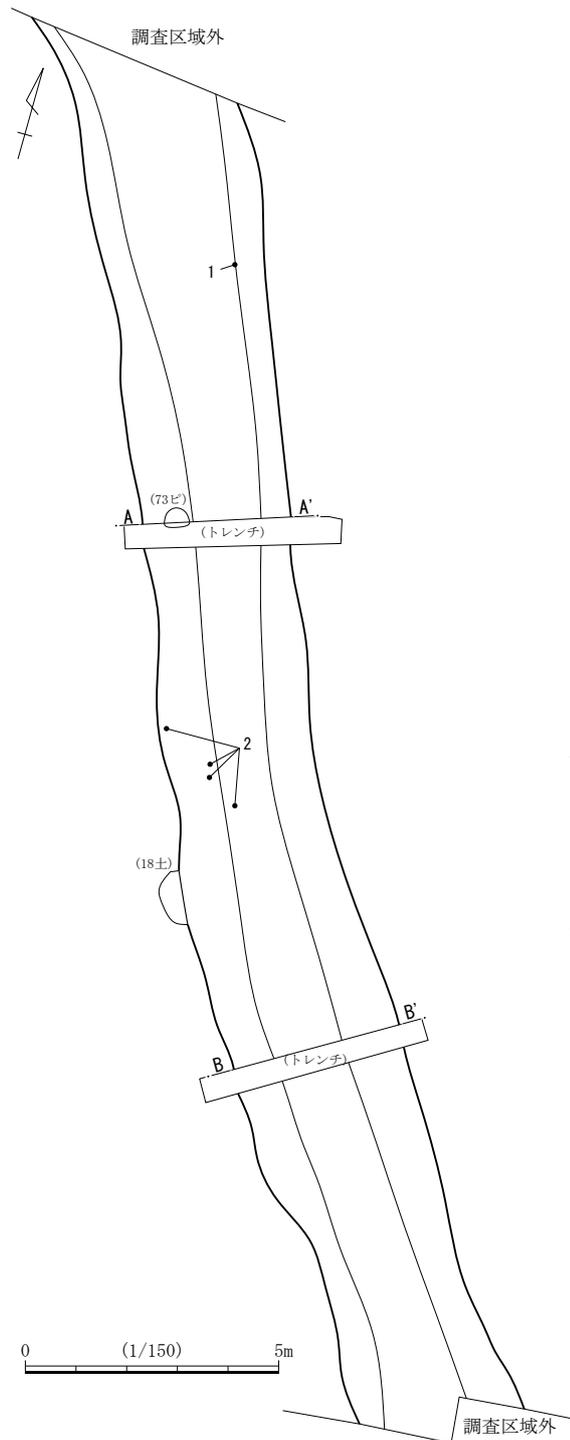


第66図 34・35号溝状遺構

36号溝状遺構 (第67・68図 図版12)

位置：中央部。南東から北西方向に延びると考えられる。北側と南側はいずれも調査区域外に延びる。

重複：18号土坑を切り、73号ピットに切られる。



第67図 36号溝状遺構

形態：6区-2で確認された溝状遺構の内、最も幅が広い。上面は部分的に緩いカーブを描き、断面形は皿状を呈する。

規模：長軸(27.97)m×短軸3.45m×深さ0.7m

長軸：N-27°-W

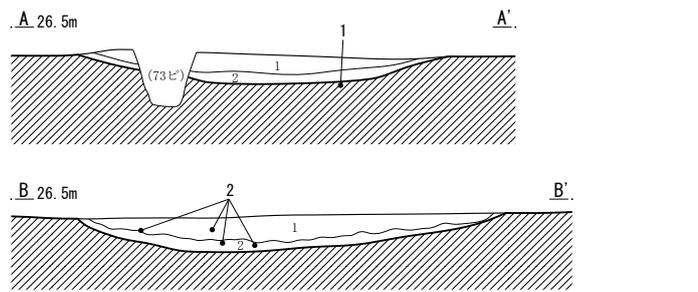
覆土：レンズ状に堆積し、2層に分層される。

遺物：2点を図示した。1は吉ヶ谷式土器甕である。器面に摩滅が激しいが、外面に縄文RLが認められる。2はハケメか残存する土師器甕である。胎土中に海綿骨針が確認されることから、在地の粘土を製作に用いたと考えられる。

時期：出土遺物と周囲の状況より、古墳時代前期と考えられる。

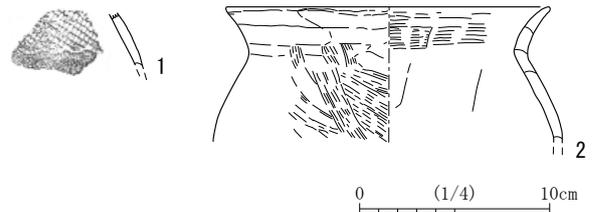
所見

時期と位置関係から2区-C2の25号溝状遺構と合流すると考えられる。区画溝である可能性が高いが、溝の東側では畝状遺構とピット群が存在するに留まる。



36号溝状遺構

- 1 暗褐色シルト 粘性ふつう。しまる。炭化物を少量含む。
- 2 灰黄褐色シルト 粘性強い。ややしまる。焼土を微量、炭化物・酸化鉄を少量含む。



第68図 36号溝状遺構出土遺物

第25表 36号溝状遺構出土土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値 (cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	吉ヶ谷甕	覆土	口径：- 底径：- 器高：[3.0] 最大径：-	特徴：全体摩滅 外面：頸部単節縄文RL横 内面：器面摩滅により判別不能	胎土：石、長、チャ 焼成：普通 色調：黒褐色 残存度：破片	
2	土師器甕	覆土	口径：(17.0) 底径：- 器高：[7.2] 最大径：-	外面：口縁部～頸部ヨコナデ、胴部ハケメ、ナデ 内面：口縁部～頸部ハケメ、ヨコナデ、胴部ナデ	胎土：針、角、片、チャ 焼成：普通 色調：黒褐色 残存度：口縁部10%	在地産

37号溝状遺構 (第69図 図版12)

位置：中央部南側。南西から北東方向に延びると考えられる。南側は調査区域外に延びる。

重複：1号掘立柱建物跡に切られる。

形態：溝の上面はほぼ直線であるが、途中はやや湾曲する。断面形は上部が広がる逆台形を呈する。

規模：長軸(10.16)m×短軸0.51m×深さ0.16m

長軸：N-46°-E

覆土：レンズ状に堆積し、2層に分層される。各層には炭化物が含まれる。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と周囲の状況より、古墳時代後期と考えられる。

38号溝状遺構 (第69図 図版12)

位置：西部南側。南東から北西方向に延びると考えられる。南側は調査区域外に延びる。

重複：なし。

形態：溝の上面は緩いカーブを描く部分があり、断面形は皿状を呈する。

規模：長軸(2.19)m×短軸0.47m×深さ0.05m

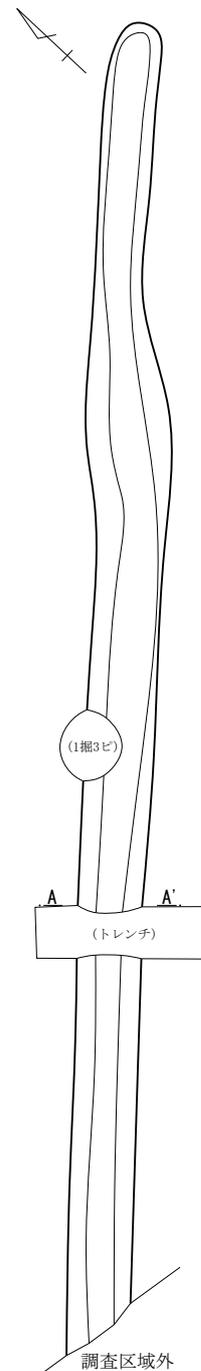
長軸：N-11°-W

覆土：灰黄褐色シルトの単層である。

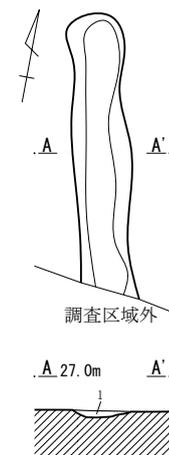
遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と周囲の状況より、古墳時代後期と考えたい。

37号溝状遺構



38号溝状遺構

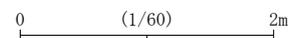


38号溝状遺構

1 灰黄褐色シルト 粘性ふつう。しまる。褐色シルトを少量含む。

37号溝状遺構

1 灰褐色シルト 粘性ややあり。ややしまる。炭化物を少量含む。
2 褐灰色シルト 粘性ふつう。ややしまる。炭化物を少量、灰色粘土ブロック(0.5～2cm大)を多量含む。



第69図 37・38号溝状遺構

2. 奈良・平安時代

検出された溝状遺構は25条である。

1号溝状遺構 (第70図 図版12)

位置：東部。南北方向に延びる。北側は2区-C2へ延び、南側は浅い攪乱により欠失する。

重複：2区-C2の46号溝状遺構と合流する。

形態：上面は緩いカーブを描くが、ほぼ直線的に延びる。断面形は浅い皿状を呈する。

規模：長軸(4.62)m×短軸0.65m×深さ0.04m

長軸：N-47°-E

覆土：灰黄褐色砂質シルトの単層である。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と46号溝状遺構(2区-C2)との関係より、奈良・平安時代と考えられる。

所見

西側に近接する2号溝状遺構とは覆土、規模、長軸方位が類似する。遺構形態から、耕作や流路に関する遺構と考えられる。

2号溝状遺構 (第71図 図版12)

位置：東部。南北方向に延びる。南側の大半が浅い攪乱により大半を欠失する。

重複：なし。

形態：上面は緩いカーブを描くが、直線部分が大半を占める。断面形は皿状を呈する。

規模：長軸(10.61)m×短軸0.68m×深さ0.02m

長軸：N-28°-E

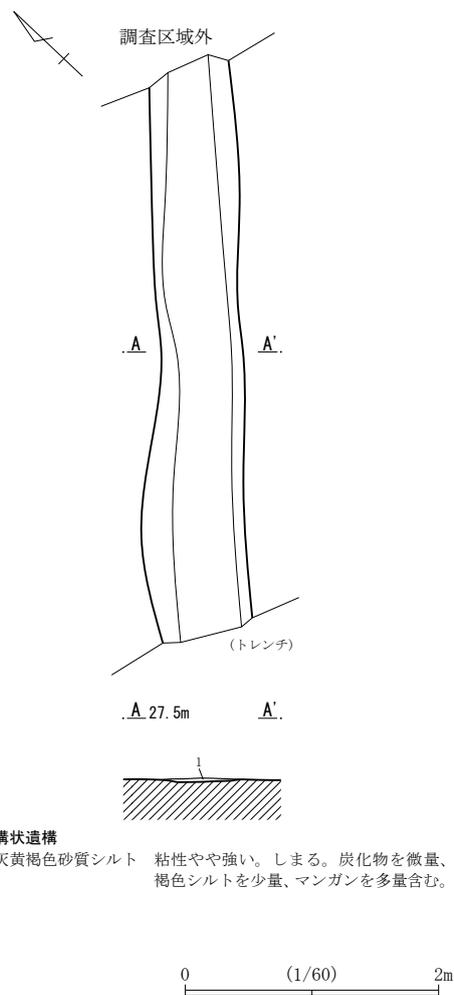
覆土：灰黄褐色砂質シルトの単層である。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と周囲の溝状遺構との共通性より、奈良・平安時代と考えられる。

所見

東側に近接する1号溝状遺構とは覆土、規模、



第70図 1号溝状遺構

長軸方位が類似する。遺構形態から、耕作や流路に関する遺構と考えられる。

3号溝状遺構 (第72図 図版12)

位置：東部。南西から北東方向に延びると考えられる。北側は2区-C2へ延びる。

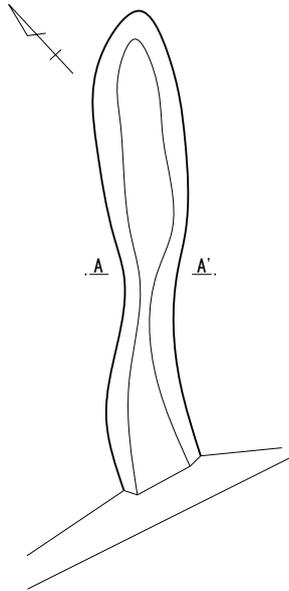
重複：なし。

形態：溝の上面は緩やかなカーブを描く部分もあるが、直線的に延びる。断面形は浅い皿状を呈する。

規模：長軸(7.72)m×短軸0.65m×深さ0.05m

長軸：N-50°-E

覆土：灰黄褐色砂質シルトの単層である。



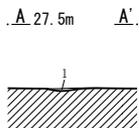
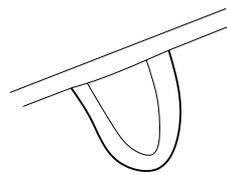
遺物：7世紀後半の所産と思われる土師器坏
1点が出土したが、小破片のため図示
できなかつた。

時期：確認面と周囲の溝状遺構との共通性よ
り、奈良・平安時代と考えられる。

所見

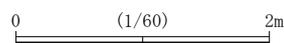
西側に近接する1・2号溝状遺構とは覆土、規
模、長軸方位が類似する。幅・平面形・断面形な
どの遺構形態が共通し、耕作や流路に関する遺
構と考えられる。

(トレンチ)

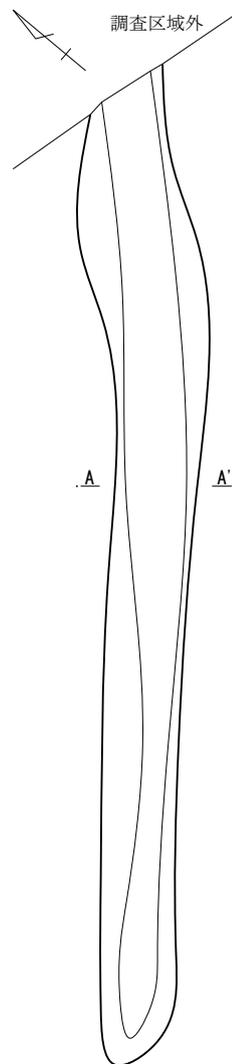


2号溝状遺構

1 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや強い。しまる。炭化物を微量、
褐色シルトを少量、マンガンを多量含む。

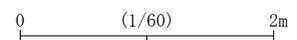
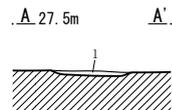


第71図 2号溝状遺構



3号溝状遺構

1 灰黄褐色砂質シルト 粘性
やや強い。しまる。炭化物
を微量、褐色シルトを少量、
マンガンを多量含む。



第72図 3号溝状遺構

4号溝状遺構 (第73図 図版12)

位置：中央部。南西から北東方向に延びる。
 北側は2区-C2に延び、中央部は浅い攪乱により部分的に欠失する。南側はクランク状に屈曲し、屈曲箇所から7号溝状遺構と重複するが、新旧関係は不明である(第77図)。

重複：2区-C2の49号溝状遺構と合流し、7号溝状遺構と重複する。

形態：北側は直線的に延びるが、南側ではクランク状に屈曲する。断面形は皿状を呈する。

規模：長軸(28.8)m×短軸1.05m×深さ0.36m
 長軸：N-52°-E
 覆土：黒褐色砂質シルトの単層である。

遺物：7世紀後半の所産とみられる土師器坏1点が出土したが、小破片のため図示できなかった。

時期：確認面と49号溝状遺構(2区-C2)との関係より、奈良・平安時代と考えられる。

所見

周囲の溝状遺構と覆土、規模、長軸方位が類似する。遺構形態から、耕作や流路などに関する遺構の可能性が高い。

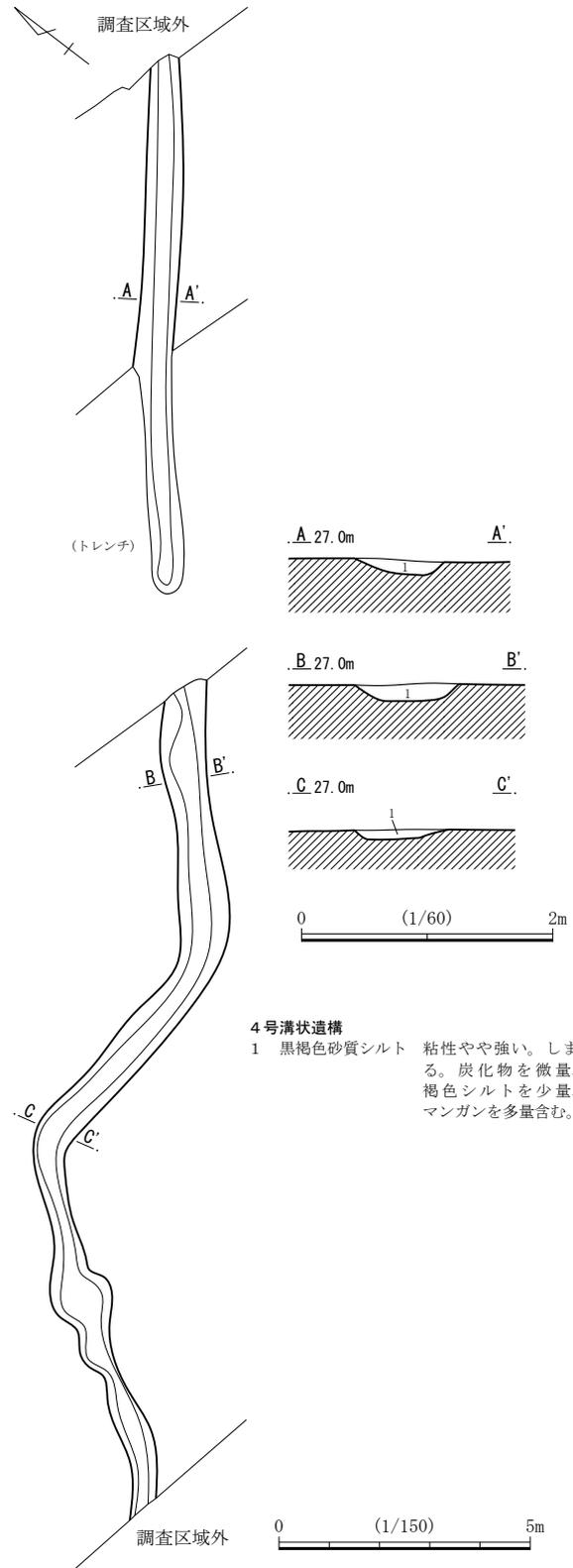
7号溝状遺構とは、覆土や断面形が類似するため、同時期に併存した可能性も考えられる。

5号溝状遺構 (第74図 図版12)

位置：中央部。南西から北東方向に延びる。
 北側は2区-C2に延び、南側は6号溝状遺構と重複するが、新旧関係は不明である。

重複：2区-C2の48号溝状遺構と合流し、6号溝状遺構と重複する。

形態：上面は僅かにカーブを描くが、ほぼ直



第73図 4号溝状遺構

線的に延びる。断面形は逆台形を呈し、一定の深さを保つ。

規模：長軸4.74m×短軸0.62m×深さ0.25m

長軸：N-72°-E

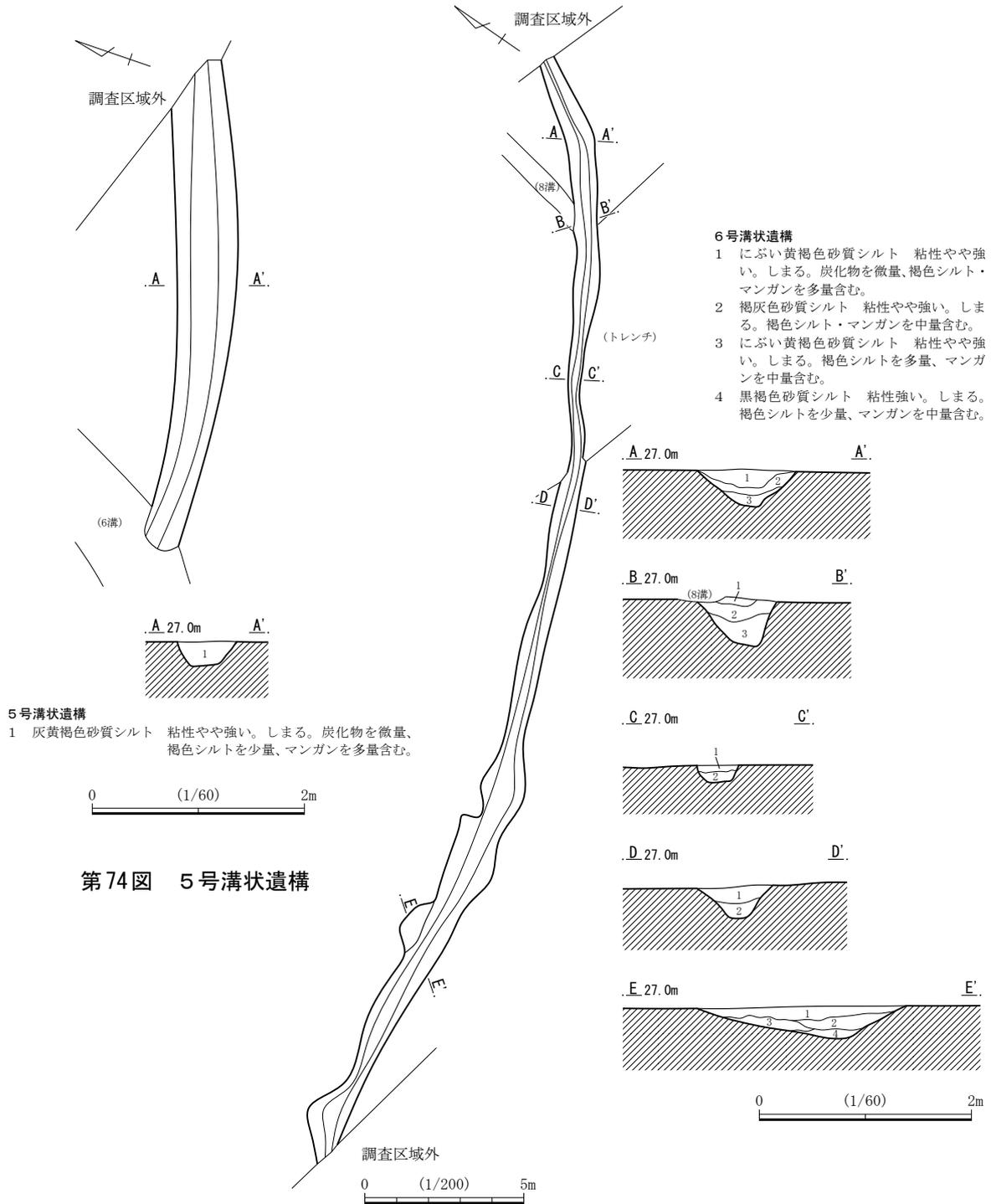
覆土：灰黄褐色砂質シルトの単層である。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と周囲の溝状遺構との関連性より、奈良・平安時代と考えられる。

所見

6号溝状遺構とは遺構形態が類似し、1～4号溝状遺構とは断面形、深さ、長軸方向など差異が認められる。



第74図 5号溝状遺構

第75図 6号溝状遺構

第6節 溝状遺構

6号溝状遺構(第75・76図 図版13)

位置：ほぼ中央部に位置する。

重複：2区-C2の47号溝状遺構と合流し、5号土坑を切る。8号溝状遺構と重複し、5・7・16号溝状遺構とも交差する形で重複するが、新旧関係は不明である。

形態：6区-2の中央部を南側から北東方向に延びる。上面・底面の幅は共に一定ではない。断面形は逆台形を呈し、一定の深さを保つ。

規模：長軸(35.4)m×短軸1.28m×深さ0.31m

長軸：N-67°-E

覆土：4層に分層される。E断面は最下層に粘性が強い黒褐色砂質シルトが堆積する。

遺物：3点を図示した。1・2は灰釉陶器坑

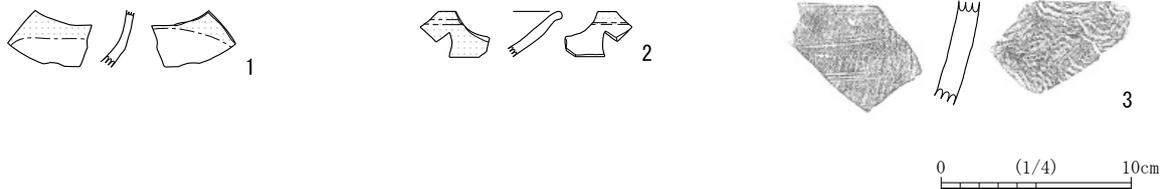
片である。胎土は灰白色の色調を示し、内外面に釉の漬け掛けを施している。3は須恵器甕である。器面に摩滅が認められるが、東金子産と考えられる。この他に、土師器甕の小破片が5点出土した。いずれも10世紀前半の所産とみられる。

時期：出土遺物と周囲の溝状遺構との関連性より、奈良・平安時代と考えられる。

所見

5号溝状遺構と同様に、1～4号溝状遺構とは長軸方位、断面形が異なる。

遺構形態と、47号溝状遺構(2区-C2)との関係より、遺構の性格としては水路の可能性が考えられる。



第76図 6号溝状遺構出土遺物

第26表 6号溝状遺構出土土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値(cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	灰釉陶器坑	覆土	口径：- 底径：- 器高：[3.0] 最大径：-	外面：漬け掛け 内面：漬け掛け	胎土：石、長、チャ 焼成：良好 色調：灰白色 残存度：破片	
2	灰釉陶器坑	覆土	口径：- 底径：- 器高：[2.4] 最大径：-	外面：ロクロナデ、漬け掛け 内面：ロクロナデ、漬け掛け	胎土：石、長、黒 焼成：良好 色調：灰白色 残存度：破片	
3	須恵器甕	覆土	口径：- 底径：- 器高：[5.5] 最大径：-	特徴：器面摩滅 外面：沈線、タタキ 内面：同心円当て具痕	胎土：石、長、片、チャ 焼成：普通 色調：灰白色 残存度：破片	東金子産

7号溝状遺構 (第77図 図版12)

位置：中央部。南から北方向に延びる。北側で6号溝状遺構と、中央で4号溝状遺構と重複するが、新旧関係は不明である。

重複：4・6号溝状遺構と重複する。

形態：平面形は緩いカーブを描き、断面形は皿状を呈する。

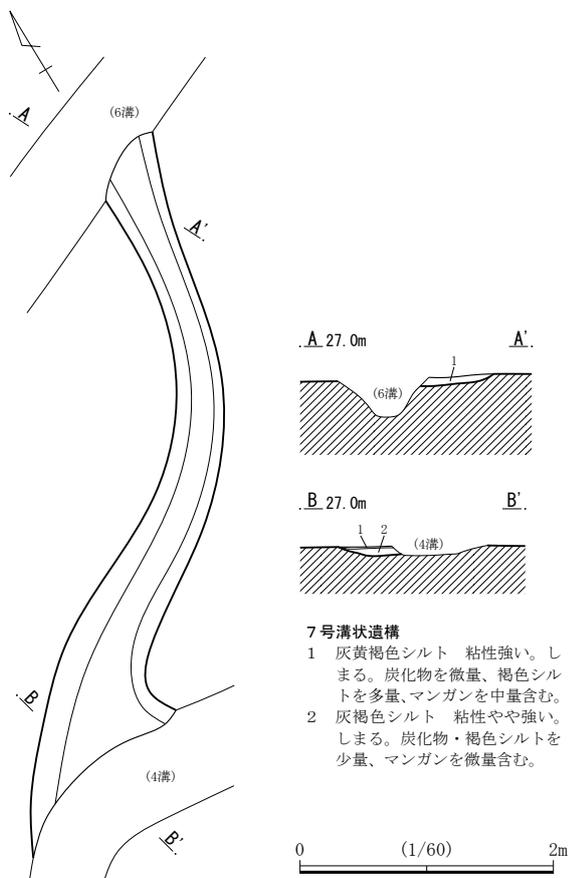
規模：長軸(5.47)m×短軸0.99m×深さ0.07m

長軸：N-39°-E

覆土：2層に分層される。各層に炭化物を含む。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面より、奈良・平安時代と考えられる。



第77図 7号溝状遺構

8号溝状遺構 (第78図 図版12)

位置：中央部北側。南から北方向に延びる。北側は2区-C2に延び、南側では6号溝状遺構と重複するが、新旧関係は不明である。

重複：6号溝状遺構と重複する。

形態：上面はほぼ直線的に延び、調査区域外に延びる。断面形は浅い皿状を呈する。

規模：長軸(5.02)m×短軸0.63m×深さ0.06m

長軸：N-13°-E

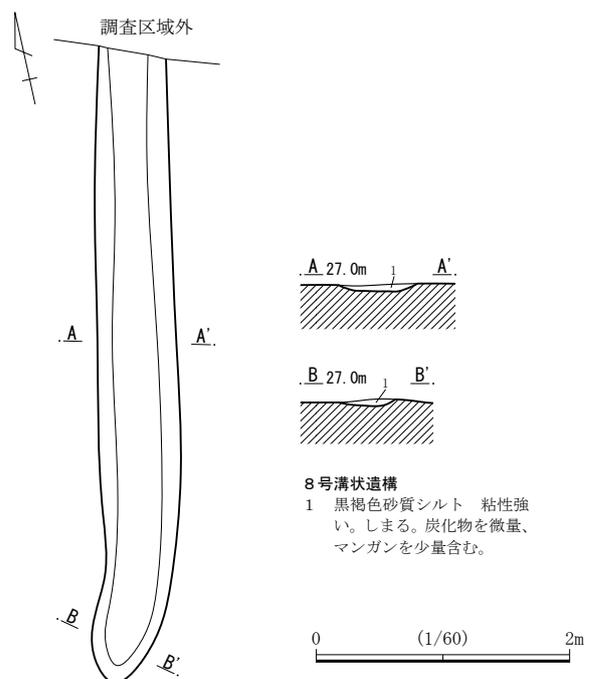
覆土：黒褐色砂質シルトの単層である。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と周囲の状況より、奈良・平安時代と考えられる。

所見

東側で確認された、1～4号溝状遺構と比べて長軸方向が西に振れるが、形態・規模が類似する。遺構形態から、耕作や流路などに関連する遺構の可能性が高い。



第78図 8号溝状遺構

9号溝状遺構 (第79図 図版13)

位置：中央部北側。南北方向に延びる。北側は2区-C2に延び、南側は浅い攪乱により欠失する。

重複：なし。

形態：上面はほぼ直線的に延び、断面形は皿状を呈する。

規模：長軸(6.45)m×短軸0.61m×深さ0.1m

長軸：N-9°-E

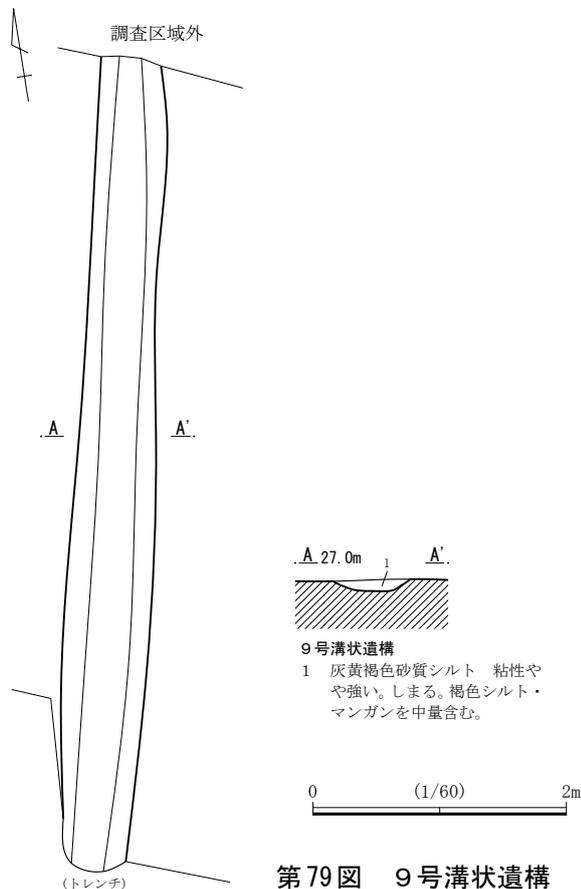
覆土：灰黄褐色砂質シルトの単層である。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と周囲の状況より、奈良・平安時代と考えられる。

所見

東側で確認された8号溝状遺構とはほぼ並走する位置関係にあり、形態や規模が類似する。遺構形態から、耕作地や流路などに関する遺構の可能性が高い。



10号溝状遺構 (第80図 図版13)

位置：中央部北側。南北方向に延びる。南側は浅い攪乱により欠失する。

重複：なし。

形態：上面は緩やかなカーブを描きながら北方向に延びる。断面形は皿状を呈する。

規模：長軸(5.05)m×短軸0.88m×深さ0.14m

長軸：N-5°-E

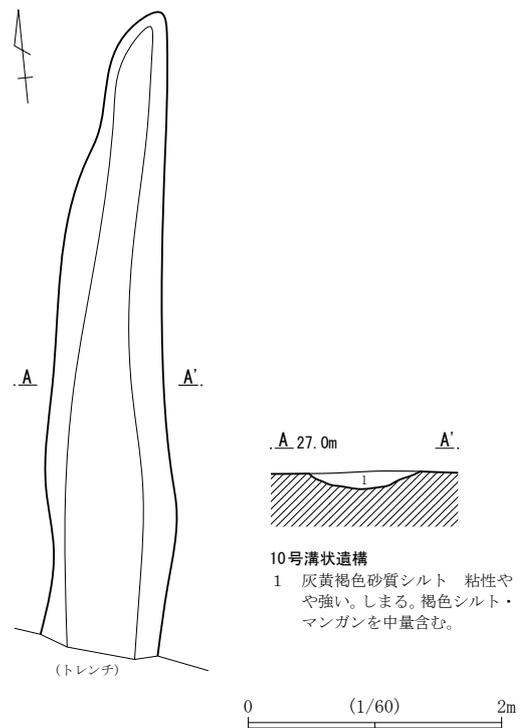
覆土：灰黄褐色砂質シルトの単層である。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と周囲の状況より、奈良・平安時代と考えられる。

所見

東側で確認された8・9号溝状遺構とはほぼ並走する位置関係にあり、形態や規模が類似する。遺構形態から、耕作地や流路などに関する遺構の可能性が高い。



第80図 10号溝状遺構

11号溝状遺構 (第81・82図 図版13)

位置：中央部北側。南北方向に延びる。北側は2区-C2に延びる。

重複：なし。

形態：断面形は逆台形を呈する。

規模：長軸(4.58)m×短軸0.4m×深さ0.07m

長軸：N-25°-E

覆土：灰黄褐色砂質シルトの単層である。

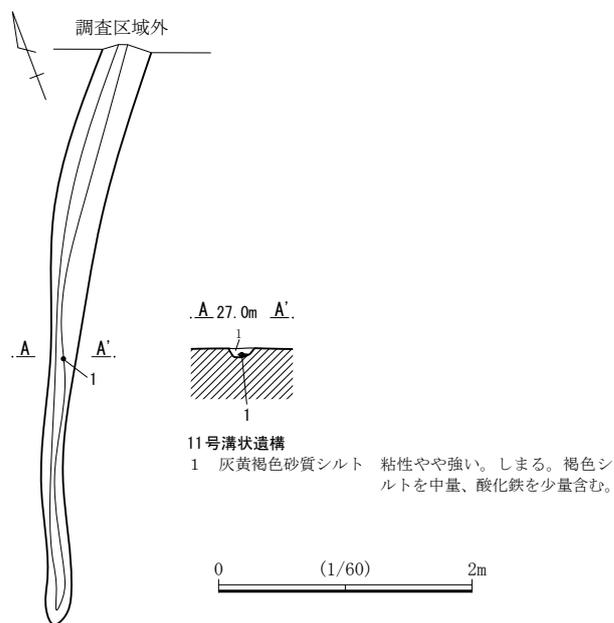
遺物：8世紀の所産と考えられる須恵器甕の胴部片が1点出土し、図示した。

外面は平行タタキ、内面は同心円当て具痕が認められる。また、胎土中に海綿骨針が含まれていることから、南比企産と考えられる。

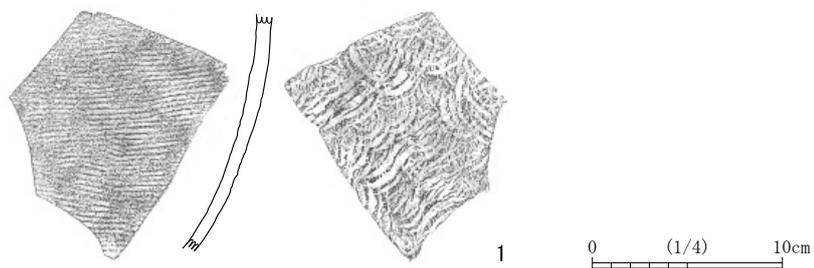
時期：出土遺物と周囲の状況より、奈良・平安時代と考えられる。

所見

東側で確認された8～12号溝状遺構とは長軸方向が異なるが、形態が類似する。



第81図 11号溝状遺構



第82図 11号溝状遺構出土遺物

第27表 11号溝状遺構出土土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値 (cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	須恵器甕	覆土	口径：- 底径：- 器高：[14.5] 最大径：-	外面：タタキ 内面：同心円当て具痕	胎土：針、石、長、チャ 焼成：普通 色調：青灰色 残存度：破片	南比企産

第6節 溝状遺構

12号溝状遺構 (第83図 図版13)

位置：中央部北側。南北方向に延びる。北側は2区-C2に延びる。

重複：2区-C2の66号溝状遺構と合流すると考えられる。

形態：平面形は緩いカーブを描きながら北方向に延び、南側端部は先細る。断面形は皿状を呈する。

規模：長軸(5.65)m×短軸0.49m×深さ0.07m
長軸：N-1°-E

覆土：灰黄褐色砂質シルトの単層である。

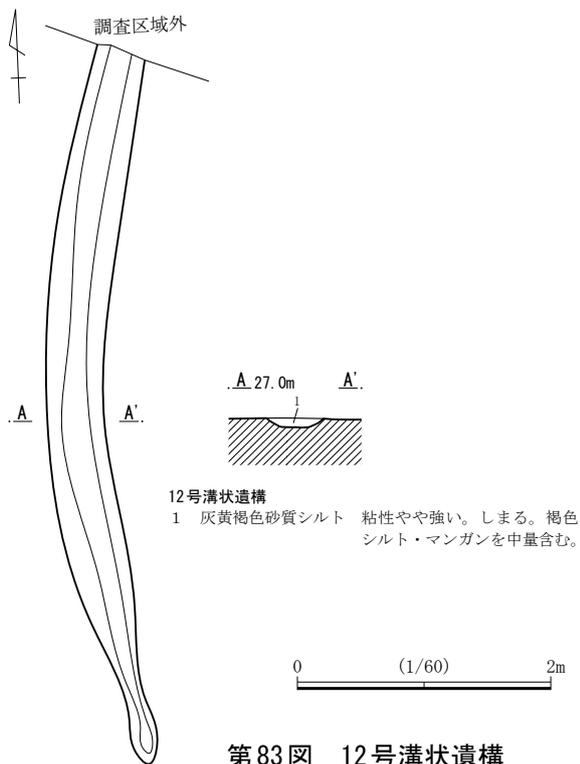
遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と周辺状況より、奈良・平安時代と考えられる。

所見

東側で確認された11号溝状遺構とは、南側先端部が先細くなり、溝が閉じる形状が類似し、覆土も同一である。

2区-C2の66号溝状遺構と合流した場合、北方向へ長く延び、流路に沿う形を呈する。



第83図 12号溝状遺構

13号溝状遺構 (第84図 図版13)

位置：中央部北側。南北方向に延びる。北側は2区-C2へ延びる。

重複：なし。

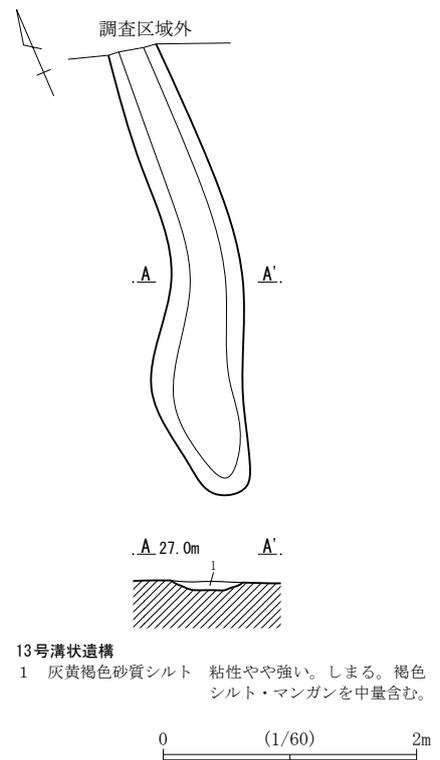
形態：平面形は緩く蛇行しながら北方向へ延びる。断面形は皿状を呈する。

規模：長軸(5.02)m×短軸0.75m×深さ0.07m
長軸：N-8°-E

覆土：灰黄褐色砂質シルトの単層である。

遺物：土師器甕と須恵器坏が出土したが、小破片のため図示できなかった。

時期：出土遺物と周囲の状況より、奈良・平安時代と考えられる。



第84図 13号溝状遺構

14号溝状遺構 (第85図 図版13)

位置：中央部北側。南北方向に延びる。北側は2区-C2へ延びる。

重複：1号道路状遺構に切られ、2区-C2の74号溝状遺構と合流すると考えられる。

形態：平面形は緩く蛇行し、南側の先端部は絞ったように閉じる。断面形は皿状を呈する。

規模：長軸(6.1)m×短軸0.71m×深さ0.06m

長軸：N-18°-E

覆土：灰黄褐色砂質シルトの単層である。

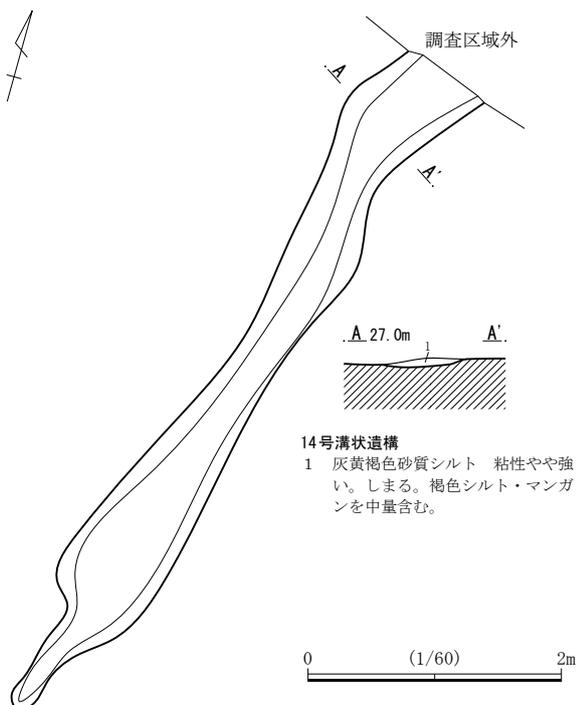
遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と周囲の状況より、奈良・平安時代と考えられる。

所見

東側で確認された12・13号溝状遺構とはほぼ並走する位置関係にあり、形態や規模などが近似する。

遺構形態から、耕作や流路などに関する遺構の可能性が考えられる。



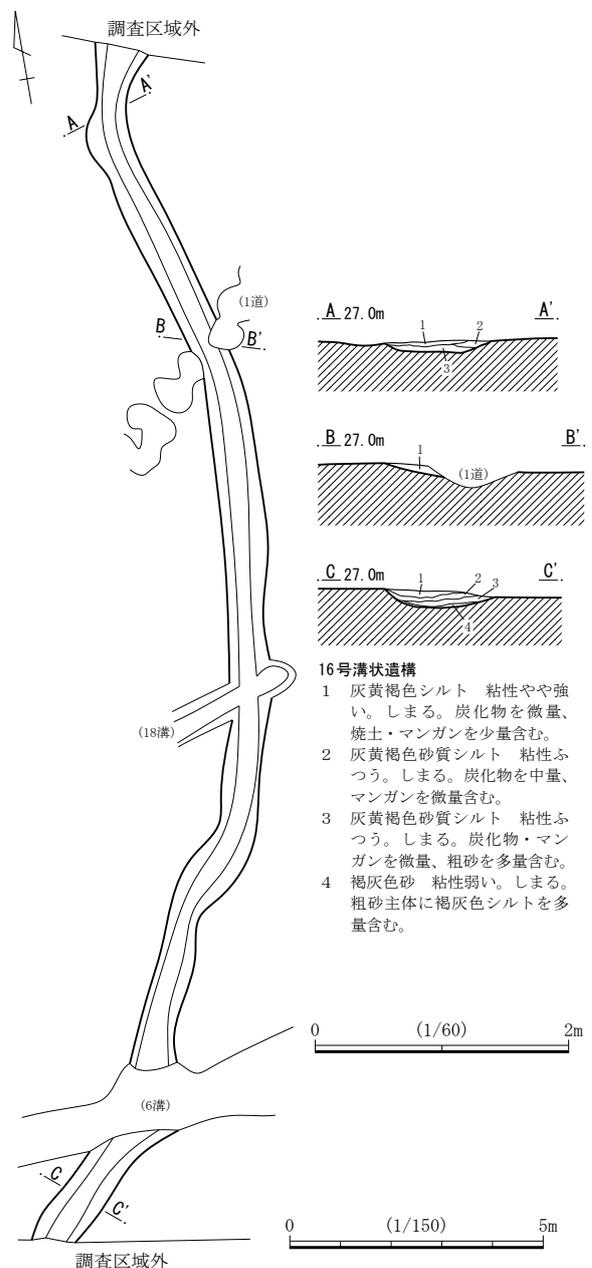
第85図 14号溝状遺構

16号溝状遺構 (第86図 図版13)

位置：中央部北側。南北方向に延びる。北側は2区-C2、南側は調査区域外になる。

重複：1号道路状遺構に切られ、6・17・18号溝状遺構と交差する形で重複するが、新旧関係は不明である。2区-C2の68号溝状遺構と合流すると考えられる。

形態：平面形は大きく蛇行し、断面は皿状を呈する。



第86図 16号溝状遺構

第6節 溝状遺構

規模：長軸(23.62)m×短軸0.89m×深さ0.13m

長軸：N-13°-E

覆土：4層に分層される。下層の3・4層は多量の粗砂を含む。

時期：確認面と68号溝状遺構(2区-C2)との関係、周囲の状況から、奈良・平安時代と考えられる。

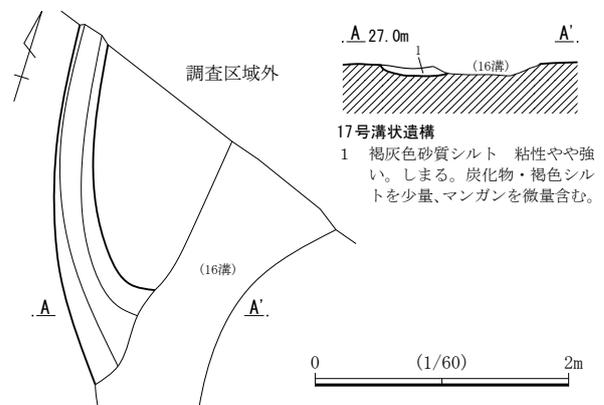
所見

2区-C2の68号溝状遺構に合流すると考えられ、68号溝状遺構の底面にも砂を含んだ土層が堆積していた。

溝の深さは0.13mと浅いため、水が流れていた水路とは言いきれないと考えられる。

を含む。

溝の深さから、16号溝状遺構と同じく、水路と断定できないと考えられる。



第87図 17号溝状遺構

17号溝状遺構(第87図 図版13)

位置：中央部北側。南東から北西方向に延びると考えられる。北側は2区-C2に延び、71号溝状遺構に合流すると考えられる。

重複：7号土坑を切る。2号道路状遺構、16号溝状遺構と交差する形で重複するが、新旧関係は不明である。

形態：16号溝状遺構からY字状に分岐し、断面形は浅い皿状を呈する。

規模：長軸(2.64)m×短軸0.51m×深さ0.08m

長軸：N-18°-W

覆土：少量の炭化物を含む褐灰色砂質シルトの単層である。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：71号溝状遺構(2区-C2)との関係、周囲の状況から、奈良・平安時代と考えられる。

所見

南端部が、16号溝状遺構から分岐する形で延びる。覆土は16号溝状遺構の4層と色調が類似するが、本遺構では砂質シルトが堆積し、炭化物

18号溝状遺構(第88図 図版13)

位置：中央部南側。南西から北東方向に延びると考えられる。南側は調査区域外になる。

重複：16号溝状遺構と交差する形で重複するが、新旧関係は不明である。

形態：平面形は緩やかな蛇行を行い、北端部で閉じている。断面形は皿状を呈する。

規模：長軸(20.08)m×短軸1.29m×深さ0.08m

長軸：N-66°-E

覆土：灰黄褐色砂質シルトの単層である。

遺物：遺物は出土しなかった。

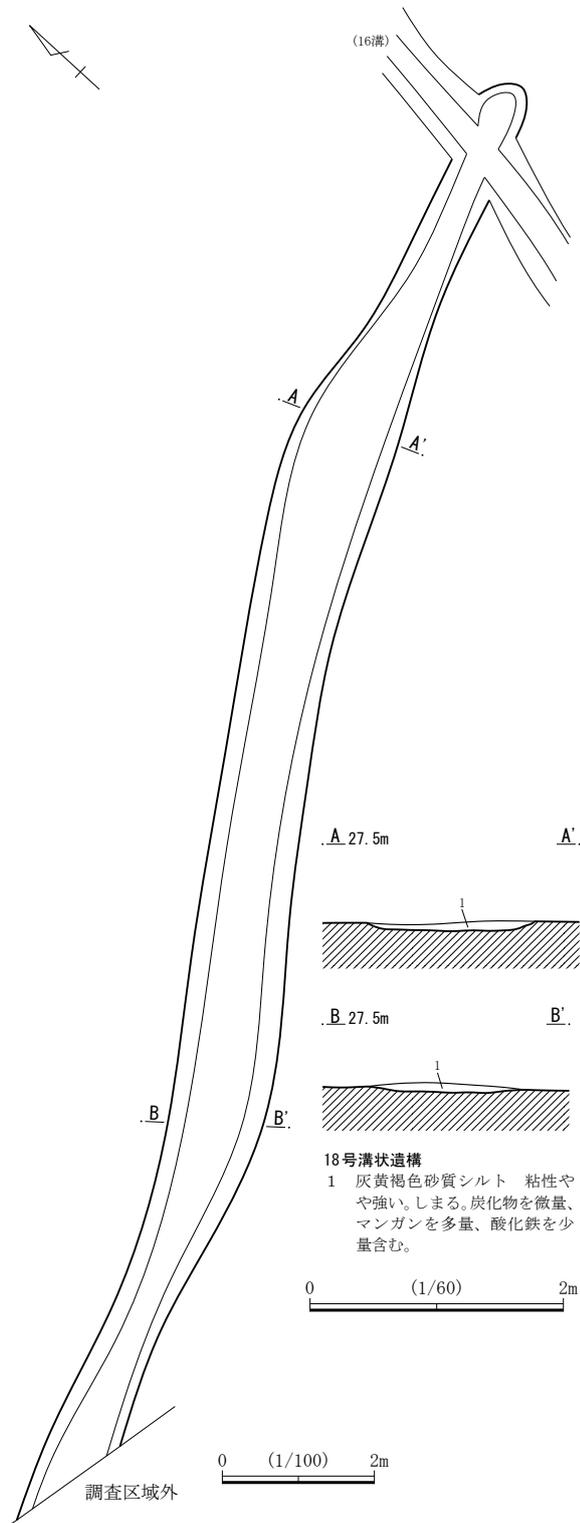
時期：確認面と周囲の状況から、奈良・平安時代と考えられる。

所見

東側で確認された溝状遺構とは長軸が異なり、東方向に傾いているが、形状や覆土は周囲の溝状遺構と類似している。

また、16号溝状遺構と交差しているが、18号溝状遺構の先端が僅かに突き出す程度であった。

溝の深さや断面形から水路とは考えられない遺構である。耕作地や流路などに関する遺構の可能性が考えられる。



第88図 18号溝状遺構

20号溝状遺構 (第89図 図版13)

位置：西部。南から北方向に走る。北側は調査区域外に延びる。

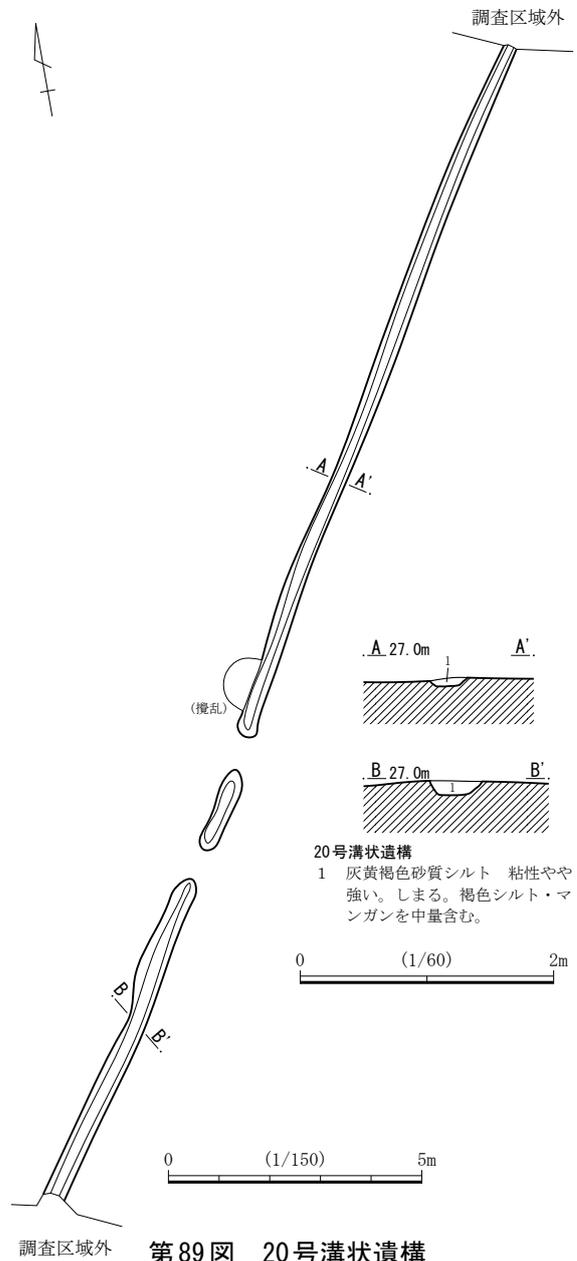
重複：21号溝状遺構と交差する形で重複するが、新旧関係は不明である。

形態：ほぼ直線的に延びており、途中で途切れて短い溝を挟んでいる。断面形は逆台形を呈する。

規模：長軸(24.61)m×短軸0.52m×深さ0.13m

長軸：N-31°-E

覆土：灰黄褐色砂質シルトの単層である。



第89図 20号溝状遺構

第6節 溝状遺構

遺物：ロクロ土師器が1点出土したが、小破片のため図示できなかった。

時期：出土遺物と周囲の状況から、奈良・平安時代と考えられる。

所見

溝の平面形は直線的に伸び、人為的に掘削されたことがうかがえる。覆土は周囲の溝状遺構と同質のものであり、溝が途中で途切れることから、水路ではないと考えられる。

21号溝状遺構 (第90図 図版13)

位置：西部南側。南西から北東方向に傾いている。

重複：20号溝状遺構と合流するように重複するが、新旧関係は不明である。

形態：断面形は側面が開く逆台形を呈する。

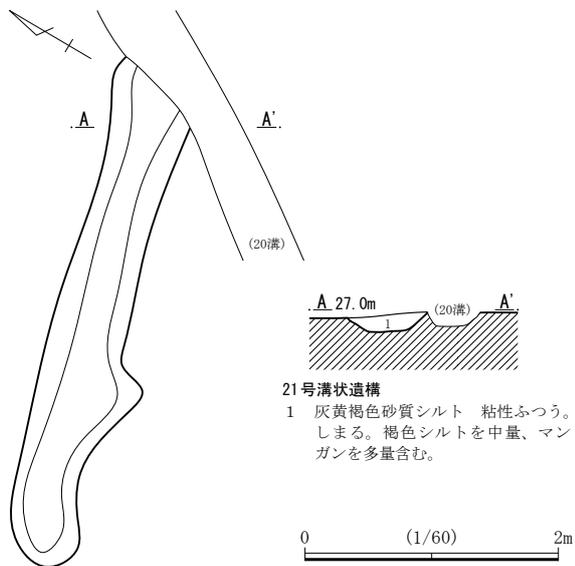
規模：長軸(4.11)m×短軸0.83m×深さ0.13m

長軸：N-84°-E

覆土：灰黄褐色砂質シルトの単層である。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と周囲の状況から、奈良・平安時代と考えられる。



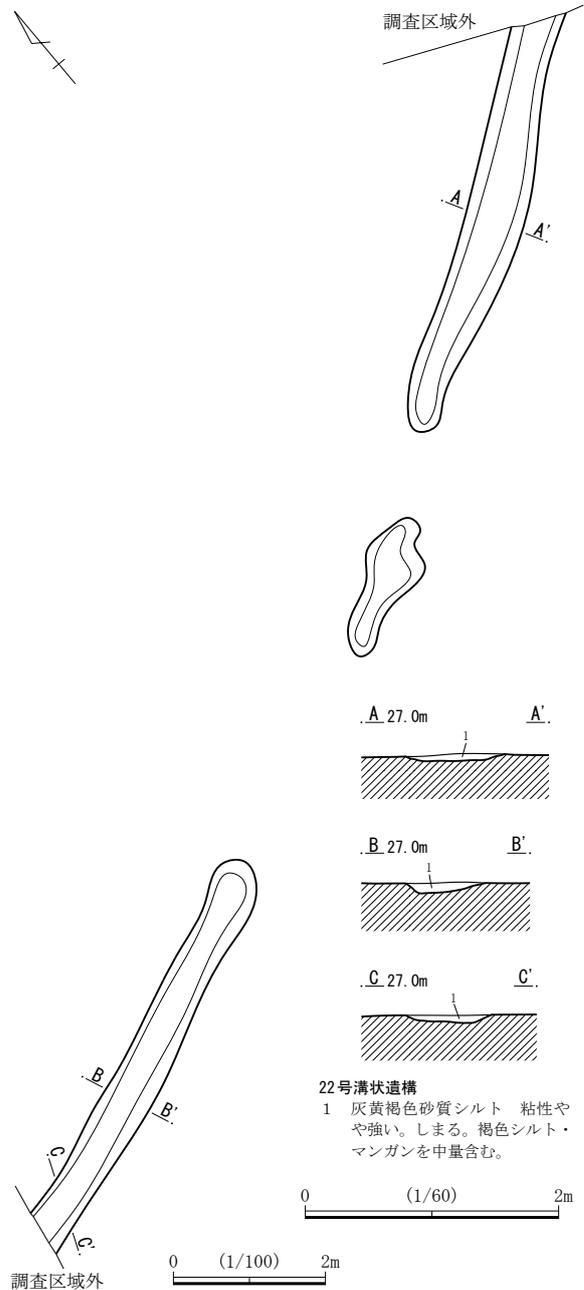
第90図 21号溝状遺構

22号溝状遺構 (第91図 図版13)

位置：北西部コーナー近く。南西から北東方向に走ると考えられる。北側、西側はともに調査区域外に伸び、中央部は削平を受けたと考えられ、途切れる。

重複：4号ピットに切られ、26号溝状遺構と重複するが、新旧関係は不明である。

形態：断面形は皿状を呈する。

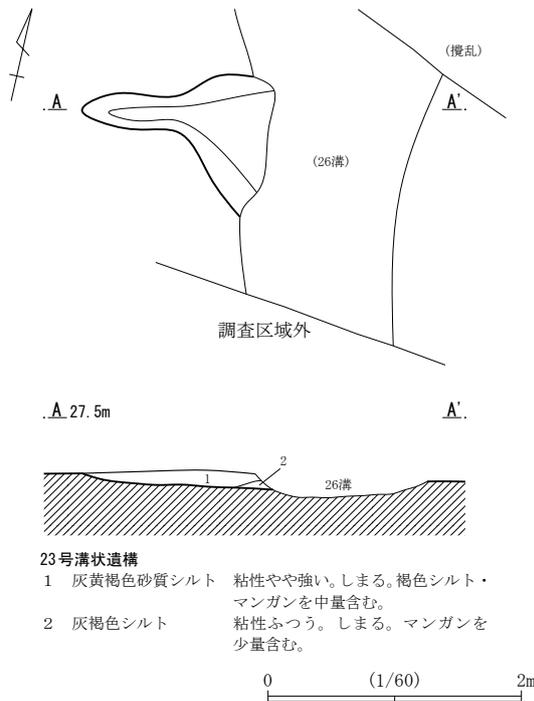


第91図 22号溝状遺構

規模：長軸(17.38)m×短軸0.66m×深さ0.08m
 長軸：N-61°-E
 覆土：灰黄褐色砂質シルトの単層である。
 遺物：遺物は出土しなかった。
 時期：確認面と周囲の状況から、奈良・平安時代と考えられる。

23号溝状遺構 (第92図 図版14)

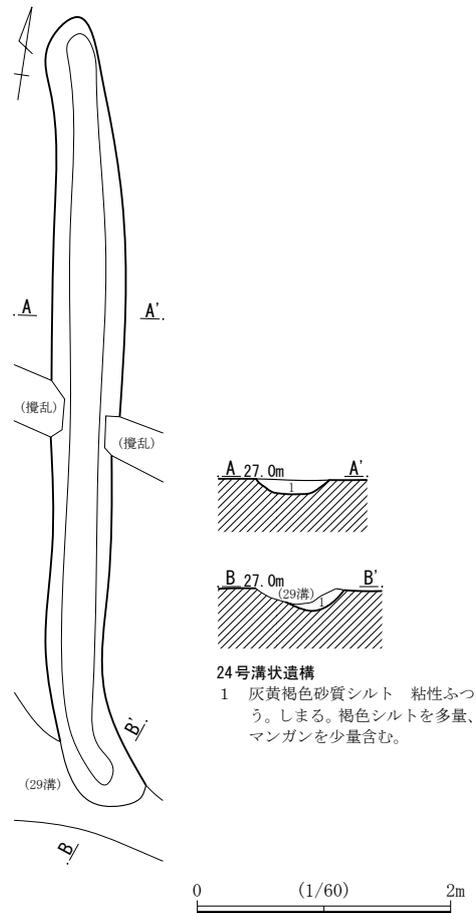
位置：南西部コーナー近く。26号溝から西方向に向いている。
 重複：26号溝状遺構と重複するが、新旧関係は不明である。
 形態：断面形は皿状を呈する。
 規模：長軸(1.5)m×短軸1.13m×深さ0.12m
 長軸：N-78°-E
 覆土：2層に分層される。
 遺物：10世紀前半の所産と考えられる土師器甕が1点出土したが、小破片のため図示できなかった。
 時期：出土遺物と周囲の状況から、奈良・平安時代と考えられる。



第92図 23号溝状遺構

24号溝状遺構 (第93図 図版14)

位置：南西部コーナー近く。中央部は浅い攪乱を受け、上面を部分的に欠失する。西側に隣接する26号溝状遺構と並行する。
 重複：29号溝状遺構と重複するが、新旧関係は不明である。
 形態：断面形は浅い逆台形を呈する。
 規模：長軸6.24m×短軸0.59m×深さ0.11m
 長軸：N-13°-W
 覆土：灰黄褐色砂質シルトの単層である。
 遺物：9世紀の所産と考えられる須恵器坏が1点出土したが、小破片のため図示できなかった。
 時期：出土遺物と周囲の状況から、奈良・平安時代と考えられる。



第93図 24号溝状遺構

26号溝状遺構 (第94図 図版14)

位置：西端部。南から北方向に走ると考える。北側と南側はいずれも調査区域外に延びる。中央部及び、南側は浅い攪乱を受け、欠失する。

重複：3・4号道路状遺構、22・23・29号溝状遺構と交差する形で重複するが、新旧関係は不明である。

形態：ほぼ直線的に南北に延びるが、途中で先端が先細るように途切れる。断面形状はA・C・D断面は皿状を呈し、B断面は逆台形を呈する。

規模：長軸(18.54)m×短軸1.58m×深さ0.17m

長軸：N-10°-W

覆土：2層に分層される。

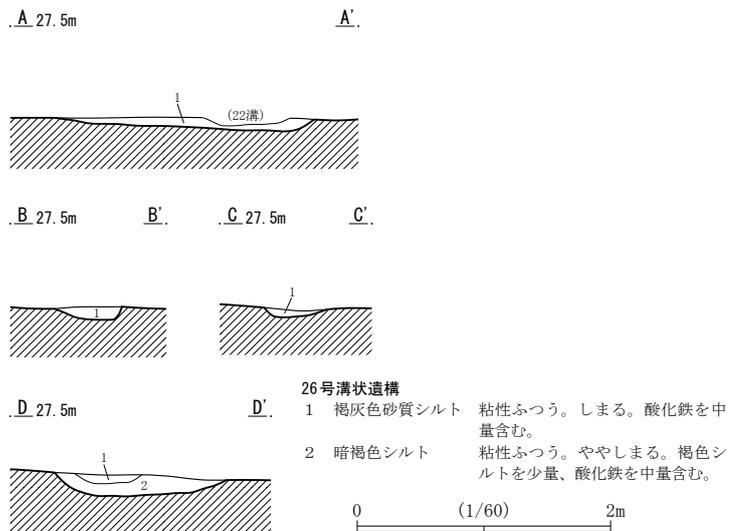
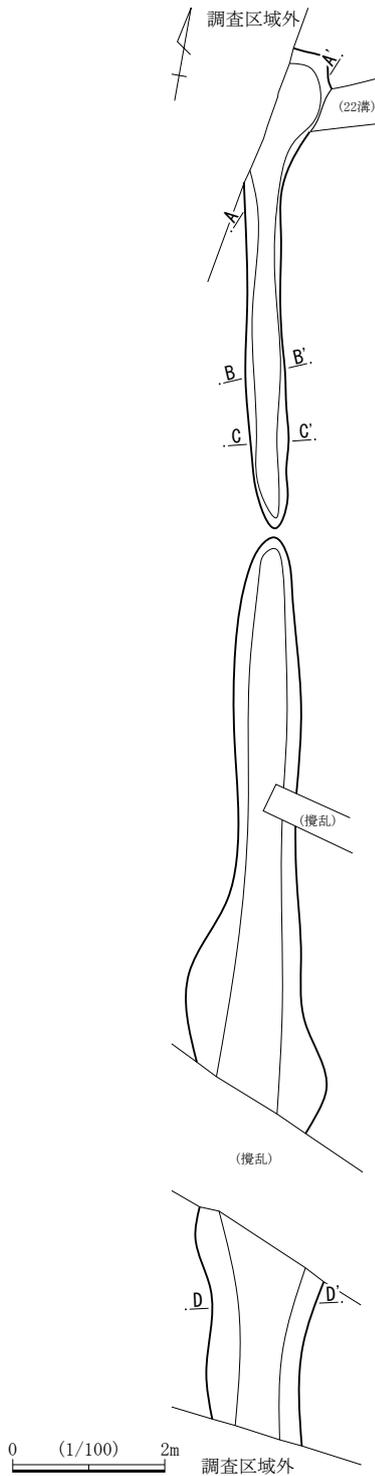
遺物：10世紀前半の所産と考えられる土師器甕が1点出土したが、小破片のため図示できなかった。

時期：出土遺物と周囲の状況から、奈良・平安時代と考えられる。

所見

溝の北側で22号溝状遺構と交差していたが、直ぐに調査区域外になるので、交差の状態が十字になるのか、T字になるのかは判別できなかったが、同時に並存していたと思われる。

短い26号溝状遺構から東西方向に分岐した23・29号溝状遺構、並行する24号溝状遺構も同時に並存していたと考えられる。



第94図 26号溝状遺構

28号溝状遺構 (第95図 図版14)

位置：北西部コーナー近く。南西から北東方向に走ると考えられる。西側は調査区域外に延びる。

重複：なし。

形態：断面形は浅い皿状を呈する。

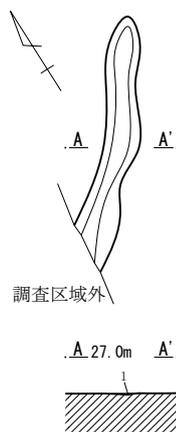
規模：長軸(2.04)m×短軸0.28m×深さ0.01m

長軸：N-37°-E

覆土：灰黄褐色砂質シルトの単層である。

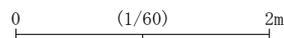
遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と周囲の状況から、奈良・平安時代と考えられる。



28号溝状遺構

1 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや強い。しまる。褐色シルトを中量含む。



第95図 28号溝状遺構

29号溝状遺構 (第96図 図版14)

位置：南西部コーナー近く。東西方向に走る。

重複：24・26号溝状遺構と重複するが、新旧関係は不明である。

形態：断面形はU字形を呈する。

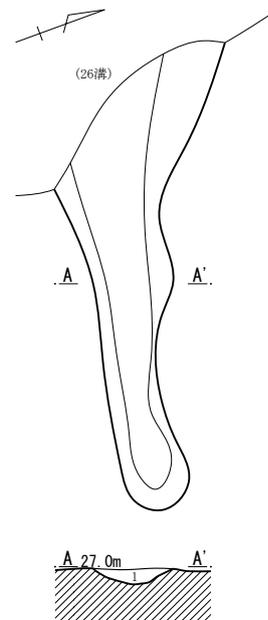
規模：長軸(3.61)m×短軸0.63m×深さ0.12m

長軸：N-69°-W

覆土：灰黄褐色砂質シルトの単層である。

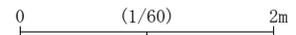
遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と周囲の状況から、奈良・平安時代と考えられる。



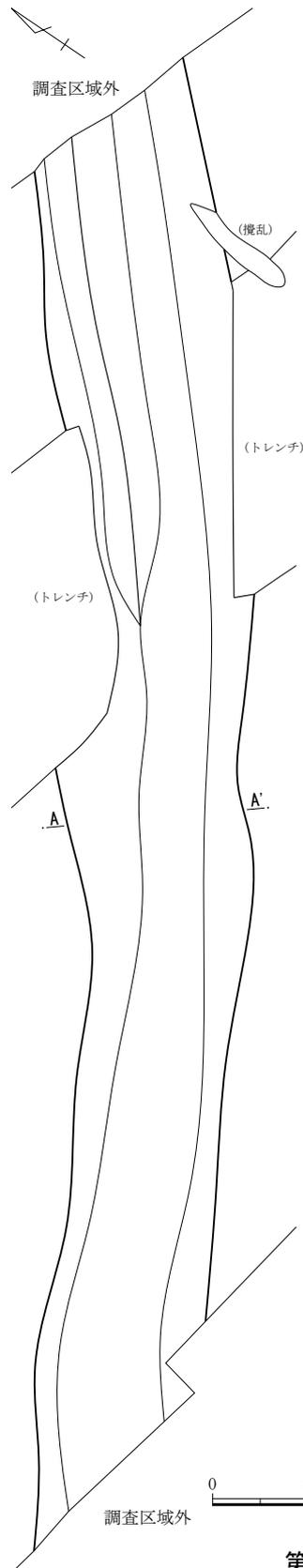
29号溝状遺構

1 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや強い。しまる。褐色シルトを中量、マンガンを多量含む。



第96図 29号溝状遺構

第7節 流路



1. 平安時代

検出された流路は2条であり、このうち、13号流路は第4章で記載した。

1号流路 (第97図 図版14)

位置：中央部。南から北方向へ延びる。北側は2区-C2に、南側は調査区域外に延びる。中央部は浅い攪乱を受け、上部を欠失する。

重複：なし。

形態：ほぼ直線的に延び、断面形は皿状を呈する。

規模：長軸(27.3)m×短軸3.4m×深さ0.69m

主軸：N-51°-E

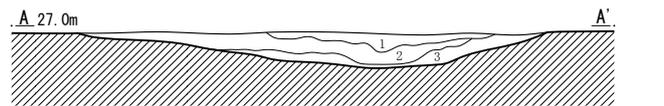
覆土：砂質シルトを主体とし、3層に分層される。

遺物：9世紀～10世紀代の所産と考えられる、須恵器坏、土師器坏・甕が出土したが、小破片のため図示できなかった。

時期：出土遺物と周辺状況より、平安時代と考えられる。

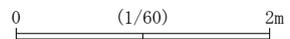
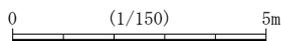
所見

2区-C2の1号溝状遺構と合流した後、6区-3の2号溝状遺構と合流し、調査区を南北に斜走すると考えられる。



1号流路

- | | |
|-------------|----------------------------|
| 1 黒褐色砂質シルト | 粘性ふつう。しまる。褐色シルト・マンガンを微量含む。 |
| 2 黒褐色砂質シルト | 粘性強い。しまる。炭化物・マンガンを微量含む。 |
| 3 灰黄褐色砂質シルト | 粘性強い。しまる。炭化物・マンガンを多量含む。 |



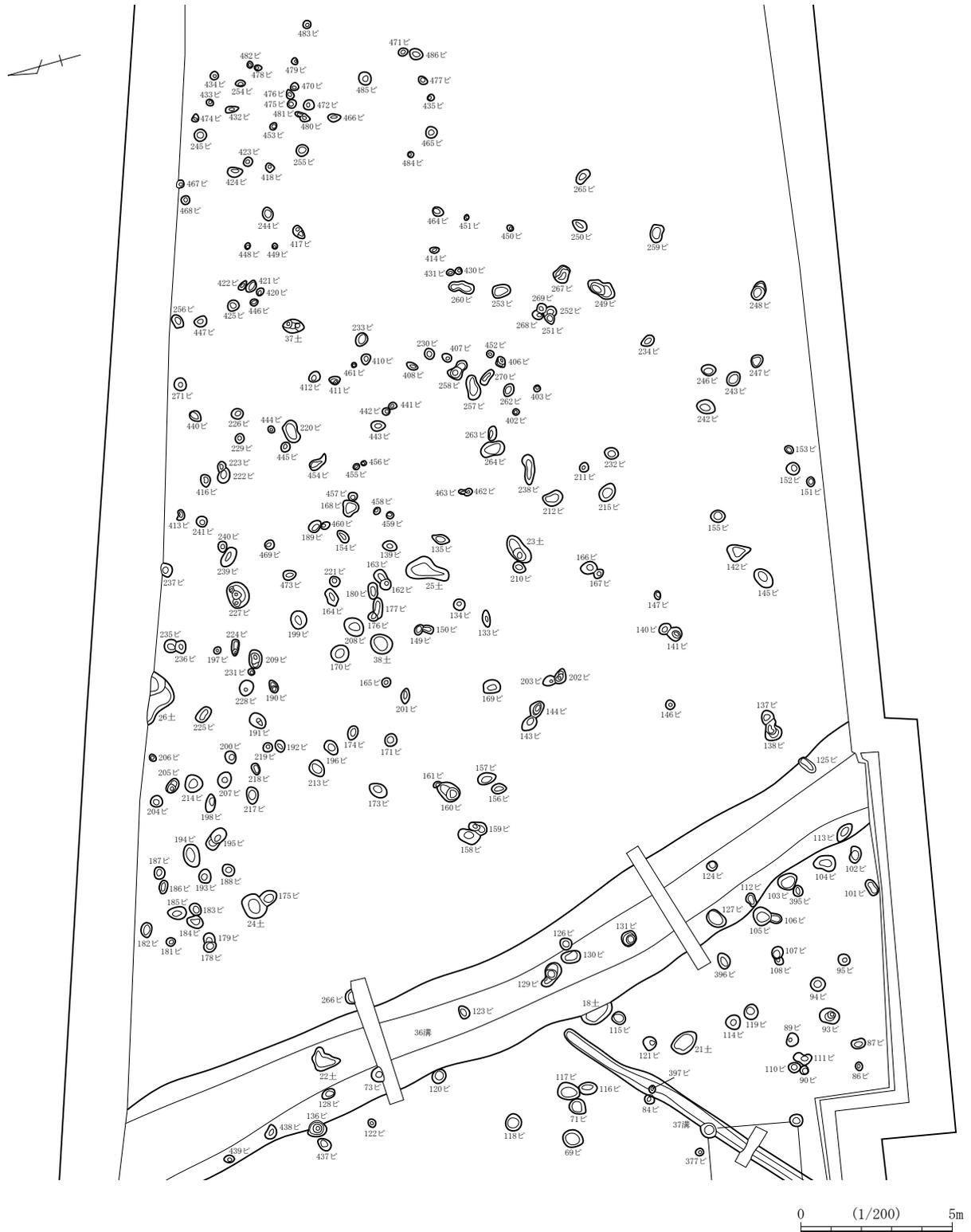
第97図 1号流路

第8節 ピット

1. 古墳時代 (第98・99図 図版14・15)

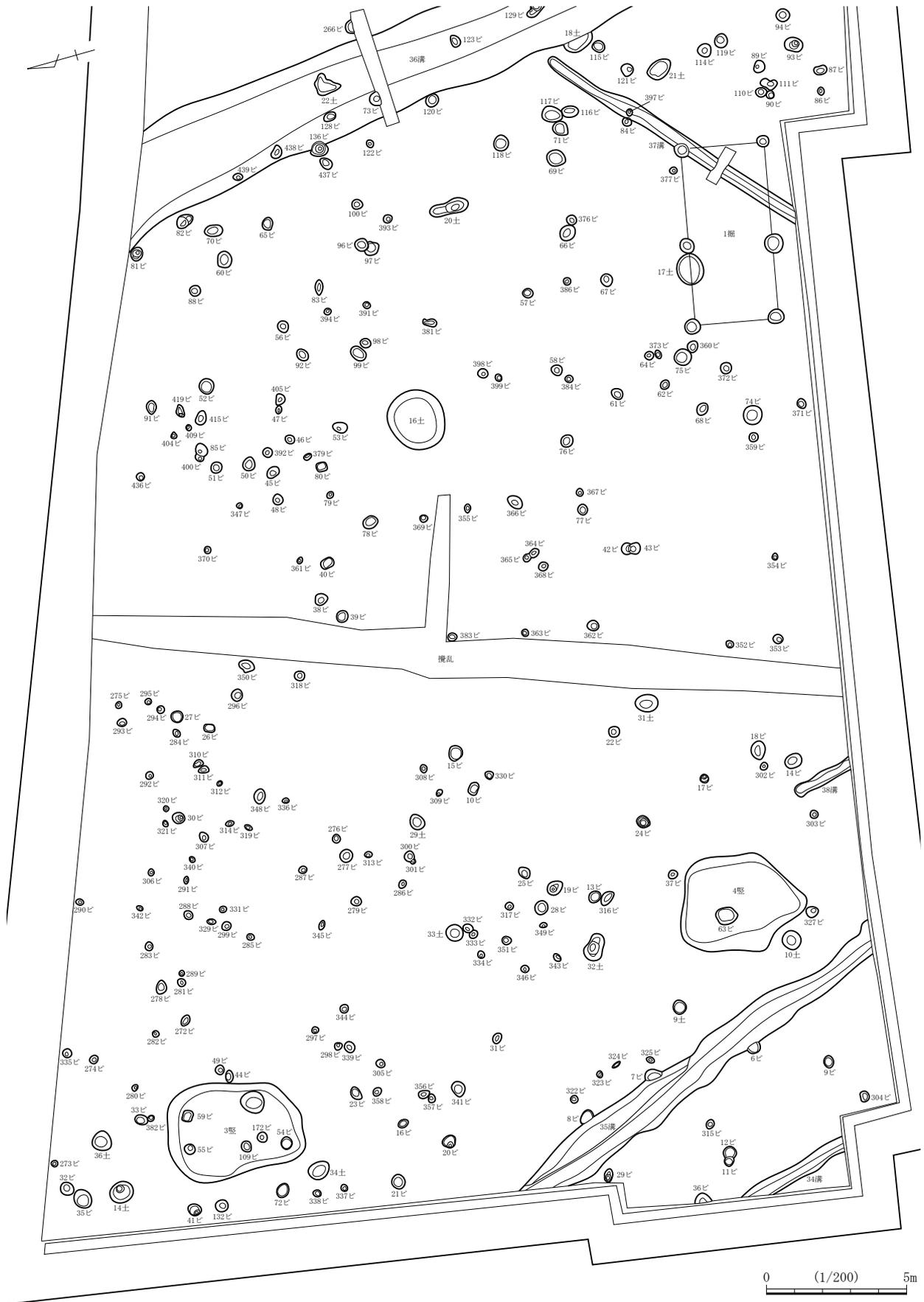
古墳時代に帰属するピットは、468基である。

本稿では一覧表にて掲載する。遺物は26号ピット、163号ピットから古墳時代の土師器甕が出土したが、小破片のため図示できなかった。



第98図 6区-2古墳時代ピット群-1

第8節 ピット



第99図 6区-2古墳時代ピット群-2

第28表 古墳時代ピット一覧表

番号	位置	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	覆土	重複	備考
6	南西部	円形	皿状	53	50	6	黒褐色シルト単層。炭化物・マンガン・酸化鉄含む。	> 35溝	
7	南西部	楕円形	逆台形	67	54	18	灰黄褐色シルト単層。マンガン含む。	> 35溝	
8	西部	(楕円形)	皿状	(52)	38	10	灰黄褐色シルト単層。マンガン・酸化鉄含む。	35溝>	
9	南西部	円形	逆台形	46	35	12	灰黄褐色シルト単層。マンガン・酸化鉄含む。		
10	西部	不整形	皿状	48	33	4	灰黄褐色シルト単層。マンガン含む。		
11	南西部	円形	U字形	38	36	7	灰黄褐色シルト単層。マンガン・酸化鉄含む。	> 12ピ	
12	南西部	(円形)	逆台形	(47)	35	14	暗褐色シルト単層。マンガン・酸化鉄含む。	11ピ>	
13	南西部	円形	U字形	42	42	8	暗褐色シルト単層。酸化鉄含む。		
14	南西部	楕円形	逆台形	62	50	16	暗褐色シルト単層。マンガン含む。		
15	西部	楕円形	皿状	54	48	5	灰黄褐色シルト単層。マンガン・酸化鉄含む。		
16	西部	楕円形	逆台形	37	30	13	褐灰色砂質粘土単層。マンガン・酸化鉄含む。		
17	南西部	円形	有段状	33	30	11	暗褐色シルト主体。上下2層。マンガン含む。		
18	南西部	楕円形	V字形	56	50	9	暗褐色シルト単層。		
19	西部	不整形	有段状	55	49	18	暗褐色シルト主体。上下2層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
20	西部	楕円形	有段状	47	47	27	褐灰色砂質粘土主体。ブロック状2層。酸化鉄含む。		柱穴痕か?
21	西部	円形	U字形	54	48	16	褐灰色砂質粘土単層。炭化物・酸化鉄含む。		
22	南西部	円形	逆台形	39	38	18	暗褐色シルト単層。マンガン・酸化鉄含む。		
23	西部	不整形	逆台形	46	35	18	褐灰色砂質粘土単層。酸化鉄含む。		
24	南西部	楕円形	有段状	50	43	15	暗褐色シルト主体。上下2層。褐灰色砂質粘土・酸化鉄含む。		
25	西部	楕円形	U字形	40	39	16	にぶい黄褐色シルト単層。		
26	北西部	楕円形	箱状	39	29	20	褐灰色砂質粘土主体。上下2層。酸化鉄含む。		土師器出土。
27	北西部	円形	箱状	43	42	24	褐灰色砂質粘土主体。上下3層。マンガン・酸化鉄含む。		
28	西部	円形	逆台形	50	46	21	黒褐色シルト主体。上下2層。褐灰色砂質粘土・酸化鉄含む。		
29	南西部	楕円形	逆台形	49	30	19	黒褐色シルト単層。酸化鉄含む。		
30	北西部	円形	有段状	45	40	34	褐灰色砂質粘土主体。上下4層。炭化物・酸化鉄含む。		
31	西部	楕円形	U字形	40	30	11	褐灰色砂質シルト単層。		
32	北西部	楕円形	逆台形	47	47	21	灰黄褐色砂質粘土単層。酸化鉄含む。		
33	北西部	円形	逆台形	38	34	6	褐灰色砂質粘土単層。酸化鉄含む。		
35	北西部	円形	逆台形	64	64	18	褐灰色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
36	南西部	(円形)	逆台形	63	(16)	18	灰黄褐色シルト単層。酸化鉄含む。		西側は調査区域外に延びる。
37	南西部	円形	逆台形	32	31	8	灰黄褐色砂質シルト単層。		
38	北西部	不整形	逆台形	44	42	22	褐灰色砂質粘土単層。酸化鉄含む。		
39	西部	円形	逆台形	44	41	20	褐灰色砂質粘土主体。上下2層。酸化鉄含む。		
40	北西部	不整形	U字形	46	40	13	褐灰色砂質粘土単層。酸化鉄含む。		
41	北西部	楕円形	逆台形	50	42	12	褐灰色砂質粘土単層。黄褐色シルト・酸化鉄含む。		
42	南西部	円形	有段状	42	36	14	灰黄褐色シルト単層。褐灰色砂質粘土・酸化鉄含む。	42ピ>	
43	南西部	(円形)	逆台形	(42)	42	25	灰黄褐色シルト単層。褐灰色砂質粘土含む。	> 43ピ	
44	北西部	楕円形	U字形	44	27	10	褐灰色砂質粘土単層。酸化鉄含む。		
45	北西部	楕円形	逆台形	50	35	22	褐灰色砂質シルト単層。		
46	北西部	円形	逆台形	35	32	14	暗褐色シルト単層。		
47	北西部	楕円形	U字形	28	22	15	褐灰色砂質シルト単層。		
48	北西部	円形	逆台形	38	36	23	暗褐色シルト単層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
49	北西部	逆台形	逆台形	34	32	18	褐灰色砂質粘土単層。酸化鉄含む。		
50	北西部	楕円形	逆台形	50	44	17	灰黄褐色シルト単層。褐色シルト含む。		
51	北西部	円形	逆台形	40	38	20	灰黄褐色シルト単層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
52	北西部	円形	逆台形	56	52	20	黒褐色シルト主体。上下2層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
53	西部	楕円形	U字形	52	37	22	褐灰色砂質シルト単層。マンガン・酸化鉄含む。		
54	北西部	楕円形	箱状	40	36	28	褐灰色砂質粘土主体。上下3層。焼土・炭化物・酸化鉄含む。		
55	北西部	円形	U字形	38	38	26	褐灰色砂質シルト単層。		
56	北西部	円形	逆台形	44	38	18	褐灰色砂質シルト単層。褐色シルト・酸化鉄含む。		

第8節 ピット

番号	位置	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	覆土	重複	備考
57	西部	楕円形	逆台形	38	34	15	暗褐色シルト単層。		
58	西部	円形	逆台形	39	38	20	褐灰色砂質シルト単層。		
59	北西部	不整形	U字形	50	38	14	褐灰色砂質粘土単層。酸化鉄含む。		
60	北部	円形	逆台形	60	50	16	褐灰色砂質シルト単層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
61	南西部	楕円形	逆台形	42	38	16	灰黄褐色シルト単層。		
62	南西部	円形	逆台形	32	32	12	暗褐色シルト単層。褐灰色砂質粘土含む。		
63	南西部	不整形	逆台形	72	61	11	灰黄褐色砂質シルト単層。焼土・褐灰色砂質粘土含む。		
64	南西部	楕円形	逆台形	33	32	18	暗褐色シルト単層。褐色シルト含む。		
65	北部	楕円形	U字形	46	38	12	灰黄褐色砂質シルト単層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
66	中央部	円形	逆台形	60	53	10	暗褐色シルト単層。褐灰色砂質粘土含む。		
67	南西部	円形	逆台形	46	42	38	暗褐色シルト単層。褐灰色砂質粘土・マンガン含む。		
68	南西部	円形	逆台形	40	40	19	暗褐色シルト単層。褐色シルト含む。		
69	中央部	楕円形	逆台形	66	58	14	褐灰色砂質シルト主体。上下2層。炭化物・褐色シルト含む。		
70	北部	楕円形	U字形	65	40	18	暗褐色シルト単層。酸化鉄含む。		
71	中央部	不整形	逆台形	53	50	14	褐灰色砂質シルト単層。焼土・炭化物・酸化鉄含む。		
72	北西部	楕円形	逆台形	48	44	10	黒褐色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
73	中央部	不整形	逆台形	50	40	44	褐灰色砂質粘土主体。ブロック状3層。酸化鉄含む。	> 36 溝	
74	南西部	円形	U字形	68	67	18	暗褐色シルト主体。上下2層。褐色シルト含む。		
75	南西部	円形	U字形	61	60	18	灰黄褐色シルト単層。酸化鉄含む。		
76	西部	円形	逆台形	45	42	18	暗褐色シルト単層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
77	南西部	円形	U字形	38	36	14	灰黄褐色シルト単層。褐灰色砂質粘土・酸化鉄含む。		
78	西部	楕円形	逆台形	52	44	14	褐灰色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
79	北西部	楕円形	U字形	27	22	22	褐灰色砂質シルト主体。上下2層。酸化鉄含む。		
80	北西部	隅丸方形	逆台形	39	34	8	褐色シルト単層。酸化鉄含む。		
81	北部	円形	有段状	50	42	24	灰黄褐色砂質シルト主体。ブロック状3層。炭化物・酸化鉄含む。		
82	北部	不整形	有段状	63	44	21	にぶい黄褐色砂質シルト主体。上下2層。炭化物含む。		
83	北部	楕円形	U字形	56	28	18	暗褐色シルト主体。上下2層。		
84	南部	(円形)	逆台形	(34)	32	14	暗褐色シルト単層。マンガン含む。		
85	北西部	楕円形	V字形	50	42	32	灰黄褐色砂質シルト主体。上下3層。	> 400 ピ	
86	南部	円形	U字形	26	22	11	暗褐色シルト単層。マンガン含む。		
87	南部	楕円形	逆台形	46	32	10	暗褐色シルト単層。マンガン含む。		
88	北部	円形	逆台形	38	38	16	褐灰色砂質シルト主体。上下2層。酸化鉄含む。		
89	南部	楕円形	V字形	46	38	30	暗褐色砂質シルト単層。炭化物含む。		
90	南部	円形	逆台形	28	28	24	暗褐色シルト主体。上下2層。炭化物・マンガン含む。		
91	北西部	楕円形	逆台形	48	36	12	灰黄褐色シルト単層。褐灰色砂質シルト。酸化鉄含む。		
92	北西部	楕円形	逆台形	48	38	22	褐灰色砂質シルト主体。ブロック状2層。マンガン・酸化鉄含む。		
93	南部	不整形	U字形	66	50	22	暗褐色シルト主体。上下2層。		
94	南部	円形	皿状	50	46	8	暗褐色シルト単層。		
95	南部	円形	U字形	40	38	20	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
96	中央部	円形	U字形	48	46	18	暗褐色シルト主体。上下2層。褐灰色砂質粘土・酸化鉄含む。	> 97 ピ	
97	中央部	不整形	有段状	50	40	16	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。褐灰色砂質粘土・酸化鉄含む。	96 ピ>	
98	西部	円形	U字形	36	34	14	暗褐色シルト単層。褐色シルト含む。		
99	西部	楕円形	逆台形	61	43	14	灰黄褐色砂質シルト単層。褐灰色砂質粘土・酸化鉄含む。		
100	中央部	円形	逆台形	38	36	20	暗褐色シルト単層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
101	南部	不整形	逆台形	56	32	10	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
102	南部	不整形	皿状	56	39	8	暗褐色シルト単層。炭化物・マンガン含む。		
103	南部	不整形	逆台形	66	54	12	にぶい黄褐色シルト主体。上下2層。炭化物含む。		
104	南部	不整形	U字形	72	52	24	にぶい黄褐色シルト主体。上下2層。炭化物含む。		

第5章 6区-2の調査成果

番号	位置	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	覆土	重複	備考
105	南部	不整形	逆台形	64	60	14	にぶい黄褐色シルト主体。上下2層。炭化物含む。	> 106ピ	
106	南部	不整形	有段状	37	32	10	灰黄褐色砂質シルト単層。炭化物含む。	105ピ>	
107	南部	円形	逆台形	40	38	10	暗褐色シルト主体。上下2層。炭化物含む。	> 108ピ	
108	南部	不整形	有段状	28	20	14	にぶい黄褐色砂質シルト単層。炭化物含む。	107ピ>	
109	北西部	円形	逆台形	42	36	12	褐灰色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
110	南部	円形	逆台形	40	34	20	にぶい黄褐色砂質シルト主体。上下2層。		
111	南部	不整形	U字形	54	36	12	暗褐色砂質シルト単層。炭化物含む。		
112	南部	不整形	逆台形	44	32	12	灰黄褐色シルト単層。炭化物含む。		
113	南部	楕円形	U字形	68	38	22	暗褐色シルト単層。炭化物・マンガン含む。		
114	南部	円形	U字形	49	46	18	灰黄褐色シルト主体。上下2層。マンガン含む。		
115	南部	円形	逆台形	44	40	14	灰黄褐色シルト主体。上下2層。焼土・炭化物・酸化鉄・マンガン含む。		
116	南部	楕円形	逆台形	56	40	18	暗褐色シルト主体。上下2層。炭化物・マンガン含む。		
117	中央部	楕円形	逆台形	72	55	21	暗褐色シルト主体。上下2層。炭化物含む。		
118	中央部	円形	逆台形	57	52	18	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
119	南部	円形	有段状	50	48	16	灰黄褐色シルト主体。上下2層。炭化物含む。		
120	中央部	円形	逆台形	46	46	20	灰黄褐色シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		
121	南部	不整形	U字形	45	44	12	暗褐色シルト主体。ブロック状3層。炭化物・マンガン含む。		柱穴痕か?
122	中央部	円形	U字形	28	27	12	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
123	中央部	楕円形	逆台形	44	32	12	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
124	南部	楕円形	逆台形	36	32	20	灰色粘土単層。炭化物・酸化鉄含む。		
125	南部	楕円形	U字形	64	32	10	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
126	中央部	円形	U字形	38	38	10	灰褐色砂質シルト単層。焼土・炭化物含む。		
127	南部	楕円形	逆台形	66	48	18	暗褐色シルト単層。酸化鉄含む。		
128	北部	楕円形	逆台形	44	30	9	灰色シルト単層。炭化物含む。		
129	中央部	不整形	有段状	88	52	34	褐灰色粘土主体。上下3層。炭化物含む。		
130	中央部	楕円形	皿状	64	40	8	褐灰色シルト単層。炭化物含む。		
131	南部	楕円形	有段状	50	48	21	褐灰色粘土主体。上下2層。炭化物含む。		
132	北西部	円形	V字形	46	42	18	褐灰色砂質粘土単層。酸化鉄含む。		
133	中央部	楕円形	V字形	54	24	18	暗褐色シルト主体。上下2層。褐色シルト含む。		
134	中央部	円形	U字形	38	38	24	暗褐色シルト主体。上下2層。褐灰色砂質シルト含む。		
135	中央部	楕円形	U字形	56	32	12	暗褐色シルト主体。上下2層。		
136	中央部	不整形	有段状	60	55	30	褐灰色砂質シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		
137	南部	楕円形	U字形	46	40	16	暗褐色シルト単層。炭化物含む。	138ピ>	
138	南部	不整形	有段状	62	58	26	暗褐色シルト単層。炭化物含む。	> 137ピ	
139	中央部	楕円形	U字形	48	33	12	黒褐色シルト主体。上下2層。酸化鉄含む。		
140	南部	楕円形	有段状	40	34	15	暗褐色シルト主体。上下2層。炭化物含む。	> 141ピ	
141	南部	不整形	有段状	46	46	18	暗褐色シルト単層。炭化物含む。	140ピ>	
142	南部	不整形	U字形	76	58	18	暗褐色砂質シルト主体。上下2層。炭化物含む。		
143	中央部	不整形	U字形	52	41	23	暗褐色シルト主体。上下2層。炭化物・マンガン含む。	> 144ピ	
144	中央部	不整形	有段状	56	42	16	暗褐色シルト単層。炭化物含む。	143ピ>	
145	南部	楕円形	U字形	74	50	24	灰黄褐色シルト主体。上下2層。マンガン含む。		
146	南部	円形	U字形	32	30	12	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
147	南部	楕円形	U字形	32	30	8	暗褐色シルト単層。マンガン含む。		
149	中央部	楕円形	U字形	32	30	8	灰黄褐色砂質シルト単層。褐色シルト含む。	> 150ピ	
150	中央部	不整形	有段状	40	28	8	灰黄褐色砂質シルト単層。褐色シルト・酸化鉄含む。	149ピ>	
151	南部	円形	逆台形	32	26	10	暗褐色砂質シルト単層。酸化鉄・マンガン含む。		
152	南部	円形	U字形	44	40	12	暗褐色砂質シルト単層。焼土含む。		
153	南部	楕円形	逆台形	30	26	12	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
154	北部	不整形	U字形	46	30	10	灰黄褐色シルト単層。褐色シルト・マンガン含む。		
155	南部	楕円形	U字形	48	40	13	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
156	中央部	楕円形	逆台形	48	34	12	暗褐色シルト主体。上下2層。炭化物含む。		
157	中央部	楕円形	U字形	62	38	20	暗褐色シルト主体。上下2層。炭化物・マンガン含む。		

第8節 ピット

番号	位置	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	覆土	重複	備考
158	中央部	不整形	逆台形	64	52	23	暗褐色シルト主体。上下2層。炭化物・マンガン含む。	> 159 ピ	
159	中央部	不整形	有段状	54	38	16	暗褐色シルト単層。炭化物含む。	158 ピ>	
160	中央部	不整形	有段状	80	58	26	暗褐色シルト主体。上下2層。炭化物・マンガン含む。	> 161 ピ	
161	中央部	不整形	有段状	24	18	11	暗褐色シルト単層。酸化鉄含む。	160 ピ>	
162	中央部	円形	U字形	38	36	22	灰黄褐色砂質シルト単層。褐色シルト・褐色砂質シルト含む。	> 163 ピ	
163	中央部	不整形	有段状	38	38	12	灰黄褐色砂質シルト単層。褐色シルト・マンガン含む。	162 ピ>	土師器出土。
164	北部	不整形	U字形	60	38	20	暗褐色シルト単層。褐色砂質粘土・酸化鉄含む。		
165	中央部	円形	逆台形	32	28	14	褐色砂質シルト単層。炭化物・マンガン含む。		
166	南部	楕円形	U字形	48	44	20	灰黄褐色シルト主体。上下2層。炭化物・マンガン含む。	> 167 ピ	
167	南部	不整形	有段状	33	24	18	暗褐色砂質シルト単層。マンガン含む。	166 ピ>	
168	中央部	不整形	逆台形	56	50	12	暗褐色シルト主体。上下2層。褐色砂質シルト含む。		
169	中央部	不整形	逆台形	54	46	16	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
170	北部	円形	U字形	58	56	8	灰黄褐色シルト主体。上下2層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
171	中央部	円形	U字形	42	40	14	黒褐色砂質シルト主体。上下2層。褐色シルト・褐色砂質粘土・酸化鉄含む。		
172	北西部	円形	逆台形	36	36	20	褐色砂質シルト単層。焼土・酸化鉄含む。		
173	中央部	楕円形	逆台形	64	44	28	暗褐色シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		
174	中央部	楕円形	逆台形	48	32	14	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
175	北部	不整形	有段状	54	46	20	暗褐色シルト単層。炭化物含む。	24 土>	
176	中央部	不整形	逆台形	32	28	14	灰黄褐色シルト単層。酸化鉄含む。	> 177 ピ	
177	中央部	不整形	有段状	52	32	10	灰黄褐色シルト主体。上下2層。褐色シルト・酸化鉄含む。	176 ピ>	
178	北部	楕円形	U字形	42	38	21	暗褐色シルト単層。炭化物含む。	178 ピ>	
179	北部	不整形	有段状	38	28	18	暗褐色シルト単層。炭化物含む。	> 179 ピ	
180	中央部	楕円形	皿状	54	30	9	灰黄褐色シルト単層。褐色シルト含む。		
181	北部	円形	U字形	30	28	9	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
182	北部	楕円形	逆台形	48	36	14	にぶい黄褐色シルト主体。炭化物・酸化鉄含む。		
183	北部	楕円形	逆台形	42	38	20	暗褐色シルト単層。炭化物・マンガン含む。		
184	北部	不整形	U字形	52	42	18	暗褐色シルト主体。上下2層。酸化鉄含む。		
185	北部	楕円形	U字形	62	42	18	暗褐色シルト単層。炭化物・マンガン含む。		
186	北部	楕円形	U字形	44	27	10	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
187	北部	円形	逆台形	40	36	15	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
188	北部	円形	逆台形	40	40	14	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
189	北部	楕円形	逆台形	46	34	12	暗褐色シルト単層。褐色シルト含む。		
190	北部	楕円形	有段状	46	17	15	褐色砂質シルト主体。ブロック状2層。炭化物・酸化鉄含む。		
191	北部	楕円形	U字形	60	46	28	灰黄褐色シルト主体。上下2層。炭化物・褐色シルト含む。		
192	北部	楕円形	逆台形	40	33	8	灰黄褐色シルト単層。褐色シルト含む。		
193	北部	円形	U字形	46	40	18	暗褐色シルト単層。炭化物・マンガン含む。		
194	北部	楕円形	U字形	78	52	18	暗褐色シルト単層。炭化物・酸化鉄・マンガン含む。		
195	北部	不整形	有段状	80	44	26	褐色シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		
196	北部	不整形	逆台形	52	38	24	褐色シルト主体。上下3層。褐色シルト含む。		
197	北部	円形	逆台形	24	22	10	褐色砂質シルト単層。		
198	北部	楕円形	V字形	58	32	18	暗褐色シルト主体。上下2層。炭化物含む。		
199	北部	円形	逆台形	58	52	14	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。酸化鉄含む。		
200	北部	円形	逆台形	40	36	20	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
201	中央部	楕円形	U字形	48	28	12	暗褐色シルト主体。上下2層。炭化物・褐色シルト含む。		
202	中央部	楕円形	U字形	42	40	18	暗褐色シルト単層。炭化物含む。	> 203 ピ	
203	中央部	不整形	有段状	42	34	14	暗褐色シルト主体。上下2層。マンガンを含む。	202 ピ>	
204	北部	円形	逆台形	40	38	11	暗褐色シルト単層。マンガン含む。		
205	北部	楕円形	有段状	50	36	14	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
206	北部	楕円形	逆台形	23	20	10	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		

第5章 6区-2の調査成果

番号	位置	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	覆土	重複	備考
207	北部	楕円形	逆台形	54	44	12	暗褐色シルト単層。マンガン含む。		
208	中央部	楕円形	逆台形	68	58	18	暗褐色シルト主体。上下2層。炭化物含む。		
209	北部	楕円形	有段状	62	42	20	灰黄褐色シルト単層。酸化鉄・マンガン含む。		
210	中央部	楕円形	U字形	42	36	14	暗褐色シルト単層。		
211	南部	円形	逆台形	32	30	12	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。炭化物・褐色シルト含む。		
212	中央部	不整形	有段状	64	44	14	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。褐灰色砂質粘土・褐色シルト含む。		
213	北部	楕円形	逆台形	54	46	12	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
214	北部	円形	U字形	58	58	14	灰黄褐色シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		
215	南部	楕円形	有段状	64	48	20	暗褐色シルト主体。ブロック状3層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
217	北部	楕円形	逆台形	56	39	10	暗褐色シルト単層。マンガン含む。		
218	北部	楕円形	逆台形	38	36	10	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
219	北部	円形	逆台形	32	30	6	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
220	北部	不整形	逆台形	72	48	18	暗褐色シルト主体。上下2層。褐色シルト含む。		
221	北部	円形	有段状	34	32	14	暗褐色シルト主体。上下2層。褐色シルト含む。		
222	北部	楕円形	逆台形	44	42	10	灰黄褐色シルト単層。炭化物・褐色シルト含む。	> 223 ピ	
223	北部	不整形	有段状	28	28	8	褐灰色シルト主体。上下2層。炭化物含む。	222 ピ>	
224	北部	楕円形	有段状	56	24	18	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
225	北部	楕円形	逆台形	60	36	18	暗褐色シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
226	北部	円形	逆台形	40	36	14	暗褐色シルト単層。褐色シルト含む。		
227	北部	円形	有段状	86	70	30	暗褐色シルト主体。上下2層。炭化物含む。		
228	北部	円形	U字形	52	44	36	暗褐色シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		
229	北部	円形	逆台形	32	30	12	暗褐色シルト主体。上下2層。褐色シルト含む。		
230	中央部	円形	逆台形	36	32	12	暗褐色シルト主体。上下2層。褐灰色砂質シルト含む。		
231	北部	円形	逆台形	22	22	8	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
232	南部	楕円形	U字形	40	40	14	暗褐色シルト単層。褐灰色シルト・酸化鉄含む。		
233	中央部	楕円形	逆台形	44	38	12	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
234	南部	楕円形	逆台形	44	32	14	暗褐色シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		
235	北部	円形	逆台形	44	44	16	灰黄褐色シルト主体。上下2層。焼土・炭化物含む。	> 236 ピ	
236	北部	不整形	有段状	42	28	20	暗褐色シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。	235 ピ>	
237	北部	不整形	逆台形	42	38	28	暗褐色シルト主体。上下3層。炭化物含む。		
238	中央部	不整形	皿状	100	38	10	暗褐色シルト主体。上下3層。褐色シルト含む。		
239	北部	楕円形	U字形	68	38	18	暗褐色シルト単層。マンガン含む。		
240	北部	楕円形	逆台形	34	30	14	暗褐色シルト単層。マンガン含む。		
241	北部	円形	逆台形	36	35	10	暗褐色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
242	南部	楕円形	逆台形	62	46	22	暗褐色シルト主体。上下3層。褐色シルト含む。		
243	南部	楕円形	逆台形	50	44	16	褐灰色砂質シルト主体。上下2層。褐色シルト含む。		
244	北東部	楕円形	逆台形	44	36	8	暗褐色シルト単層。褐色シルト含む。		
245	北東部	円形	逆台形	40	40	12	暗褐色シルト主体。上下2層。焼土含む。		
246	南部	楕円形	逆台形	46	37	18	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。褐灰色砂質粘土含む。		
247	南部	楕円形	逆台形	44	38	16	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。褐灰色砂質粘土含む。		
248	南部	楕円形	有段状	66	42	18	褐灰色砂質シルト主体。上下2層。炭化物含む。		
249	南部	不整形	有段状	98	54	24	暗褐色シルト主体。ブロック状4層。褐色シルト含む。		
250	南東部	楕円形	U字形	50	38	16	灰黄褐色シルト主体。ブロック状5層。炭化物・褐色シルト含む。		
251	中央部	楕円形	逆台形	40	32	10	褐灰色シルト単層。炭化物含む。	> 252 ピ	
252	中央部	不整形	有段状	42	24	10	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。炭化物・褐色シルト含む。	251 ピ、268 ピ>	
253	中央部	楕円形	逆台形	58	42	20	暗褐色シルト単層。炭化物・褐色シルト含む。		
254	北東部	楕円形	逆台形	28	22	14	灰黄褐色シルト単層。酸化鉄含む。		
255	北東部	円形	逆台形	42	38	12	灰黄褐色シルト単層。炭化物・褐色シルト含む。		
256	北東部	不整形	逆台形	48	32	24	灰黄褐色砂質シルト主体。ブロック状4層。褐灰色砂質粘土・酸化鉄含む。		
257	中央部	不整形	逆台形	82	44	16	灰黄褐色シルト主体。上下3層。酸化鉄含む。		

第8節 ピット

番号	位置	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	覆土	重複	備考
258	中央部	不整形	有段状	74	44	18	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。酸化鉄含む。		
259	南東部	不整形	逆台形	56	40	12	暗褐色シルト主体。上下2層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
260	中央部	不整形	逆台形	84	38	10	暗褐色シルト単層。酸化鉄含む。		
262	中央部	楕円形	逆台形	46	34	12	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。焼土・炭化物・酸化鉄含む。		
263	中央部	楕円形	皿状	48	28	6	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
264	中央部	不整形	逆台形	80	58	8	暗褐色シルト単層。炭化物・褐色シルト含む。		
265	南東部	不整形	U字形	56	32	14	褐灰色シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		
266	中央部	(不整形)	逆台形	(48)	26	14	灰黄褐色シルト単層。炭化物含む。		南側は調査区域外に延びる。
267	中央部	不整形	V字形	58	50	18	灰黄褐色砂質シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
268	中央部	不整形	有段状	32	32	14	灰黄褐色シルト単層。褐色シルト含む。	269ピ > 252ピ	
269	中央部	楕円形	V字形	36	27	30	灰黄褐色シルト単層。炭化物・褐色シルト含む。	> 268ピ	
270	中央部	不整形	逆台形	58	26	14	灰黄褐色シルト主体。上下2層。炭化物含む。		
271	北部	円形	U字形	44	40	26	暗褐色シルト主体。ブロック状3層。褐色シルト含む。		
272	北西部	楕円形	U字形	34	32	14	褐灰色砂質粘土単層。酸化鉄含む。		
273	北西部	円形	U字形	24	23	6	褐灰色砂質シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
274	北西部	円形	逆台形	52	30	14	褐灰色砂質シルト主体。上下2層。にぶい黄褐色シルト・酸化鉄含む。		
275	北西部	円形	逆台形	26	22	18	褐灰色砂質単層。酸化鉄含む。		
276	西部	円形	逆台形	30	28	8	暗褐色シルト主体。上下2層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
277	西部	円形	逆台形	46	45	16	褐灰色砂質シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		
278	北西部	楕円形	皿状	48	38	8	灰黄褐色砂質粘土単層。炭化物・酸化鉄含む。		
279	西部	楕円形	逆台形	38	34	10	暗褐色シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
280	北西部	楕円形	逆台形	26	20	12	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。酸化鉄含む。		
281	北西部	円形	逆台形	28	28	20	暗褐色砂質シルト主体。上下2層。褐灰色砂質粘土・酸化鉄含む。		
282	北西部	円形	逆台形	24	24	12	灰黄褐色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
283	北西部	円形	逆台形	32	28	12	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
284	北西部	楕円形	逆台形	30	24	10	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。酸化鉄含む。		
285	北西部	楕円形	逆台形	26	24	10	灰黄褐色砂質シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
286	西部	楕円形	逆台形	28	26	12	暗褐色シルト単層。酸化鉄含む。		
287	北西部	楕円形	逆台形	28	28	8	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。酸化鉄含む。		
288	北西部	円形	逆台形	36	30	14	褐灰色シルト主体。上下2層。酸化鉄含む。		
289	北西部	円形	逆台形	22	20	10	灰黄褐色シルト単層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
290	北西部	楕円形	逆台形	28	22	20	灰黄褐色砂質シルト主体。ブロック状4層。炭化物・酸化鉄含む。		
291	北西部	楕円形	U字形	26	18	14	灰黄褐色砂質シルト主体。ブロック状3層。炭化物・酸化鉄含む。		
292	北西部	円形	逆台形	28	26	16	褐灰色砂質シルト主体。ブロック状3層。炭化物・酸化鉄含む。		
293	北西部	楕円形	V字形	34	28	11	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。褐灰色砂質粘土・酸化鉄含む。		
294	北西部	円形	逆台形	28	28	18	褐灰色砂質シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		
295	北西部	円形	逆台形	24	24	12	褐灰色砂質シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		
296	北西部	円形	逆台形	42	40	12	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		
297	北西部	円形	逆台形	26	23	8	灰黄褐色シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
298	西部	円形	逆台形	30	28	10	灰黄褐色砂質シルト単層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
299	北西部	円形	U字形	32	32	18	暗褐色シルト主体。上下3層。酸化鉄含む。		
300	西部	円形	逆台形	36	36	18	褐灰色砂質シルト主体。上下2層。褐色シルト・酸化鉄含む。	> 301ピ	
301	西部	不整形	有段状	18	14	14	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。酸化鉄含む。	300ピ>	
302	南西部	円形	V字形	28	24	14	暗褐色シルト単層。褐灰色シルト含む。		

第5章 6区-2の調査成果

番号	位置	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	覆土	重複	備考
303	南西部	円形	U字形	30	28	12	暗褐色シルト単層。炭化物・褐色シルト含む。		
304	南西部	不整形	逆台形	38	32	28	灰黄褐色砂質シルト主体。ブロック状5層。褐色砂質粘土・酸化鉄含む。		
305	西部	円形	U字形	30	30	13	褐色砂質シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		
306	北西部	円形	U字形	24	21	38	褐色砂質シルト主体。上下3層。酸化鉄含む。		柱穴痕か？
307	北西部	楕円形	U字形	34	32	11	褐色砂質シルト主体。上下2層。酸化鉄含む。		
308	西部	楕円形	逆台形	30	24	8	灰黄褐色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
309	西部	楕円形	V字形	26	20	8	灰黄褐色シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		
310	北西部	楕円形	皿状	34	24	8	褐色シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		
311	北西部	楕円形	逆台形	36	26	9	灰黄褐色砂質シルト単層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
312	北西部	円形	逆台形	20	18	8	褐色シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
313	西部	円形	U字形	28	22	6	褐色砂質シルト単層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
314	北西部	楕円形	逆台形	30	20	8	褐色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
315	南西部	楕円形	V字形	30	30	10	灰黄褐色シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
316	南西部	楕円形	皿状	58	36	8	暗褐色シルト単層。褐色シルト含む。		
317	西部	円形	V字形	30	28	8	灰黄褐色シルト単層。酸化鉄含む。		
318	北西部	円形	逆台形	37	34	14	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。酸化鉄含む。		
319	北西部	楕円形	U字形	28	18	8	褐色砂質シルト単層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
320	北西部	円形	逆台形	20	18	12	褐色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
321	北西部	楕円形	逆台形	26	18	10	褐色砂質シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
322	西部	円形	逆台形	28	26	12	灰黄褐色シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
323	西部	円形	U字形	24	22	10	灰黄褐色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
324	南西部	楕円形	皿状	34	14	6	灰黄褐色砂質シルト単層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
325	南西部	楕円形	皿状	30	21	6	褐色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
327	南西部	楕円形	V字形	44	38	22	灰黄褐色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
329	北西部	楕円形	U字形	30	20	8	褐色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
330	西部	楕円形	皿状	30	28	6	灰黄褐色砂質シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
331	北西部	円形	皿状	26	24	6	褐色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
332	西部	楕円形	U字形	34	32	11	褐色シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。	> 333ピ	
333	西部	不整形	有段状	32	26	10	褐色シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。	332ピ>	
334	西部	円形	U字形	26	25	8	褐色砂質シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
335	北西部	円形	U字形	32	30	10	褐色砂質シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
336	北西部	楕円形	逆台形	26	18	9	褐色シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
337	西部	円形	V字形	26	24	16	灰黄褐色シルト単層。褐色砂質粘土・酸化鉄含む。		
338	北西部	円形	逆台形	28	26	14	灰黄褐色シルト単層。炭化物・褐色砂質シルト・酸化鉄含む。		
339	西部	円形	U字形	40	38	10	褐色砂質シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		
340	北西部	円形	逆台形	20	20	12	褐色砂質シルト単層。炭化物・灰黄褐色シルト・酸化鉄含む。		
341	西部	楕円形	逆台形	52	48	8	灰黄褐色シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
342	北西部	楕円形	U字形	20	20	8	灰黄褐色シルト単層。酸化鉄含む。		
343	西部	楕円形	逆台形	32	22	14	灰黄褐色シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		
344	西部	円形	逆台形	32	32	14	灰黄褐色砂質シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
345	北西部	楕円形	U字形	30	20	8	褐色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
346	西部	円形	逆台形	28	28	8	灰黄褐色シルト単層。酸化鉄含む。		
347	北西部	円形	逆台形	22	20	10	灰黄褐色砂質シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
348	北西部	楕円形	逆台形	54	40	8	灰黄褐色シルト単層。酸化鉄含む。		
349	西部	楕円形	逆台形	26	18	12	灰黄褐色シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
350	北西部	不整形	U字形	50	42	12	褐色砂質シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		
351	西部	楕円形	逆台形	32	31	12	灰黄褐色シルト単層。酸化鉄含む。		
352	南西部	円形	逆台形	26	26	10	灰黄褐色砂質シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
353	南西部	円形	U字形	36	34	8	灰黄褐色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		

第8節 ピット

番号	位置	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	覆土	重複	備考
354	南西部	円形	逆台形	26	20	8	灰黄褐色砂質シルト単層。褐灰色砂質シルト・酸化鉄含む。		
355	西部	楕円形	V字形	30	22	8	褐灰色砂質粘土単層。炭化物・褐色砂質シルト・酸化鉄含む。		
356	西部	楕円形	U字形	42	28	14	褐灰色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
357	西部	楕円形	U字形	32	25	10	灰黄褐色砂質シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
358	西部	円形	逆台形	34	27	14	灰黄褐色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
359	南西部	円形	U字形	34	32	10	暗褐色シルト単層。褐灰色砂質粘土・酸化鉄含む。		
360	南西部	円形	皿状	42	38	6	灰黄褐色シルト単層。褐灰色砂質粘土含む。		
361	北西部	円形	逆台形	26	18	11	褐灰色シルト単層。炭化物含む。		
362	南西部	円形	U字形	42	38	10	灰黄褐色シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
363	西部	円形	V字形	26	26	8	褐灰色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
364	西部	楕円形	U字形	38	28	8	褐灰色シルト単層。褐色シルト含む。	> 365 ピ	
365	西部	不整形	有段状	28	26	5	灰黄褐色シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。	364 ピ>	
366	西部	楕円形	U字形	58	40	14	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
367	西部	円形	皿状	26	26	6	暗褐色シルト単層。炭化物・褐色シルト含む。		
368	西部	円形	逆台形	36	32	32	灰黄褐色砂質シルト主体。上下3層。炭化物・酸化鉄含む。		
369	西部	円形	逆台形	28	28	12	灰黄褐色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
370	北西部	円形	U字形	26	24	14	暗青灰色砂質粘土主体。上下2層。暗褐色シルト・酸化鉄含む。		
371	南西部	楕円形	逆台形	36	30	10	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
372	南西部	円形	逆台形	40	40	10	灰黄褐色砂質シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
373	南西部	楕円形	逆台形	32	22	8	にぶい黄褐色砂質シルト単層。褐灰色砂質粘土含む。		
374	南部	円形	U字形	52	50	10	暗褐色シルト単層。褐灰色砂質粘土・酸化鉄含む。		
375	南西部	円形	皿状	58	54	8	灰黄褐色シルト主体。上下2層。酸化鉄含む。		
376	中央部	円形	逆台形	36	36	12	灰黄褐色シルト主体。上下2層。炭化物・褐灰色砂質シルト含む。		
377	南部	円形	U字形	28	26	20	暗褐色シルト単層。褐灰色砂質シルト含む。		
378	南部	円形	U字形	58	52	18	灰黄褐色砂質シルト主体。ブロック状4層。炭化物・褐灰色砂質粘土含む。		
379	北西部	楕円形	逆台形	30	20	10	暗灰色砂質シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		
380	南西部	楕円形	皿状	56	50	8	灰黄褐色シルト主体。ブロック状6層。褐灰色砂質シルト・酸化鉄含む。		
381	西部	不整形	逆台形	48	28	8	灰黄褐色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
382	北西部	円形	逆台形	24	20	16	褐灰色砂質シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
383	西部	円形	逆台形	32	30	18	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。酸化鉄含む。		
384	西部	円形	皿状	30	28	4	灰黄褐色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
385	南部	円形	逆台形	44	42	28	灰黄褐色砂質シルト主体。ブロック状5層。炭化物・酸化鉄含む。		
386	西部	円形	逆台形	26	26	24	灰黄褐色シルト主体。上下2層。炭化物含む。		
391	西部	円形	U字形	26	24	11	褐灰色砂質粘土単層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
392	北西部	円形	U字形	34	34	44	灰色粘土主体。ブロック状3層。炭化物含む。		
393	中央部	円形	逆台形	30	30	22	灰黄褐色砂質シルト主体。ブロック状8層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
394	北西部	円形	U字形	26	24	8	褐灰色砂質シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
395	南部	円形	逆台形	36	34	14	暗褐色シルト単層。褐灰色砂質粘土含む。		
396	南部	楕円形	U字形	54	40	14	灰黄褐色砂質シルト主体。ブロック状4層。褐灰色砂質粘土含む。		
397	南部	円形	U字形	26	22	6	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
398	西部	円形	逆台形	36	34	20	暗褐色シルト主体。上下3層。褐灰色砂質粘土含む。		
399	西部	円形	逆台形	24	24	18	灰黄褐色砂質シルト単層。褐灰色砂質シルト含む。		
400	北西部	不整形	有段状	32	20	20	褐灰色シルト単層。炭化物含む。	85 ピ>	
402	中央部	円形	逆台形	22	22	16	灰黄褐色シルト単層。褐灰色砂質粘土・酸化鉄含む。		
403	中央部	円形	U字形	22	22	16	褐灰色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
404	北西部	不整形	逆台形	24	20	22	褐灰色シルト単層。酸化鉄含む。		
405	北西部	不整形	U字形	38	37	16	褐灰色シルト単層。炭化物・灰黄褐色シルトブロック含む。		

番号	位置	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	覆土	重複	備考
406	中央部	不整形	有段状	38	32	18	灰黄褐色砂質シルト主体。上下3層。炭化物・酸化鉄含む。		
407	中央部	楕円形	皿状	32	26	6	褐灰色砂質シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
408	中央部	楕円形	U字形	40	22	10	灰黄褐色砂質シルト単層。炭化物・褐灰色砂質粘土含む。		
409	北西部	円形	逆台形	22	20	14	青灰色砂質粘土単層。酸化鉄含む。		
410	中央部	楕円形	U字形	34	30	10	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		
411	北部	楕円形	逆台形	37	36	8	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。酸化鉄含む。		
412	北部	楕円形	有段状	36	34	14	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。褐灰色シルト・酸化鉄含む。		
413	北部	不整形	U字形	34	22	10	灰黄褐色シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
414	東部	楕円形	U字形	32	20	12	灰黄褐色砂質シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
415	北西部	楕円形	V字形	52	36	14	褐灰色シルト単層。酸化鉄含む。		
416	北部	楕円形	U字形	38	32	12	褐灰色砂質シルト主体。上下2層。酸化鉄含む。		
417	北東部	楕円形	有段状	50	32	7	灰黄褐色砂質シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
418	北東部	不整形	V字形	30	28	12	褐灰色シルト単層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
419	北西部	不整形	有段状	46	28	12	褐灰色シルト単層。黄褐色シルトブロック含む。		
420	北東部	楕円形	有段状	26	22	13	灰黄褐色シルト単層。酸化鉄含む。		
421	北東部	楕円形	U字形	42	30	8	灰黄褐色シルト単層。褐灰色砂質粘土・酸化鉄含む。		
422	北東部	楕円形	V字形	36	20	10	灰黄褐色シルト単層。酸化鉄含む。		
423	北東部	円形	U字形	32	28	12	褐灰色砂質シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
424	北東部	楕円形	U字形	50	32	10	灰黄褐色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
425	北東部	円形	皿状	40	36	6	褐灰色砂質シルト主体。上下2層。酸化鉄含む。		
430	東部	円形	逆台形	24	23	14	灰黄褐色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
431	東部	円形	逆台形	26	22	12	暗褐色シルト単層。褐灰色砂質シルト含む。		
432	北東部	楕円形	U字形	44	20	14	灰黄褐色砂質シルト単層。炭化物・褐色シルト含む。		
433	北東部	円形	U字形	24	22	14	灰黄褐色シルト単層。褐灰色砂質粘土・酸化鉄含む。		
434	北東部	円形	U字形	28	28	12	褐灰色砂質シルト主体。ブロック状3層。炭化物・酸化鉄含む。		
435	東部	円形	皿状	22	22	6	褐灰色シルト単層。マンガン・酸化鉄含む。		
436	北西部	円形	V字形	30	28	10	褐灰色シルト単層。黄褐色シルト含む。		
437	北部	楕円形	逆台形	49	36	12	灰色シルト単層。酸化鉄含む。		
438	北部	不整形	U字形	46	32	15	灰色シルト主体。上下3層。炭化物・酸化鉄含む。		
439	北部	楕円形	U字形	36	24	12	褐灰色シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		
440	北部	楕円形	U字形	40	34	13	灰黄褐色砂質シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
441	中央部	楕円形	逆台形	26	24	18	灰黄褐色砂質シルト単層。炭化物含む。		
442	中央部	円形	逆台形	26	26	18	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
443	中央部	楕円形	U字形	46	34	18	灰黄褐色シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
444	北部	円形	U字形	23	22	14	灰黄褐色シルト単層。酸化鉄含む。		
445	北部	円形	U字形	34	30	14	灰黄褐色シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		
446	北東部	円形	U字形	28	24	10	灰黄褐色砂質シルト単層。炭化物含む。		
447	北東部	楕円形	逆台形	38	36	10	褐灰色砂質シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
448	北東部	円形	逆台形	22	18	28	灰黄褐色シルト主体。ブロック状3層。炭化物含む。		
449	北東部	円形	逆台形	18	18	12	灰黄褐色砂質シルト単層。炭化物・褐灰色砂質粘土含む。		
450	東部	円形	U字形	20	20	6	灰黄褐色シルト単層。酸化鉄含む。		
451	東部	円形	皿状	16	16	4	灰黄褐色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
452	中央部	円形	逆台形	24	24	26	灰黄褐色シルト主体。上下4層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
453	北東部	円形	U字形	26	22	8	灰黄褐色砂質シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
454	北部	不整形	U字形	60	32	16	暗褐色シルト主体。上下2層。酸化鉄含む。		
455	中央部	円形	逆台形	22	20	14	灰黄褐色シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
456	中央部	円形	U字形	18	16	9	暗褐色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
457	中央部	円形	U字形	30	28	16	褐灰色砂質シルト主体。上下2層。炭化物含む。		
458	中央部	円形	逆台形	23	22	16	褐灰色シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		

第8節 ピット

番号	位置	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	覆土	重複	備考
459	中央部	円形	逆台形	24	24	20	暗褐色シルト主体。上下2層。炭化物含む。		
460	北部	楕円形	逆台形	32	24	14	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。炭化物・にぶい黄褐色シルト含む。		
461	中央部	円形	逆台形	16	16	12	灰黄褐色シルト主体。上下2層。炭化物・褐灰色砂質シルト含む。		
462	中央部	楕円形	U字形	28	22	14	暗褐色シルト単層。炭化物含む。	> 463 ピ	
463	中央部	不整形	有段状	22	16	10	暗褐色シルト単層。炭化物・褐灰色砂質シルト含む。	462 ピ>	
464	東部	楕円形	皿状	36	30	6	灰黄褐色シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
465	東部	円形	U字形	40	38	16	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。酸化鉄含む。		
466	北東部	楕円形	U字形	42	28	10	暗褐色シルト単層。酸化鉄含む。		
467	北東部	円形	U字形	26	24	15	灰黄褐色砂質シルト単層。炭化物・褐色シルト含む。		
468	北東部	円形	U字形	30	30	12	暗褐色シルト単層。炭化物含む。		
469	北部	円形	逆台形	32	30	14	灰黄褐色シルト主体。上下2層。炭化物含む。		
470	北東部	円形	U字形	28	26	8	灰黄褐色砂質シルト単層。		
471	東部	楕円形	U字形	28	28	10	褐灰色砂質シルト主体。上下2層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
472	北東部	円形	U字形	35	35	14	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。炭化物・酸化鉄含む。		
473	北部	楕円形	U字形	42	32	18	灰黄褐色シルト主体。上下2層。暗青灰色砂質粘土・酸化鉄含む。		
474	北東部	楕円形	U字形	24	24	14	灰黄褐色砂質シルト単層。炭化物含む。		
475	北東部	円形	逆台形	30	28	14	灰黄褐色シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
476	北東部	楕円形	逆台形	34	24	8	灰黄褐色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
477	東部	楕円形	逆台形	34	26	8	暗褐色シルト単層。酸化鉄含む。		
478	北東部	円形	逆台形	24	19	10	灰黄褐色砂質シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
479	北東部	楕円形	V字形	22	20	16	灰黄褐色シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
480	北東部	楕円形	U字形	34	26	10	灰黄褐色砂質シルト主体。上下2層。炭化物含む。	> 481 ピ	
481	北東部	不整形	有段状	26	16	6	灰黄褐色砂質シルト単層。褐灰色シルト含む。	480 ピ>	
482	北東部	円形	皿状	24	20	4	灰黄褐色シルト単層。酸化鉄含む。		
483	北東部	円形	逆台形	26	26	10	灰黄褐色砂質シルト単層。酸化鉄含む。		
484	東部	円形	逆台形	20	20	14	灰黄褐色シルト単層。褐色シルト・酸化鉄含む。		
485	東部	円形	U字形	44	42	12	褐灰色砂質シルト単層。炭化物・酸化鉄含む。		
486	東部	楕円形	U字形	46	36	8	灰黄褐色砂質シルト単層。炭化物・褐色シルト・酸化鉄含む。		

2. 奈良・平安時代 (第50図)

奈良・平安時代に帰属するピットは、5基である。古墳時代(第28表)と同様に一覧表で掲載する。遺物は出土しなかった。

第29表 奈良・平安時代ピット一覧表

番号	位置	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	覆土	重複	備考
1	南東部	円形	逆台形	28	23	29	黒褐色シルト単層。マンガン含む。		
2	南東部	円形	U字形	26	24	32	黒褐色シルト単層。マンガン含む。		
3	南東部	円形	U字形	24	24	56	黒褐色シルト単層。マンガン含む。		
4	西部	(楕円形)	逆台形	(54)	44	11	黒褐色シルト単層。焼土・炭化物・マンガン含む。	> 22 溝	
5	西部	楕円形	逆台形	60	44	21	黒褐色シルト主体。上下2層。マンガン含む。		

第9節 遺構外出土遺物 (第100図 図版18)

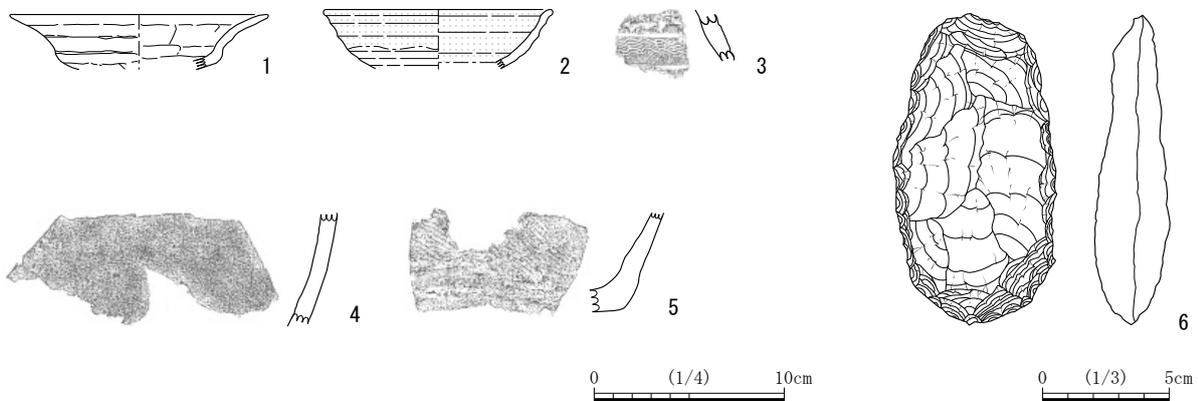
本稿では、6区-2において、表土掘削から各遺構確認面までに部分的に残存していた遺物包含層、及び表土から出土した遺物のうち、6点を図示した。土器は古墳時代から奈良・平安時代の所産と考えられる。

1は土師器杯の口縁部～体部片である。色調は明赤褐色を呈し、胎土中には海綿骨針を含むこと

から、在地産の可能性が高い。2は灰釉陶器碗の口縁部～体部片である。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。

3は須恵器甗の胴部片である。色調は灰白色を呈し、外面には櫛描波状文が認められる。4・5は須恵器甕の胴部片である。いずれも胎土中に海綿骨針を含むことから、南比企産と考えられる。

6は縄文時代の所産と考えられる打製石斧である。石材はホルンフェルスである。



第100図 6区-2遺構外出土遺物

第30表 6区-2遺構外出土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値 (cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	土師器 杯	-	口 径：(13.6) 底 径：- 器 高：[2.9] 最大径：-	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ 内面：ヘラナデ	胎 土：針、片、チャ 焼 成：普通 色 調：明赤褐色 残存度：口縁部20%	在地産
2	灰釉陶器 碗	-	口 径：(11.8) 底 径：- 器 高：[3.2] 最大径：-	外面：ロクロナデ、漬け掛け 内面：ロクロナデ、漬け掛け	胎 土：石、長、黒 焼 成：良好 色 調：灰白色 残存度：破片	
3	須恵器 甗	-	口 径：- 底 径：- 器 高：[3.6] 最大径：-	外面：櫛描波状紋、ヨコナデ 内面：ヘラナデ	胎 土：石、長、角、チャ 焼 成：普通 色 調：灰白色 残存度：破片	東金子産か？
4	須恵器 甕	-	口 径：- 底 径：- 器 高：[5.9] 最大径：-	特徴：外面降灰 外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	胎 土：針、石、チャ 焼 成：普通 色 調：灰色 残存度：破片	南比企産
5	須恵器 甕	-	口 径：- 底 径：- 器 高：[5.2] 最大径：-	外面：タタキ 内面：ヘラナデ	胎 土：針、石、長、チャ 焼 成：良好 色 調：灰色 残存度：破片	南比企産

第31表 6区-2遺構外出土石器観察表

番号	器種	石材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存度	備考
6	打製石斧	ホルンフェルス	-	12.5	6.3	2.7	243.9	100%	

第6章 6区-3の調査成果

第1節 概要・層序

6区-3は下田遺跡6区の北西部にあたり、2区-C2が南隣する。現地表面の標高は27.7mを測る。

遺構は表土除去後に、中世以降、奈良・平安時代、古墳時代の遺構を確認した。(第49・50図)

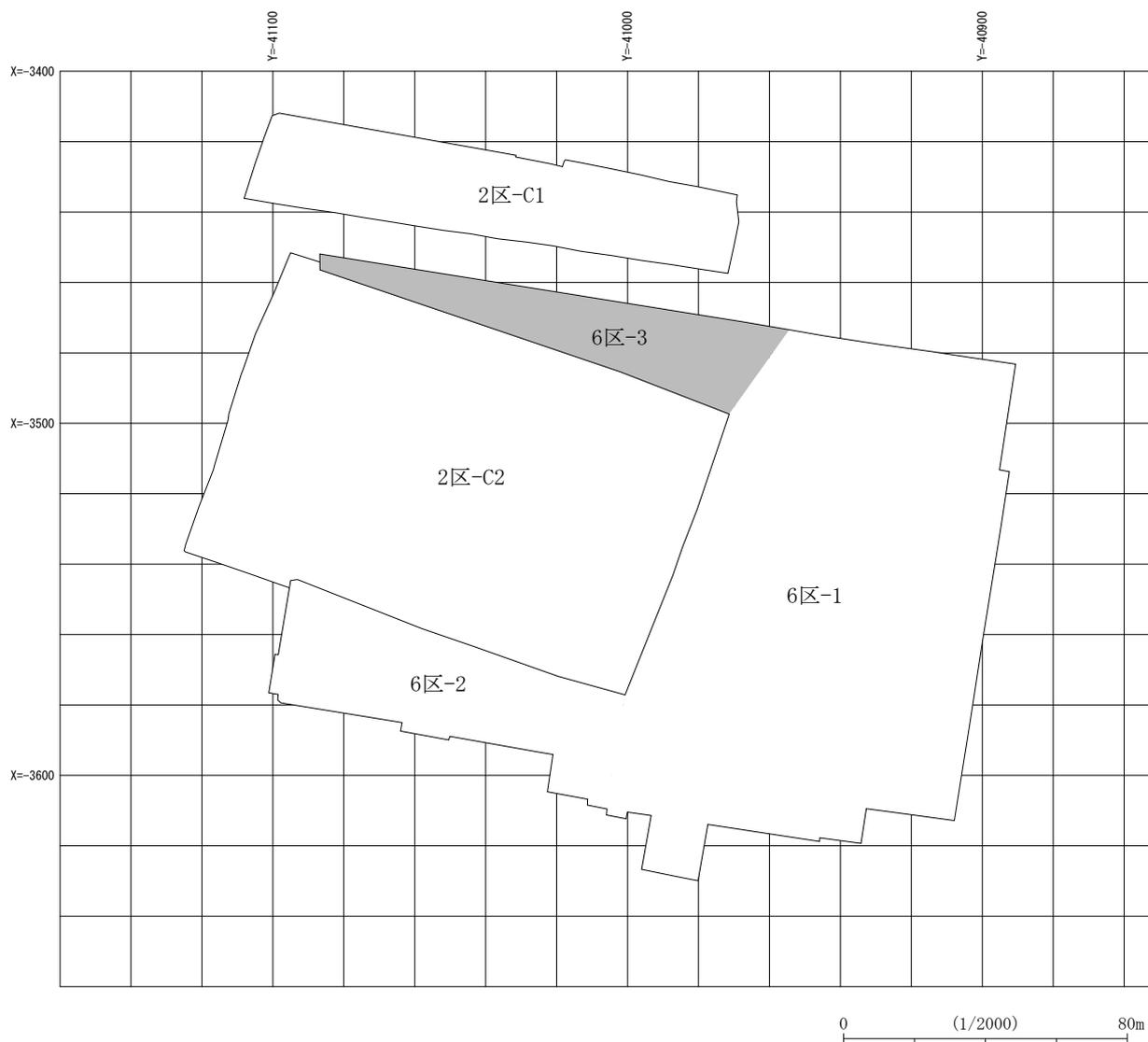
調査区北壁を観察するに、中・近世の水田層であるⅡb層、あるいは流路の覆土と考えられる砂礫層を一枚挟んで、V層、Ⅶ層、Ⅷ層の順に、堆

積する様子が観察された。

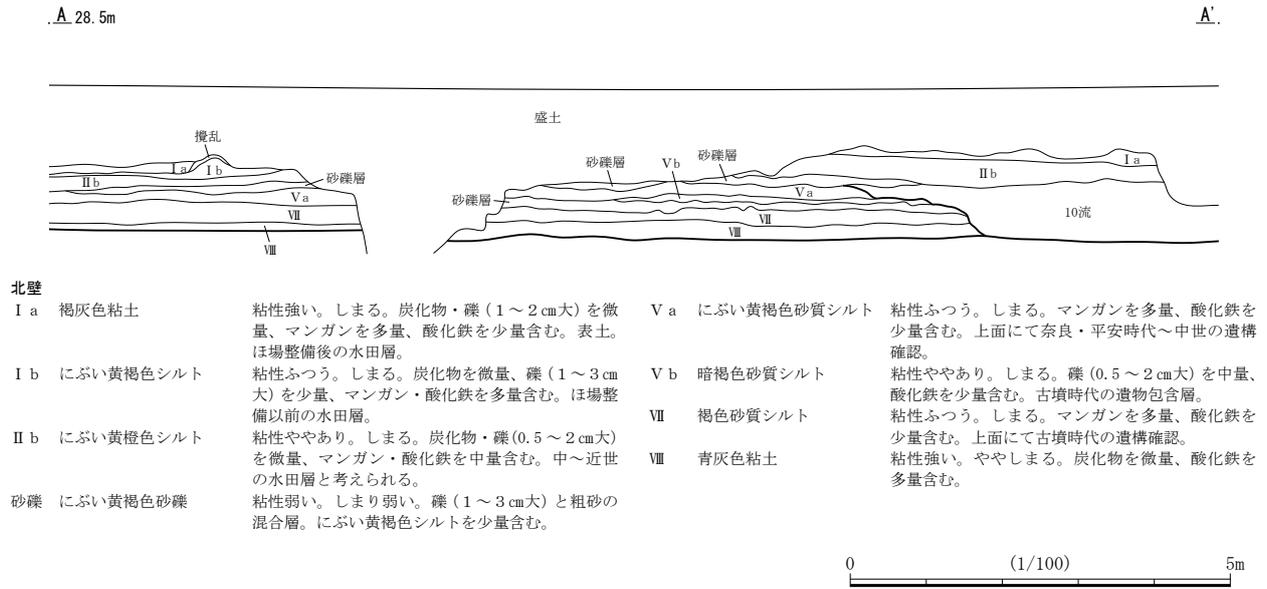
V層は地点によっては0.1mまで薄くなるが、ほぼ0.18～0.25mの厚さで堆積していた。

Ⅶ層は6区-1の東壁と比較すると薄く、北側に漸移的に傾斜する地形が影響していると考えられる。

V層あるいは、Ⅶ層上面に堆積する砂礫層は先述のとおり流路の一部であると考えられ、6区-1で発生した河川氾濫の影響を受けた結果と推察される。



第101図 調査区位置図 6区-3



第102図 北壁断面

第2節 土坑

1. 中世以降

検出された土坑は1基である。

11号土坑(第103図 図版15)

位置：中央部北側。北側は調査区域外へ延びると考えられる。

重複：なし。

形態：平面形は不整形、断面形は浅いU字形を呈する。東壁は急激に立ち上がり、西側では緩やかな段を有する。

規模：長軸3.35m×短軸(2.92)m×深さ0.24m

長軸：N-77°-W

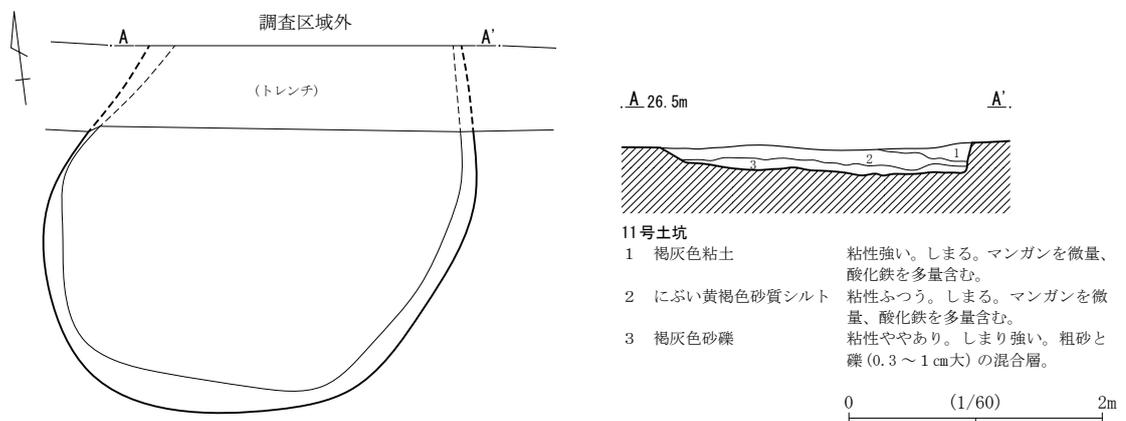
覆土：3層に分層される。最下層の3層は粗砂と礫の混合層である。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：北壁の観察では、V層を切り込む形で構築されていたが、上面にはII b層が堆積していたため、中世以降と考えた。

所見

単独で確認された土坑であり、覆土中にマンガンと酸化鉄を含むことから、水田耕作に関連する遺構と考えられる。



第103図 11号土坑

第3節 溝状遺構

1. 古墳時代

検出された溝状遺構は1条である。

39号溝状遺構 (第104図 図版15)

位置：西部。南から北に向けて走ると考えられる。北側は調査区域外へ、南側は2区-C2に延びる。

重複：なし。

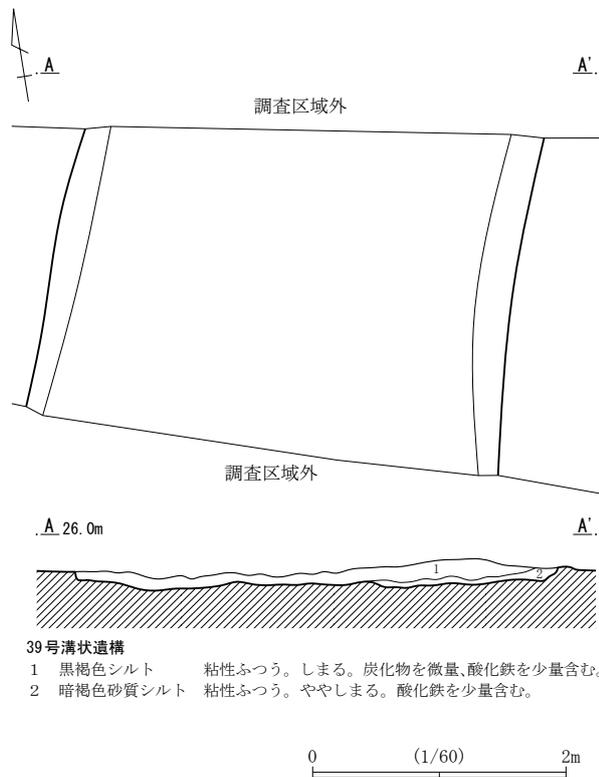
形態：断面形は皿状を呈する。

規模：長軸(2.19)m×短軸0.47m×深さ0.05m

長軸：N-11°-W

覆土：2層に分層される。1層は炭化物を微量に含む。

遺物：10世紀の土師器甕が出土したが、小破片のため図示できなかった。また、器面の摩滅が著しいことから、周辺からの流入物と考えられる。



第104図 39号溝状遺構

時期：確認面と、2区-C2との溝状遺構との関係から、古墳時代と考えられる。

所見

南側で2区-C2の25号溝状遺構に合流した後、6区-1の36号溝状遺構と更に合流すると考えられる。

10世紀の所産と思われる遺物が出土したが、2区-C2との整合性から古墳時代の所産と考えたい。

2. 奈良・平安時代

検出された溝状遺構は3条である。いずれも掘り込みは浅く、遺構に伴う遺物は出土しなかった。

遺構形態は6区-2で確認された、奈良・平安時代の溝状遺構と類似する。

30号溝状遺構 (第105図 図版15)

位置：西部。南から北方向に走ると考えられる。北側は調査区域外に延び、南側は攪乱を受け、欠失する。

重複：なし。

形態：断面形は皿状を呈する。

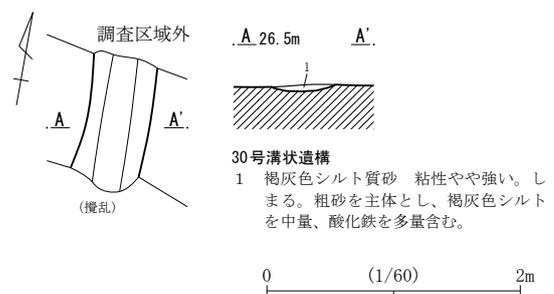
規模：長軸(1.1)m×短軸0.51m×深さ0.05m

長軸：N-10°-W

覆土：褐灰色シルト質砂の単層である。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と周辺状況より、奈良・平安時代と考えたい。



第105図 30号溝状遺構

32号溝状遺構 (第106図 図版15)

位置：東部。南から北方向に走ると考えられる。北側は攪乱を受け欠失し、南側は2区-C2に延びる。

重複：なし。

形態：断面形は皿状を呈する。

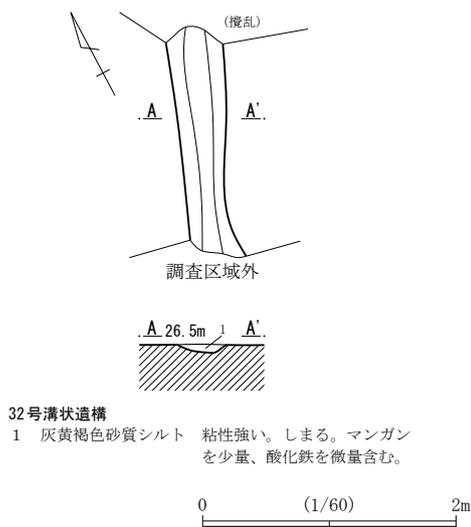
規模：長軸(1.74)m×短軸0.39m×深さ0.07m

長軸：N-28°-E

覆土：灰黄褐色砂質シルトの単層である。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：確認面と周辺状況より、奈良・平安時代と考えたい。



第106図 32号溝状遺構

33号溝状遺構 (第107図 図版15)

位置：東部。南から北方向に走ると考えられる。南側は2区-C2に延びる。

重複：なし。

形態：断面形は皿状を呈する。

規模：長軸(8.49)m×短軸1.26m×深さ0.1m

長軸：N-55°-E

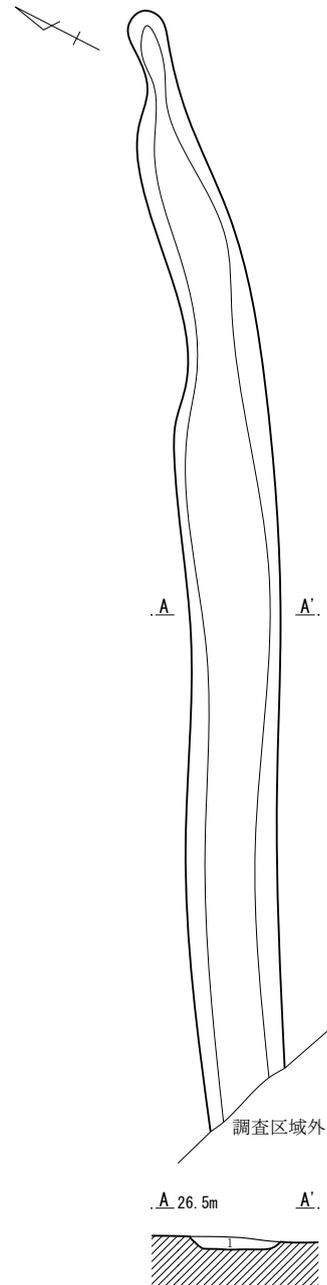
覆土：灰黄褐色砂質シルトの単層である。

遺物：遺物は出土しなかった。

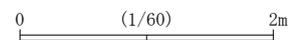
時期：確認面と周辺状況より、奈良・平安時代と考えたい。

所見

南側で2区-C2の47号溝状遺構か53号溝状遺構に合流する可能性が考えられる。



33号溝状遺構
1 灰黄褐色砂質シルト 粘性強い。しまる。マンガンを微量、酸化鉄を多量含む。



第107図 33号溝状遺構

第4節 流路

1. 奈良・平安時代

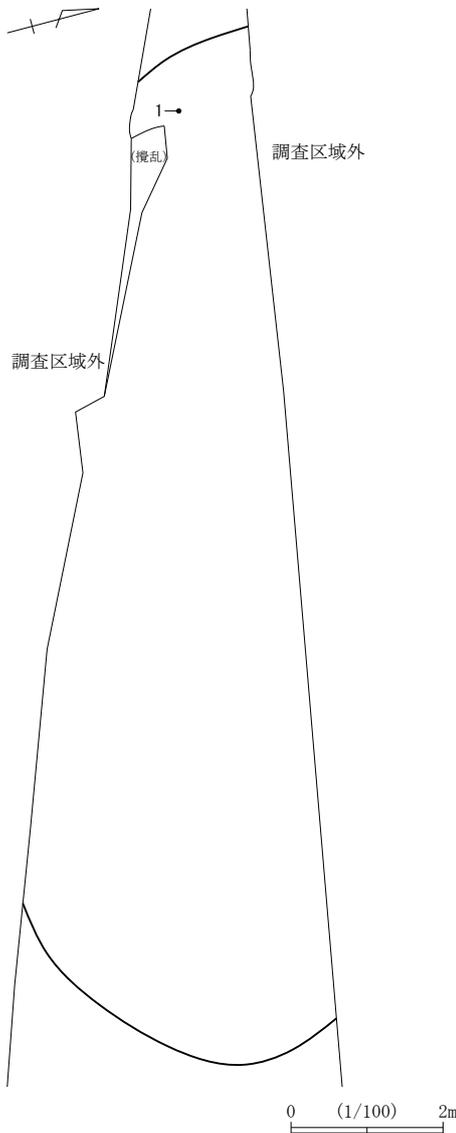
検出された流路は3条である。このうち、2号流路は6区-1の流路群との関連性から、第4章に記載した。

3号流路 (第108・109図 図版15・18)

位置：西部。北側は調査区域外に延び、南側は攪乱を受け、欠失する。

重複：6号流路を切る。

形態：調査区域内での平面は楕円形を呈するが、底面まで至らなかったため、断面



第108図 3号流路

形は不明である。

規模：長軸13.69m×短軸(4.0)m

主軸：N-76°-W

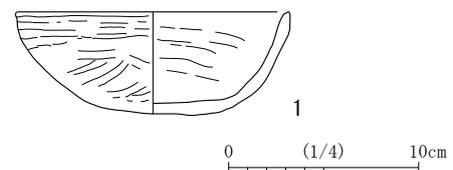
覆土：調査区北壁の土層観察ではV層を切り込み、流路の上部にはII a層(近世の水田層)が乗る状態がみられた。3号流路の主体となる土層は灰黒色シルト層であり、部分的に深堀したところ、灰黒色粘土層が厚く堆積し、途中から湧水が発生した。

遺物：土師器壺1点を図示した。口唇部内面に沈線が巡り、体部は内外面ともにヘラケズリ後に、ヘラナデを施している。器形は半球状を呈し、整形が粗雑なためか、特に体部下位から底部にかけて歪みが生じている。8世紀前半の所産と考えられる。

時期：調査区北壁の精査から、V層から切り込んでいることを確認したが、覆土上部にはII a層が堆積していた。ほぼ完形で出土した土師器壺の年代から、8世紀前半にはある程度埋没していたと考えられる。

所見

埼玉県埋蔵文化財調査事業団による、下田遺跡第2次調査では、形態が近似する第1号沼状遺構が確認されている。第1号沼状遺構では、土師器や石製紡錘車が出土したほか、多数の板材、木杭が発見されている。本流路も沼状遺構である可能性も考慮したが、積極的には断定できないことから、流路として報告する。



第109図 3号流路出土遺物

第32表 3号流路出土土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値 (cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	土師器 埴	覆土	口 径： 14.4 底 径： 5.4 器 高： 6.5 最大径： -	特徴：器面摩滅 外面：口縁部～体部ヘラケズリ後ヘラナデ 内面：口唇部沈線、口縁部～体部ヘラケズリ後ヘラナデ	胎 土：針、片、チャ 焼 成：普通 色 調：にぶい褐色 残存度：90%	在地産

6号流路 (第110・111図 図版18)

位 置：西部。南側は2区-C2へ延び、中央部は攪乱を受け欠失する。

重 複：3号流路に切られる。

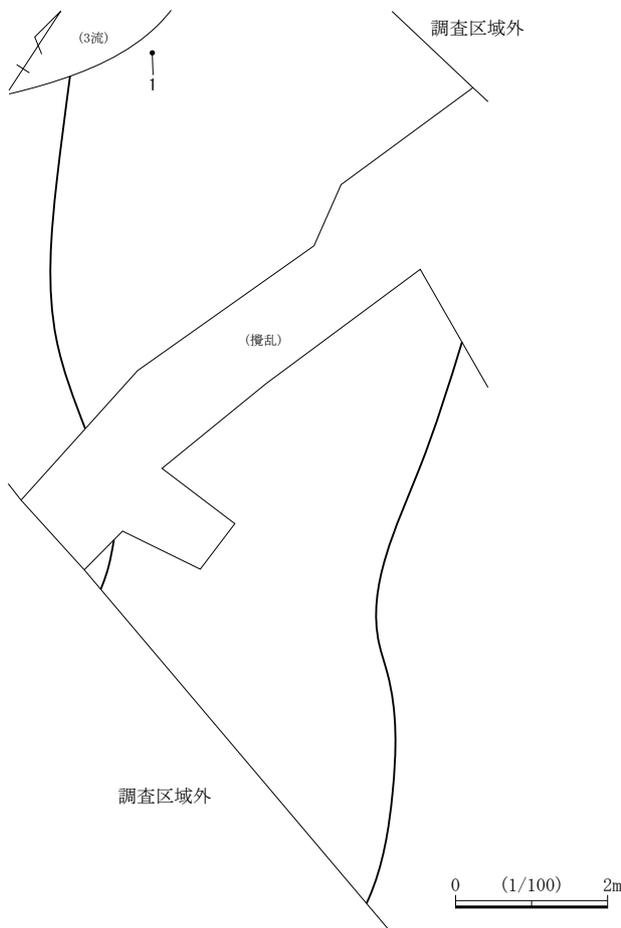
形 態：平面は南から北方向に向け、ほぼ直線的に延びる。断面形は、掘削途中で湧水が発生し、底面まで至らなかったため不明である。

規 模：長軸(19.72)m×短軸8.8m

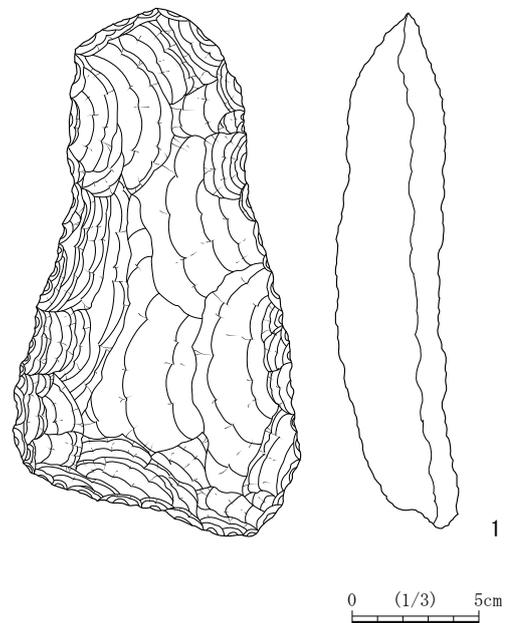
主 軸：N-32°-W

遺 物：打製石斧が1点出土し、図示した。摩滅が認められることから、流入物と考えられる。

時 期：切り合い関係より、8世紀前半には埋没していたと考えられる。



第110図 6号流路



第111図 6号流路出土遺物

第33表 6号流路出土石器観察表

番号	器種	石材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存度	備考
1	打製石斧	ホルンフェルス	覆土	21.2	10.2	4.1	775.0	100%	全面摩滅 弥生時代の所産か?

第5節 遺構外出土遺物(第112図 図版18)

本稿では、6区-3において、表土掘削から各遺構確認面までに部分的に残存していた遺物包含層、及び表土から出土した遺物のうち、8点を図示した。

1は土師器坏である。内外面には赤彩が施されているが、外面は流路による摩滅を受けた影響からか、部分的な剥離が散見された。

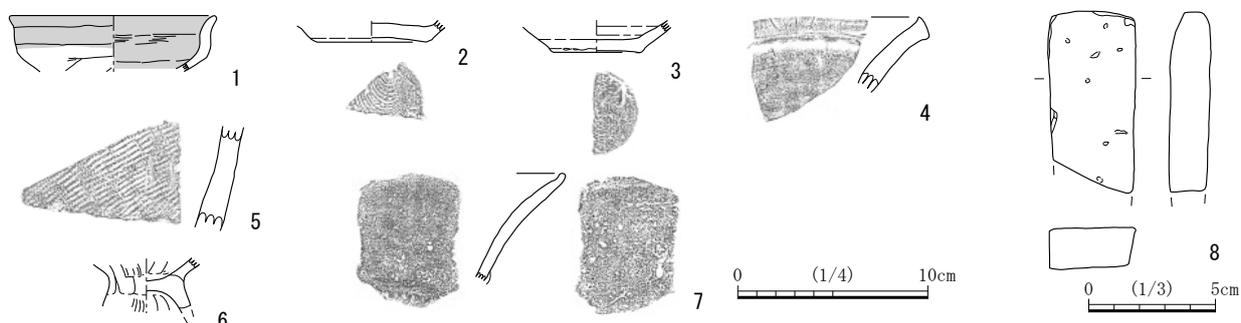
2・3は須恵器坏である。ともに胎土中に海綿骨針が確認されたことから、南比企産と考えられる。

4・5は須恵器甕である。4は口縁部片、5は胴部片である。精緻な胎土と比較的良好な焼成状態から、東金子産と考えられる。

6は土師器台付甕の底部片である。脚部も部分的な残存が認められたが、全体に重度の摩滅を受け、内外面から割れ口に至るまで丸みを帯びてしまっている。

7は縄文土器深鉢の口縁部～頸部片である。6と同様に摩滅を受けた影響で、内外面の特徴は判然としないが、頸部外面には僅かに隆帯文が認められた。

8は凝灰岩製の砥石である。



第112図 6区-3遺構外出土遺物

第34表 6区-3遺構外出土器観察表

()は推定、[]は残存高

番号	種別	出土位置	計測値 (cm)	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	土師器坏	-	口径：(10.6) 底径：- 器高：[3.0] 最大径：-	特徴：内外面赤彩 外面：口縁部～体部上半ナデ、体部下部ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	胎土：石、長、片、チャ、赤 焼成：普通 色調：にぶい橙色 残存度：10%	
2	須恵器坏	-	口径：- 内底径：(5.6) 底径：(5.6) 器高：[1.1] 最大径：-	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：-	胎土：針、石、長、チャ 焼成：普通 色調：灰白色 残存度：破片	南比企産
3	須恵器坏	-	口径：- 内底径：(4.0) 底径：(4.6) 器高：[1.7] 最大径：-	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	胎土：針、片、チャ 焼成：普通 色調：灰白色 残存度：底部40%	南比企産
4	須恵器甕	-	口径：- 底径：- 器高：[4.0] 最大径：-	外面：ヨコナデ 内面：ヘラナデ	胎土：石、長、チャ 焼成：良好 色調：灰色 残存度：破片	東金子産
5	須恵器甕	-	口径：- 底径：- 器高：[5.5] 最大径：-	外面：タタキ 内面：ヘラナデ	胎土：石、長、角、チャ 焼成：普通 色調：灰色 残存度：破片	東金子産
6	土師器台付甕	-	口径：- 底径：- 器高：[3.0] 最大径：-	外面：ナデ、一部ハケ 内面：ヘラナデ	胎土：角、凝、チャ、白 焼成：普通 色調：にぶい橙色 残存度：底部100%	
7	縄文土器深鉢	-	口径：- 底径：- 器高：[5.9] 最大径：-	特徴：器面摩滅 外面：頸部隆帯文か？ 内面：口唇部～口縁部沈線	胎土：片、チャ 焼成：普通 色調：黒褐色 残存度：破片	縄文時代後期

第35表 6区-3遺構外出土石製品観察表

番号	器種	石材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存度	備考
8	砥石	凝灰岩	-	[7.4]	3.5	1.7	69.3	80%	片側先端部欠損

第7章 自然科学分析

第1節 樹種同定および放射線炭素年代測定

はじめに

下田遺跡6区の遺構から出土した炭化物や木材について、種類の同定と年代測定を実施し、年代観や用材に関する情報を得る。

1. 試料

分析試料は、遺跡より出土した炭化物8点、生材1点の計9点である。試料の詳細に関しては樹種同定結果と合わせて第36表に記す。

2. 分析方法

(1) 樹種同定

炭化材の同定は、年代測定の試料調整の際に削り落とした部分を用いる。木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の各切片を作成し、双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で観察する。生材は、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の各切片を作成し、ガムクロラールを用いてプレパラートに封入し、光学顕微鏡で観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。なお、No. 2は双眼実体顕微鏡観察の結果灰化していたため、そのまま電子顕微鏡による観察を行った。

(2) 放射性炭素年代測定

炭化材は、実体顕微鏡で観察し、周囲を削り落として付着物等を取り除き、乾燥重量で50mg程度に調整する。生材は、水分を多量に含んでいるため、湿ったままの状態でも周囲を削り落とし、500mg程度に調整する。

塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lである。なお、試料が脆弱な場合、炭素の損耗が激しく、分析に必要な炭素量が得られない場合がある。このため、試料によってはアルカリの濃度を薄めて処理を行う(AaAと記載)。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cube とIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置(NEC社製)を用いて、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;

第1節 樹種同定および放射線炭素年代測定

68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver&Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4 (Bronk, 2009)、較正曲線はIntCal20(Reimer et al., 2020)である。

なお、No. 2は顕微鏡観察の結果、ほとんどが灰分で有機質が残っていないことから、年代測定用試料としては不適であると判断し、年代測定は行っていない。

3. 結果

(1) 樹種同定

結果を第36表に示す。検出された種類は、炭化材5種類(クルミ属、コナラ亜属コナラ節、サクラ属、ムクロジ、イネ科草本類)、生材1種類(ヤナギ属)である。またNo. 2の灰は電子顕微鏡観察の結果、イネ科由来の棒状珪酸体が多数みられたが、種類を特定できる機動細胞珪酸体や短細胞珪酸体は検出されなかった。以下に検出された木材等の植物解剖学的所見を記す。

・ヤナギ属 (*Salix*) ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または数個が複合して散在する。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1～15細胞高。

・クルミ属 (*Juglans*) クルミ科

散孔材で、道管径は比較的大径、単独または

2～3個が散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織はほぼ同性、1～3細胞幅、1～40細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus subgen. Quercus sect. Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔、壁孔は交互状に配列。放射組織は同性、単列、1～20細胞高程度のものと複合放射組織とがある。

・サクラ属 (*Prunus*) バラ科

散孔材で、年輪のはじめにやや大型の道管が配列し、孔圏外でやや管径を減じた後、単独または2～6個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～6細胞幅、1～60細胞高。

・ムクロジ (*Sapindus mukorossi* Gaertn.) ムクロジ科ムクロジ属

環孔材で、孔圏部は1列、孔圏外で急激に径を減じたのち、塊状に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔、壁孔は交互状。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～40細胞高。柔組織は带状およびターミナル状。

・イネ科草本類 (*Grass*)

小径の道管の左右に1対の大型の道管があり、

第36表 樹種同定結果

No.	遺構名	層位	性状(種類)	備考
1	3号堅穴状遺構	覆土	炭化材(ムクロジ)	
2	3号堅穴状遺構	覆土	灰(イネ科)	炭化物ではなく、測定不能
3	4号堅穴状遺構	2層	炭化材(コナラ亜属コナラ節)	
4	3号堅穴状遺構	覆土	炭化材(クルミ属)	
5	3号堅穴状遺構	1層	炭化材(クルミ属)	
6	9号流路	覆土	炭化物(イネ科草本類)	
7	15号流路	覆土	炭化材(サクラ属)	
8	15号流路	覆土	炭化物(イネ科草本類)	
9	16号流路	覆土	生材(ヤナギ属)	

その外側に師部細胞がある。これらを繊維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成する。繊維細胞が薄い。維管束は組織中に散在するが、茎の周辺は小型で密度が高く、髄は大型で密度が低い。年代測定の $\delta^{13}\text{C}$ の値からイネ科の中でもC4植物と考えられる

(2) 放射性炭素年代測定

結果を第37表に示す。ほとんどの炭化材は定法での分析処理が可能であったが、一部化学的に脆弱な試料があり、これらは試料の損耗を防ぐためアルカリの濃度を薄くする（第37表に記載）。いずれも、測定に必要なグラフアイトは得られて

第37表 放射性炭素年代測定結果

試料 No.	遺構	分析方法	補正年代 (暦年較正用)BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正結果				Code No.	
					年代値			確率%		
No. 1	3号堅穴状遺構	AAA (1M)	1780 ± 20 (1781 ± 22)	-28.46 ± 0.55	σ	cal AD 240 - cal AD 255	1710 - 1695	calBP 18.0	YU- 14466	pal- 13694
						cal AD 286 - cal AD 325	1665 - 1625	calBP 50.2		
					2 σ	cal AD 277 - cal AD 263	1724 - 1688	calBP 28.8		
						cal AD 276 - cal AD 341	1674 - 1610	calBP 66.6		
No. 3	4号堅穴状遺構	AAA (1M)	2165 ± 20 (2163 ± 22)	-28.38 ± 0.50	σ	cal BC 347 - cal BC 315	2296 - 2264	calBP 31.5	YU- 14467	pal- 13695
						cal BC 205 - cal BC 168	2154 - 2117	calBP 36.8		
					2 σ	cal BC 354 - cal BC 283	2303 - 2232	calBP 42.0		
						cal BC 230 - cal BC 108	2179 - 2057	calBP 53.5		
No. 4	3号堅穴状遺構	AAA (1M)	1885 ± 20 (1885 ± 22)	-29.85 ± 0.43	σ	cal AD 128 - cal AD 175	1822 - 1775	calBP 46.3	YU- 14468	pal- 13696
						cal AD 180 - cal AD 203	1770 - 1748	calBP 22.0		
					2 σ	cal AD 83 - cal AD 96	1867 - 1854	calBP 3.6		
						cal AD 115 - cal AD 223	1835 - 1728	calBP 91.8		
No. 5	3号堅穴状遺構	AaA (0.05M)	1965 ± 20 (1967 ± 22)	-25.34 ± 0.49	σ	cal AD 22 - cal AD 81	1929 - 1870	calBP 60.3	YU- 14469	pal- 13697
						cal AD 99 - cal AD 109	1851 - 1842	calBP 8.0		
					2 σ	cal BC 33 - cal BC 16	1982 - 1965	calBP 5.0		
						cal AD 6 - cal AD 121	1944 - 1830	calBP 90.4		
No. 6	9号流路	AAA (1M)	1080 ± 20 (1079 ± 21)	-12.38 ± 0.54	σ	cal AD 900 - cal AD 918	1051 - 1033	calBP 22.4	YU- 14470	pal- 13698
						cal AD 973 - cal AD 996	977 - 955	calBP 37.5		
					2 σ	cal AD 1007 - cal AD 1015	944 - 935	calBP 8.4		
						cal AD 894 - cal AD 927	1056 - 1024	calBP 28.0		
No. 7	15号流路	AAA (1M)	1160 ± 20 (1161 ± 21)	-29.72 ± 0.42	σ	cal AD 776 - cal AD 786	1175 - 1164	calBP 10.1	YU- 14471	pal- 13699
						cal AD 831 - cal AD 852	1120 - 1098	calBP 15.3		
					2 σ	cal AD 874 - cal AD 895	1076 - 1055	calBP 22.1		
						cal AD 925 - cal AD 950	1026 - 1001	calBP 20.8		
No. 8	15号流路	AaA (0.05M)	1040 ± 20 (1041 ± 20)	-10.47 ± 0.43	σ	cal AD 772 - cal AD 790	1179 - 1161	calBP 12.5	YU- 14472	pal- 13700
						cal AD 821 - cal AD 903	1129 - 1048	calBP 52.2		
					2 σ	cal AD 915 - cal AD 975	1036 - 976	calBP 30.8		
						cal AD 995 - cal AD 1021	955 - 930	calBP 68.3		
No. 9	16号流路	AAA (1M)	1245 ± 20 (1246 ± 20)	-29.35 ± 0.38	σ	cal AD 987 - cal AD 1031	963 - 920	calBP 95.4	YU- 14473	pal- 13701
						cal AD 790 - cal AD 822	1248 - 1210	calBP 43.3		
					2 σ	cal AD 987 - cal AD 1031	1160 - 1129	calBP 25.0		
						cal AD 679 - cal AD 746	1272 - 1204	calBP 55.5		
2 σ	cal AD 759 - cal AD 779	1192 - 1172	calBP 4.8							
	cal AD 786 - cal AD 833	1165 - 1118	calBP 30.1							
2 σ	cal AD 852 - cal AD 875	1099 - 1075	calBP 5.1							

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68.2%が入る範囲) を年代値に換算した値。
- 4) AAAは、通常の酸・アルカリ・酸処理、AaAは通常よりアルカリの濃度を薄くした処理を示す。
- 5) 暦年の計算には、OxCal V 4.4を使用。
- 6) 暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
- 7) 較正データセットはIntCal20を使用。
- 8) 1桁目を丸めるのが慣例だが、較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 9) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.3%、2 σ が95.4%である。

第1節 樹種同定および放射線炭素年代測定

いる。同位体補正を行った値は、No. 1(3号竪穴状遺構)が 1780 ± 20 BP、No. 3(4号竪穴状遺構)が 2165 ± 20 BP、No. 4(3号竪穴状遺構)が 1885 ± 20 BP、No. 5(3号竪穴状遺構)が 1965 ± 20 BP、No. 6(9号流路)が 1080 ± 20 BP、No. 7(15号流路)が 1160 ± 20 BP、No. 8(15号流路)が 1040 ± 20 BP、No. 9(16号流路)が 1245 ± 20 BPである。

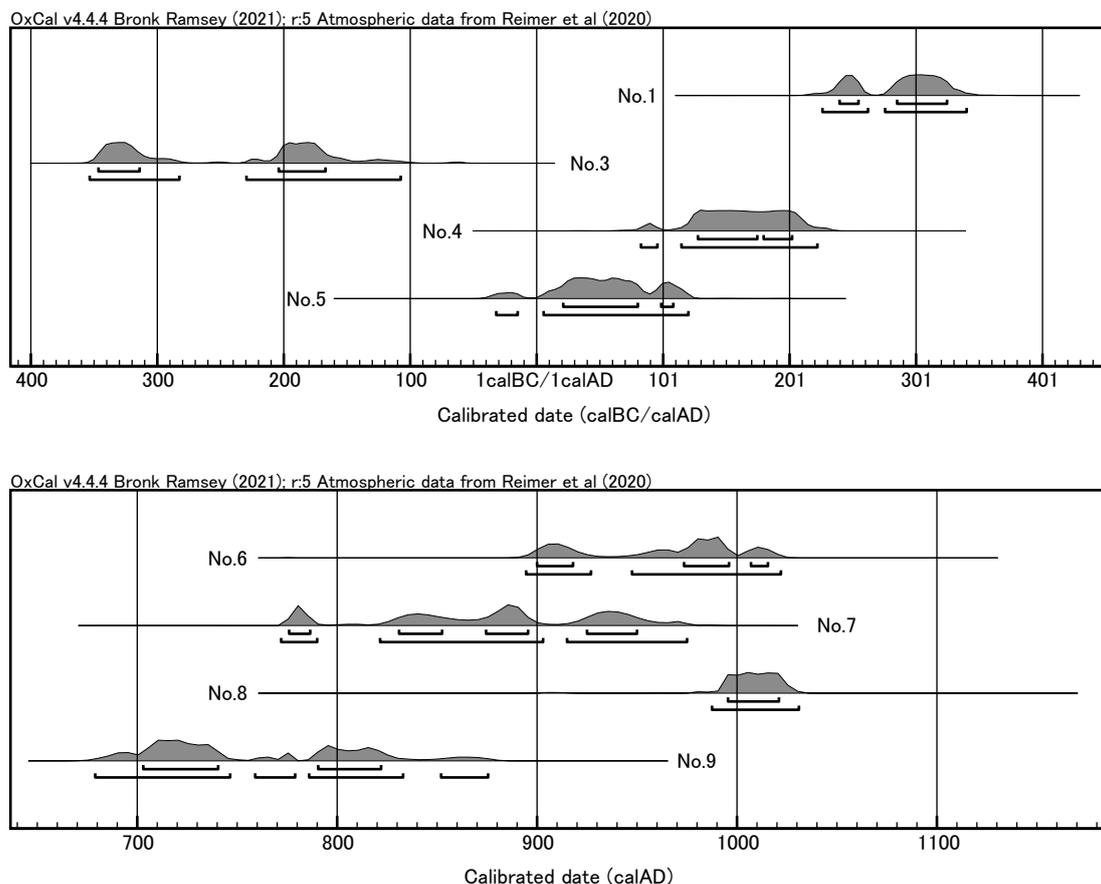
暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データセットは、IntCal20(Reimer et al., 2020)を用いる。2 σ の値は、No. 1(3号竪穴状遺構)がcalAD277 ~ 341、No. 3(4号竪穴状遺構)がcalBC354 ~ 108、No. 4

(3号竪穴状遺構)がcalAD83 ~ 223、No. 5(15号土坑)がcalBC33 ~ AD121、No. 6(9号流路)がcalAD894 ~ 1022、No. 7(15号流路)がcalAD772 ~ 975、No. 8(15号流路)がcalAD987 ~ 1031、No. 9(16号流路)がcalAD679 ~ 875である。

4. 考察

暦年代を第113図に示す。暦年でみると、No. 1、No. 3 ~ 5は弥生時代、No. 6 ~ No. 9は古代(奈良~平安時代)を示している。なお、前述したように、No. 2はイネ科由来の植物珪酸体を含む灰分で、有機質ではないことから、年代測定を行っていない(特殊な方法ではあるが、植物珪酸体の中にわずかに含まれる炭素を用いて年代測定を行った例は存在する)。

弥生時代の炭化材は、ムクロジ、コナラ亜属コ



第113図 暦年較正結果

ナラ節、クルミ属である。いずれも落葉広葉樹であり、人里や林縁、河川沿いなど明るい林地を好む。遺跡の立地環境からみて、これらが河川沿いを中心に生育しており、そこから木材を得ていたことが推測される。

古代の植物遺体は、ヤナギ属(生材)、サクラ属(炭化材)、イネ科草本類(炭化)である。ヤナギ属とサクラ属は、ともに落葉広葉樹であり、林縁、河川沿いなど明るい林地を好む。また炭化したイネ科草本は $\delta^{13}\text{C}$ の値が高く、C4植物だとわかる。C4植物は、温暖で乾燥した地域でも効率よく光合成を行うために進化した植物群で、イネ科やカヤツリグサ科等の一部にみられる。日本の草地でよくみられるイネ科としては、ススキやエノコログサ属、ヒエ属、キビ属がある。遺跡の立地環境からみて、これらは河川沿いを中心に生育し、そこから資材を得ていた推測される。

引用文献

- Bronk R.C., 2009, Bayesian analysis of Bronk R.C., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51, pp. 337-360.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, pp. 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, pp. 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, pp. 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, pp. 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, pp. 47-216.
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J., Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S., 2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon* 62, pp. 1-33.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (編), 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修) 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 海青社, p. 70.
- Stuiver M., & Polach A.H., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of ^{14}C Data. *Radiocarbon*, 19, pp. 355-363.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, p. 176.
- Wheeler E.A., Bass P. & Gasson P.E. (編), 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修) 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト., 海青社, p. 122.

第8章 まとめ

第1節 平安時代の土器について

はじめに

今回の調査では、6区-1の南側で2軒の竪穴建物と2基の竪穴状遺構などが確認され、各遺構から出土した土器は10世紀に位置づけられると考えられる。

8～9世紀においては、ロクロ成形の土器を登窯で還元焰焼成された須恵器と、非ロクロで成形された土器で焼成温度が低いために酸化焰焼成された土師器に大別される。須恵器については、器面の色調によって、還元焰焼成と酸化焰焼成に分類されることはあるが、単に焼成時の被熱温度の違いによって現れた状況と解される。

しかし、10世紀のロクロを使用して成形されながら酸化焰焼成に分類された土器については、「ロクロ土師器」・「須恵系土師質土器」・「土師質須恵器」などの呼称があり、長い間議論されてきたが統一されていない。

下田遺跡の10世紀の土器についても、状況は同じで、須恵器と分類できる土器についても、8～9世紀の須恵器とは質感が異なり、特に胎土・焼成に違いが見られ、須恵器として認識する基準を新たにする必要があった。

本書では、10世紀の供膳具(食器)については、「須恵器」・「(須恵器)」・「ロクロ土師器」の3種で表記した。

1. 須恵器とロクロ土師器

下田遺跡は地理的に南比企窯跡群に近い位置にある。遺跡の北側を流れる越辺川を挟んで、南比企窯跡群を擁する比企郡鳩山町に隣接する。越辺川は坂戸市と鳩山町の境を東方向に流れ、途中、下田遺跡に大きな影響を与えてきた高麗川と合流

し、さらに入間川と合流している。

地理的な位置関係から、10世紀の須恵器は、南比企窯跡群の終末期に当たる須恵器窯である境田窯跡の製品が参考になる。

境田窯は掘り込みの浅い半地下式窯で、隣接して粘土採掘坑も確認されている。境田窯に伴う製品は灰原出土の須恵器が報告されている。口唇部が肥厚し、口縁部が大きく開く器形を示し、内底径は4cmを下回る土器が多い。

胎土は粗い砂粒を多く含み、焼成もあまり良いとは言えず酸化焰焼成である。胎土・焼成については8～9世紀の南比企窯跡群の製品からは大きくかけ離れる感がある。

ロクロ土師器とした土器の特徴は、器壁に残るロクロ目は弱い器厚は比較的薄手で安定し、色調は黄褐色・褐色・灰褐色などに発色し、焼成と質感は土師器である。また、胎土も境田窯の製品よりも良好で、粗い砂粒は含まない。角閃石・長石・石英が目立つ土器も見られる。器形は基本的に坏類が主体である。

須恵器とロクロ土師器を比較した場合、器形・胎土・焼成に違いが認められる。

本書の遺物観察表には、須恵器とロクロ土師器の他に、カッコ付けで「(須恵器)」と表記した土器がある。この土器は、ロクロ成形で、胎土は須恵器と同様である。焼成状態が須恵器より悪く、土師質に近い酸化焰焼成である。色調も土師器色の褐色から須恵器に近い灰色までバラエティーに富む。ロクロ成形、底部糸切、胎土が須恵器に近似することから、須恵器から変容した土器と捉え、(須恵器)と表記した(坏を中心とした供膳具の分類上の表記で、名称ではない。あくまでも本書のみの使用である)。

2. 下田遺跡の土器

下田遺跡6区出土の10世紀の土器を第114図にまとめた。各器種の特徴を概観してみたい。

須恵器 (第114図1～3)

1は南比企窯跡終末期の製品で、境田窯などの製品に器形・胎土・焼成が類似する。

2の底部には回転糸切りが残る。3は高台付埴であるが、高台が欠損している。胎土・焼成は1の埴に似る。

いずれの土器も、8～9世紀の須恵器より粗い砂粒を含む胎土と酸化焰焼成が特徴となる。強いあげれば2の酸化焰焼成は須恵器に近い。

(須恵器) (第114図4～6)

4は口縁部が大きく開く器形を示し、須恵器埴と同様の器形を示す。外面のロクロ目が顕著であるが、須恵器と比べると焼成状態が良くない。温度が十分に確保できない環境での焼成で、登窯の製品では無い可能性が高いと思われるが、胎土に白色針状物質(海綿骨針)を含む。

5は高台付埴の底部である。高台の形状が台形を示し、ロクロ土師器の台部とは異なる。6はいわゆる小皿に分類され、年代は10世紀後半であろう。小皿はロクロ土師器に分類されているが、本資料は胎土が須恵器に近似し、淡黄色の色調である。5・6の胎土にはチャート・片岩が含まれ、下田遺跡近くで採取された粘土を使用していると考えられる。

ロクロ土師器 (第114図7～12)

7は高台付埴、8は高台付埴になると思われる。9は推定口径が15.6cmと大きいのが、須恵器埴のように口縁部が開く器形である。10～12は高台付埴の底部である。

ロクロ土師器は高台付が多く、高台は回転糸切り後底部腰部から外側に向いて貼付けられ、台の端部は丸く収められている。

ロクロ土師器に分類した土器には、白色針状物

質を含むものが散見され、下田遺跡から南比企窯跡群の周辺で採取された粘土を使用していると考えられる。

土師器埴 (第114図13・14)

13・14は非ロクロ成形の土師器埴である。口唇部は横方向のナデ、体部外面は横方向のケズリ、内面は横方向のナデがそれぞれ施される。

15号流路からも同様の土師器埴が出土しており、1号堅穴状遺構から出土した13・14とはもともと同一遺構から出土した可能性がある。

13・14の胎土には白色針状物質を含み、15号流路出土の土師器埴ではチャート・片岩・凝灰岩などが含まれ、下田遺跡周辺で採取された粘土を使用していると思われる。

黒色土器 (第114図15)

2号堅穴状遺構から出土した。黒色土器は遺跡全体を通して15のみの出土で、破片も発見されていない。ロクロ成形で、外面底部近くは横方向のヘラケズリで調整し、黒色処理した内面は斜方向の細かいナデが施されている。

下田遺跡が位置する入間・比企地域は、埼玉県の他地域に比べても、黒色土器の出土数は少ないようである(渡邊2019)。また、2号堅穴状遺構から、16の灰釉陶器とともに出土したことは、遺構の性格を反映したものと考えられる。

灰釉陶器 (第114図16)

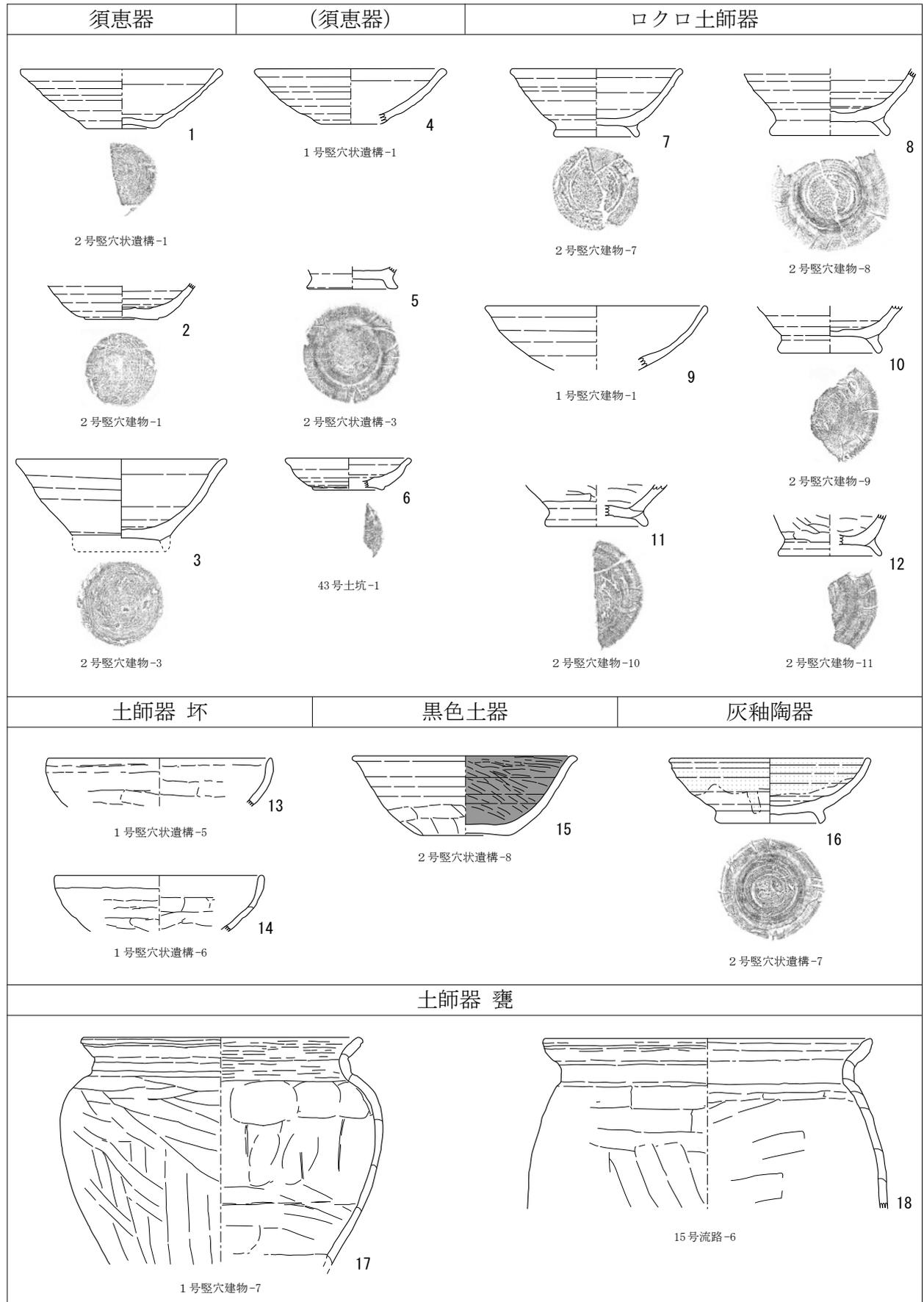
黒色土器と同様、2号堅穴状遺構から出土した。灰釉陶器は他の遺構からも出土しているが、いずれも小片であり、器形を知ることができる土器は16のみである。

釉薬は漬け掛けとみられ、10世紀中葉から後半の製品であろう。

土師器甕 (第114図17～29)

土師器甕は口縁部の形状・肩の張りなどの違いで数種に分類できそうで、これ以外に小型甕が存在する。

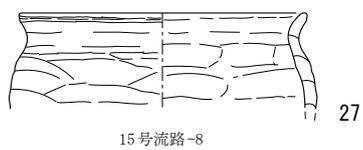
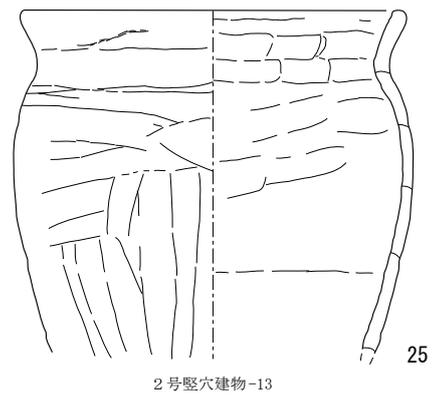
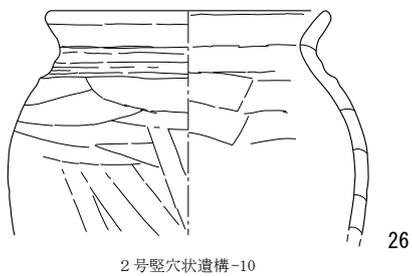
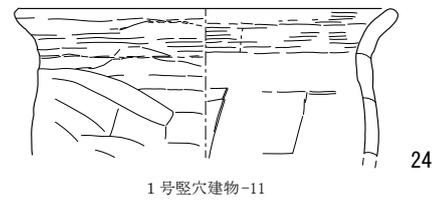
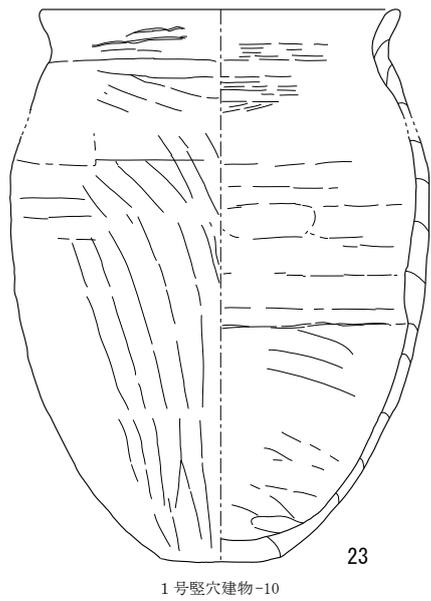
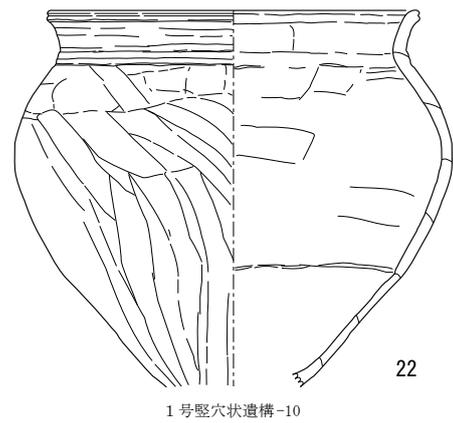
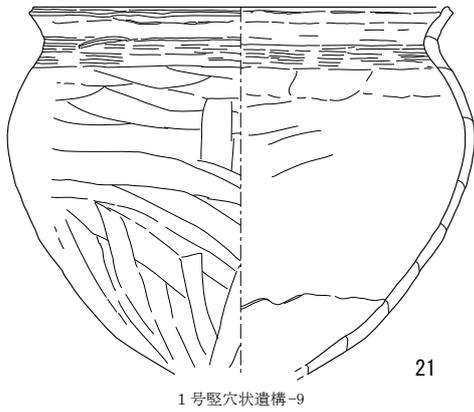
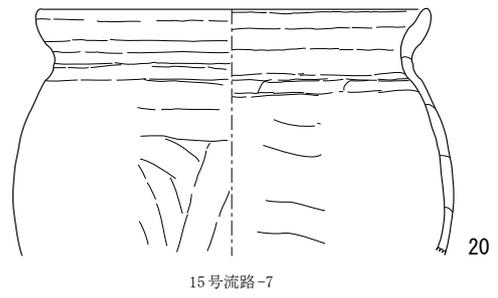
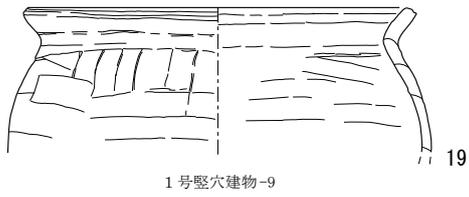
第1節 平安時代の土器について



第114図 平安時代の土器

0 (1/4) 10cm

土師器 甕



0 (1/4) 10cm

第1節 平安時代の土器について

17・18は口縁部が「コ」の字状を示し、口唇部には沈線がめぐる。17は肩部が張る器形である。共に、肩部付近は横から斜め方向、それ以下は縦方向のヘラケズリを施す。

19～22は口縁部が「く」の字状を呈する一群で、いずれも口唇部に沈線が巡り、20は口唇部が肥厚する。外面の調整は肩部が横から斜め方向、胴部は縦方向のヘラケズリが施される。また、胴部最大径が口径を超えており、丸みを持った肩部が張りだす器形となる。21・22の胎土には白色針状物質が含まれる。

23～25は口縁部の屈曲がなだらかで、他の土器に比べて口縁部の幅がやや長くなる。肩部～胴部の張りも弱く、口径と胴部最大径が近い。口唇部の沈線は見られない。

26・27は小型甕で、28・29は小型甕の脚である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、27の口唇部には沈線が巡る。脚は短く、器壁が厚く作られ、胎土に白色針状物質を含む。

土師器甕には胎土・焼成・色調に共通性が認められ、素地の粘土と焼成状況が共通していたと考えられる。他の器種と同様、胎土にチャート・片岩・凝灰岩などが含まれ、白色針状物質を含む土器が一定量存在する。

土師器甕の出土が多い遺構で、破片までを対象として白色針状物質を含む土器の割合を算出すると10%前後の含有率が多く、1号竪穴状遺構では45%にまで達した。胎土に含まれる砂粒から、遺跡周辺から採取した粘土を素地として、土師器甕を生産していたと考えられる。

3. 土器製作の地域色

これまで、下田遺跡6区から出土した10世紀の土器を中心に、3種に分類した土器についてそれぞれの特徴を主に記述してきた。

南比企窯跡群の終末期の須恵器が、多くはない

が一定量出土した。これらの須恵器は、8～9世紀の製品とは大きくかけ離れ、胎土・焼成においてこれまでの須恵器とは違いが見られ、酸化焰焼成が主体であることが特徴と言えそうである。他地域でこの須恵器が出土した場合、須恵器と積極的には分類できないかもしれない。

南比企窯跡の終末期に置かれている境田窯の製品が下田遺跡から出土した土器と類似し、この土器を基準に須恵器を分類した。

カッコ付けで表記した(須恵器)は、須恵器と分類するには躊躇する土器群である。境田窯の製品と近似し、ロクロ目が明確に残る土器が多く、胎土は粗い砂粒を含んでいる。土器の色調にばらつきが見られ、安定した温度で焼成されていないように見える。焼成状態も酸化焰焼成になり、断面観察では焼き上がりが甘く、焼成温度の低さが感じられる。

ロクロ成形であることは間違いなく、胎土から須恵器と同様の素地を使用していることが考えられ、須恵器との大きな違いは焼成方法と焼成温度になるのかもしれない。

ロクロ土師器については、名称そのものを否定する意見もあるが、胎土・色調など土器の質感は土師器と言え、ロクロ成形であることも間違いはない。実測した土器には含まれていないが、ロクロ土師器と分類した小片には胎土に白色針状物質を含む土器も散見された。

土師器甕は胎土・焼成・成形において、ある程度の統一感が見られた。やはり、胎土に白色針状物質を含む土器が一定量あることに注目したい。

南比企窯跡の終末期に当たる境田窯の製品に類似した須恵器が出土しているが、下田遺跡6区の10世紀の土器群は、南比企窯跡の終末期から解体された時期の製品と位置づけられる。

(須恵器)と表記した土器は粘土・成形からは須恵器に分類できるが、焼成の状態が須恵器とは異なる。解体された窯場に関与していた須恵器工

人が(須恵器)製作に主体的に関わっていたことは間違いないことである。

ロクロ土師器は他の土器とは胎土が異なり、分類した土器群の中では最も良好と言える。しかし、多くはないが白色針状物質を含む土器があることは注目したい。

土師器甕については、9世紀まで主体として存在した武蔵型甕は全く出土しなかった。須恵器窯場の解体と武蔵型甕の製作、あるいは流通が停止したのと時期を同じくしていたのであろう。

下田遺跡の土器群の組成の特徴としてあげられるのが、10世紀の集落では普遍的に出土する羽釜が全く出土しなかったことである。破片の出土もなかった。

4. 須恵器とロクロ土師器の狭間

10世紀の土器は、名称について議論が交わされ、ロクロ土師器の存在や、須恵質土器の名称に関して問題が提起されてきた。未だに統一した見解に達していないが、地域によって、焼成・胎土・製作技法などに違いが見られ、地域色が存在することが明らかになってきた。

下田遺跡では、南比企窯跡が解体され、須恵器工人が須恵器、カッコ付けで表記した須恵質土器、ロクロ土師器、土師器甕の製作に関与した可能性が考えられる。前述したとおり、いずれの器種にも白色針状物質が含まれており、南比企窯周辺から採取された粘土を使用して土器づくりが行われたことは間違いないであろう。須恵器、(須恵器)、ロクロ土師器はロクロ成形の土器であることから、須恵器工人の関与は首肯されるであろう。

下田遺跡周辺の奈良・平安時代の遺跡からは、土師器の製品が殆ど出土しない、土師器甕はすべて武蔵型甕が使われ、在地産甕の出土は武蔵型甕の流通が少ない時期に限られる。供膳具はすべて須恵器に置き換わり、土師器坏類はほぼ搬入品で

賄われ、その数量は少量である。

こうした状況下で、8～9世紀の土師器工人の存在は考えられない。従って、10世紀の土師器甕も須恵器工人が関与した可能性が高い。

須恵器とカッコ付きで表記した須恵質土器には、明確かつ具体的に須恵器との違いを提示することは難しい。これが未だに統一見解に達しない大きな要因で、使用される粘土と焼成状態などの土器製作環境が異なることに起因するためである。

かつて、酒井清治氏(1987)は「窯業生産体制の分散化、縮小化は生産品の多系化を生み出していった。(中略)「山の須恵器から里の須恵器」への転化である。」と表現している。

第2節 平安時代の集落について

はじめに

『下田遺跡3』では調査した下田遺跡をとおして、各時代の集落の変遷については触れてきたが、平安時代の集落に関しては堅穴建物の発見が少なく、確認された地域も調査区全体に及んでいない。

今回、新たに平安時代前期の堅穴建物2軒と堅穴状遺構2基を自然流路の近くで確認した。流路との関係性や堅穴建物の性格について考察し、これまで調査した堅穴建物を含めて集落構成について再度考えてみたい。

1. 6区-1の堅穴建物・堅穴状遺構

調査区の南端部近くに、2軒の堅穴建物と2基の堅穴状遺構が、それぞれ接近して構築されていた(第115図)。

1号堅穴建物はカマドを持たず、東壁寄りの床面に僅かな掘り込みが伴う炉が設けられていた。2号堅穴建物は北壁にカマドが構築されていたが、袖や火床面などが明確に認められなかった。

堅穴建物から出土した土器は須恵器・灰釉陶

第2節 平安時代の集落について

器・ロクロ土師器・土師器甕など、ほぼ同時期の土器であった。2軒は同時並存の可能性が高い。

カマドの使用痕跡が希薄で、1軒は炉が構築されていただけという状況から、竪穴建物は恒常的な使用ではなかったことが予想される。炉に対しては、羽釜の使用も考えられるが、今のところ下

田遺跡での羽釜の出土は見られない。こうしたことから、羽釜を常に設置した生活を送るのではなく、一時的な使用を示唆していると考えられる。

また、流路の上に堆積したV層を掘削して竪穴建物が構築されたことは、流路の影響で過去に居住地として選択できなかった地域において、新た



第115図 6区-1 平安時代遺構配置図

な進出であったことを意味する。

堅穴建物の周囲には円形の土坑が分布していた。

堅穴状遺構は堅穴建物の西側に位置し、14・15号流路の肩部(上部)近くに構築されていた。

1号堅穴状遺構は遺構確認調査を行っていた時点で遺物の散布が見られ、遺物の出土に合わせて掘り下げた結果、1号堅穴状遺構と15号流路が確認された。両遺構から出土した遺物はほぼ同時期で、接合関係にある須恵器甕も含まれている。

2号堅穴状遺構は14号流路と40号溝状遺構に挟まれた位置にあり、不整形を示す。中央北壁寄りの底面には焼土の堆積が認められた。掘り込みは伴わないが、焼土の堆積と、焼土直上の土層には炭化物・焼土粒が多く含まれていることから、火を焚く行為は単発でなかったことを意味している。

2基の堅穴建物から出土した遺物は須恵器杯・ロクロ土師器・灰釉陶器・土師器甕などで、堅穴建物とほぼ同時期であった。

2基の堅穴状遺構は、流路や溝状遺構の直近に構築されている。この地区は、幾条もの流路が集約するように、流路の位置を少しずつ変えながら流れていた。

こうした地理的特徴がある地域に、火を焚き、完形に近い灰釉陶器や黒色処理土器が出土した堅穴状遺構が近接して存在するのは、流路(河川)に対する祭祀的な関わりがあったと推測される。

2. 集落の特徴について

今回の調査成果を加え、平安時代前期(10世紀前半)の下田遺跡の集落の特色について考えてみたい。

これまで調査した下田遺跡の遺構分布図(第116図)からは、広範な水田跡と堅穴建物がまばらに分散していることが見て取れる。調査総面積約76,300㎡に対して堅穴建物9軒、堅穴状遺構2基は、ある程度のまとまりをもった集団が構成する集落とは言いがたい状況である。

堅穴建物を調査区ごとに見ると、2区-D1と2区-A2ではわずかに1軒だけである。最も堅穴建物が調査された地区は2区-B1の5軒で、今回の調査区6区-1の2軒と、隣接する埼玉県埋蔵文化財調査事業団(以下、県事業団と表記)が調査したⅡ区の2軒を合わせた4軒が続く。2区-B1の堅穴建物は5軒が近接しており、2時期が考えられるが、今回は10世紀前半の時間幅で考える。

遺跡の中央部から東側は水田跡が広がっており、確認された水田跡から範囲を推定するとかなりの広範囲にわたる。これに堅穴建物の位置を重ねると、水田跡の外縁部に分布している。特に2区-B1の5軒は1号流路を挟んで水田跡の近くに集中している。2区-A2の1軒は水田跡の外縁近くに位置する。

2区-B1の堅穴建物からは鉄製鎌と砥石が出土し、水田跡に対して何らかの作業を行っていたことを示唆する。

6区-1と県事業団Ⅱ区の堅穴建物は、自然流路が流れていた地区で、やはり水田跡の外縁部に位置する。

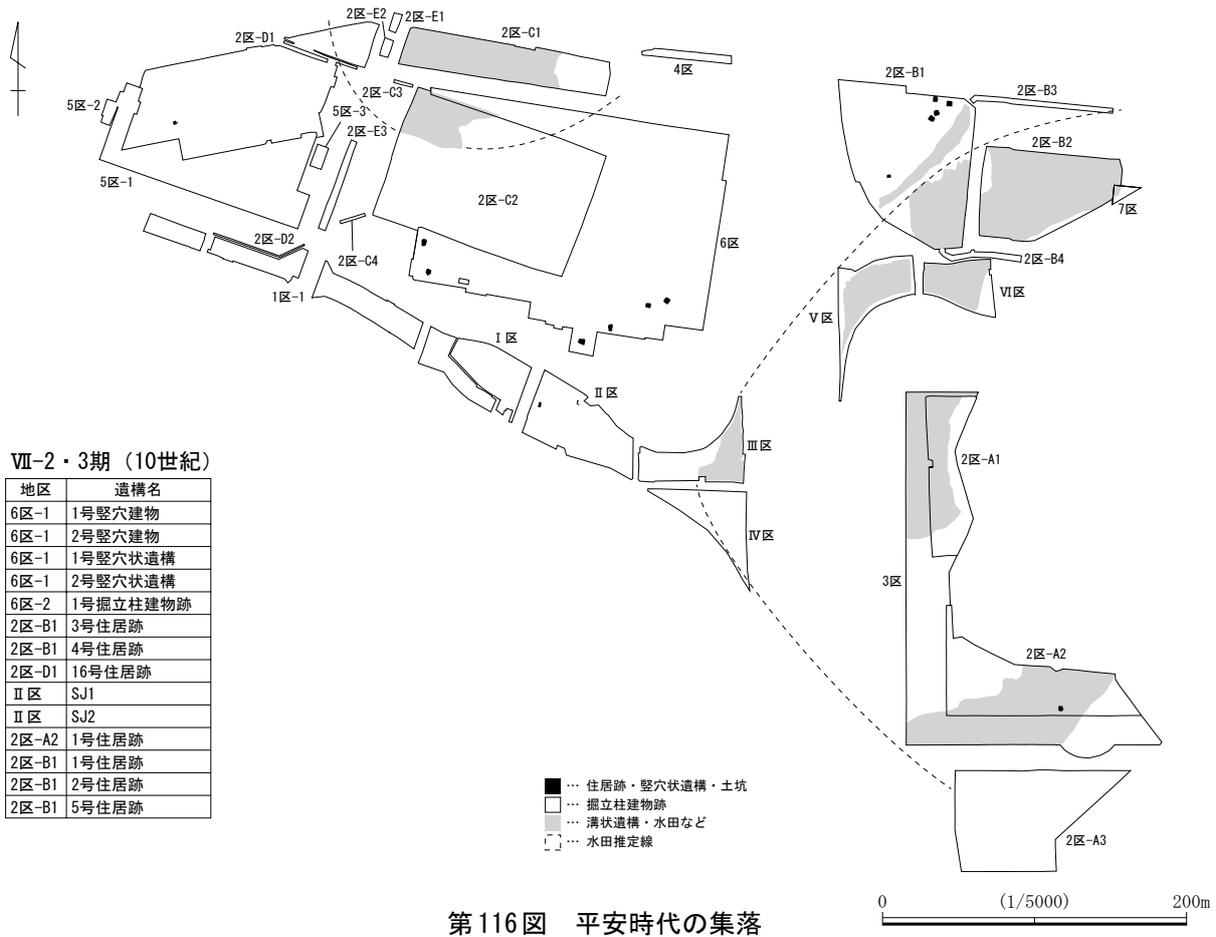
水田跡と堅穴建物の分布から、両者は密接に、なおかつ近い位置関係を保ち、両者で水田跡の景観を構成していると言える。

堅穴建物は水田跡の外縁部に立地することや単独で存在することで恒常的に住んでいなかった可能性が高い。6区-1の堅穴建物の状態を考慮すると、水田跡に対する農作業を支援するための建物であった可能性が高いであろう。

また、6区-1で調査した堅穴状遺構は流路に近接しており、祭祀を司った堅穴である可能性が高いことにも触れた。

水田と自然流路との関わりを視野に入れた堅穴建物と堅穴状遺構の配置であり、基本的集落の景観であったと言える。

第3節 流路と道路状遺構



VII-2・3期 (10世紀)

地区	遺構名
6区-1	1号竪穴建物
6区-1	2号竪穴建物
6区-1	1号竪穴状遺構
6区-1	2号竪穴状遺構
6区-2	1号掘立柱建物跡
2区-B1	3号住居跡
2区-B1	4号住居跡
2区-D1	16号住居跡
II区	SJ1
II区	SJ2
2区-A2	1号住居跡
2区-B1	1号住居跡
2区-B1	2号住居跡
2区-B1	5号住居跡

第3節 流路と道路状遺構

はじめに

今回の調査区である6区に、「コ」の字状に囲まれた前回の調査区2区-C2からは、多くの溝状遺構と流路が確認されている。溝状遺構か流路かを分類する基準として、規模と堆積土を重視した。特に、覆土に砂礫や礫層を含む溝を流路とした。また、規模はおおよそ幅1m前後、深さ0.5m前後を基準とし、これを超える溝を流路とした。従って、幅・深さにおいて規模がこれ以下は溝状遺構とした。

流路とした遺構は基本的には自然流路で、流れが移動しながら蛇行するのが基本であるが、短い距離で極端に蛇行する流路などは人為的に掘削された可能性が考えられる。さらに、自然流路とした遺構にも、炭化物が敷き詰められた状態が確認

され、近接する竪穴状遺構との遺物の接合関係が認められるなど、人為的関わりが予想される。

また、前回の調査ではピット列として報告した遺構が、道路状遺構の可能性が高いことが判明した。これは、日高市教育委員会で報告書が刊行された、『拾石』・『王神』・『宮久保』の道路状遺構が類似していることからである。特に、拾石遺跡では用水に並行して道路状遺構が構築されており、今回の調査区と2区-C2からは流路と道路状遺構が併存している。

さらに、道路状遺構と流路の位置関係や形態から類推すると、溝状遺構とした遺構も道路として機能したことが考えられる。

以上のように、自然流路であっても人為的関わりが予想され、近くに道路状遺構が何条も並行している状況から、流路と道路状遺構との関係性について考えてみたい。

1. 流路について

はじめに取り上げる自然流路(第117図)は、高麗川の流路の一部であったと考えられる。調査区では主に、6区-1・6区-3の東と2区-C2の東側にかけて確認された流路である。特に6区-1は大半が流路で占められ、調査区の70%前後は礫層で覆われていた。

6区-1の北壁と東壁の土層観察をとおして、各流路の切り合い関係がある程度把握できた。流路の形態と断面観察から、流路の新旧関係と変遷についてまとめてみたい。

(1) 自然流路

12号流路・13号流路(第117図)

12号流路・13号流路は、最も新しい耕作土と水田層(ほ場後の水田層)を掘削すると礫層で覆われた状況で確認された、2面・3面と掘り下げた調査を進めたが最終段階まで礫層が続いた。最終確認のため部分的な深掘りを行っても状況は変わらなかった。

12号流路と他の流路との切り合い関係は、すべての流路が12号流路を削っていた。

13号流路についても14号流路に切り込まれ、流路の西側(6区-2)はシルト層が広がっていたが、このシルト層は13号流路の覆土の上に乗るように堆積していた。

12号流路・13号流路は空中写真からも、他の地割と形状や方向が異なっていることが確認でき(第118図)、砂礫層の影響で水田として耕作することが難しい地区であったと予想される。

以上の状況から、12号流路・13号流路はシルト層が安定的に堆積する以前に形成された礫層で、この地域で基盤層として堆積した礫層が後世の流路などの掘削作用を受けながら、部分的に高まった状態で残った地点と考えられる。

4・9・14・15号流路(第117図)

4号流路は9号流路と重なり、9号流路が縮小して4号流路に転じたもので、同じ流路と考えられる。10号流路についても、9号流路へと流路の変更が起こったものと考えられる。調査区の平面観察と北壁の土層観察では、切り合った状況が見られたが、同じ流路が少しずつ移動していった結果の表れであろう。

9号流路は15号流路・2区-C2の3号流路と接続して、1条の流路となっている。14号流路も北側の2区-C2の2号流路と合流する。

14・15号流路は調査区南側から流入し、12号流路を巻き込むように流路を東方向に変えながら、調査区域外に流出している。

15号流路では、Ⅶ層の遺構確認調査を行っていたところ、流路の覆土内に炭化物層が流路に沿って広がっていることが確認された。流路を確認した位置から0.4～0.5m程下層に当たる。9号流路からも一部で炭化物層が堆積していたことが確認されている。炭化層の堆積は薄く、水平を保っている。人為的に敷かれた可能性が高い。

炭化材の放射性炭素年代測定の結果、2点の試料からは8世期後半から10世紀前半の年代が得られた(第113図・第37表)。

15号流路は隣接して確認された1号竪穴状遺構と同時期の遺物が一定量出土し、1点ではあるが接合関係も認められた。こうした遺物の出土状況から、1号竪穴状遺構と15号流路の炭化層は同時期に存在していたことも考えられる。

6区-1の南側ではスマートICの部分を県事業団により調査されており、14・15号流路の南側に当たる調査区(Ⅱ区第一面)では、平安時代の竪穴建物2軒、平安時代前期から中世の遺物が出土した第2号溝跡が調査されている。

また、Ⅱ区第三面で調査された第11・12号溝跡からは、炭化物が層状に堆積していたことが報

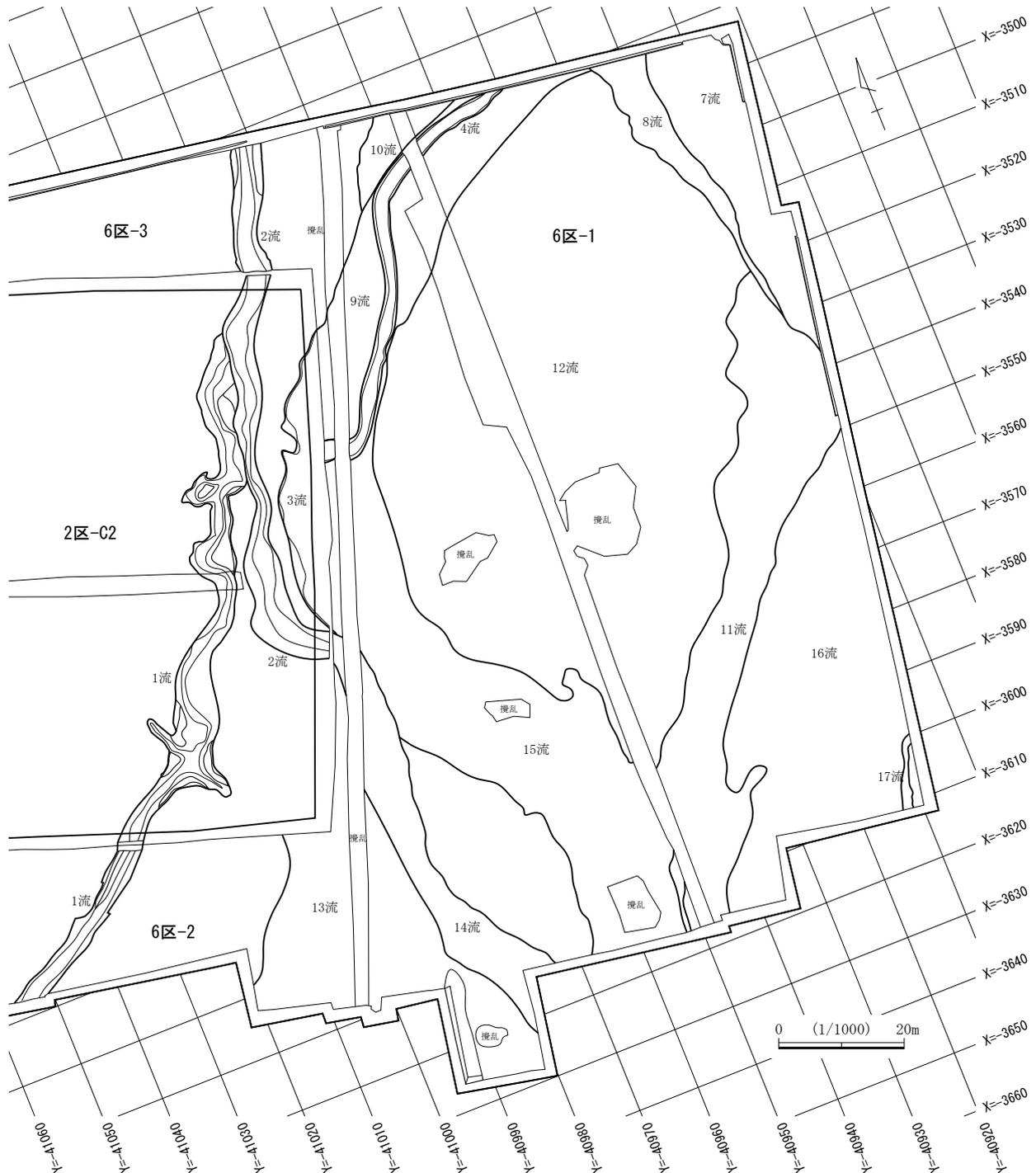
第3節 流路と道路状遺構

告されている

14号流路は第2号溝跡に合流していたのであろう。確認面に齟齬があるが、15号流路とは炭化物の層の堆積が共通し、第11・12号溝跡に合流すると予想される。県事業団で調査したⅡ区でも、14・15号流路は近接していたことが判明した。

7・8号流路(第117図)

6区-1の北東コーナー部近くで確認された。8号流路は7号流路と重なり、土層観察では7号流路が8号流路を切っている状況であった。また、8号流路が12号流路と9号流路・11号流路を切り込んでいた。7号流路は11号流路と16号



第117図 流路配置図

流路を切っていた。

以上の重複関係から、7・8号流路が最も新しい流路であることが分かる。しかし、県事業団が調査したⅢ区・Ⅳ区で流路は確認されていないようである。古墳時代前期の住居址を構築した層の下に潜ってしまったのか、さらに東側に流路があるのか、判然としないが、南東に大きく蛇行して6区-1の調査区に現れたのであろう。

11・16号流路（第117図）

11号流路と16号流路は重複した状態にあり、土層観察からは16号流路が11号流路を切り込んでいた。他の流路と同様、土層観察では新旧関係にあるが、流路の移動が表れたものと考えられる。従って、11号流路と16号流路は同じ流路で、流れが移動したものである。

11・16号流路は調査区の南側中央から15号流路とほぼ同じ位置から流入し、12号流路の東側を削って調査区の北東方向に流れているが、その先は7・8号流路で切られていた。

11・16号流路の上部にはV層が、0.6m前後の厚さで堆積していた。V層上面には10世紀前半の竪穴建物、土坑などが構築されていた。

流路の新旧と土層の堆積から、11・16号流路は12号流路より新しく、他の流路よりは古いものと考えられる。

（2）人為的流路

1・2号流路（第117図）

1号流路は6区-2の東側で、2号流路は6区-3の東側でそれぞれ調査された。

2区-C2の北東部で1号流路と2号流路が重なっており、これに6区-3の2号流路が合流する。2区-C2の1号流路は調査区の南部で6区-2の1号流路と合流する。結果、3地区で調査された流路は1条の流路と考えられる（以下、

各流路の番号を続けて、211流路とする）。

2区-C2の2号流路は東側から流入しており、6区-1の14号流路と合流し、県事業団が調査したⅡ区の溝跡に合流すると考えられる（以下、2214流路とする）。

211流路は2区-C2内では細かく蛇行し、蛇行部には突起状に張り出しが付属する。この類例として、日高市の拾石遺跡があげられる。遺跡の近くを流れる小畔川から水を引き込んだ用水として報告され、突起部は両岸に規則的に配置されている。

また、211流路の覆土には炭化物を含む土層が確認され、流路としての水量が少なくなった時期があり、流路としての役割を終えて埋められたのであろう。

2214流路も211流路程ではないが蛇行した流れがみられ、位置関係と出土遺物から県事業団のⅡ区の第2号溝跡（第一面）、第10号溝跡（第三面）に合流する可能性が高い。やはり覆土に炭化物を含む層がみられ、同時期の遺物がある程度まとまって出土していることは、人為的な流路であると判断されよう。

6区-1の9・15号流路は自然流路であるが、前述したとおり両流路と合流する溝跡では、炭化層が薄く堆積し人的行為が施されたと考えられる。

（3）流路のまとめ

前述したように6区-1は自然流路で大半が占められており、土層観察と流路の状態から、流路の流れ出した順番が判明した。

確認された流路は、高麗川の本流か支流であったと考えられ、6区-1の南側から調査区に流入している。7・8号流路は調査区の北東コーナー部で確認されているが、東壁の土層観察では流れの一部が表れていた。他の流路よりは全体に東に

第3節 流路と道路状遺構

寄っていた可能性があるが、調査区に近づくようにして11・16号流路と交差する位置にまで戻ってくる。

流路の新旧関係から、現在の高麗川に徐々に近づいて行ったことが分かったが、流路は規則的に順次近づいたのではなく、現在の流れに近づいたり、遠ざかったりを繰り返していたことも判明した。

4・7～13・16・17号流路は自然流路である。

1・2号堅穴建物と1・2号堅穴状遺構などの関係から、流路は10世紀前半には全て流れを止めて、11・16号流路が埋まった上部には完全にV層が堆積していた。

14・15号流路は流れが止まり、炭化物層と遺物の出土状態から、10世紀前半にはある程度の深さまで埋まり、炭化物層が敷かれていたと考えられる。近接して確認された1・2号堅穴状遺構とは、出土遺物が同時期であることから関連性がうかがえる。

人的に構築された流路として、6区-1の2号流路を合流する211流路と6区-1の14号流路が合流する2214流路ではないかと考えた。自然流路にある程度沿いながらも、違う方向を目指しているように見られ、後述する道路状遺構との関係性が考えられるからである。



第118図 流路重ね図(写真は昭和50年撮影)

0 80m (1/2000)

2. 道路状遺構について

前回の調査ではピット列や土坑として報告した遺構が、道路状遺構（連結状土坑）であることが判明した。今回の調査から1～4号道路状遺構として報告した。2区-C2のピット・土坑も改めて道路状遺構と認識して、この章で図を道路状遺構として修正し、概略を報告する。

(1) 2区-C2の道路状遺構

5号道路状遺構 (第119図)

位置：2区-C2のほぼ中央部。

規模：長軸6.9m×短軸1.32m×深さ0.15m

長軸：N-82°-E

時期：6区-2と同様に、奈良・平安時代と考えられる。

所見

51号溝状遺構や64号溝状遺構に隣接するが、長軸を同じにする遺構は近くに無い。連結状土坑が二重に連なっている。

6号道路状遺構 (第120図)

位置：2区-C2のほぼ中央部。

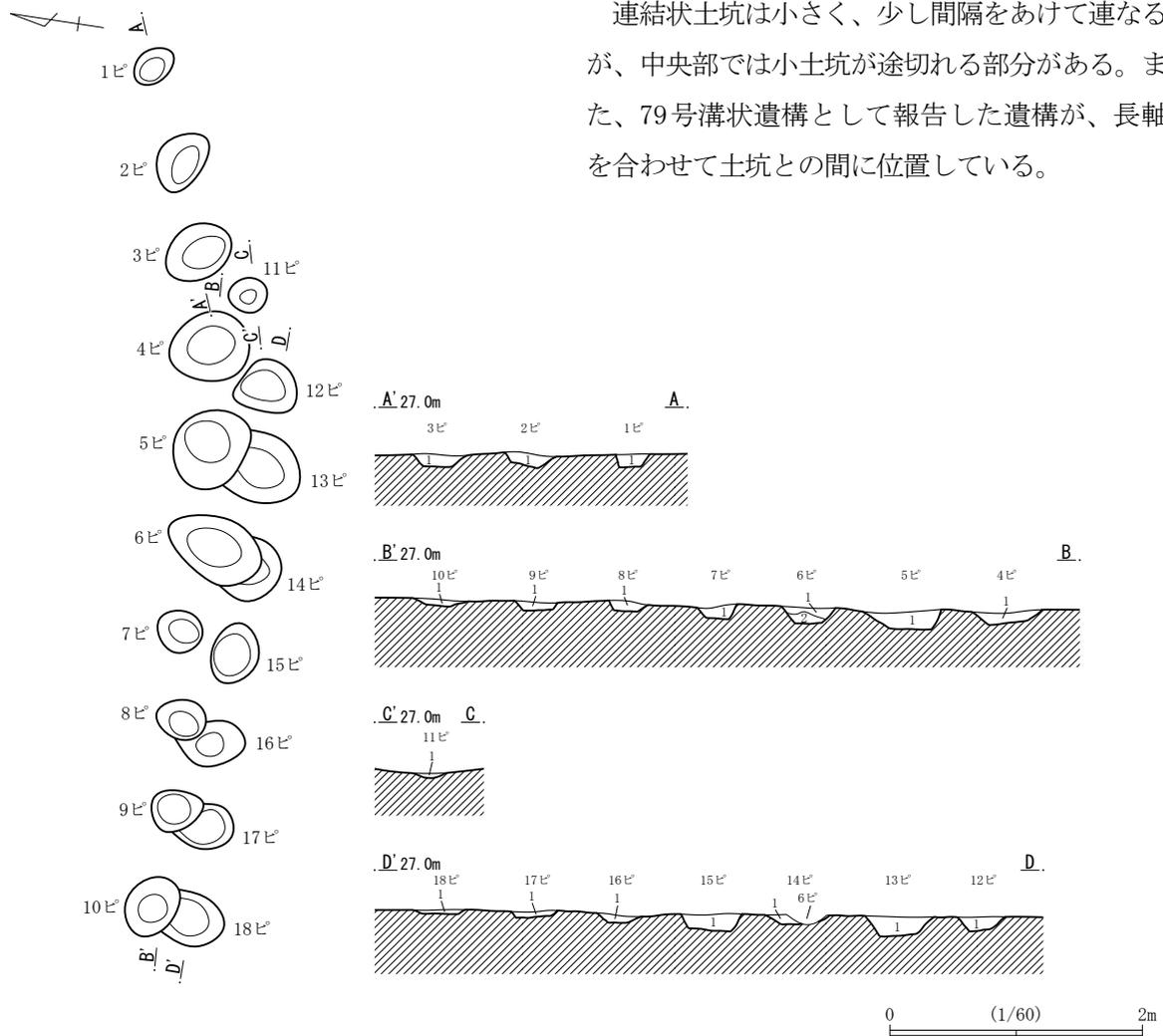
規模：長軸21.3m×短軸2.1m×深さ0.3m

長軸：N-55°-E

時期：6区-2と同様に、奈良・平安時代と考えられる。

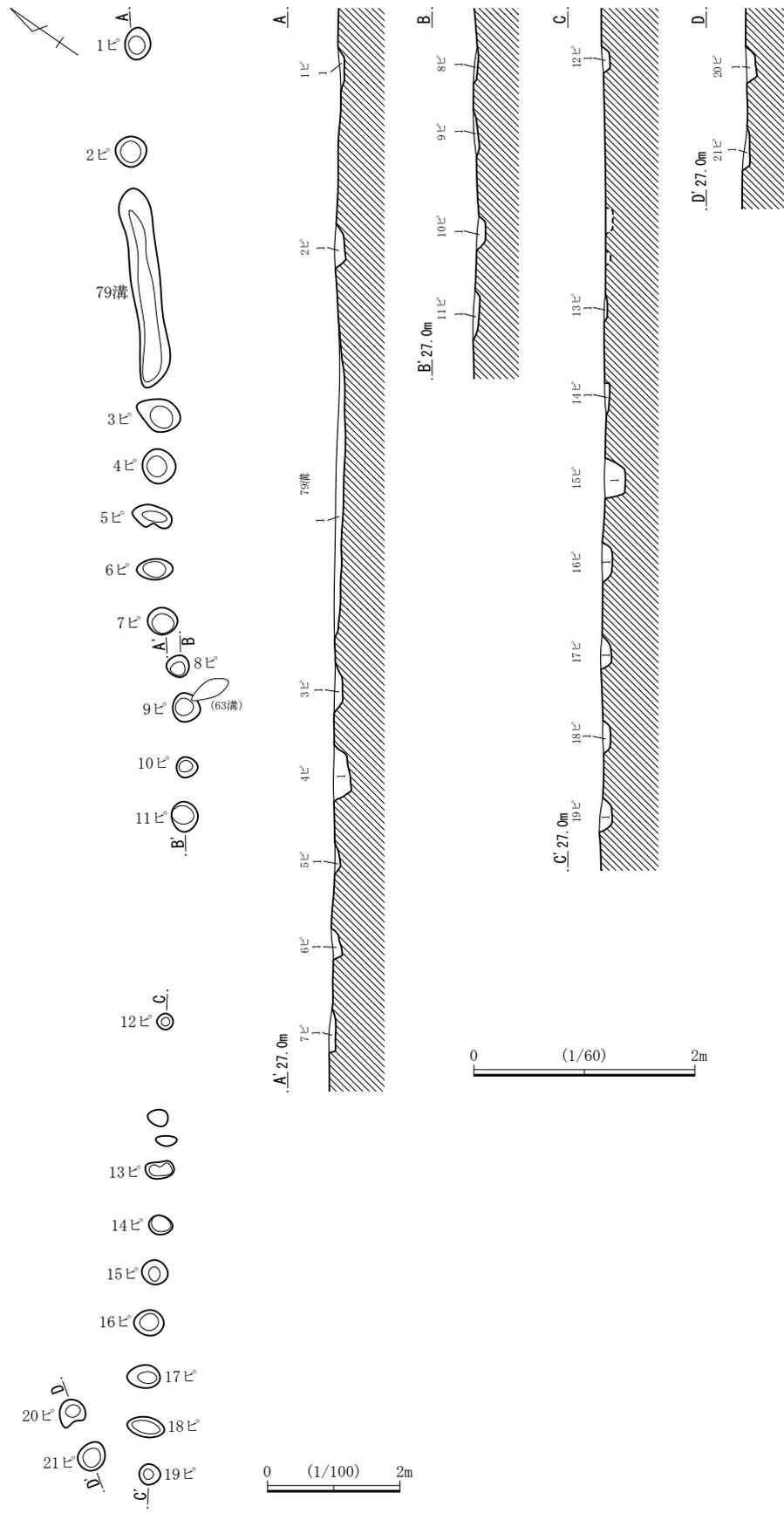
所見

連結状土坑は小さく、少し間隔をあけて連なるが、中央部では小土坑が途切れる部分がある。また、79号溝状遺構として報告した遺構が、長軸を合わせて土坑との間に位置している。



第119図 5号道路状遺構

第3節 流路と道路状遺構



第120図 6号道路状遺構

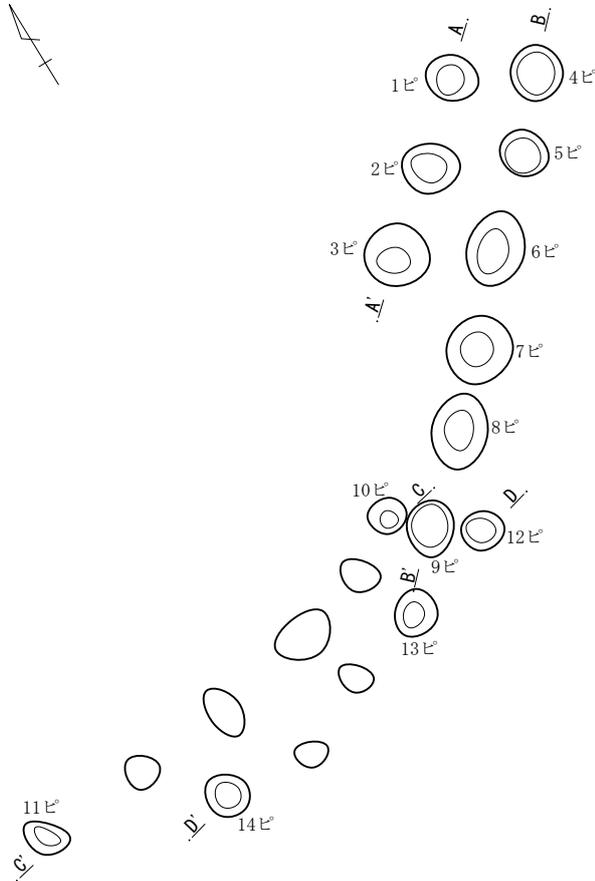
第121図 7号道路状遺構

7号道路状遺構 (第121図)

位置：2区-C 2のほぼ中央部。

規模：長軸6.54m×短軸0.72m×深さ0.12m

長軸：N-59°-E



時期：6区-2と同様に、奈良・平安時代と考えられる。

所見

6号道路状遺構の南側に位置し、6号に長軸が近い。連結土坑の規模と間隔が一定しない。土坑の平面に下端が表現されていないものは、上端の確認で終わったためである。

8号道路状遺構 (第122図)

位置：2区-C 2のほぼ中央部。

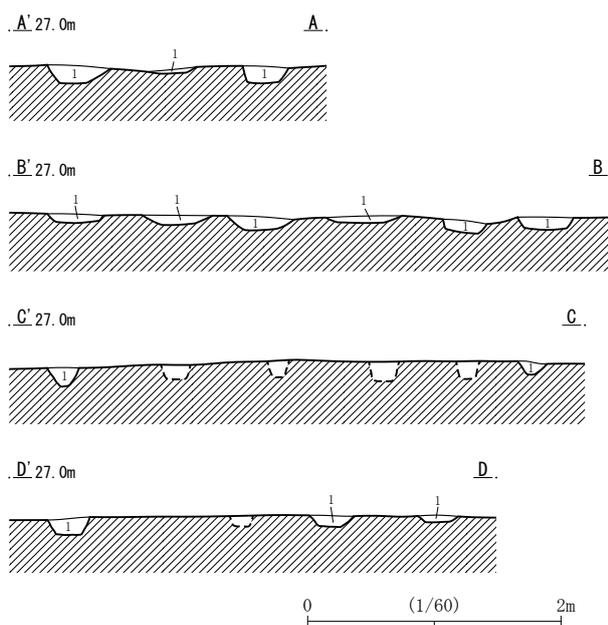
規模：長軸7.2m×短軸2.16m×深さ0.12m

長軸：N-59°-E

時期：6区-2と同様に、奈良・平安時代と考えられる。

所見

7号道路状遺構の南側に位置し、長軸を同じくする。連結状土坑が2列に並行し、土坑の規模にややばらつきが見られるが、間隔は一定を保っている。土坑の平面に下端が表現されていないのは、上端の確認で終わったものである。



第122図 8号道路状遺構

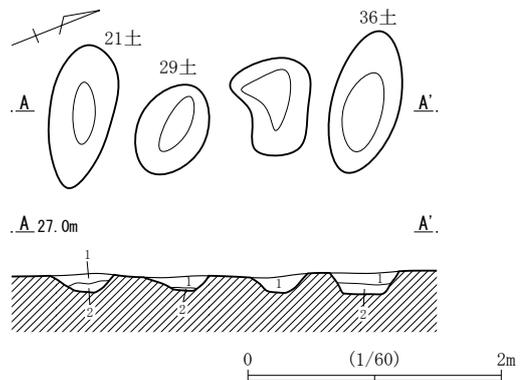
9号道路状遺構 (第123図)

位置：2区-C 2のほぼ中央部。

規模：長軸2.7m×短軸1.2m×深さ0.18m

長軸：N-22°-E

時期：6区-2と同様に、奈良・平安時代と考えられる。



第123図 9号道路状遺構

所見

8号道路状遺構の南に位置するが、長軸は東への振れ幅が少ない。土坑は近接し、細長い楕円形を呈する。『下田遺跡2』には、21・29・36号土坑として報告し、遺構番号を付していない1基は未報告のものである。

10号道路状遺構 (第124図)

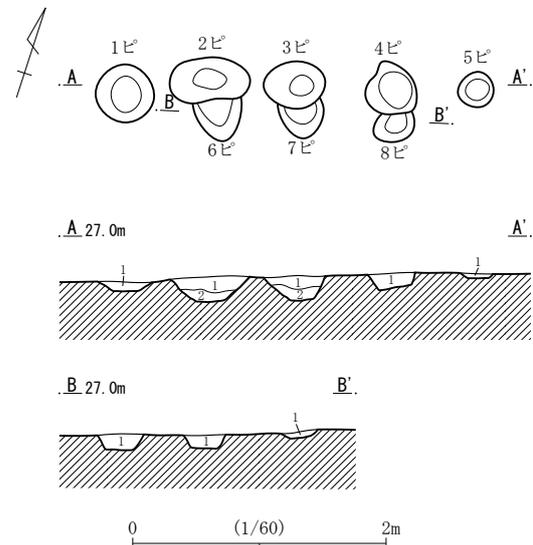
位置：2区-C2のほぼ中央部東寄り。
 規模：長軸3.0m×短軸0.66m×深さ0.18m
 長軸：N-72°-E
 時期：6区-2と同様に、奈良・平安時代と考えられる。

所見

溝状遺構が集中する地域に、1条だけ存在する状況で、77号溝状遺構と並行する。連結状土坑は一部が2基重複したような平面形を示す。

状土坑と溝から構成されており、これも道路状遺構と考えられる。

また、2区-C1で報告されたピット列も、道路状遺構として再報告する。



第124図 10号道路状遺構

11号道路状遺構 (第125図)

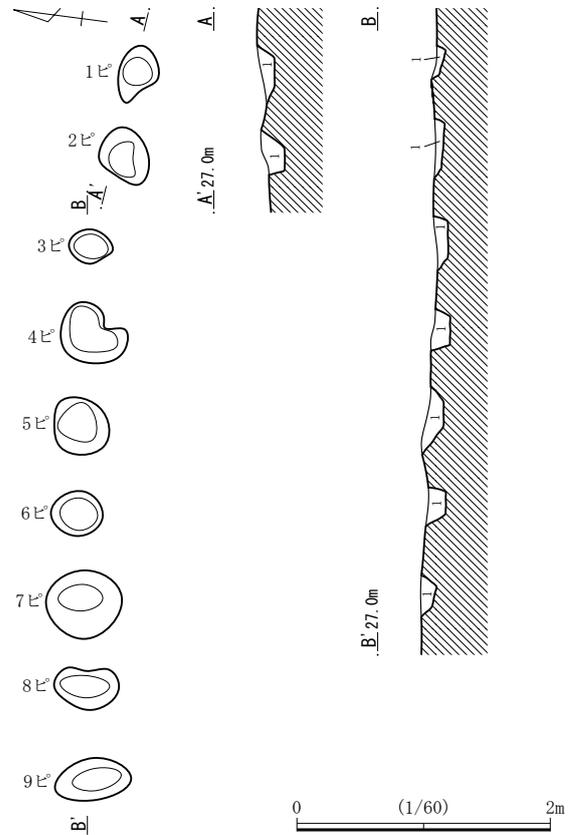
位置：2区-C2のほぼ中央部北寄り。
 規模：長軸5.76m×短軸0.72m×深さ0.18m
 長軸：N-72°-E
 時期：6区-2と同様に、奈良・平安時代と考えられる。

所見

53・54・57号溝状遺構に交差するようにある。連結状土坑は円形から楕円形を呈し、土坑は等間隔に近く配置されている。『下田遺跡2』には、一部、26・51・52号土坑、12・17・26・27・35号ピットとして報告した。

以上が2区-C2で新たに道路状遺構とした連結状土坑である。6～9号道路状遺構はそれぞれに遺構番号を付したが、一連の道路状遺構として捉えられる。

2区-C2の中央部やや西よりで調査された12号溝状遺構が報告されているが、平面形では連結

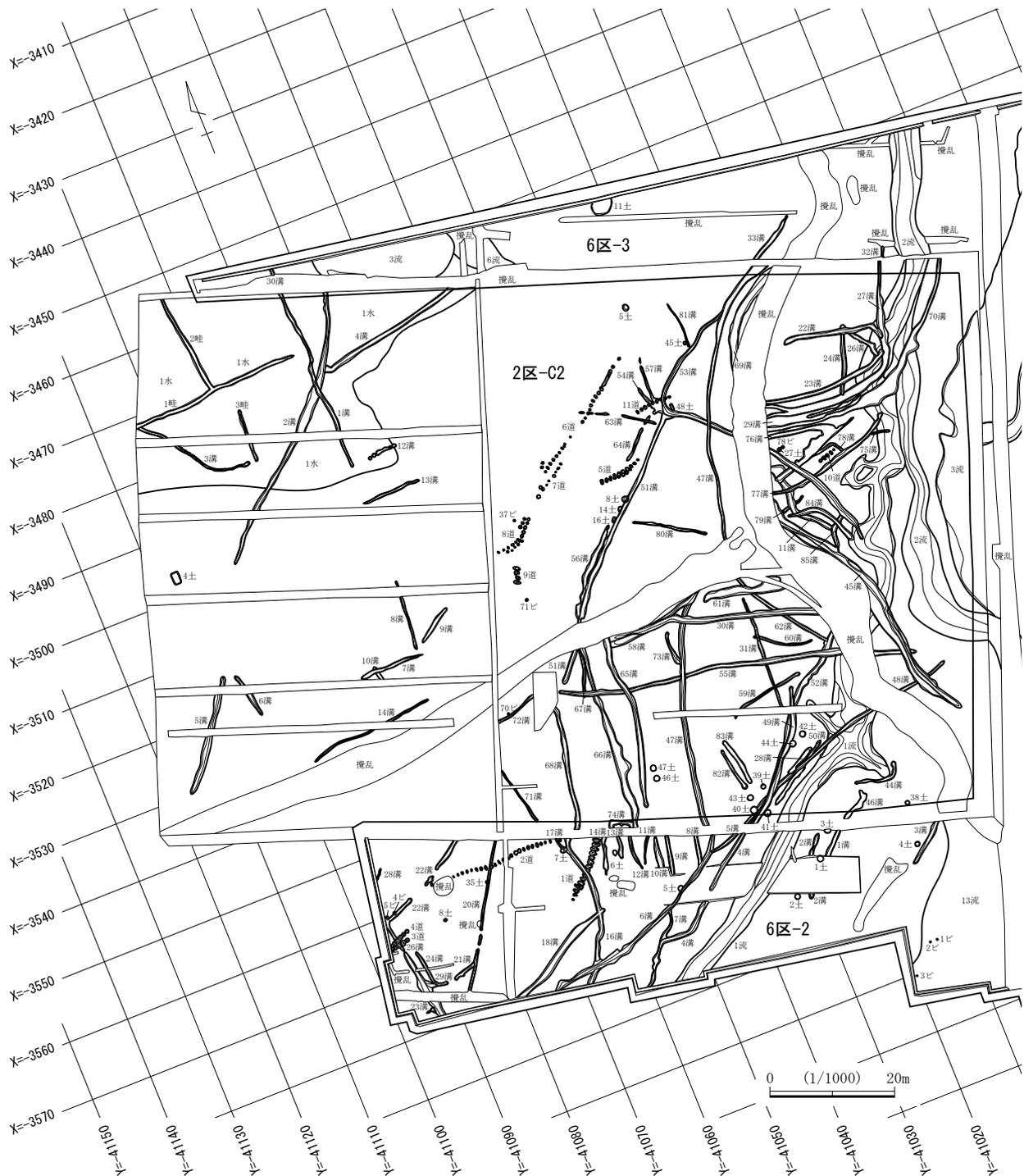


第125図 11号道路状遺構

(2) 道路状遺構と溝状遺構

連結状土坑の状態を呈する遺構を道路状遺構と認識し、過去の調査でピット・土坑とした遺構などを道路状遺構として再報告した。すべての道路状遺構は2区-C2と6区-2で分散した状況で

分布している。しかし、連結状土坑は途中で途切れ、長く続かない状態のものが多い。2区-C2の6・7号道路状遺構と6区-2の2号道路状遺構が比較的長く続いているが、調査区全体をとおして続いてはいない。道路と認識する上で、途中



第126図 6区-2・3奈良・平安時代遺構配置図

第3節 流路と道路状遺構

で途切れてしまう状態は課題となろう。

溝状遺構については、これまで直線的な流れで溝の断面形が逆台形に近い溝は流路としての役割があり、覆土に砂粒や小礫を含む溝も人為的な流路と判断した。

今回の調査では大きく蛇行する溝状遺構は少なく、断面形が浅い皿状を呈するものが多く確認された。溝状遺構の方向は一定しているとは言えないが、南北方向、211流路に沿うもの、南北方向から東にふれるものなど、おおむね3方向に延びているようである。この方向は、道路状遺構にも当てはまる。

6区-2の26号溝状遺構に対して、交差して合流する23・29号溝状遺構があり、道路状遺構で突起状に短く道路が合流する例に類似し、特徴的である。

人為的流路とした211流路、2214流路に沿うように道路状遺構と溝状遺構が配置されていることと、浅い掘り込みの溝状遺構と道路状遺構が類似することに注目したい。

今回の調査で確認された人為的流路と道路状遺構は日高市拾石遺跡の用水と道路状遺構との関係性が参考になる。溝状遺構とした遺構の形状が日高市宮久保遺跡の道路状遺構と類似している。

広大な調査区の中で、人為的流路、方向を同じくする道路状遺構と溝状遺構は、関係性をもって整備された遺構の可能性が見いだせそうである。

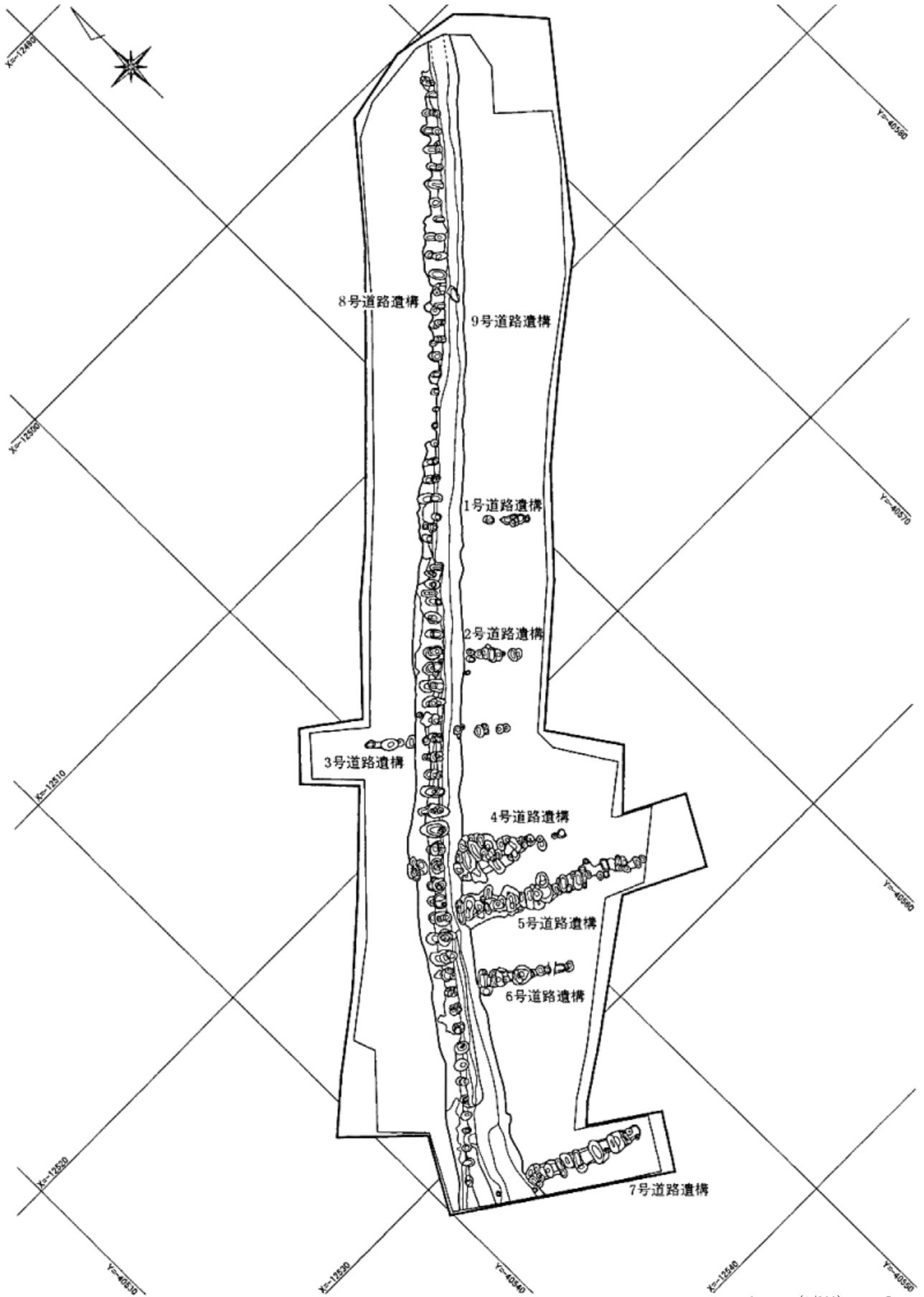
引用文献

- 金井塚厚志 1989『境田遺跡』鳩山町埋蔵文化財調査報告書第5号
- 酒井清治 1987「第2節 埼玉県の須恵器の変遷について」『埼玉の古代窯業調査報告書(末野・南比企窯跡群)』埼玉県立歴史資料館
- 渡邊理伊知 2019「武蔵国からみち黒色土器の消長と展開」『研究紀要』第33号公益法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 富田和夫 2000「VIまとめ 1. 羽釜出現期以降の土器群について」『大寄遺跡I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第268号
- 永井いずみ 2002「V結語 1. 出土土器の様相」『大寄遺跡II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第280号
- 永井いずみ 2004「埼玉県北部における10世紀以降の土師質土器」『研究紀要』第19号埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 中平薫 2019『拾石』日高市埋蔵文化財調査報告書第39号
- 松本尚也 2020『宮久保』16次調査 日高市埋蔵文化財調査報告書第42号
- 村山卓 2017『前領家遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第430号
- 山本禎 2013『下田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第401号



第127図 拾石遺跡全測図（『拾石』より転載）

第3節 流路と道路状遺構



第128図 宮久保遺跡16次調査区遺構検出図（『宮久保』より転載）

写 真 图 版



調査区周辺 (昭和50年)



調査区完掘全景- 1

図版 2



調査区完掘全景 - 2



調査区完掘全景 - 3



調査区北壁



調査区東壁



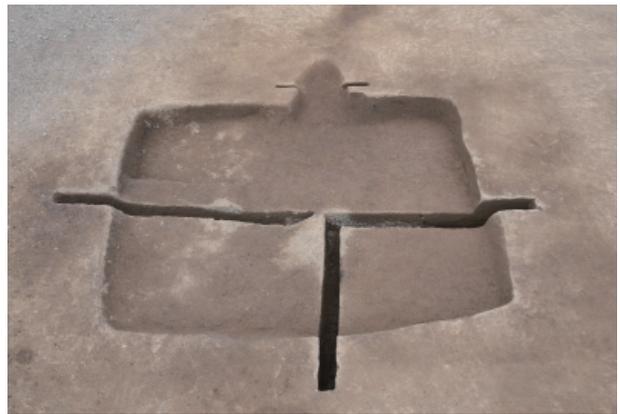
1号竪穴建物



1号竪穴建物炉



1号竪穴建物遺物出土状況



2号竪穴建物



2号竪穴建物カマド



2号竪穴建物遺物出土状況

图版 4



1号竖穴状遺構



1号竖穴状遺構遺物出土状況



2号竖穴状遺構



2号竖穴状遺構遺物出土状況



19号土坑



27号土坑



39号土坑



40号土坑



41号土坑



42号土坑



43号土坑



44号土坑



45号土坑



46号土坑



47号土坑



48号土坑

图版 6



49号土坑



50号土坑



51号土坑



52号土坑



40号沟状遺構



41号沟状遺構



2号流路



4号流路



13号流路



15号流路遺物出土状況



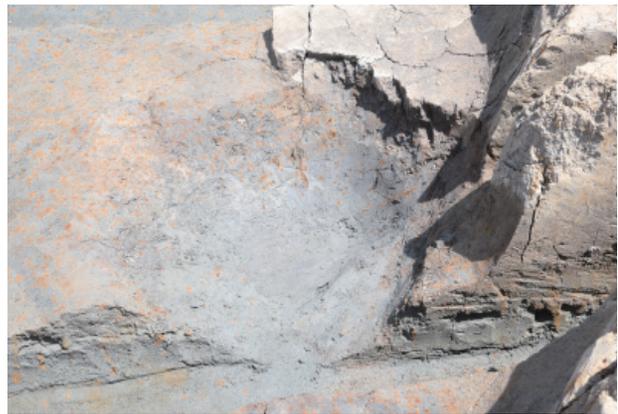
1号掘立柱建物跡



3号竪穴状遺構



3号竪穴状遺構焼土集中



3号竪穴状遺構1号ピット

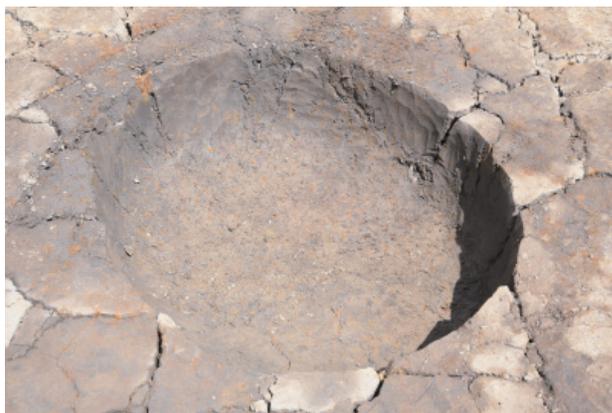


4号竪穴状遺構



9号土坑

图版 8



14号土坑



16号土坑



17号土坑



18号土坑



20号土坑



21号土坑



22号土坑



23号土坑



24号土坑



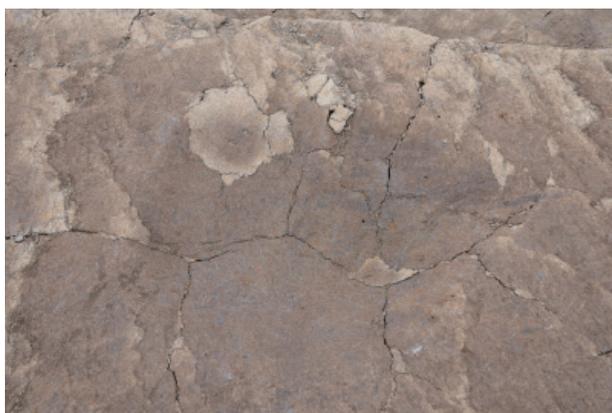
25号土坑



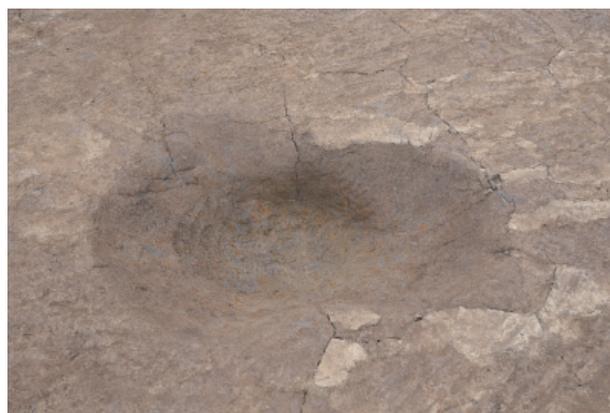
26号土坑



29号土坑



31号土坑



32号土坑



33号土坑



34号土坑



36号土坑



37号土坑



38号土坑



1号土坑



2号土坑



3号土坑



4号土坑



5号土坑



6号土坑



7号土坑



8号土坑



35号土坑



1号道路状遺構



2号道路状遺構



3·4号道路状遺構



34号溝状遺構



35号溝状遺構



36号溝状遺構



37号溝状遺構



38号溝状遺構



1・2号溝状遺構



3号溝状遺構



4・7号溝状遺構



5・8号溝状遺構



6号溝状遺構



9～12号溝状遺構



13・14号溝状遺構



16号溝状遺構



17号溝状遺構



18号溝状遺構



20・21号溝状遺構



22号溝状遺構



23・24・26・29号溝状遺構



28号溝状遺構



1号流路



ピット群-1



ピット群-2



ピット群-3



ピット群-4



ピット群-5



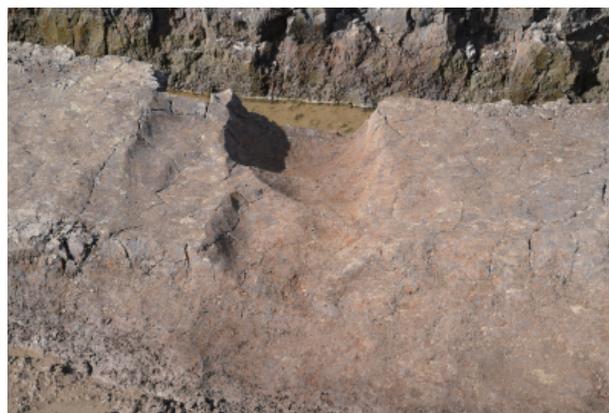
ピット群-6



11号土坑



39号溝状遺構



30号溝状遺構



32号溝状遺構



33号溝状遺構



3号流路



3号流路遺物出土状況



1号竖穴建物 第13图7



2号竖穴建物 第16图3



2号竖穴建物 第16图8



1号竖穴建物 第13图13



2号竖穴建物 第16图9



2号竖穴建物 第16图10



1号竖穴状遺構 第18図9



1号竖穴状遺構 第18図12



2号竖穴状遺構 第20図1



1号竖穴状遺構 第18図10



2号竖穴状遺構 第20図7



2号竖穴状遺構 第20図8



11号流路 第37图 1



6区-2遺構外 第100图 6



13号流路 第40图 1



3号流路 第109图 1



15号流路 第44图 3



6号流路 第111图 1

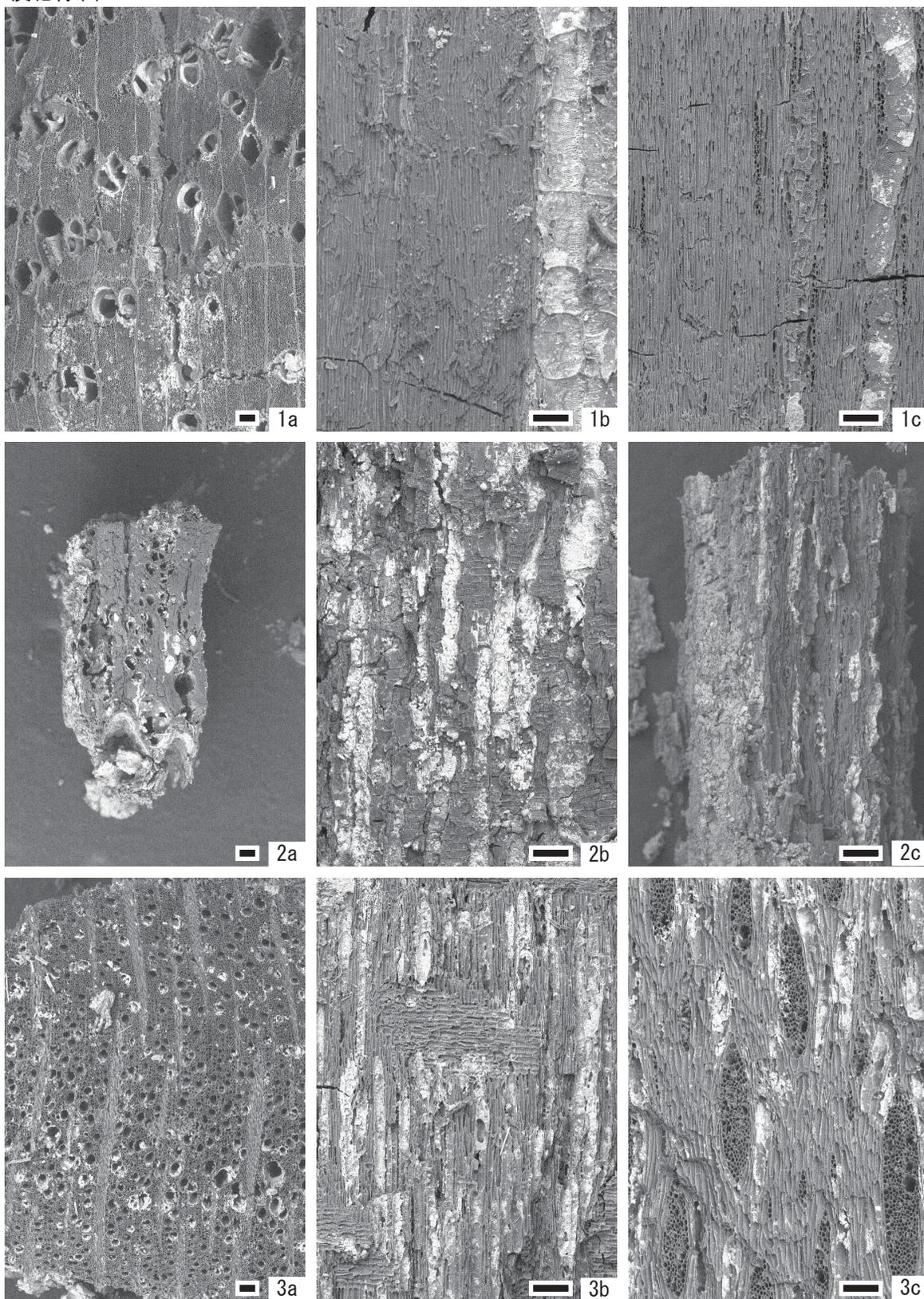


4号竖穴状遺構 第55图 1



6区-3遺構外 第112图 8

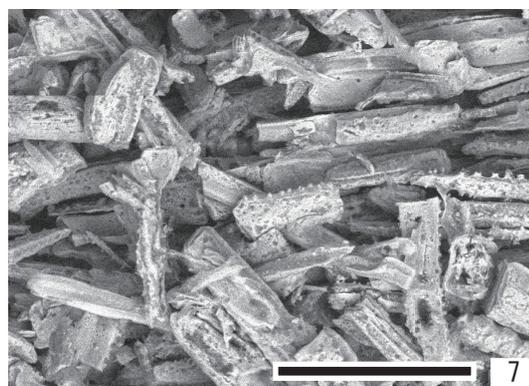
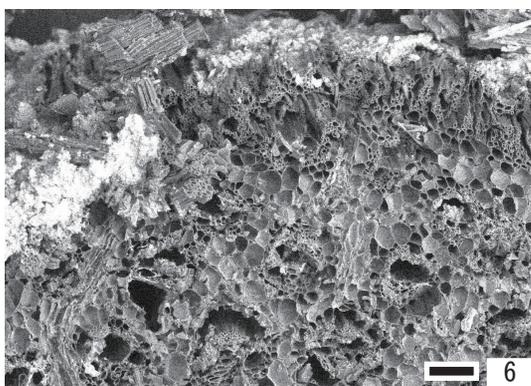
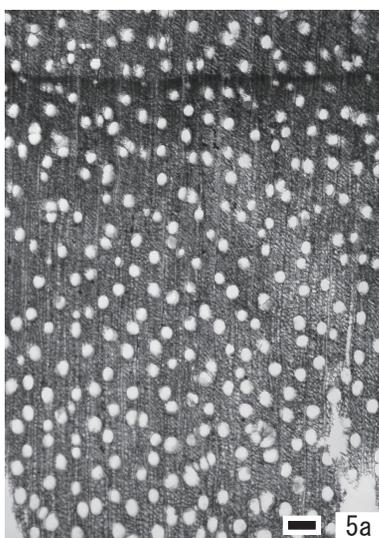
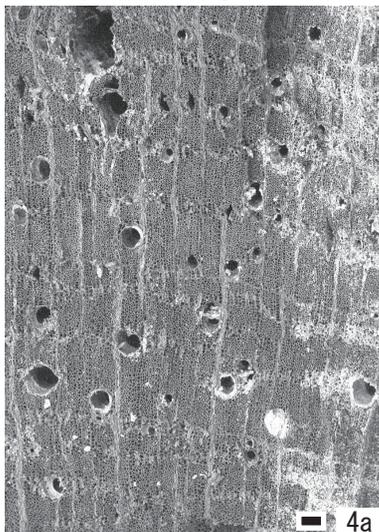
炭化材(1)



- 1. クルミ属 (No. 4)
- 2. コナラ亜属コナラ節 (No. 3)
- 3. サクラ属 (No. 7)

a: 木口 b: 柎目 c: 板目
 スケールは100 μm

炭化材(2)・木材など



- 4. ムクロジ (No. 1)
- 5. ヤナギ属 (No. 9)
- 6. イネ科草本類 (No. 6)
- 7. イネ科の灰 (No. 2)

a: 木口 b: 柁目 c: 板目
スケールは100 μ m

報告書抄録

ふりがな	しもだいせき
書名	下田遺跡 5
副書名	下田遺跡6区発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	山本良太、後藤亮太、加藤恭朗
編集機関	坂戸市教育委員会
所在地	〒350-0292 埼玉県坂戸市千代田一丁目1番1号 TEL 049-283-1331
発行年月日	2022（令和4）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもだいせき 下田遺跡6区	さかどにしに 坂戸市西インター 二丁目2番1、2番2	11239	27-155	35° 58' 02"	139° 22' 46"	2021.1.8 ～ 2021.7.2	15,300 m ²	物流倉庫建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下田遺跡6区	包蔵地 集落跡	縄文時代		縄文土器、打製石斧	
		古墳時代	掘立柱建物跡 1棟 竪穴状遺構 2基 土坑 21基 溝状遺構 6条 ピット 468基	吉ヶ谷式土器、土師器、打製石斧	
		奈良・平安時代	竪穴建物 2基 竪穴状遺構 2基 土坑 25基 道路状遺構 4条 溝状遺構 30条 ピット 5基 流路 16条	須恵器、土師器、ロクロ土師器、灰釉陶器、土製紡錘車、砥石	
		中世以降	土坑 1基		

要 約	<p>下田遺跡6区は平成26・27年度調査の2区-C2と、コの字状に三方を隣接する。検出された遺構は地点によって偏りが生じているが、古墳時代、奈良・平安時代の2時期に大別できる。最も古い遺物は、縄文時代後期の土器が出土しているが、器面に重度の摩滅を受けていることから、周辺からの流入物と考えられる。また、2区-C2南西部で確認された、弥生時代中期と吉ヶ谷期の遺物を伴う遺構は、今回の調査では発見されなかった。</p> <p>古墳時代は、調査区の南西部にあたる6区-2で、2基の竪穴状遺構を主に調査した。このうち、4号竪穴状遺構からは4世紀の所産と思われる、高坏の坏部が出土した。出土遺物の年代観及び、炭化物の年代測定結果から、2区-C2の1号住居と同時期に併存していた可能性があり、2区-D1より広がる集落の南東端部に属すると考えられる。また、調査区東部の6区-1、調査区北西部の6区-3では遺構は殆ど確認されず、砂礫層、礫層が露出したことから、当地域は流路内、あるいは高麗川の氾濫原に属していたと考えられる。</p> <p>奈良・平安時代では、主に平安時代前期の遺構・遺物が確認された。6区-1では2軒の竪穴建物、2基の竪穴状遺構が流路の上部、あるいは近接する形で確認された。</p> <p>2軒の竪穴建物は使用痕跡が希薄である点から、恒常的に居住していた可能性は低いと考えられる。また、6区-1南端部で確認された、2号竪穴状遺構からは多数の土師器・須恵器とともに、完形に近い黒色土器、灰釉陶器が出土した。遺構内には、掘り込みを伴わない焼土集中範囲が確認されたことから、複数回に渡り火を焚く行為が行われていたことが示唆され、祭祀的性格を持つ遺構である可能性が考えられる。</p> <p>6区-2では、主に南から北方向に走る溝状遺構、および断面形が波板状を呈する道路状遺構を調査した。大半の遺構は6区-2の北側に隣接する2区-C2で確認された遺構との接続関係が認められ、流路に沿う形で構築されたものも認められた。</p> <p>道路状遺構については他市でも調査例が増加し、新たな課題が提示されてきた。下田遺跡では流路を中心とする自然環境と共存した人々の営みが存在していたことは確かである。</p>
-----	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

下田遺跡5

- 下田遺跡6区発掘調査報告書 -

令和4年3月31日発行

編集・発行 埼玉県坂戸市教育委員会

埼玉県坂戸市千代田一丁目1番1号

印刷 能登印刷株式会社

石川県金沢市武蔵町7番10号